761.2/9
CD-1

できる® ゼロからはじめる 楽譜&リズムの読み方 超入門

侘美秀俊 著

いちばんやさしい楽譜とリズムの本

RittorMusic

CamScannerでスキャン

まえがき

日頃、楽器や音楽を嗜んでいらっしゃる方からも、とかく「楽譜は苦手なんだよねー」という意見をよく耳にします。確かに、楽譜がなくても、直接音を鳴らしてコミュニケーションをとれるのは「音楽」の魅力です。その一方で、楽器の種類やジャンルの壁を越えて、いろんなミュージシャンと音楽を作り上げていくために必要となる確実な伝達手段が「楽譜」です。英語は、話せるだけでなく読み書きができると、いろんなビジネスチャンスが広がりますが、音楽においては「楽譜」が、英語のような世界に通用する「公用語」に相当することに間違いはありません。

「音楽の文法」のような知識のことを「楽典」といいますが、その中でも楽譜に関する部分だけを、ごくごく最低限まとめたものが本書です。「ドレミは時間をかければ読めても、リズムがまったくダメなんだよね～」という意外に多い巷の意見も踏まえて、この種の書籍としては珍しく、最初は「リズムの読み方」からマスターしていく順序構成になっていますが、もちろん、どこの章からトライして頂いてもかまいません。ぜひ、これを機に、楽譜の世界にチャレンジしてください！

佗美秀俊

CamScannerでスキャン

本書の読み方

本書では、大きな図や譜面をふんだんに使い、大きな文字ですべての手順をていねいに解説しています。はじめて楽譜やリズムを読む人でも、迷わずに安心して読み進められます。

レッスン

見開き2ページを基本に、やりたいことを簡潔に解説します。「やりたいこと」や「知りたいこと」をタイトルからすぐに見つけられます。

キーワード

音楽用語などのキーワードからレッスン内容がわかります。

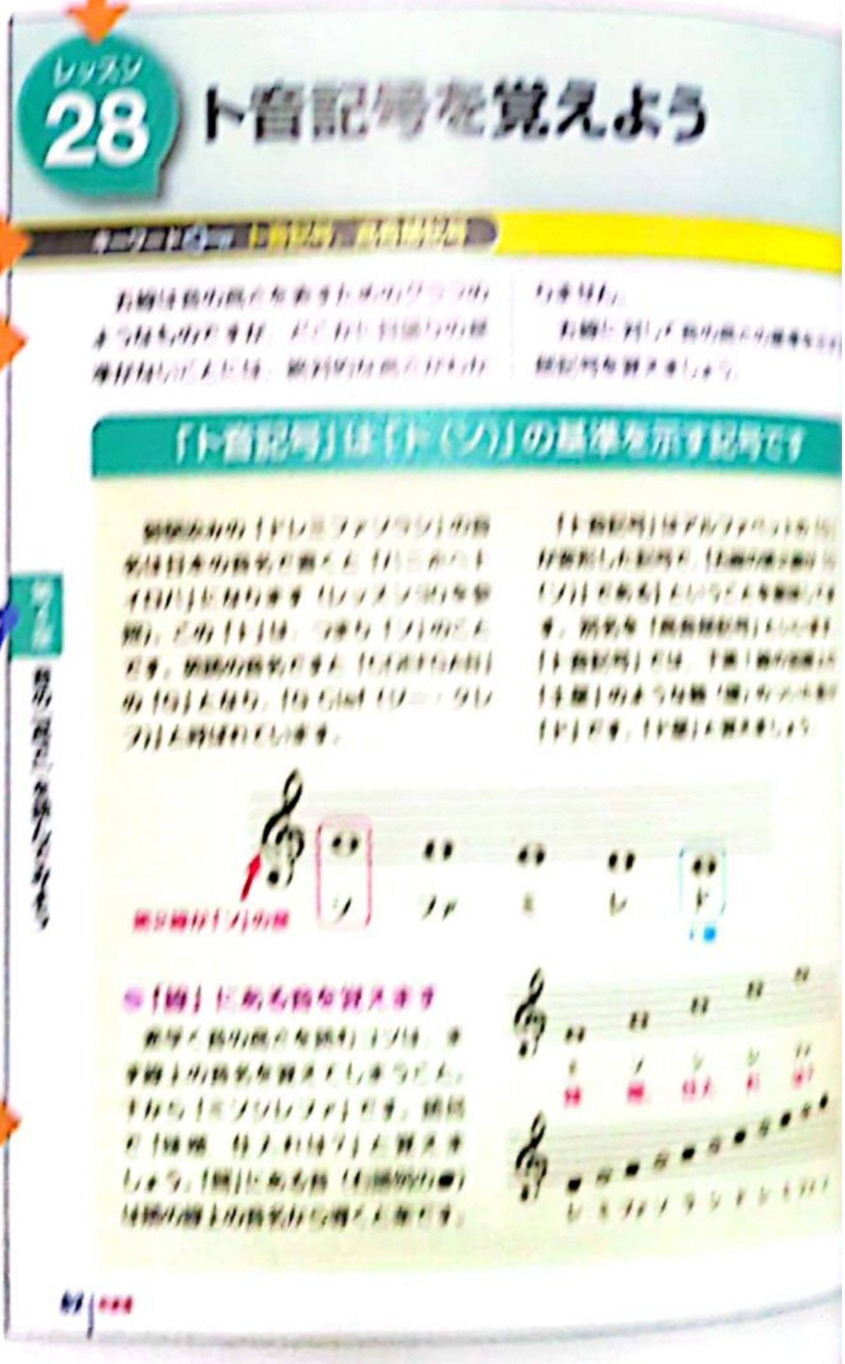
概要

レッスンの目的を理解できるように要点を解説します。

左ページのつめでは、章タイトルでページを探せます。

ポイント

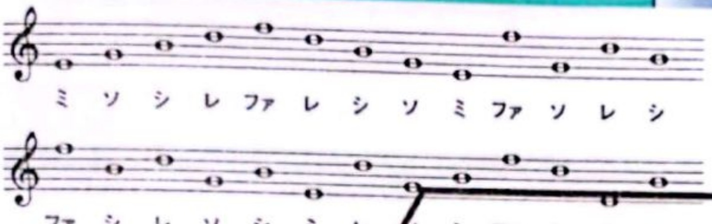
レッスンの概要、楽譜やリズムの要点を図解でていねいに解説します。概要や内容をより深く理解できるようになります。



CamScannerでスキャン

手　順　必要な手順を、図解や楽譜とともに解説

① ト音記号の「線」の高さに慣れましょう　CD TRACK 55



最初は音名を読んでみて、慣れてきたら楽器で音を鳴らしてみましょう

「線」の音名をストレスなく読めるまで繰り返して慣れましょう

② ト音記号の「間」の高さに慣れましょう　CD TRACK 56

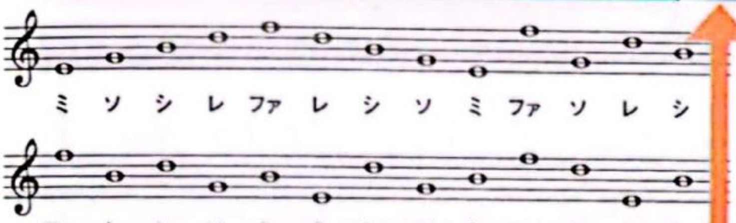
手順見出し
楽譜やリズムを読むために必要な知識を習得する手順を、それぞれの内容ごとに見出しを付けて挙げています。マスターする上で、しっかり押さえておきたい手順を説明する箇所では、見出しに番号が付いています。番号がある場合は順に進めてください。

説明
「○○を鳴らします」など、それぞれのポイント手順の説明です。番号がある時は順に進めてください。

解説
目標・目的などについて説明しています。

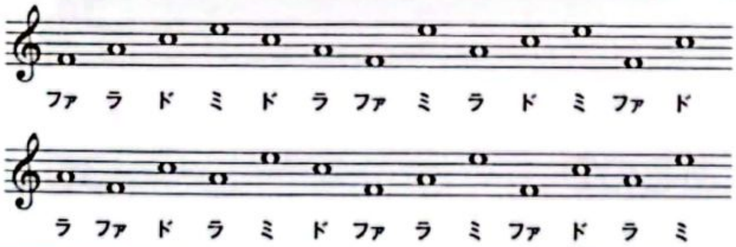
---

① ト音記号の「線」の高さの音名に慣れましょう　TRACK 55



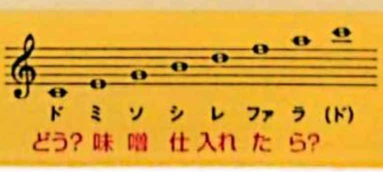
最初は音名を読んでみて、慣れてきたら楽器で音を鳴らしてみましょう

「線」の音名をストレスなく読めるまで繰り返して慣れましょう

② ト音記号の「間」の高さの音名に慣れましょう　TRACK 56

最初は音名を読んでみて、慣れてきたら楽器で音を鳴らしてみましょう

「間」の音名をストレスなく読めるまで繰り返し慣れましょう

ヒント
通常の音階とは別に「一段飛ばしの音階」を覚えておくといろんなところで便利です。「どう?味噌仕入れたら」とゴロ合わせで覚えてしまいましょう。



終わり

できる 83

28　ト音記号、高音部記号

右ページのつめでは、音楽用語などからページを探せます。

音源の番号

下の譜例の音が収録されたトラック数を表示しています。特典CDに収録されています。

ヒント

レッスンに関連した、さまざまなノウハウや、一歩進んだ知識を解説します。

CamScannerでスキャン

目次

まえがき …… 3
本書の読み方 …… 4

第1章 音の【長さ】を読んでみよう 13

1 拍について知ろう <ビート> …… 14
2 テンポについて知ろう <速度、BPM> …… 16
3 拍子について知ろう <強拍、弱拍> …… 18
4 4分音符と4分休符を覚えよう <1拍> …… 20
5 8分音符と8分休符を覚えよう <半拍> …… 24
6 16分音符と16分休符を覚えよう <1/4拍> …… 28
7 2分音符と2分休符を覚えよう <2拍> …… 32
8 全音符と全休符を覚えよう <4拍> …… 34

Q&A もっと短い音符、長い音符はあるの？ …… 36

CamScannerでスキャン

第2章 もっと拍子を読んでみよう 37

9 基本の小節線を覚えよう ＜小節、縦線＞……38
10 その他の小節線を覚えよう ＜複縦線、終止線＞……40
11 拍子を表す記号を覚えよう ＜拍子記号＞……42
12 2拍子を知ろう ＜2拍子系＞……44
13 3拍子を知ろう ＜3拍子系＞……46
14 4拍子を知ろう ＜4拍子系＞……48
15 変わった拍子を知ろう ＜変拍子、混合拍子＞……50
16 強拍と弱拍を知ろう ＜弱起、アウフタクト＞……52

Q&A なぜ4分音符以外の音符を分母に使うの?……54

CamScannerでスキャン

第3章 リズムを読んでみよう　53

17 付点のついた音符と休符を覚えよう <付点> …… 56
18 タイの使い方を覚えよう <タイ> …… 58
19 【ラーメン】のリズム、タータタを覚えよう <タータタ> …… 60
20 【カロリー】のリズム、タタター を覚えよう <タタター> …… 62
21 【ステーキ】のリズム、タタータを覚えよう <タタータ> …… 64
22 【ケーキ】のリズム、ターータを覚えよう <ターータ> …… 66
23 【カレー】のリズム、タターーを覚えよう <タターー> …… 68
24 休符を含んだリズムを覚えよう <休符を含んだリズム> …… 70
25 【メタボ】のリズム、3連符を覚えよう <3連符、タタタ> …… 72
26 5連符、6連符、7連符を覚えよう <連符> …… 74

Q&A 「3連符が4つ」と12/8拍子の違いは？ …… 76

第4章 音の【高さ】を読んでみよう 79

27 五線の仕組みを知ろう <五線、加線> …… 80

28 ト音記号を覚えよう <ト音記号、高音部記号> …… 82

29 ヘ音記号を覚えよう <ヘ音記号、低音部記号> …… 84

30 「ドレミファソラシ」をおさらいしよう <音名、幹音> …… 86

31 ト音とヘ音の組み合わせを覚えよう <大譜表> …… 88

32 その他の音部記号を知っておこう <ハ音記号> …… 90

33 半音上げる記号を覚えよう <シャープ、ダブルシャープ> …… 92

34 半音下げる記号を覚えよう <フラット、ダブルフラット> …… 94

35 変化した「ドレミ～」の読み方を知ろう <派生音> …… 96

36 臨時記号のルールを覚えよう <臨時記号> …… 98

37 まとめて変化させる記号を覚えよう <調号、キー> …… 100

Q&A なぜ「ダブルシャープ」や「ダブルフラット」を使うの？ …… 104

CamScannerでスキャン

第5章 楽譜の記号を読んでみよう 105

38 速度を表す記号を覚えよう <速度記号、メトロノーム記号> ………… 106

39 速度の変化を表す記号を覚えよう <テンポの変化> ………… 108

40 強弱を表す記号を覚えよう <強弱記号、ダイナミクス> ………… 110

41 強弱の変化を表す記号を覚えよう <強弱の変化> ………… 112

42 演奏する感情を表す記号を覚えよう <アーティキュレーション> ………… 116

43 音を飾る記号とパターンを覚えよう <装飾音符、装飾記号> ………… 120

44 省略を表す記号を覚えよう <省略記号> ………… 122

45 繰り返しの記号を覚えよう <反復記号、繰り返し記号> ………… 126

Q&A なぜ楽譜はイタリア語の指示が多いの? ………… 128

CamScannerでスキャン

第6章 楽器別の楽譜を読んでみよう 129

46 コードについて知っておこう <コードネーム、和音>…… 130

47 ピアノの楽譜を知ろう <ペダル、指番号>…… 132

48 ギターやベースの楽譜を知ろう <タブ譜>…… 134

49 ドラムの楽譜を知ろう <ドラム譜>…… 136

50 弦楽器の楽譜を知ろう <ピチカート、アルコ>…… 138

51 管楽器の楽譜を知ろう <移調楽器>…… 140

52 オーケストラの楽譜を知ろう <スコア、パート譜>…… 142

Q&A なぜこんなにわかりにくい「移調楽器」があるの?…… 144

CamScannerでスキャン

あとがき 145

付録 146

付録1 楽譜の書き方と基本的なルール 147
付録2 よく使われるコードネーム一覧 158

楽譜でよく使われる用語集 170
索　引 173

CamScannerでスキャン

第1章

音の【長さ】を読んでみよう

楽譜やリズムの読み方を知る上で基本となるのは、音の「長さ」です。音符の長さを理解しないと、楽譜やリズムを読んでいくことはできません。「拍」「テンポ」「拍子」「音符」「休符」、音の長さに関する基礎を覚えてしまいましょう。

この章の内容

1 拍について知ろう …… 14
2 テンポについて知ろう …… 16
3 拍子について知ろう …… 18
4 4分音符と4分休符を覚えよう …… 20
5 8分音符と8分休符を覚えよう …… 24
6 16分音符と16分休符を覚えよう …… 28
7 2分音符と2分休符を覚えよう …… 32
8 全音符と全休符を覚えよう …… 34
楽譜&リズムの素朴な「?」に答えるQ&A …… 36

CamScannerでスキャン

レッスン 1

拍について知ろう

キーワード ビート

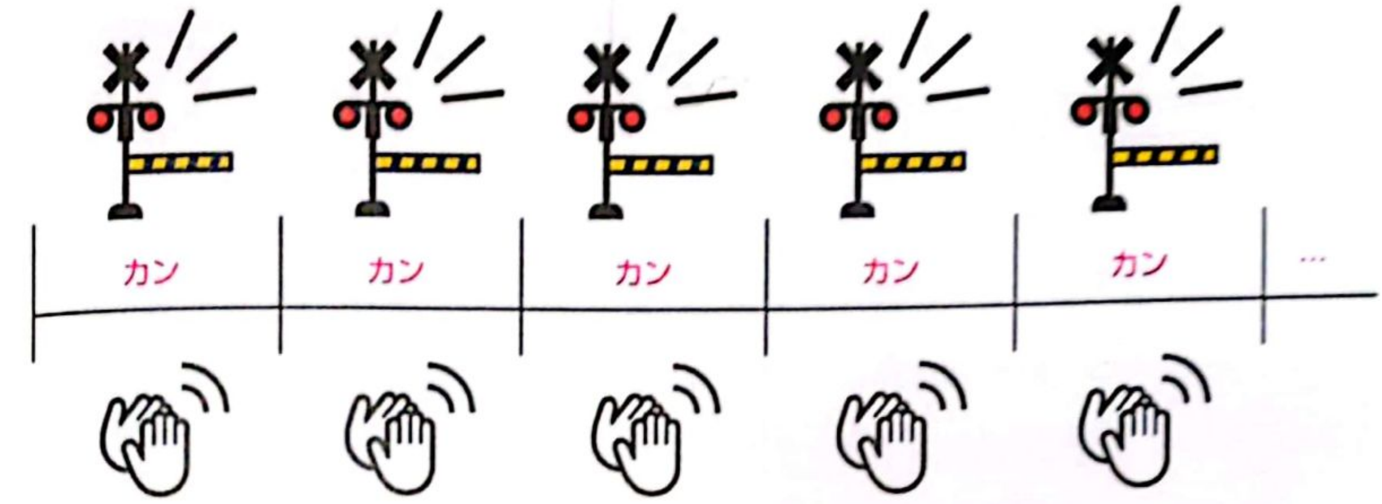
楽譜には、主に音の「高さ」と「長さ」が記されています。この本では音の「高さ」を理解する前に、まずは音の「長さ」について説明していきます。

では音の長さの基準となる「拍」について説明しましょう。

一定の間隔・タイミングの刻みが「拍」です

拍を英語で言うと「ビート」です。「規則的に感じられるタイミング」と表現すればよいでしょうか。例えば、英語のビートには「心拍」の意味もあります。健康である心臓の鼓動は、一定の間隔で「ドクン・ドクン・ドクン……」となりますよね。この「ドクン」が連続するタイミングが「拍」です。

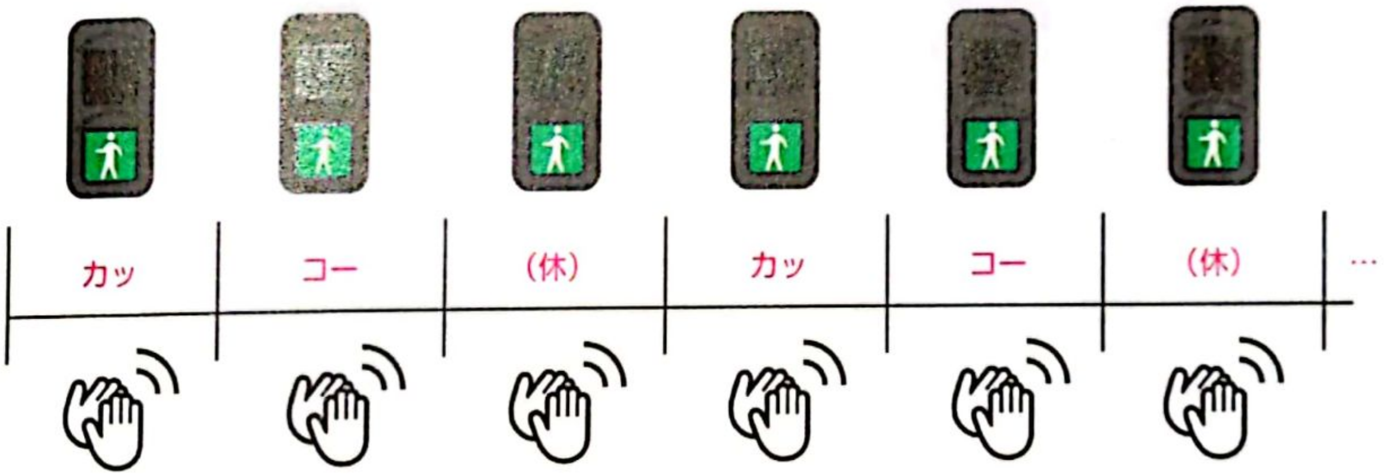
① 「踏切」の音に合わせて、手拍子してみます　TRACK 01



連続する「カン」のタイミングに合わせて、手を叩きます

繰り返し一定の間隔で手拍子することで「拍」を感じましょう

② 横断歩道の信号音に合わせて、手拍子してみます　TRACK 02



「カッ」「コー」「（休）」のそれぞれのタイミングに合わせて、手を叩いてみましょう

①と同じく一定の間隔で手拍子をしつつ、①とは異なる間隔の「拍」を感じましょう

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 2

テンポについて知ろう

キーワード 速度、BPM

レッスン1の「拍」の仕組みがわかると、音楽に不可欠な「テンポ」についても理解できます。ここでは、テンポの意味と感覚を身に付けていきましょう。

「拍」の長さが、速度=テンポです

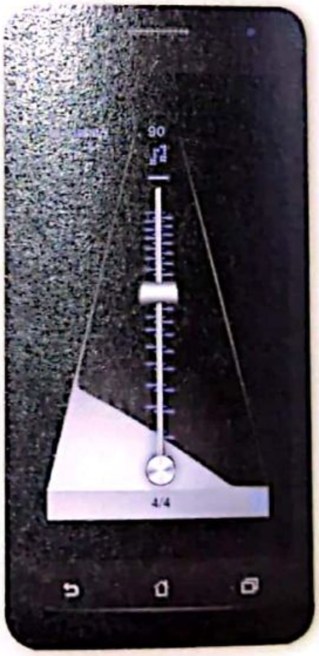
一定の間隔で刻まれる「拍」ですが、ひとつの拍が長い場合、テンポは「遅い」と表現され、拍が短い場合、テンポは「速い」と表現されます。

心拍数（脈拍数）が数字で表されるように、音楽のテンポも数字で表されます。心拍数は、1分間に心臓が脈打つ回数ですが、音楽も1分間の拍の回数を数字で表します。

心拍もテンポも、英語では同じ表現となり、beats per minute、略してBPMという単位で表されます。

●テンポを計ったり感じるための装置が「メトロノーム」です

従来の振り子式のメトロノーム

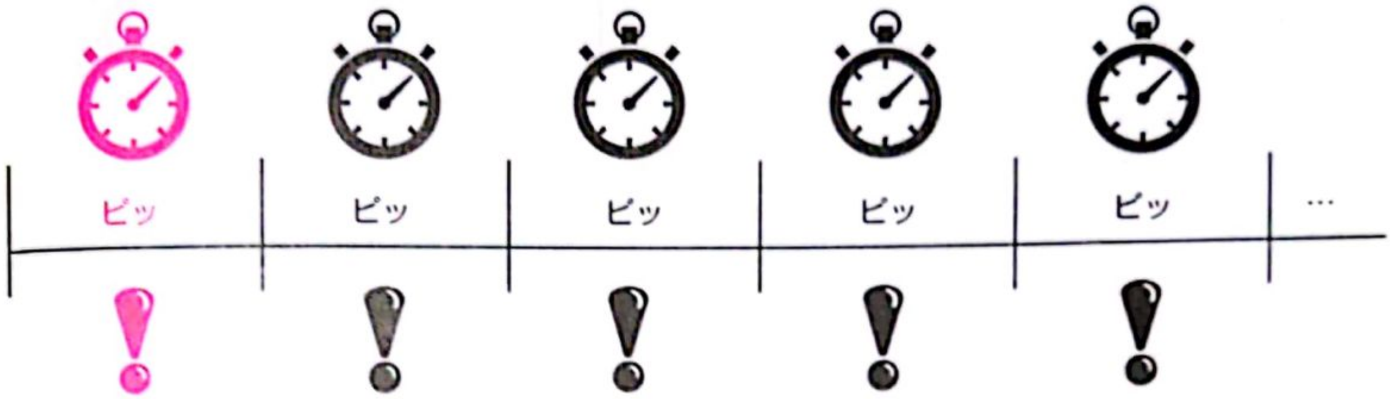


スマホアプリで再現した電子的なメトロノーム

CamScannerでスキャン

① 時報に合わせて拍を感じてみます

TRACK 03

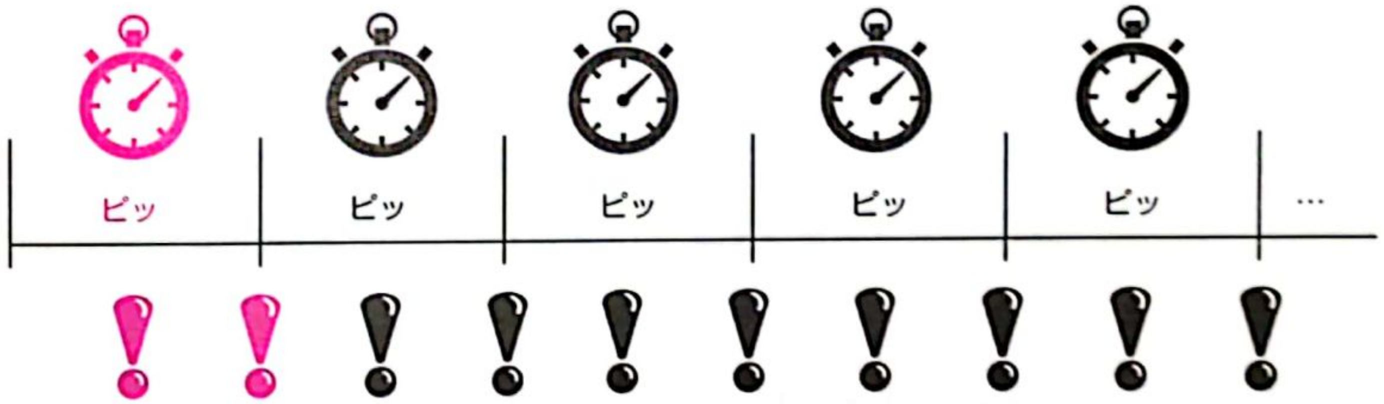


時報の1秒ごとに手拍子や声などでカウントをとってみます

1秒＝1拍、つまり1分間に60回の拍を打つので「テンポ」60(60BPM)」になります ※」はレッスン4参照

② より速い拍を感じてみます

TRACK 04



時報の1秒に対して2つのカウントが入るように拍をとってみます

1秒＝2拍、つまり1分間に120回の拍を打つので「テンポ」120(120BPM)」になります

ヒント

テンポ」60なら1拍は1秒、テンポ」120なら1拍は0.5秒と、1拍の時間は固定ではなく、テンポで相対的に変化します。

終わり

レッスン3

拍子について知ろう

キーワード 強拍、弱拍

「拍」と「テンポ」の関係性と感覚がつかめたら、次に「拍子」のとらえ方について考えていきましょう。

「拍」を何個かでグループに区切って、ひと固まりとして感じられるものが「拍子」です。

拍をひと固まりにまとめたものが「拍子」です

一定の間隔で刻まれる「拍」に、「よっ」「こら」……というかけ声をつけて、それを繰り返してみると、2つの拍子をひとつのグループとして感じられます。それが「2拍子」です。

「よっ	・こら」	「よっ	・こら」	「よっ	・こら」……
◎	○	◎	○	◎	○
1	2	1	2	1	2

次に「よっ・こら・しょ」……というかけ声をつけて、それを繰り返すと、3つの拍子をひとつのグループとして感じることができます。それが「3拍子」です。

「よっ	・こら	・しょ」	「よっ	・こら	・しょ」	「よっ	・こら	・しょ」……
◎	○	○	◎	○	○	◎	○	○
1	2	3	1	2	3	1	2	3

「よっ・こら・しょ・っと」……というかけ声をつけて、それを繰り返すと、4つの拍子をひとつのグループとして感じることができます。それが「4拍子」です。

「よっ	・こら	・しょ	・っと」	「よっ	・こら	・しょ	・っと」	「よっ	・こら	・しょ	・っと」
◎	○	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4

拍子のグループに分けて規則的に繰り返すと、グループの最初の拍に重さやスタートのニュアンスを感じられますが、これを「強拍」と呼びます。

今回の例で言うと、「よっ（◎）」にあたる拍が「強拍」です。それ以外の拍は「弱拍」と呼ばれます。

① 童謡「ぞうさん」に合わせてみます

TRACK 05

ラ　～ララン	ラ　～ララン	ラ　～ラララ	ラララ ララン
◎ ○ ○	◎ ○ ○	◎ ○ ○	◎ ○ ○
ピ ポ ポ	ピ ポ ポ	……	
1 2 3	1 2 3		
ラ　～ララン	ラ ララン ラン	ラ　～ラララ	ラ　～　～
◎ ○ ○	◎ ○ ○	◎ ○ ○	◎ ○ ○

拍をとりながら、1、2、3とカウントしてみます

3拍子の拍子を感じてください

② 童謡「かえるのうた」に合わせてみます

TRACK 06

ラ ラ ラ ラ	ラ ラ ラ ～	ラ ラ ラ ラ	ラ ラ ラ ～
◎ ○ ○ ○	◎ ○ ○ ○	◎ ○ ○ ○	◎ ○ ○ ○
ピ ポ ポ ポ	ピ ポ ポ ポ	……	
1 2 3 4	1 2 3 4		
ラン　ラン	ラン　ラン	ラララララララララ	ランランラン
◎ ○ ○ ○	◎ ○ ○ ○	◎ ○ ○ ○	◎ ○ ○ ○

拍をとりながら、1、2、3、4とカウントしてみます

4拍子の拍子を感じてください

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 4

4分音符と4分休符を覚えよう

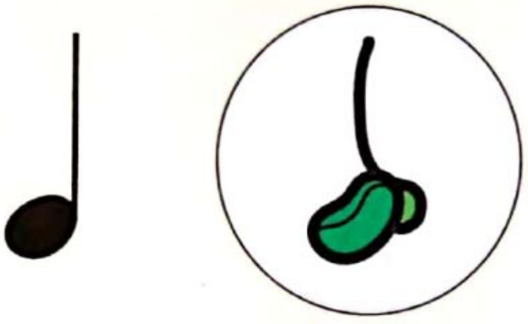
キーワード 1拍

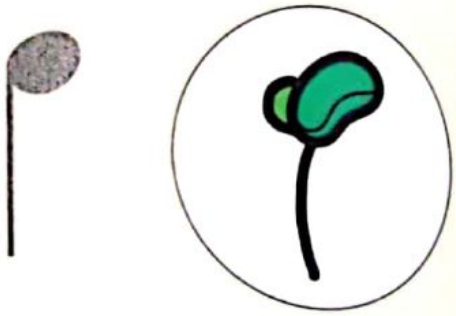
実際の楽譜のリズムを読むためには、まずは音符の長さと拍の関係をしっかりと把握する必要があります。ここでは「4分音符」から理解していきましょう。

1拍の長さを表す音符が「4分音符」です

黒い玉に棒がついた音符です。まずは形で覚えましょう。玉は、音の「高さ」も同時に表しますが、これについては本書の後半で紹介します。

音の高さによっては、棒の向きが「上」になったり「下」になったしります





棒が上向きの時は、玉（種）の右側から棒（芽）が伸びる形です

棒が下向きの時は、玉（種）の左側から棒（根）が伸びる形です

CamScannerでスキャン

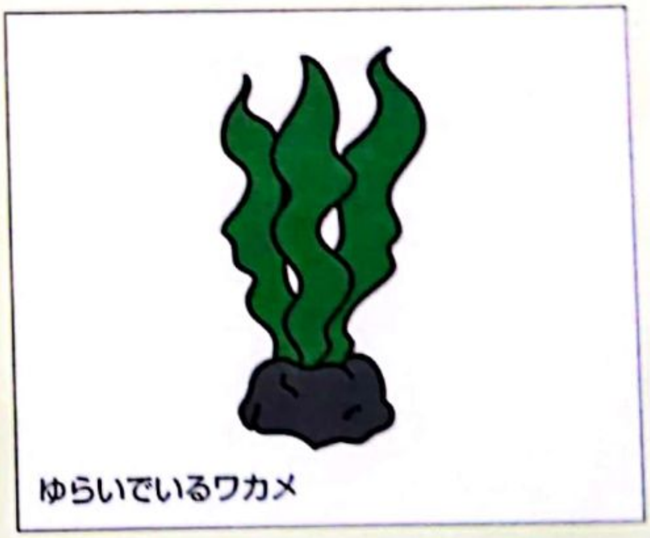
なぜ「4分音符」と呼ぶのか？

音楽の中で最も頻繁に使われるのが「4拍子」です。

「4拍子」の全体の長さを「1」とした時、その「4分の1（1拍）の長さの音符」なので、「4分音符」と呼ばれます。

4分音符と同じ長さの休符が「4分休符」です

「4分休符」は4分音符と違って音の高さは表しません。そのため、音符の時のように向きが上下と変わることはありません。海底から海面に向かって揺れるワカメのように、常にゆらいでいる形です。

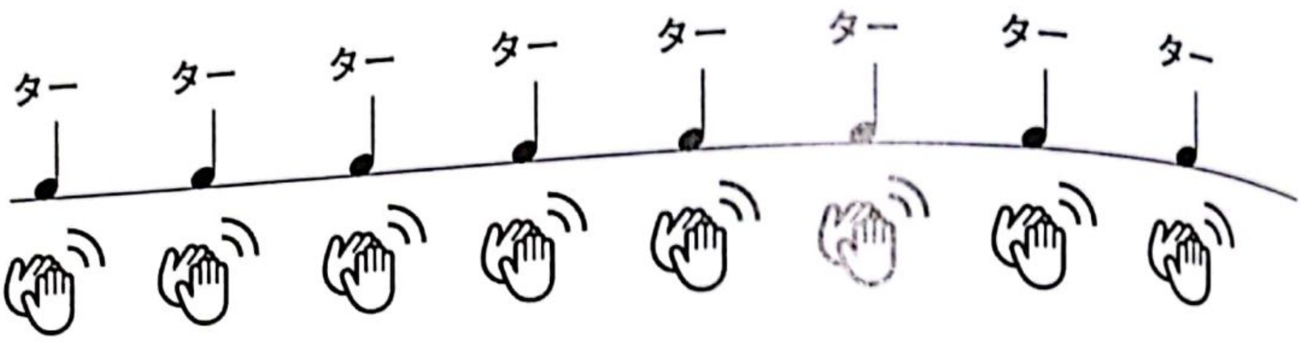


次のページに続く ▶

CamScannerでスキャン

① 拍をカウントして4分音符の長さを確認

TRACK 07 テンポ♩60　TRACK 08 テンポ♩120



手やメトロノームで拍をカウントしながら、「ター」で歌う or 楽器で音を鳴らしてみます

track07のテンポ♩60とtrack08のテンポ♩120で、テンポと拍の関係を体感しましょう

ヒント

この4分音符のカウントと手拍子が、均等にうまく刻めないという方もいらっしゃるかと思いますが、これは基本的な拍を感じるためのベースとなる大事な練習パターンです。

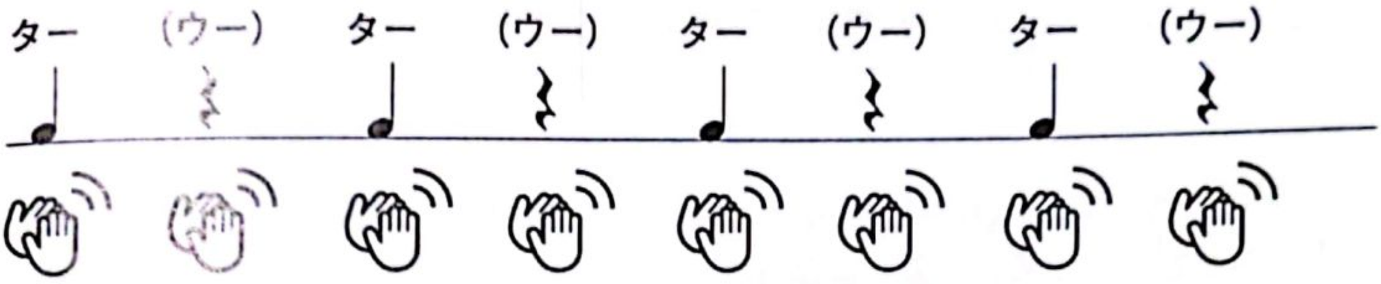
もしうまく刻めなくて不安な時は、レッスン2で紹介した「メトロノーム」のカウントを用いて、安定してできるようになるまで、何度も繰り返し練習してみてください。

できるだけ身体の力を抜いて、単純に動きを反復することがコツです。

CamScannerでスキャン

② 拍をカウントして4分音符と4分休符を確認

TRACK 09 テンポ♩60 TRACK 10 テンポ♩120



「ター」で歌って「(ウー)」は声に出さず心の中で感じてみます(楽器演奏でも試してみましょう)

track09のテンポ♩60とtrack10 のテンポ♩120で、テンポと拍の関係を体感しましょう

ヒント

4分音符を「タン」、4分休符を「ウン」という言葉で説明する教本が多いのですが、音の長さを感じる場合、「タン」はピアノやギターなどの音が減衰するイメージが強くなり、音の長さを短くしてしまいがちです。しかし歌や音が持続する楽器にとっての「4分音符」には、相応の長さがあります。本書では「4分音符」のイメージとして「ター」をオススメしています。

ヒント

ちなみに、休符は単なる「休み」と感じずに「音が鳴らない音符」と感じるようにしてください。これは音符と休符の組み合わせで、演奏がとぎれたり、それぞれの拍が歪な間隔になったりすることを防ぐコツです。

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 5

8分音符と8分休符を覚えよう

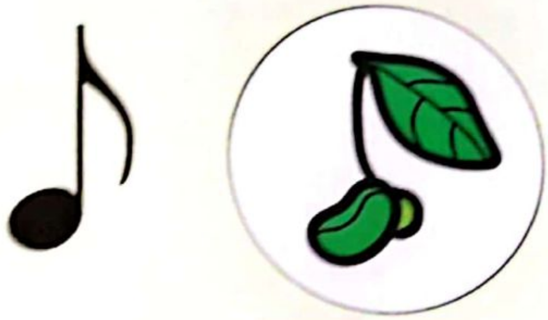
キーワード 半拍

「4分音符」が理解できたら、次は「8分音符」です。音符の長さは規則正しい法則になっていますので、まずは意味を理解しましょう。

拍をカウントしながら感覚を身につければ難しく感じることはありません。

1拍の半分の長さを表す音符が「8分音符」です

4分音符の棒の先に、旗（はた）が付いた形になります



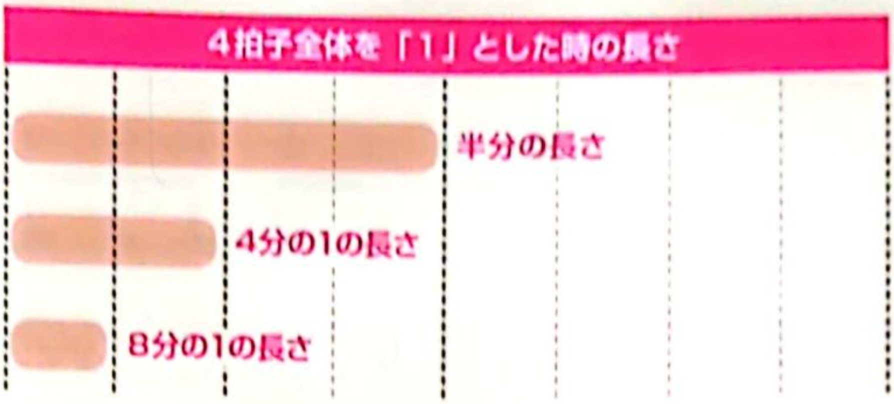
棒が上向きの時は、玉（種）の右側から棒（芽）が伸びて、その先に右向きの旗（葉っぱ）がつきます

棒が下向きの時は、玉（種）の左側から棒（根）が伸びて、やはり右向きの旗（ヒゲ）がつきます

CamScannerでスキャン

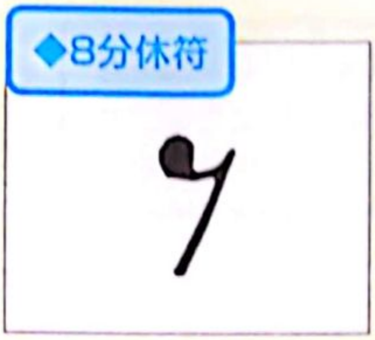
●なぜ「8分音符」と呼ぶのか？

4拍子の全体の長さを「1」とした時、その「8分の1（半拍）の長さの音符」なので、「8分音符」と呼ばれます。



●8分音符と同じ長さの休符が「8分休符」です

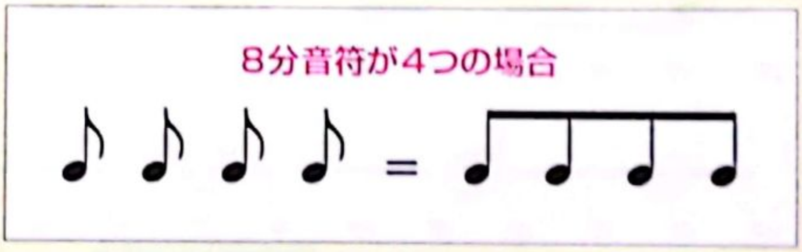
「消防署」の地図記号に似ていますが、8分休符は棒が右端にあります。

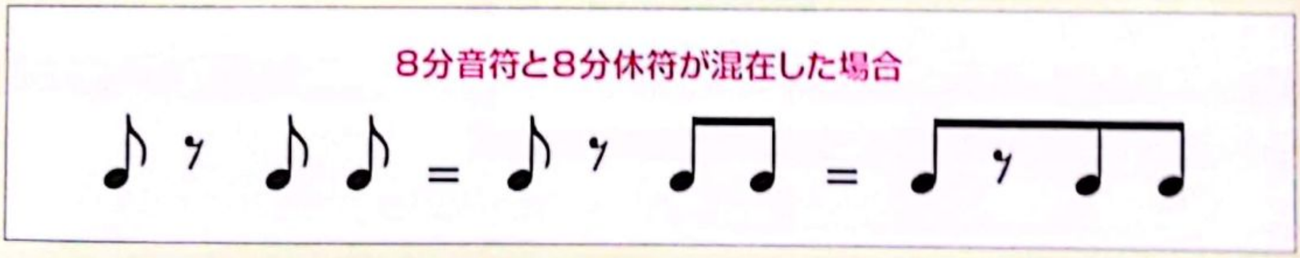


●旗が並ぶと、桁で繋げられます

8分音符や8分休符が連続する時、旗同士を繋いで、建築の桁のように書かれることもあります。

通常は1拍分（8分音符2つ）や2拍分（8分音符4つ）のまとまりで桁が繋がれます。



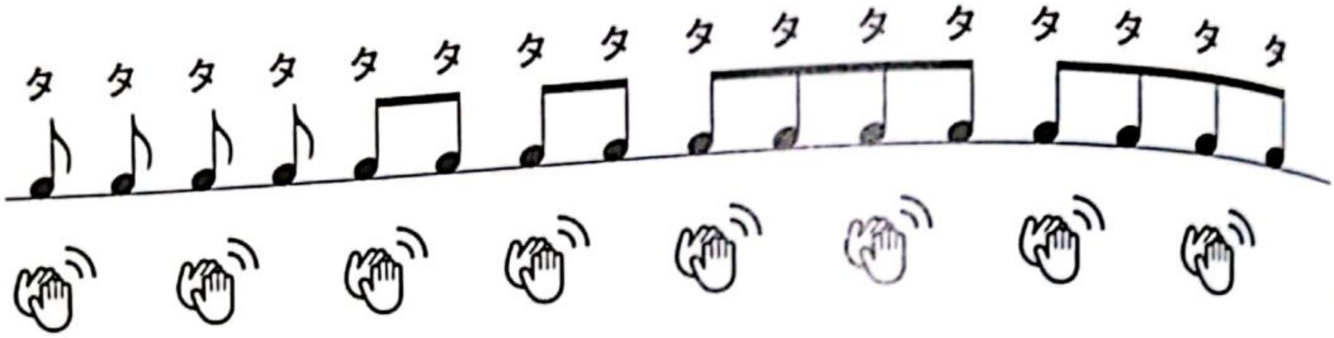


次のページに続く ▶▶▶

CamScannerでスキャン

① 拍をカウントして8分音符の長さを確認

TRACK 11 テンポ♩60　TRACK 12 テンポ♩120

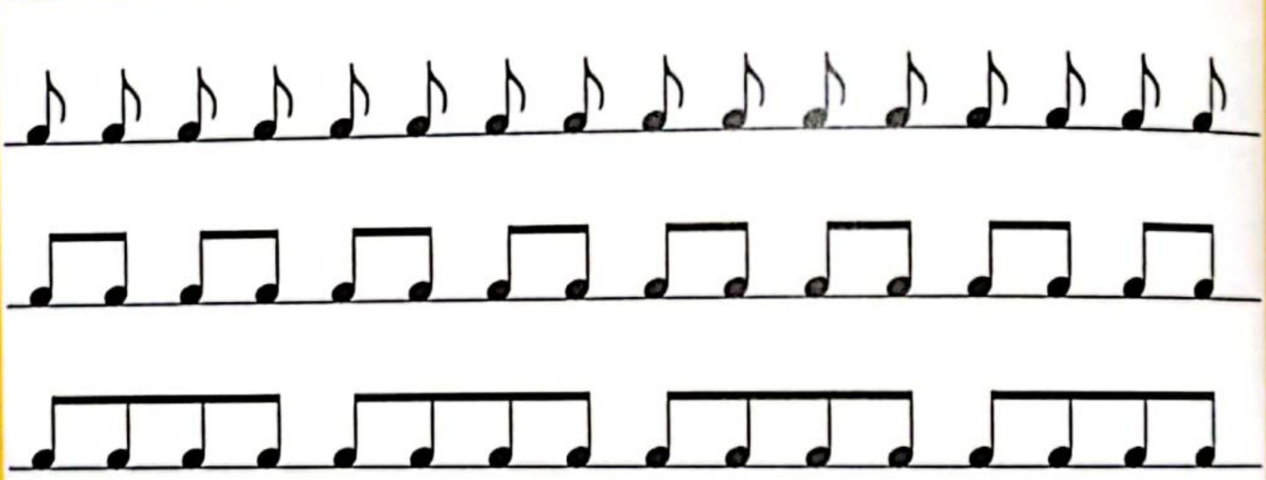


手やメトロノームで拍をカウントしながら、「タ」で歌う or 楽器で音を鳴らしてみます

track11のテンポ♩60とtrack12のテンポ♩120で、テンポと拍の関係を体感しましょう

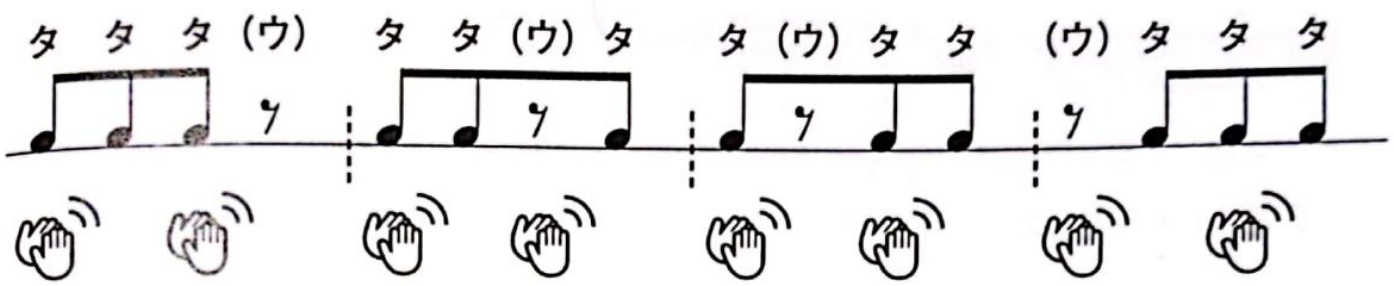
ヒント

下の譜例のように旗で書いても桁で書いても、すべて同じ8分音符の長さです。



② 拍をカウントして8分音符と8分休符を確認

TRACK 13 テンポ♩60　TRACK 14 テンポ♩120



「タ」で歌って「(ウ)」は声に出さず心の中で感じてみます（楽器演奏でも試してみましょう）

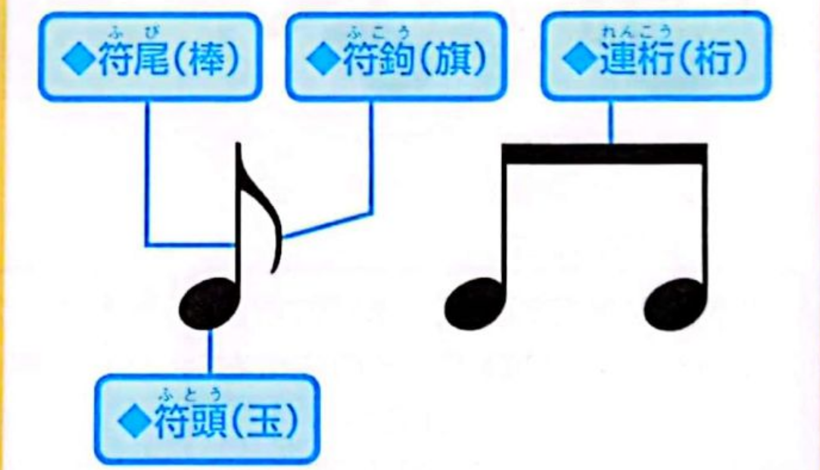
track13のテンポ♩60とtrack14のテンポ♩120で、テンポと拍の関係を体感しましょう

ヒント

8分音符（or休符）4つでひとかたまりとしてとらえて、すべて同じ長さの「タ」「(ウ)」で歌ってみます。そして慣れてきたら「(ウ)」の部分だけを声に出さずに練習するのがコツです。

ヒント

「玉」「棒」「旗」「桁」は次のような呼び方もあります。



終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 6

16分音符と16分休符を覚えよう

キーワード 1／4拍

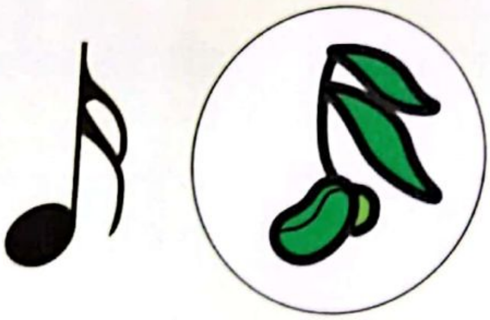
ここまで「4分音符」「8分音符」を紹介してきました。次は「16分音符」です。

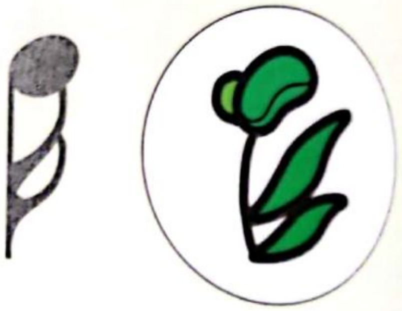
16分音符は8分音符を2分割した長さの音符になります。

1拍の1/4の長さを表す音符が「16分音符」です

8分音符の棒の先に旗（はた）を追加します

つまり4分音符の棒の先に「旗が2つ」です





棒が上向きの時は玉（種）の右から棒（芽）が伸びて、その先に右向きの旗（葉っぱ）が2つ

棒が下向きの時は玉（種）の左から棒（根）が伸びて、やはり右向きの旗（ヒゲ）が2つ

ヒント

玉に近いほうの旗が、2つ目の外側の旗よりもちょっと長めです

なぜ「16分音符」と呼ぶのか？

４拍子の全体の長さを「１」とした時、その「16分の1（1/4拍）の長さの音符」なので、「16分音符」と呼ばれます。

16分音符と同じ長さの休符が「16分休符」です

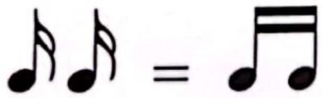
16分音符と同様に、８分休符を２つズラして重ねたような形です。

◆16分休符

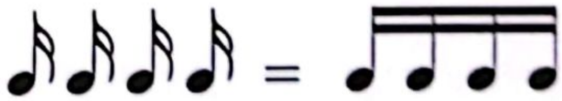
旗が並ぶと、桁で繋げられます

８分音符(休符)と同様、16分音符や16分休符が連続する時、旗同士を繋いで、建築の桁のように書かれることもあります。８分音符は桁が１本ですが、16分音符では桁は２本になります、通常は1/2拍分（16分音符２つ）や１拍分（16分音符4つ）のまとまりで桁が繋がれます。

16分音符が2つの場合



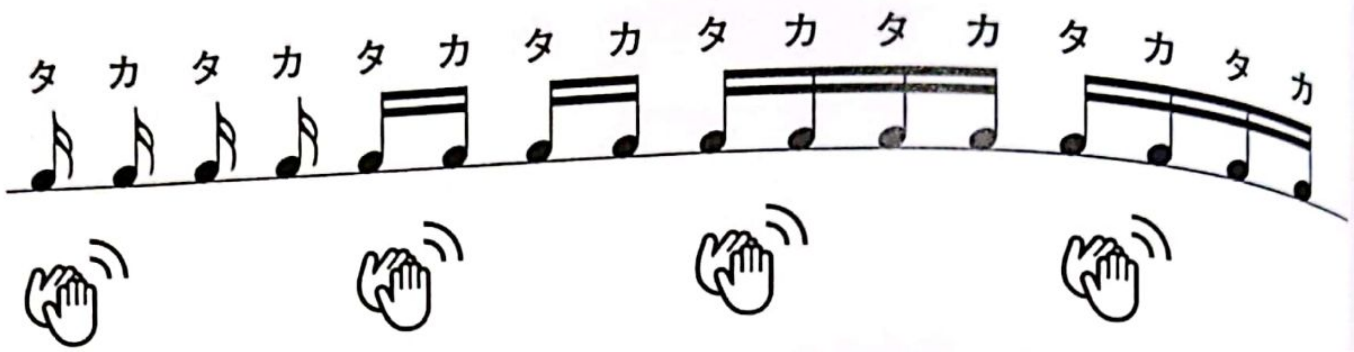
16分音符が4つの場合



16分音符と16分休符が混在した場合

次のページに続く ▶▶▶

① 拍をカウントして16分音符の長さを確認

TRACK 15 テンポ♩60　TRACK 16 テンポ♩100

手やメトロノームで拍をカウントしながら、「タ」「カ」で歌う or 楽器で音を鳴らしてみます（速いタイミングでは「タ」が発音しにくいので工夫しましょう）

track15のテンポ♩60とtrack16のテンポ♩100で、テンポと拍の関係を体感しましょう

ヒント

上の譜例のように旗で書いても桁で書いても、すべて同じ16分音符の長さです。

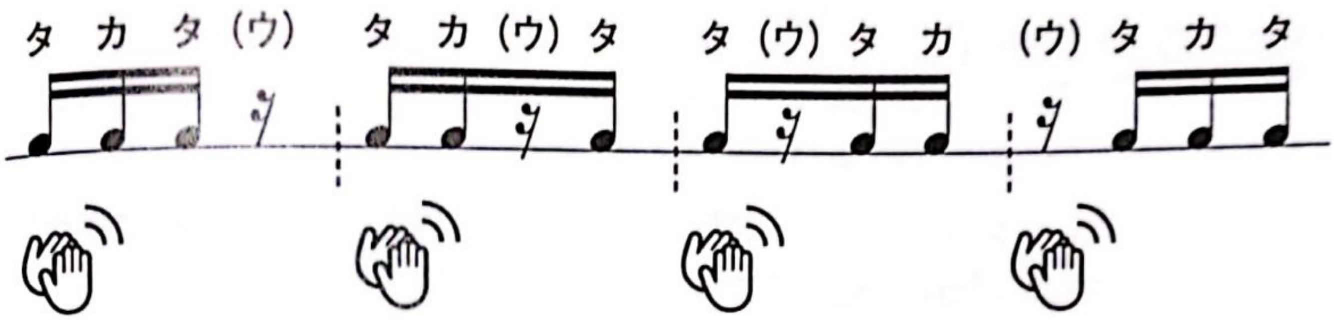
ヒント

16分音符（or休符）は短い（速い）という印象を持っているかもしれませんが、あくまでもテンポとの相対関係によります。

例えばtrack15のテンポ♩60での16分音符（or休符）は、レッスン5のtrack12のテンポ♩120の8分音符（or休符）と実際に演奏される音の「長さ」は同じです（演奏する側の「拍」の速さは倍になります）。

② 拍をカウントして16分音符と16分休符を確認

TRACK 17 テンポ♩60　TRACK 18 テンポ♩100



「タ」「カ」で歌って「(ウ)」は声に出さず心の中で感じます（楽器演奏でも試してみましょう）

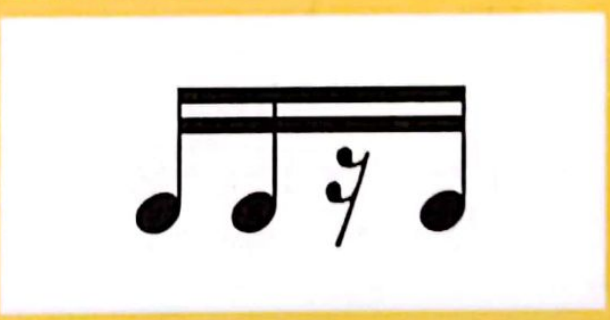
track17のテンポ♩60とtrack18のテンポ♩100で、テンポと拍の関係を体感しましょう

ヒント

16分音符と16分休符の連桁は通常2本で繋ぐため、8分音符が混ざらない限り1本になることはありません。しかし最近はパソコン楽譜作成ソフトなどにより、下記の左のような不思議な書き方もはびこっています。

不思議な書き方

通常の書き方



終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 7 2分音符と2分休符を覚えよう

キーワード 2拍

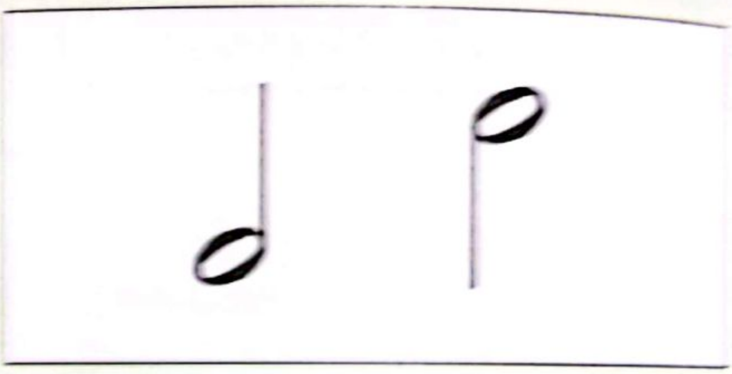
これまでは、「4分音符」「8分音符」「16分音符」と、レッスンが進むにつれて音の長さを半分に減らして考えてきました。

ここからは音の長さを2倍に増やしながら音符を考えていきます。

1拍の2倍の長さを表す音符が「2分音符」です

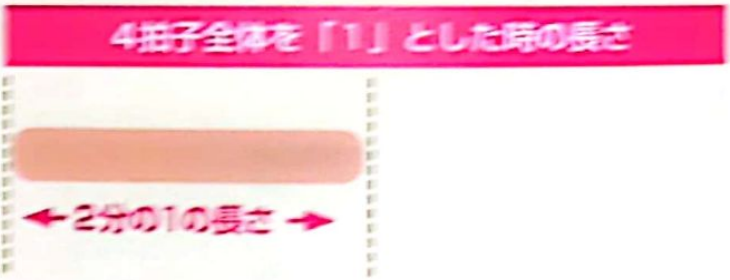
「2分音符」は、4分音符の玉の部分が白抜き(白玉)になったものです。2拍分の長さを表します。

4分音符と同じく、上向きと下向きがあります。



●なぜ「2分音符」と呼ぶのか？

4拍子の全体の長さを「1」とした時、その「2分の1(2拍)の長さの音符」なので、「2分音符」と呼ばれます。



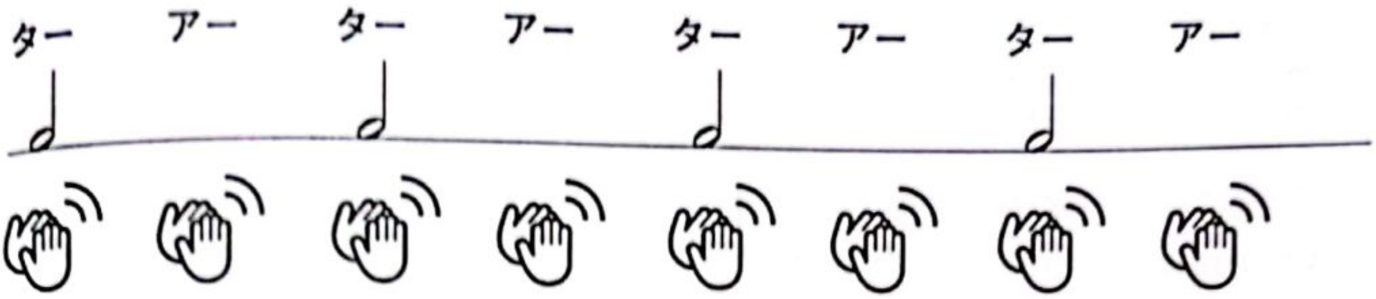
●2分音符と同じ長さの休符が「2分休符」です

基準となる線の上に置かれているのが2分休符です。地面に置かれた石碑のような形です。

地面に置かれた石碑

① 拍をカウントして2分音符の長さを確認

TRACK 19 テンポ♩60　TRACK 20 テンポ♩120

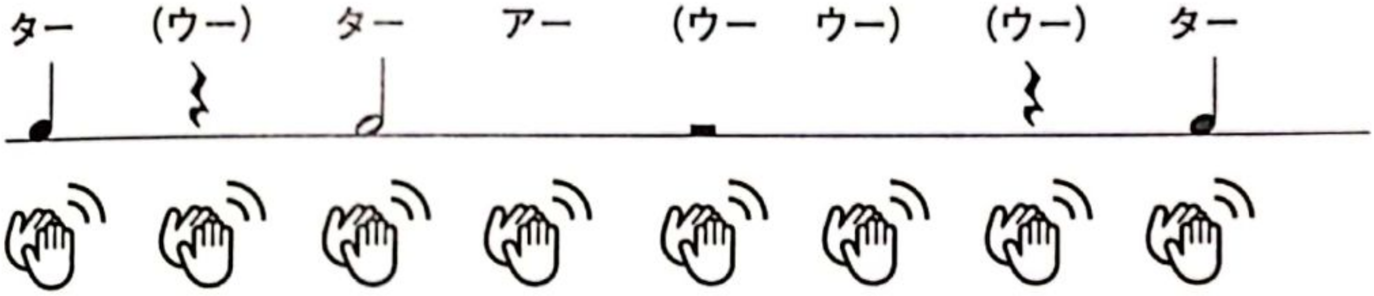


手やメトロノームで拍をカウントしながら、「ターアー」で歌う or 楽器で音を鳴らしてみます

track19のテンポ♩60とtrack20のテンポ♩120で、テンポと拍の関係を体感しましょう

② 拍をカウントして2分と4分の音符&休符を確認

TRACK 21 テンポ♩60　TRACK 22 テンポ♩120



「ター(アー)」で歌って「(ウー)」は声に出さず心の中で感じます(楽器演奏でも試してみましょう)

track21のテンポ♩60とtrack22のテンポ♩120で、テンポと拍の関係を体感しましょう

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 8

全音符と全休符を覚えよう

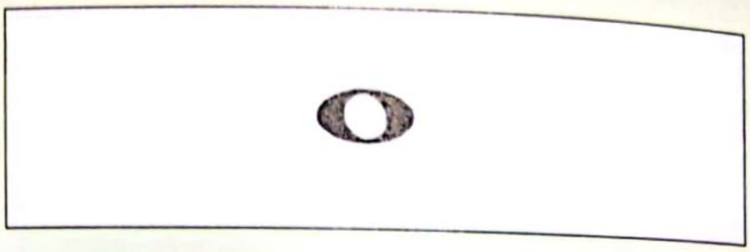
キーワード 4拍

「2分音符」は「4分音符」を2倍にした長さの音符ですが、その「2分音符」をさらに2倍にした長さの音符が「全音符」です。

音符の名称は、全音符を基準にして表しているのです。

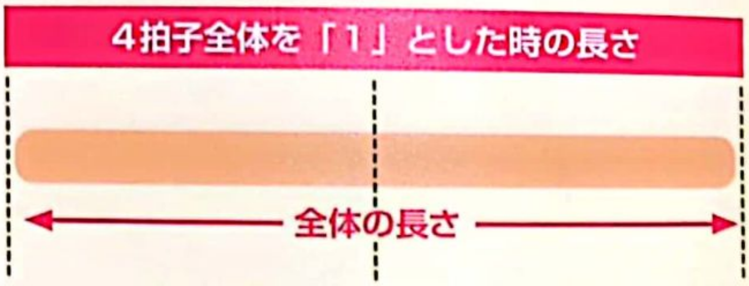
2拍の2倍の長さを表す音符が「全音符」です

棒がつかない白玉だけの音符が、全音符です。4拍分の長さを表しています。



●なぜ「全音符」と呼ぶのか？

4拍子の全体の長さを「1」とした時、その長さの「全体」になるので、「全音符」と呼ばれます。



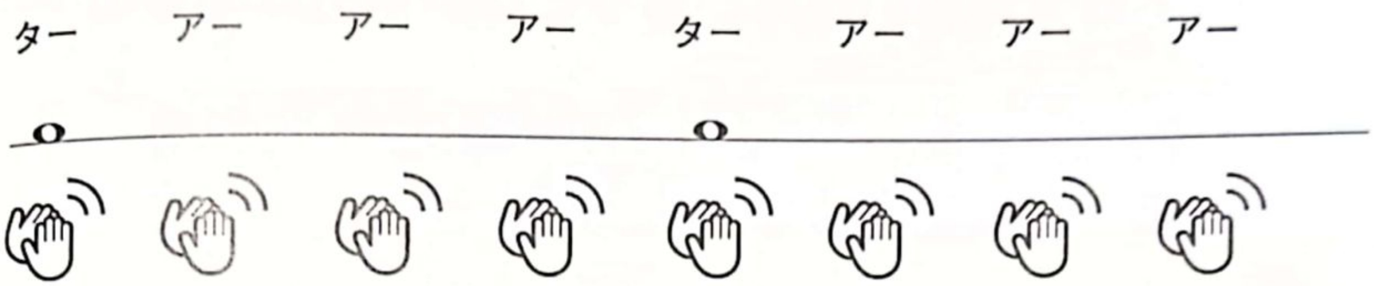
●全音符と同じ長さの休符が「全休符」です

基準となる線の下にぶら下がっている形が全休符です。物干しにかけられたタオルのようです。2分休符と似ていますが、線にぶら下がっているほうが全休符と覚えてください。

※拍数に限らず「1小節目休み」の意味もありますが、そちらは付録1を参照してください。

① 拍をカウントして全音符の長さを確認

TRACK 23 テンポ♩60　TRACK 24 テンポ♩120

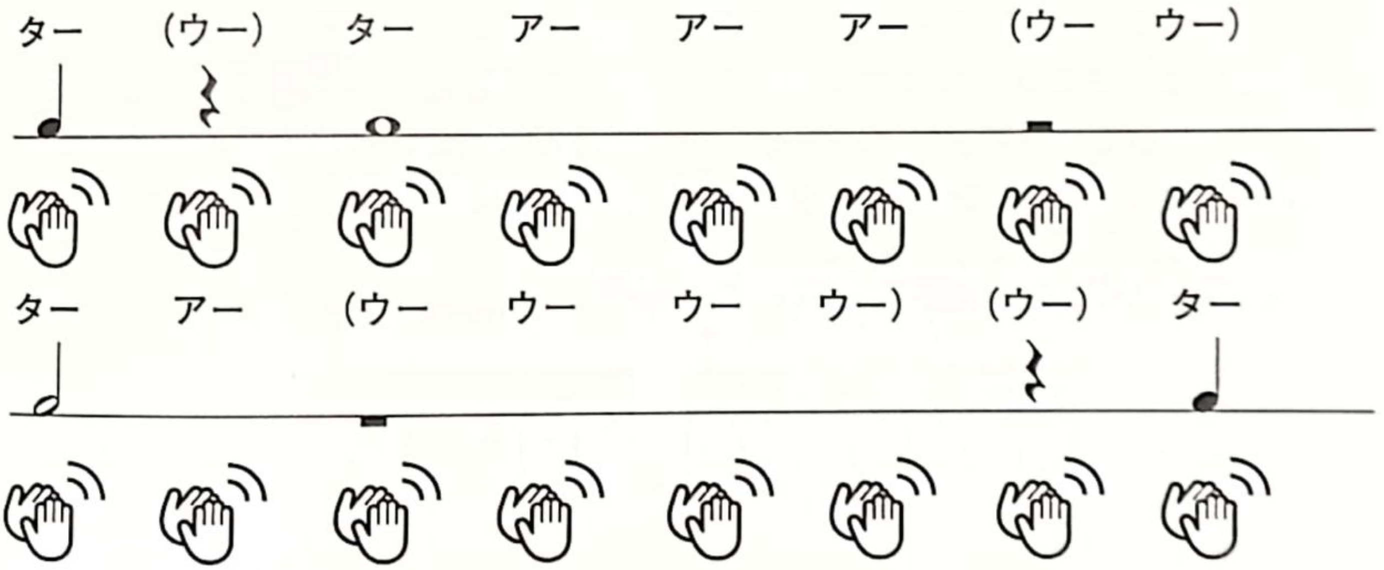


手やメトロノームで拍をカウントしながら、「ターアーアーアー」で歌う or 楽器で音を鳴らしてみます

track23のテンポ♩60とtrack24のテンポ♩120で、テンポと拍の関係を体感しましょう

② 拍をカウントして、いろいろな音符&休符を確認

TRACK 25 テンポ♩60　TRACK 26 テンポ♩120



「ター(アー)」で歌って「(ウー)」は声に出さず心の中で感じます(楽器演奏でも試してみましょう)

track25のテンポ♩60とtrack26のテンポ♩120で、テンポと拍の関係を体感しましょう

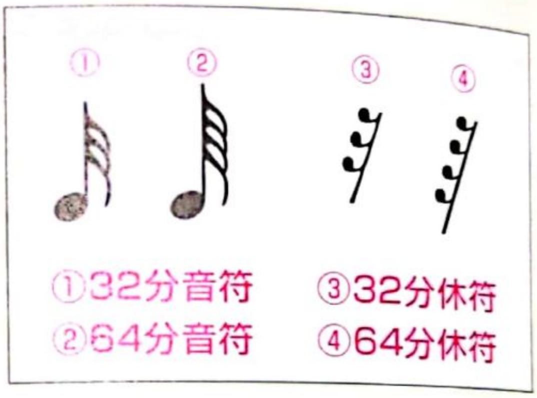
終わり

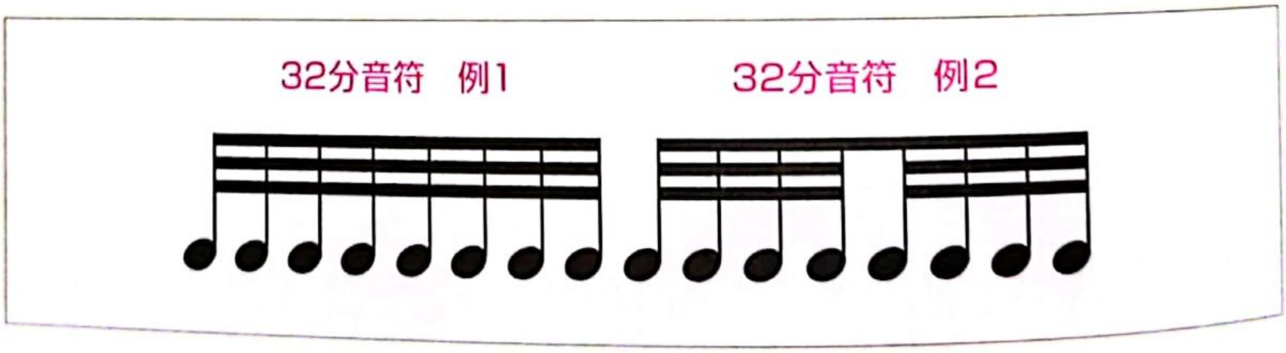
CamScannerでスキャン

Q もっと短い音符、もっと長い音符はあるの？

A 短いものは「32分音符」「64分音符」長いものは「倍全音符」などもあります

●短い音符について

これまでと同じように考えると、16分音符を半分に分割した長さは32分音符、さらに半分に分割した長さは64分音符となります。音符の形は旗がひとつずつ増えていくことになります。休符も同様です。

●どのように使われるの？

ちなみに32分音符は、4拍を32分割した長さです。つまり1拍を8つに分割した長さですね（例1）。テンポが遅い曲やコンピューターを使った音楽などでは、稀に使われる音符です。連続する時には桁でまとめられることも多く、途中で桁を分断して（例2）音符の数のグループを見やすく表記することもあります。

●長い音符について

長い音符や休符には、最近では滅多に使われませんが、全音符や全休符の倍の長さの「倍全音符」や「倍全休符」があります。

CamScannerでスキャン

第2章

もっと拍子を読んでみよう

第１章に登場した「拍子」。次のステップとなる第２章では、この「拍子」についてもう少し深く知っていきます。小節と小節を分ける「小節線」、１小節の中の拍の数を示す「□拍子」など、慌てずじっくり覚えていきましょう。

この章の内容

9 基本の小節線を覚えよう …… 38
10 その他の小節線を覚えよう …… 40
11 拍子を表す記号を覚えよう …… 42
12 2拍子を知ろう …… 44
13 3拍子を知ろう …… 46
14 4拍子を知ろう …… 48
15 変わった拍子を知ろう …… 50
16 強拍と弱拍を知ろう …… 52
楽譜&リズムの素朴な「?」に答えるQ&A …… 54

CamScannerでスキャン

レッスン 9

基本の小節線を覚えよう

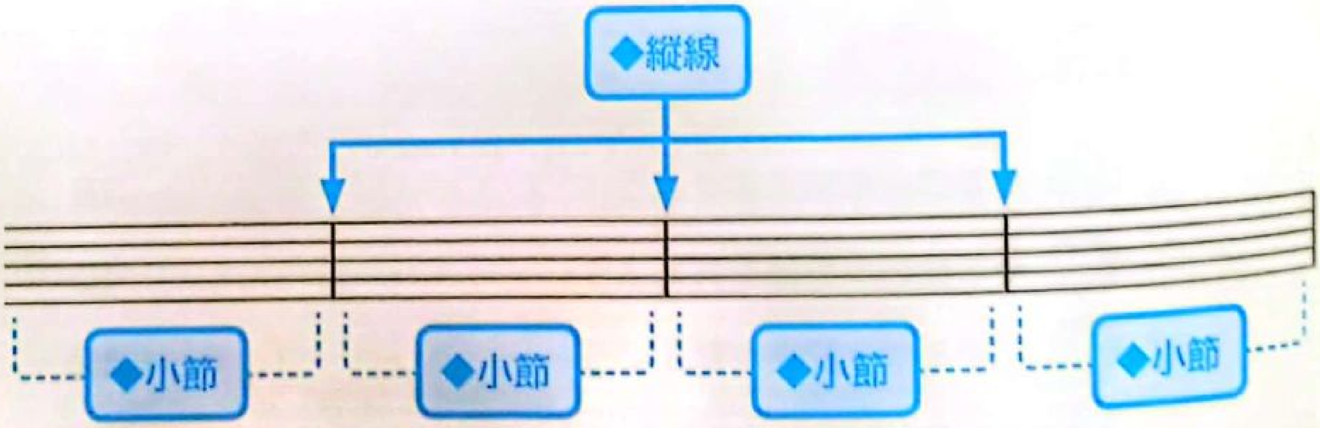
キーワード 小節、縦線

楽譜にはいろいろな種類の線が使われます。例えば、第1章の音符の長さを表す形にも玉と棒が出てきましたが、ここでは、それとは違った意味を持つ、楽譜上では基本となる縦の線について覚えましょう。

拍子の区切りに使われる記号が「縦線」です

楽譜は強・弱の組み合わせが感じられる「拍子」のグループに沿って、縦線で区切られます。その縦線と縦線に挟まれた、拍の一箱に当たる部分が「小節（しょうせつ）」です。

楽譜を読む方向は、この本を読む方向と同じで、左の小節から右の小節へと順番に進んでいきます。

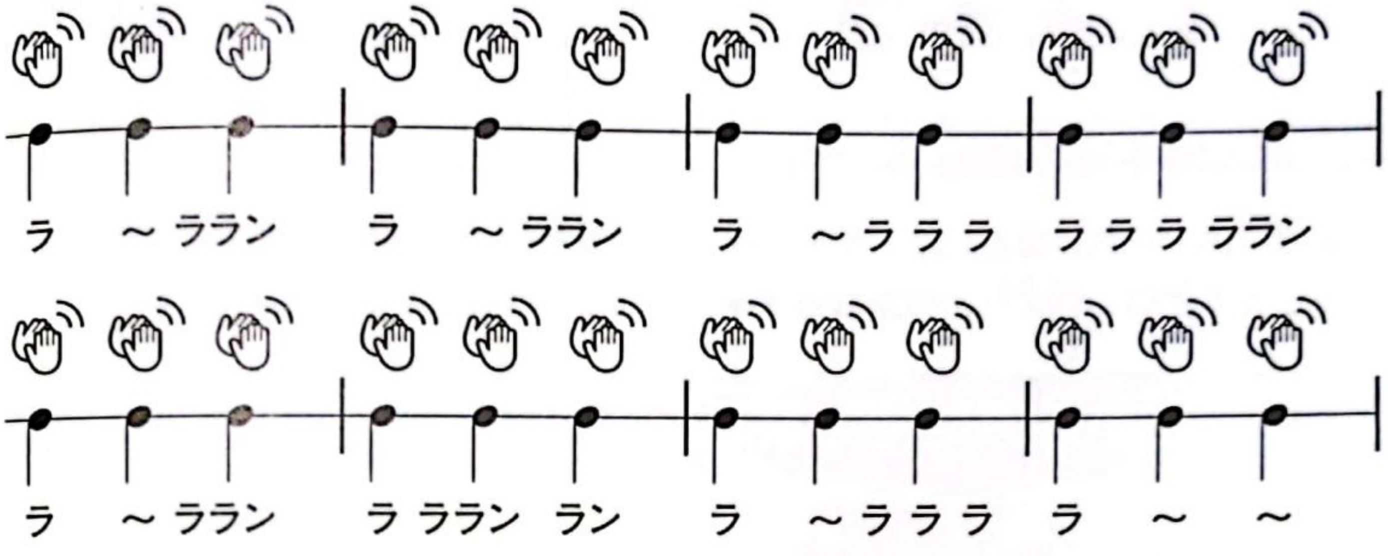


上の譜例では、楽譜でお馴染みの横の五本線である「五線」をサンプルに説明しています。音の高さを表すこの「五線」については、第4章で詳しく説明します。

ヒント

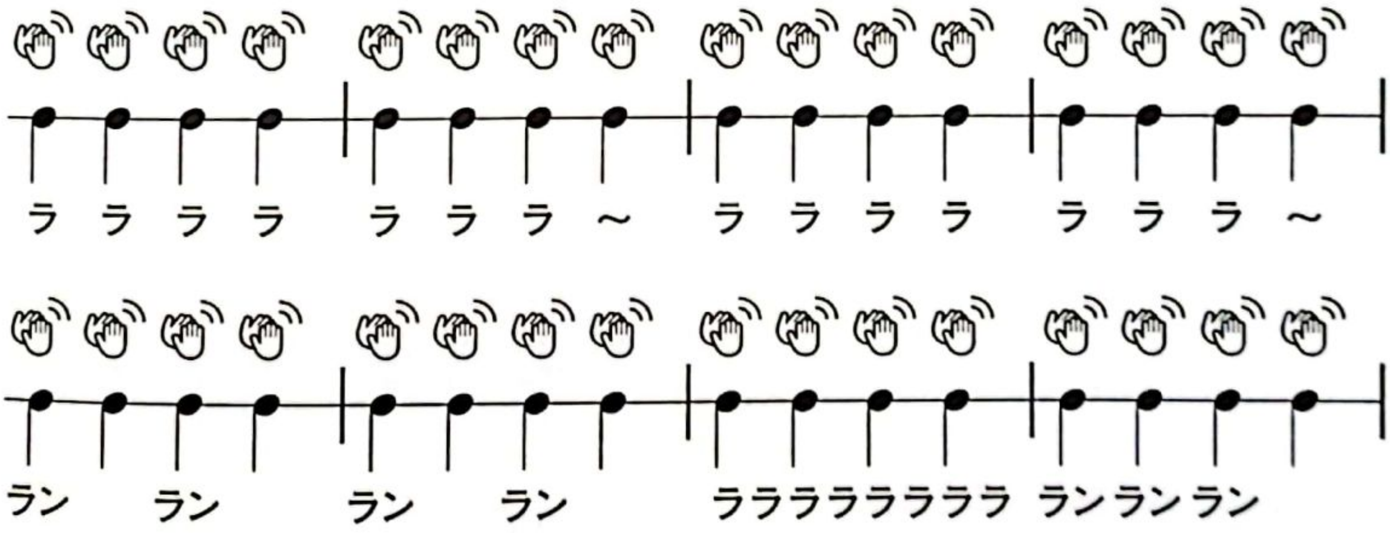
竹の幹にも区切りがあって、そちらは「竹の節（ふし）」と呼びますが、音楽における小さな節を表すものが「小節」です。

① 3拍子の小節を感じましょう

TRACK 27

拍を手拍子でとりながら「ぞうさん」のメロディを口ずさんでみます

3拍子で1小節ごとの区切りを感じてみましょう

② 4拍子の小節を感じましょう

TRACK 28

拍を手拍子でとりながら「かえるのうた」のメロディを口ずさんでみます

4拍子で1小節ごとの区切りを感じてみましょう

終わり

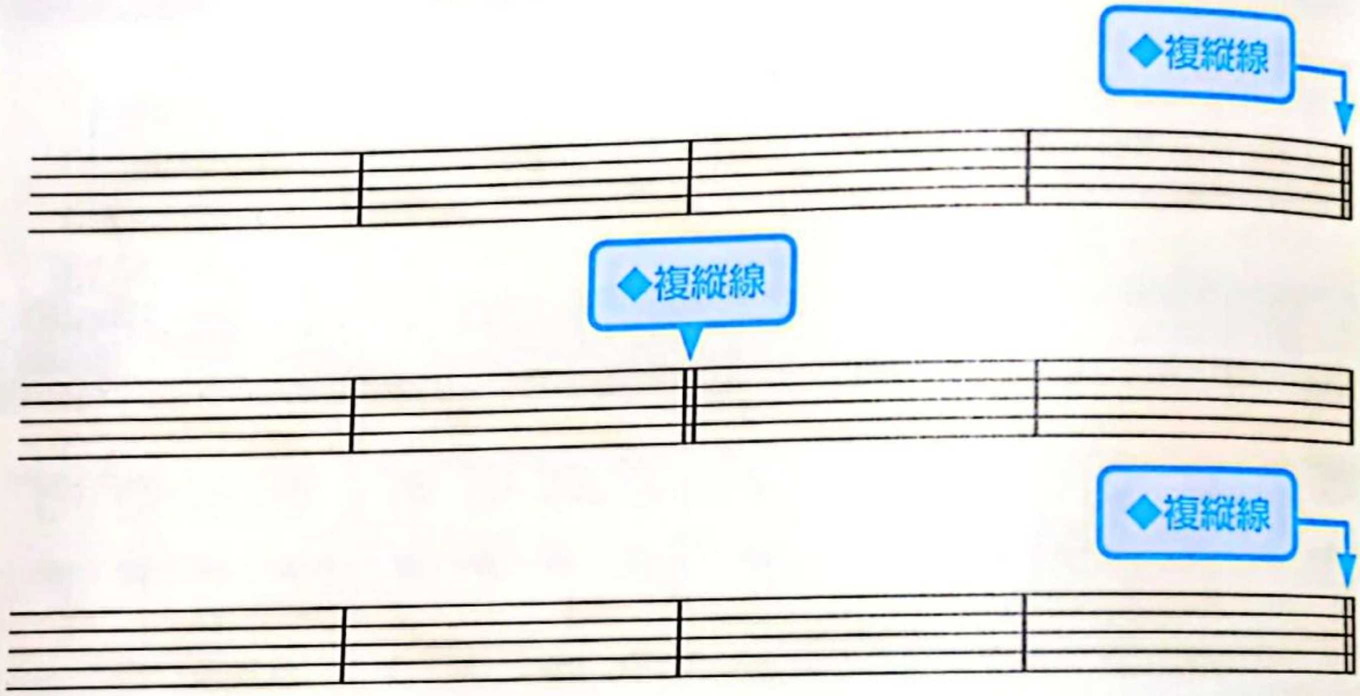
CamScannerでスキャン

レッスン 10
その他の小節線を覚えよう

キーワード 複縦線、終止線

楽譜に用いられる縦線には、小節の区切りを表す縦線の他にも、特別な意味を持った縦線があります。ここではそれらもまとめて覚えてしまいましょう。

第2章 もっと拍子を読んでみよう

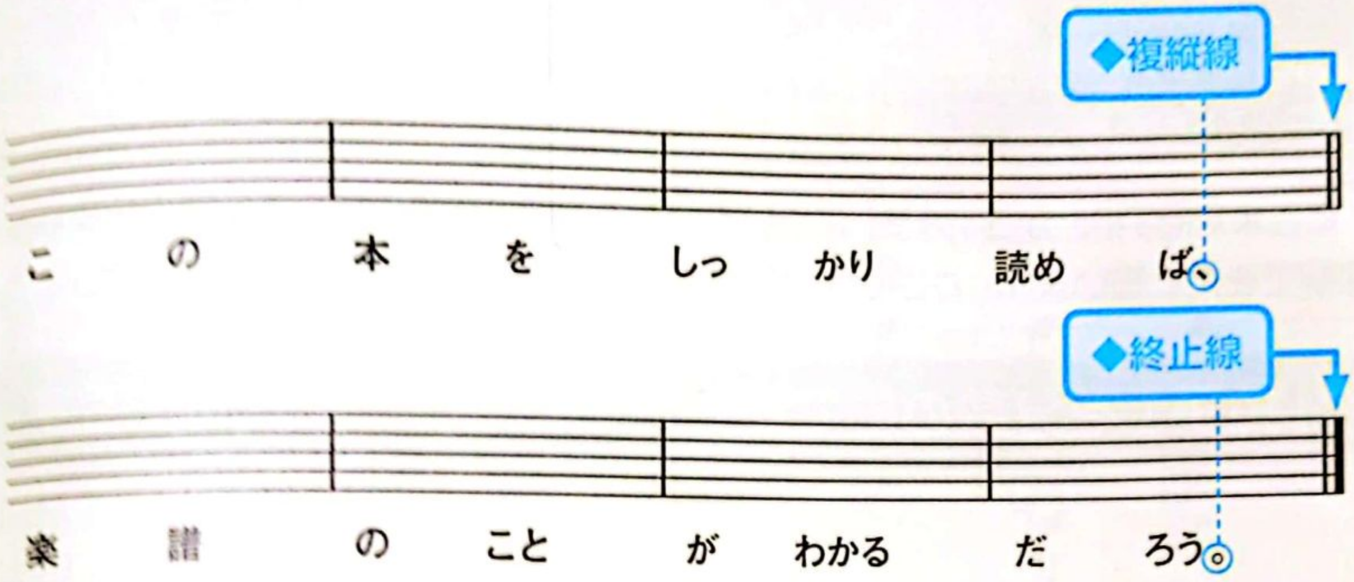
曲の段落に使われる記号が「複縦線」です

上の譜例はいくつかの縦の線で区切られています。2本の縦線は「複縦線」といい、曲の段落や曲の雰囲気が変わる時に使われます。

曲の段落区切りの用途としては、①～④などが挙げられます。

①テンポが変わる場合
②拍子が変わる場合
③キー（調性）が変わる場合
（「キー」については第4章で説明します）
④くり返しなどで流れが変わる場合
などがあります

CamScannerでスキャン

曲の終わりに使われる記号が「終止線」です



曲のはじめから終わりまでをひとつの文（一文）と考えた場合、複縦線は「テン（、）」、そして終止線は「マル（。）」にあたります。

文章でいう改行にあたるのが、楽譜の段の改段です。

段の一番右の小節まで進んだところで、下の段の左端の小節に移動します。小節の途中で次の段に移る特別なケースもありますが、通常は小節の区切りとなる縦線や複縦線で次の段の小節に移動します。

ヒント

「縦線」「複縦線」「終止線」の３点セットのことをまとめて「小節線」といいます。しかしまれに「縦線」のことだけを指して、単に「小節線」と説明する場合もあります。

終わり

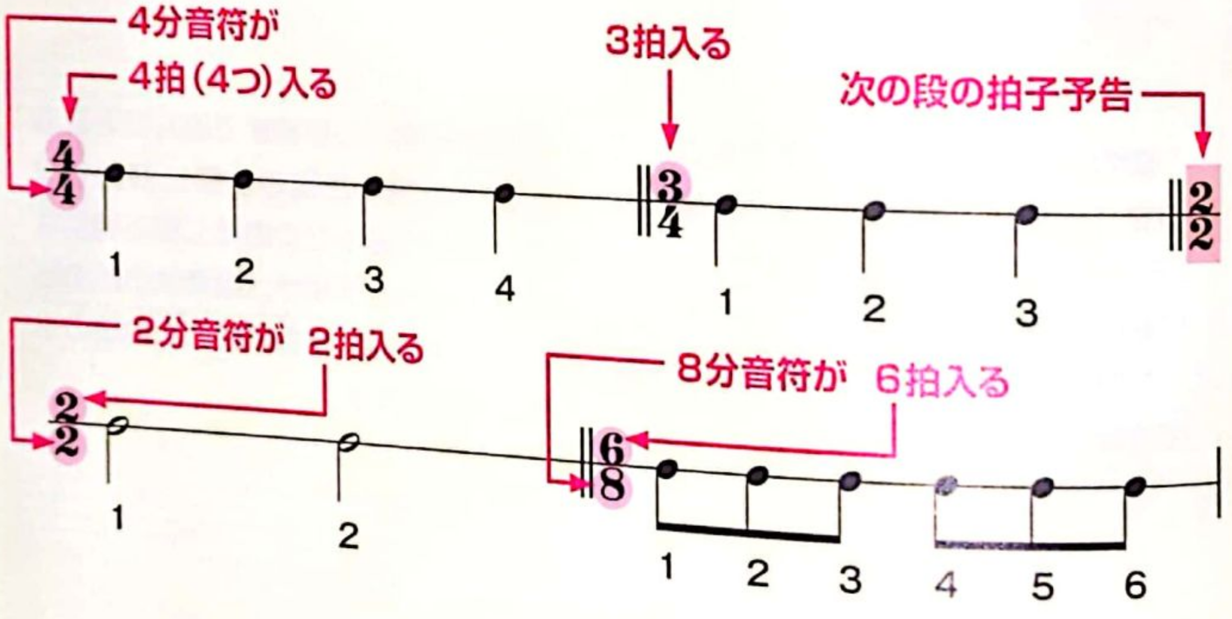
CamScannerでスキャン

レッスン11 拍子を表す記号を覚えよう

キーワード 拍子記号

ここまでで「拍」から「拍子」について理解できたと思います。ここでは「拍子」を実際に楽譜に書き表す時の決まりなどをまとめて覚えておくことにしましょう。

「拍子」を分数の形で記したものが「拍子記号」です



分数といっても、算数のように計算をしたりはしません。

分数の下の数字（分母）が「1拍として数える基準の音符の種類」、分数の上の数字（分子）が「1小節に入る拍の数」です。

第1章では4分音符を1拍と考えて説明をしてきましたが、ここからの拍子記号では、1拍とカウントする音符の種類ももっと自由に選べると考えてください。

拍子が変わる時の小節線は、レッスン10で紹介したように「複縦線」となります。さらに拍子記号が変わるところで改段する場合は、次の段の最初の拍子記号を、直前の段の右端で予告表示します（上譜例、上段右端）。

第2章 もっと拍子を読んでみよう

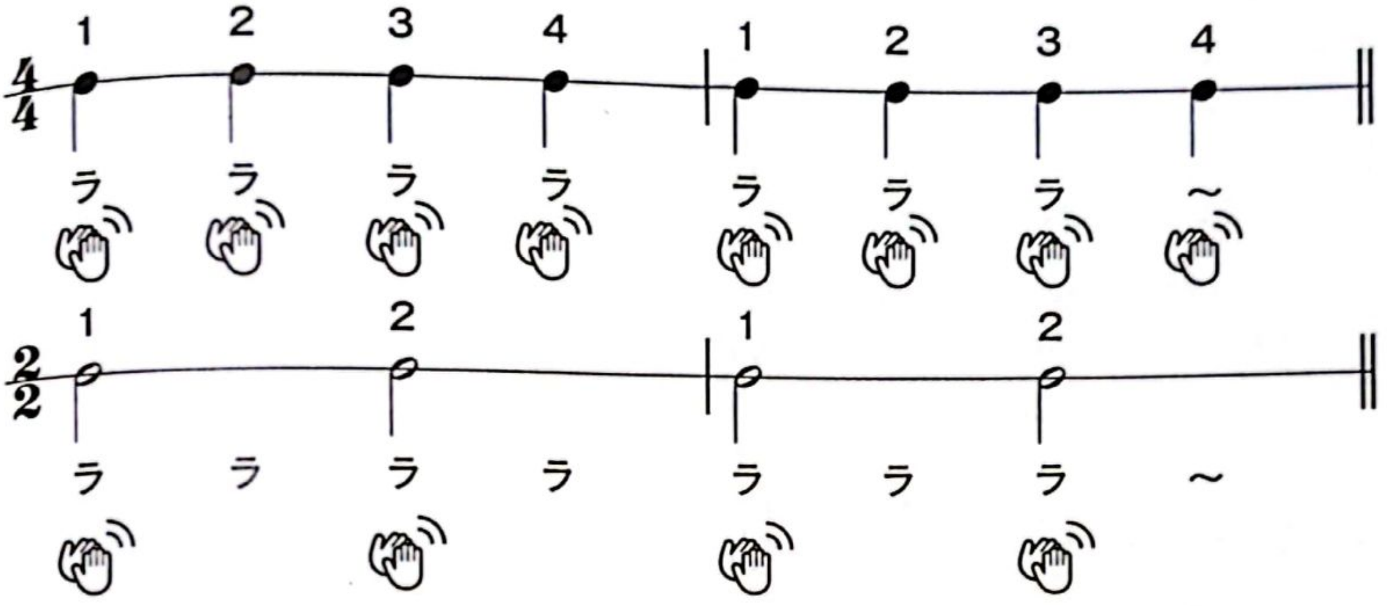
CamScannerでスキャン

① 4/4拍子と2/2拍子を比べましょう

TRACK 29

4/4拍子（譜例上段）で拍のカウントを手拍子しながら「かえるのうた」のはじめの2小節のメロディを口ずさんでみます

続けて同じく、2/2拍子（譜例下段）で拍のカウントを手拍子しながらメロディを口ずさんでみます

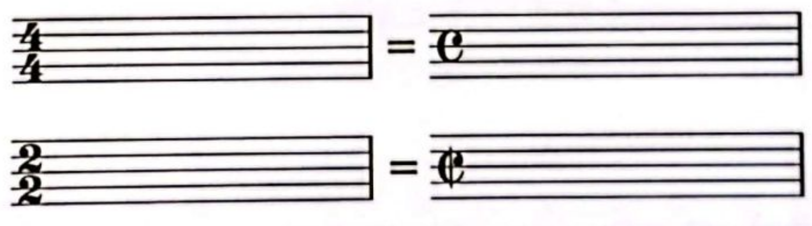


ここでは1拍とする基準の音符の種類は異なりますが、テンポはどちらも同じと想定します

歌われるタイミングは同じはずですが、フレーズの感じ方として、4/4拍子では「タ・タ・タ・タ・タ・タ・タ・～」と、ひとつずつの歯切れがよくなり、2/2拍子では「タ～タ～/タ～タ～/タ～タ～/タ～～～」と、ややとらえ方が大きくなる傾向があります

ヒント

4/4拍子や2/2拍子には、𝄴、𝄵などの略記号（図右）があり、ポピュラー音楽などでは、こちらが好んで使われることもあります。



終わり

レッスン 12

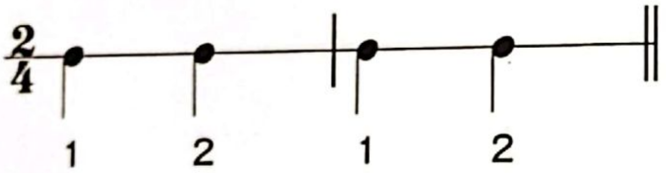
2拍子を知ろう

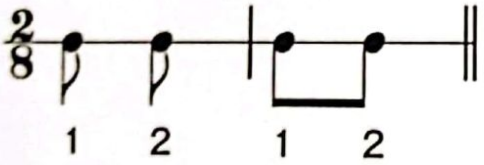
キーワード 2拍子系

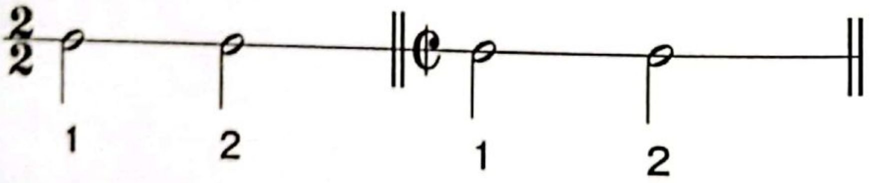
拍子記号の仕組みがわかったところで、実際の音楽で使われる拍子の種類を、いくつかに分類して考えてみましょう。まずは基本的な「2拍子」系の拍子記号です。

拍子記号の上の数字（分子）が「2」のものは「2拍子」です

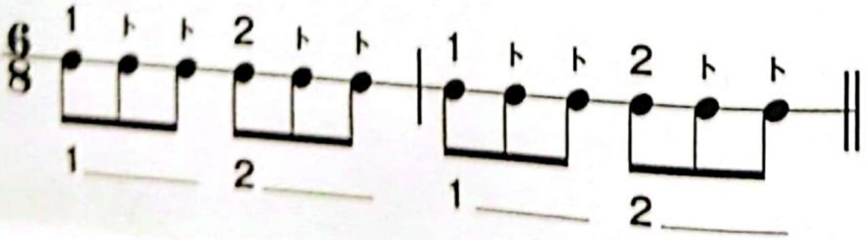
代表的なものは、4分音符を1拍とする「2/4」拍子です。その他には8分音符を基準にした「2/8」拍子、そして2分音符を基準とした「2／2」拍子（略記号の場合も同じ）なども使われます。







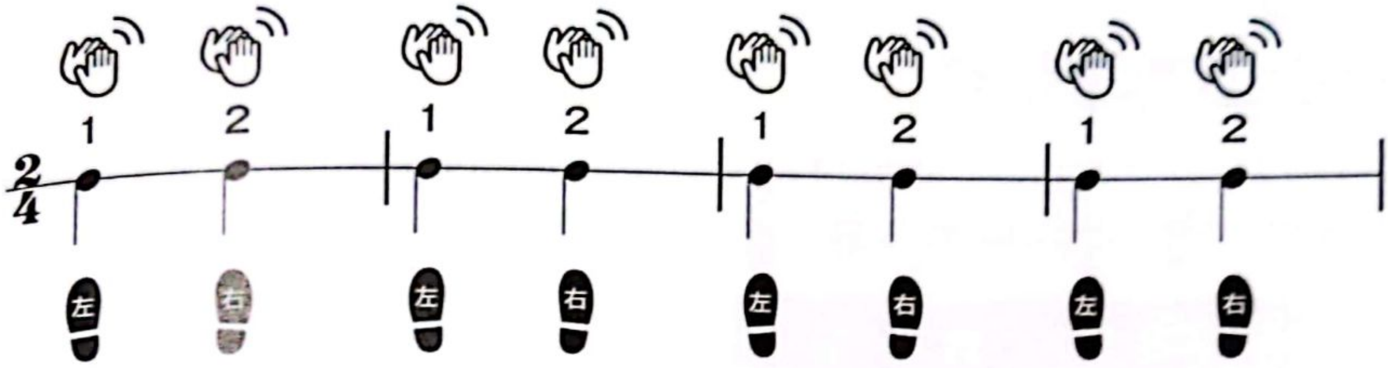
8分音符を基準とした6拍子「6/8」拍子は、8分音符3つのグループを1拍とカウントする「3/8（3拍子）が2つ」の2拍子の仲間とも考えられます。



第2章 もっと拍子を読んでみよう

①「2/4」の行進に合わせて足踏みしてみよう

TRACK 30

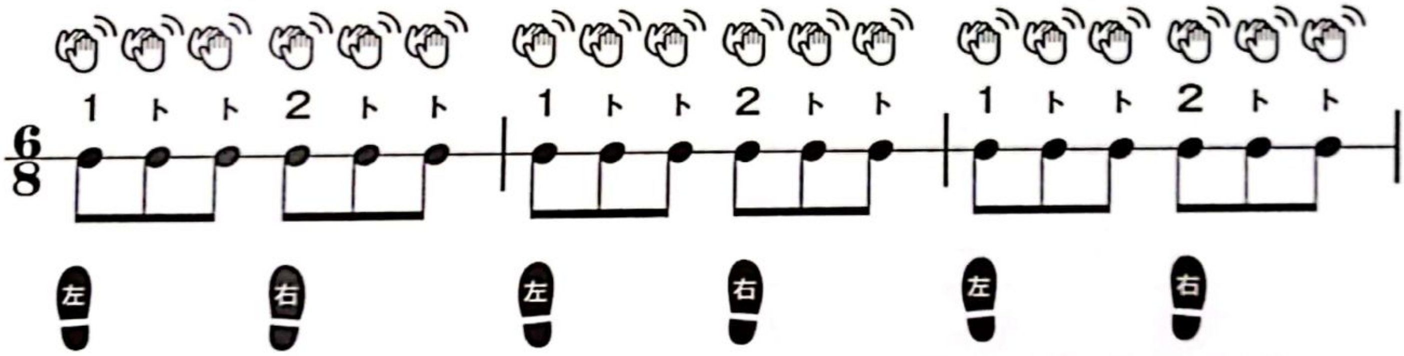


手拍子しながら、2拍子に合わせて足踏み（行進）してみます

行進の動きで「強・弱」（1拍・2拍）の繰り返しを感じてみましょう

②「6/8」の行進に合わせて足踏みしてみよう

TRACK 31



細かな6つの手拍子を打ちながら、それと同時に大きな流れの2拍子に合わせて足踏み（行進）してみます

ここでは、同じ2拍子系の行進の動きで「2/4」拍子と「6/8」拍子の違いを感じてみましょう

終わり

CamScannerでスキャン

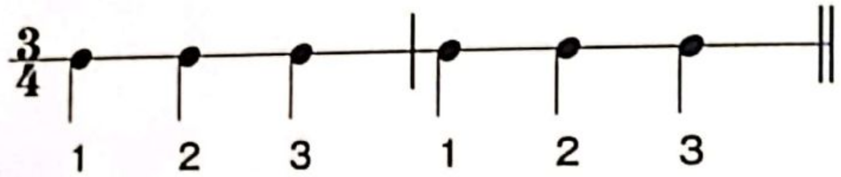
レッスン 13 3拍子を知ろう

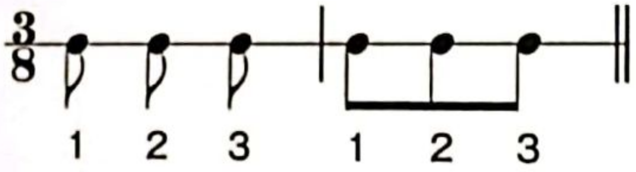
キーワード 3拍子系

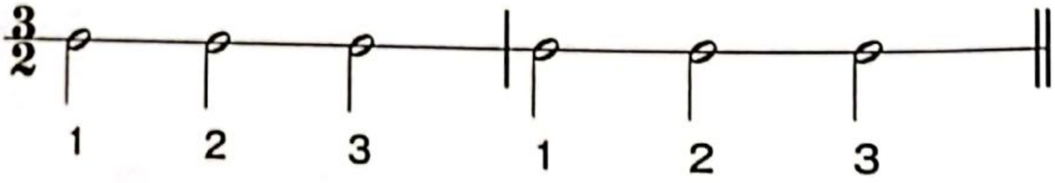
レッスン12で「2拍子」系の拍子記号を理解できたかと思います。次は「3拍子」系の拍子記号について覚えていきましょう。

拍子記号の上の数字（分子）が「3」のものは「3拍子」です

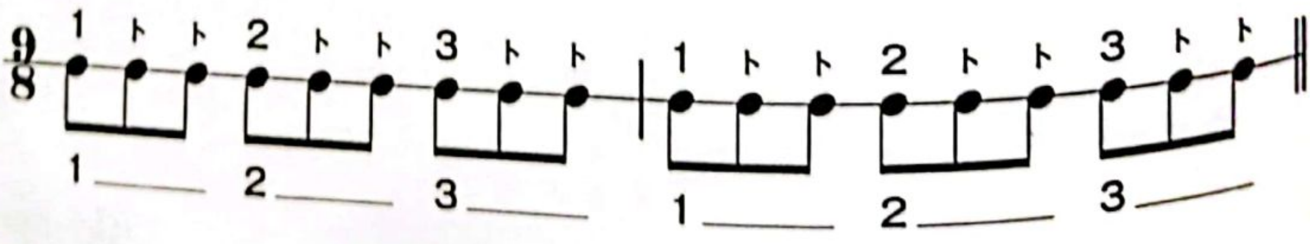
代表的なものは、4分音符を1拍とする「3/4」拍子ですが、8分音符を基準にした「3/8」拍子、2分音符を基準とした「3/2」拍子なども使われます。





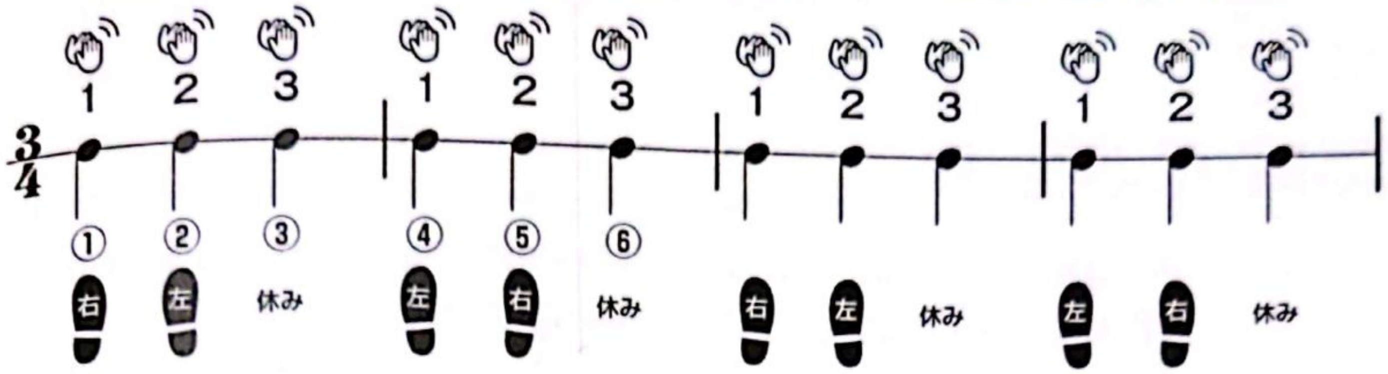


「6/8」拍子と同じく「9/8」拍子も、8分音符3つのグループを1拍とカウントして「3/8（3拍子）が3つ」の3拍子の仲間とも考えられます。



①「3/4」のワルツに合わせて左右にステップしよう

TRACK 32



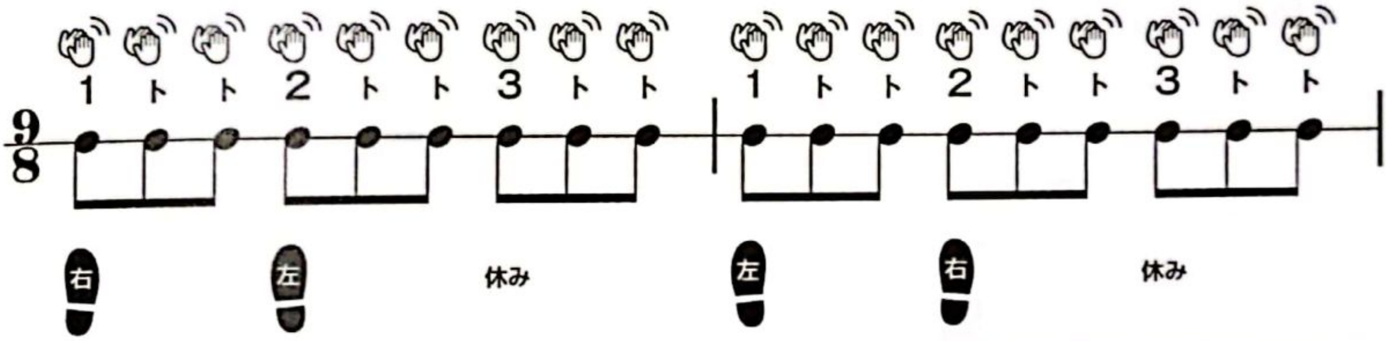
手拍子しながら、3拍子に合わせてステップしてみます

①右足を右横に出す、②左足を右足に引き寄せる、③止まる、④左足を左横に出す、⑤右足を左足に引き寄せる、⑥止まる（①～⑥×2）

ワルツのステップで「強・弱・弱」の繰り返しを感じてみましょう

②「9/8」に合わせてステップしてみよう

TRACK 33



細かな9つの拍子をカウントしながら、大きな流れの3拍子に合わせて、上の①～⑥と同様に左右にステップしてみます

同じ3拍子系の動きで「3/4」拍子と「9/8」拍子の違いを感じてみましょう

ヒント

「3/4」とレッスン12の「6/8」は、どちらも1小節に入る8分音符が6つになりますが、3拍子系と2拍子系で強弱の感じ方が異なります。

終わり

CamScannerでスキャン

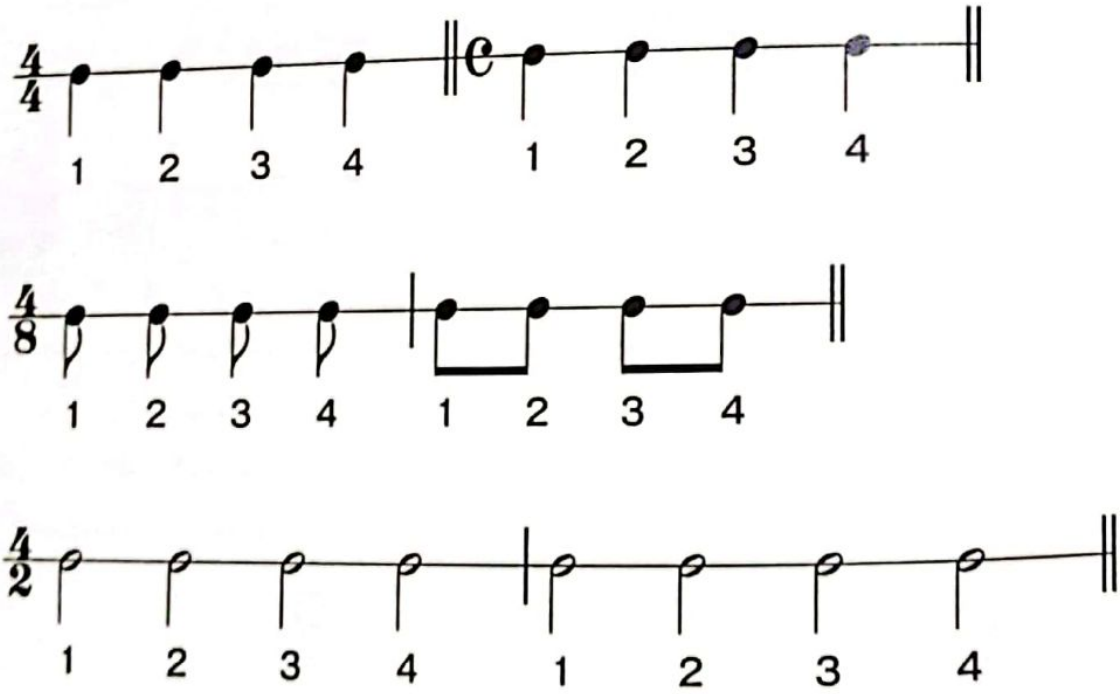
レッスン 14 4拍子を知ろう

キーワード 4拍子系

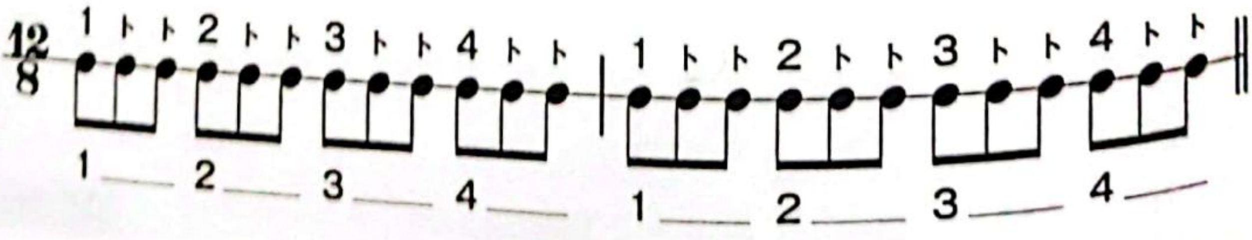
「2拍子」系「3拍子」系と見てきましたので、次は「4拍子」系です。いろんな種類の拍子の中でも、もっともポピュラーな拍子です。

拍子記号の上の数字（分子）が「4」のものは「4拍子」です

代表的なものは、4分音符を1拍とする「4/4」拍子（略記号でも同じ）ですが、8分音符を基準にした「4/8」拍子、2分音符を基準とした「4/2」拍子も使われます。

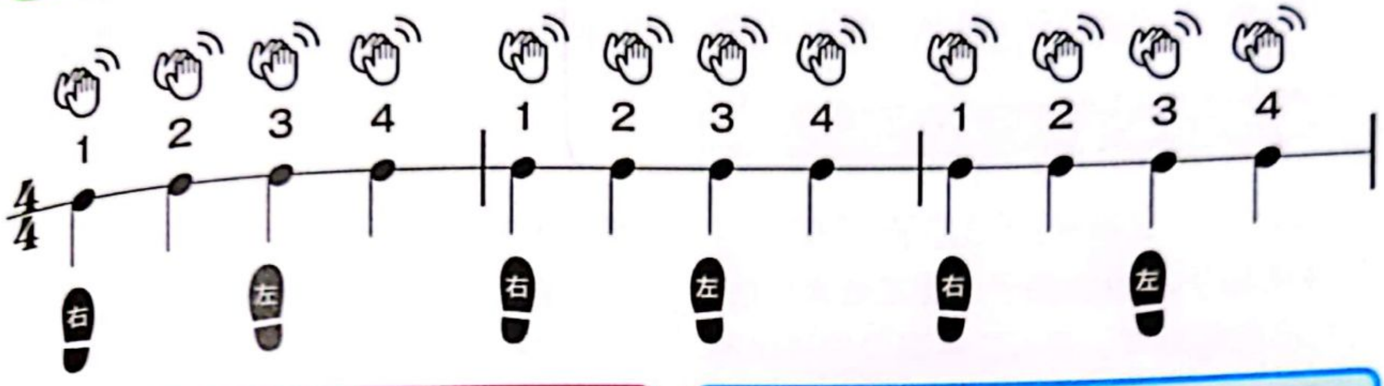


「6/8」拍子や「9/8」拍子と同じく「12/8」拍子も、8分音符3つのグループを1拍として「3/8（3拍子）が4つ」の4拍子の仲間としても考えられます。



①「4/4」に合わせて手拍子と足踏みをしよう

TRACK 34

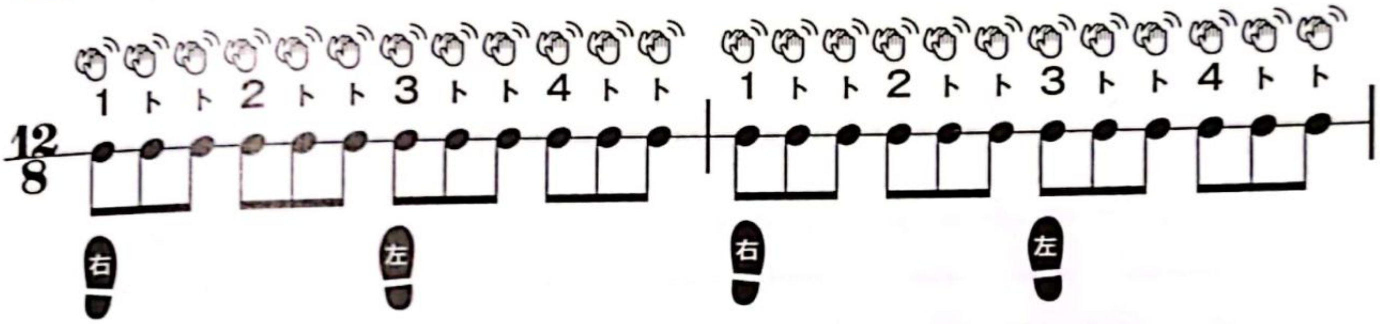


4拍子の手拍子をしながら、それと同時に2拍でひとまとまりととらえた箇所で、足踏みをしてみます

「2/4」が2つ組み合わさったものと考えると、拍の感じ方は「強・弱・やや強・弱」の繰り返しにもなります

②「12/8」に合わせて手拍子と足踏みをしよう

TRACK 35



細かな12個の手拍子をしながら、大きな流れの4拍子の2拍分をひとまとまりとして足踏みをしてみます

同じ4拍子系の「4/4」拍子と「12/8」拍子の違いを感じてみよう

ヒント

「6/8」や「9/8」「12/8」のような拍子は、小さな3拍子が、いくつか組み合わされたような仕組みなので「複合拍子」といいます。これに対してシンプルな「2/4」や「3/4」「4/4」は「単純拍子」と分類されます。

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 15

変わった拍子を知ろう

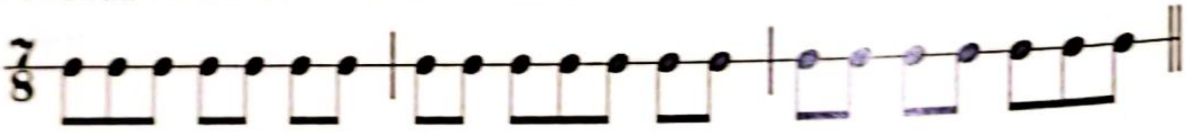
キーワード 変拍子、混合拍子

これまで「2拍子」「3拍子」「4拍子」の単純拍子と複合拍子を見てきました。これらの知識で、多くの音楽の拍子が理解できますが、他にも不思議な拍子がごくまれに存在します。ここでまとめて知っておきましょう。

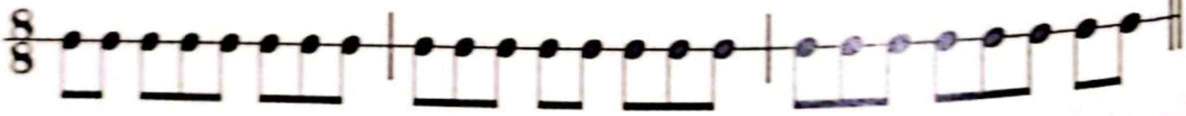
拍子記号の上の数字(分子)が、珍しい数字のものが存在します

「5拍子」「7拍子」など、風変わりな拍子(「変拍子」)も考えられますが、例えば「5拍子」は「3+2(譜例左)」、あるいは「2+3(譜例右)」など、異なる種類の単純拍子を組み合わせて、ひとつの拍子とする場合があります。これを「混合拍子」といいます。

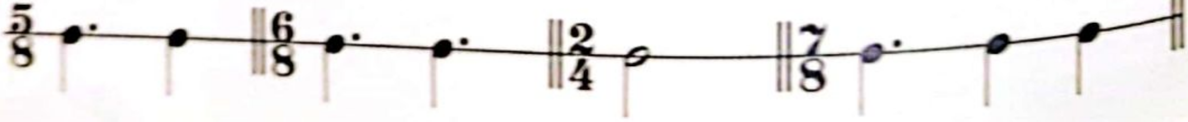
「7拍子」は、組み合わせで「3+2+2」「2+3+2」「2+2+3」などがあります。



「8/8」拍子は、1小節に8分音符が8つ入りますが、「2×4」ではなく、「2+3+3」あるいは、「3+2+3」または「3+3+2」となることが多いです。

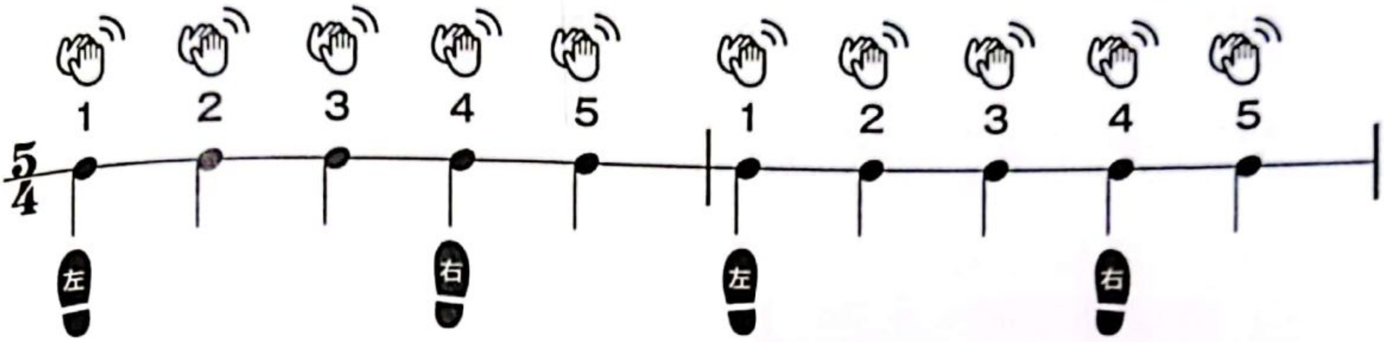


同じ曲の中で頻繁に拍子が変わる曲もあります。



① 「5/4」に合わせてカウントと手拍子をしよう

TRACK 36

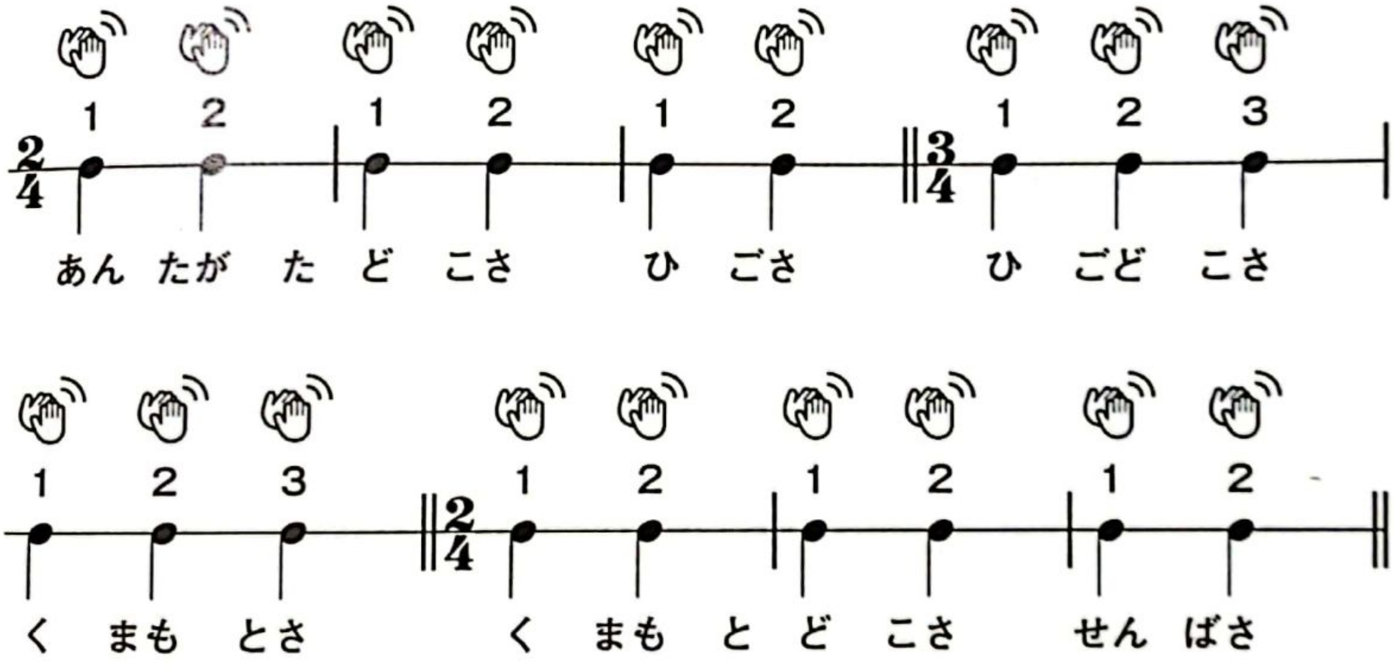


5拍子の手拍子をしながら、3拍子+2拍子のタイミングで足踏みをします

均等ではないスリリングな強弱の関係を感じるのが目的です

② 「あんたがたどこさ」に合わせて手拍子しよう

TRACK 37



メロディを口ずさみながら、拍子に合わせて手拍子してみます

2拍子から3拍子に変わる時、また2拍子に戻る時、拍子の変化を感じてみてください

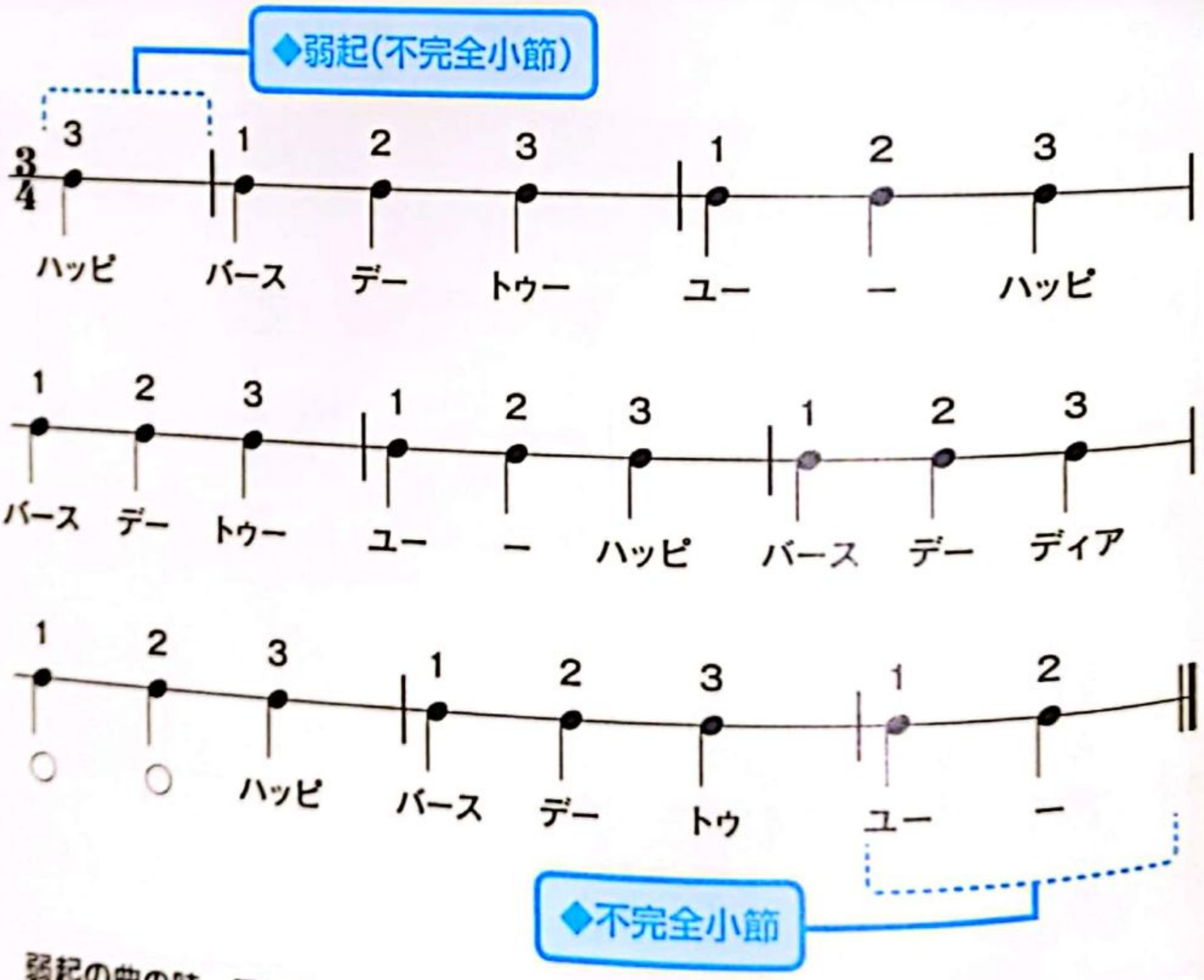
終わり

レッスン16 強拍と弱拍を知ろう

キーワード 弱起、アウフタクト

ここまで、いろんな種類の拍子を見てきました。今回は曲の始まりが1拍目からスタートしない、つまり小節の途中の拍から始まる曲について考えてみます。

1拍目以外から始まることを「弱起」(アウフタクト)といいます



弱起の曲の時、最初の小節は拍が不足するので「不完全小節」と呼ばれます。その時に、曲の最後の小節は、最初の小節と合わせて「完全小節」となるように「不完全」の拍で終わらす習慣がありました。

しかし最近はこのルールは守られないことも多いです。

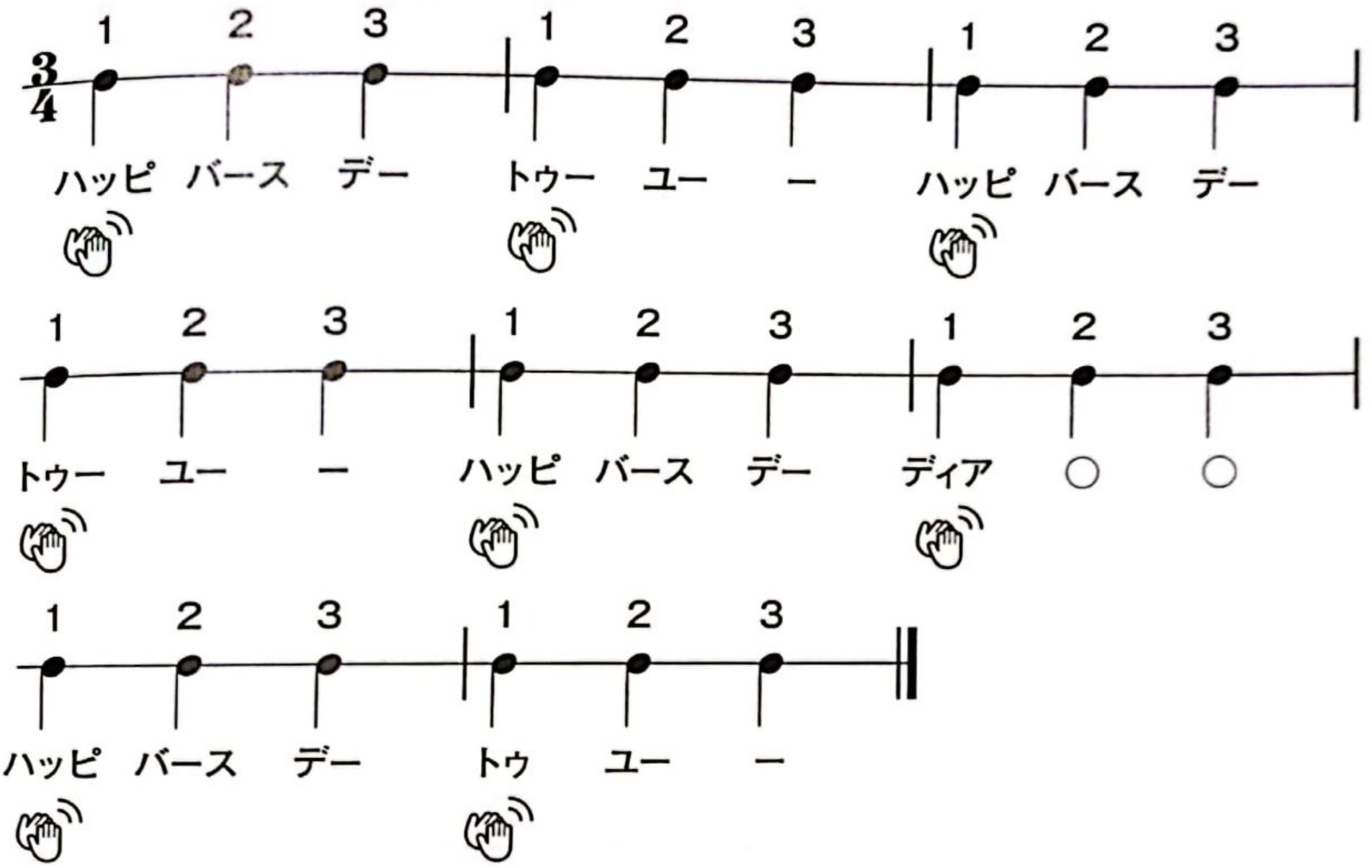
ヒント

小節を数える時に、最初の不完全小節は1小節目と数えずに、次の完全小節から1小節目と数えます。ちなみに最後の不完全小節は小節数に含めるので、この「ハッピー・バースデー・トゥー・ユー」は全部で8小節という数え方になります。

1 強起に変えて歌ってみよう

TRACK 38

「ハッピー・バースデー・トゥー・ユー」を弱起ではなくて、強起に変更して歌ってみましょう



1拍目（音源のピ音）に合わせて手拍子をして、3拍子の強弱を感じながら歌ってみます

弱起は、なだらかにスタートするのに対して、強起は、きっぱりと力強く始まるのを理解してください

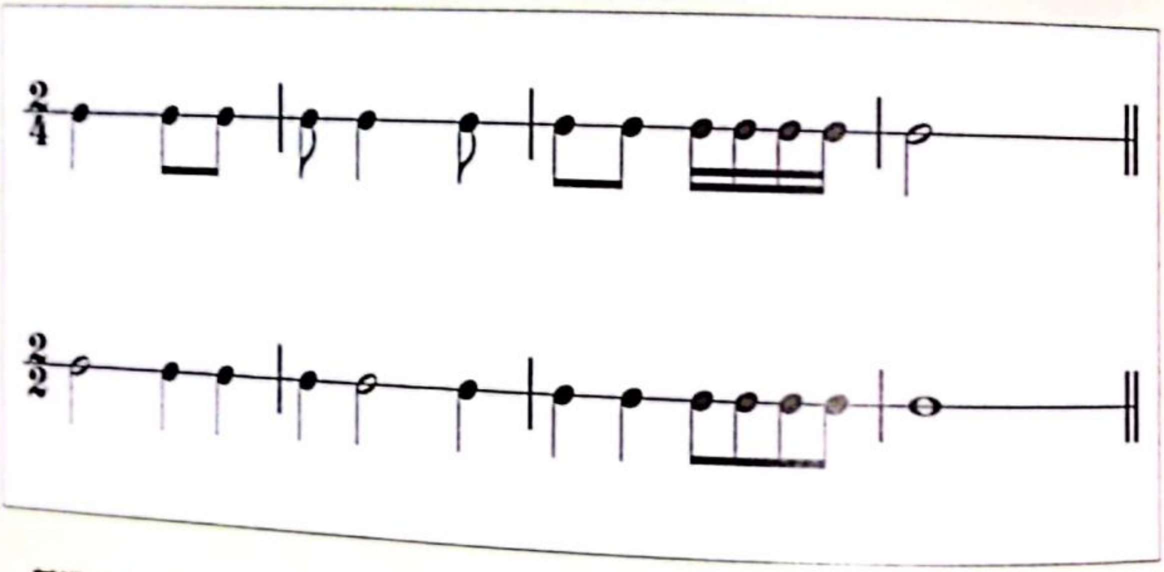
終わり

CamScannerでスキャン

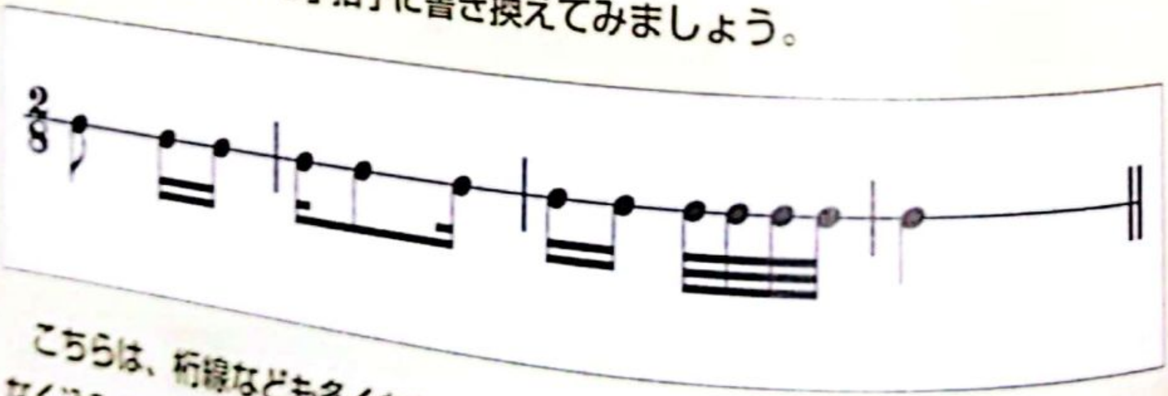
Q なぜ4分音符以外の音符を分母に使うの？

A 音符の長さの種類の組み合わせによって全体の楽譜の印象が変わるからです

「2/4」拍子は、同じ2拍子系の「2/2」拍子を使って、同じタイミングになるように書き換えることができます。



基準の拍のテンポが同じならば、どちらも同じリズムになるのですが、見た目の印象は変わっています。「2/2」拍子は、8分音符より長い音符だけしか使われていないので、どこかしらシンプルな印象に見えませんか？

同じリズムを「2/8」拍子に書き換えてみましょう。

こちらは、桁線なども多くなり、短い音符が多い印象になるので、どことなく込み入って難しそうに見えるのではないでしょうか。

第3章

リズムを読んでみよう

第2章で「拍子」について理解していただけたでしょうか。本章ではさまざまなリズムについて覚えていきましょう。各リズムを日常で使っている馴染みやすい言葉に置き換えてみました。ぜひ声に出しながら読んでリズムに馴染んでください。

この章の内容

17 付点のついた音符と休符を覚えよう …… 56
18 タイの使い方を覚えよう …… 58
19 【ラーメン】のリズム、タータタを覚えよう …… 60
20 【カロリー】のリズム、タタターを覚えよう …… 62
21 【ステーキ】のリズム、タータタを覚えよう …… 64
22 【ケーキ】のリズム、タ――タを覚えよう …… 66
23 【カレー】のリズム、タ――ーを覚えよう …… 68
24 休符を含んだリズムを覚えよう …… 70
25 【メタボ】のリズム、3連符を覚えよう …… 72
26 5連符、6連符、7連符を覚えよう …… 76
楽譜&リズムの素朴な「?」に答えるQ&A …… 78

CamScannerでスキャン

7 付点のついた音符と休符を覚えよう

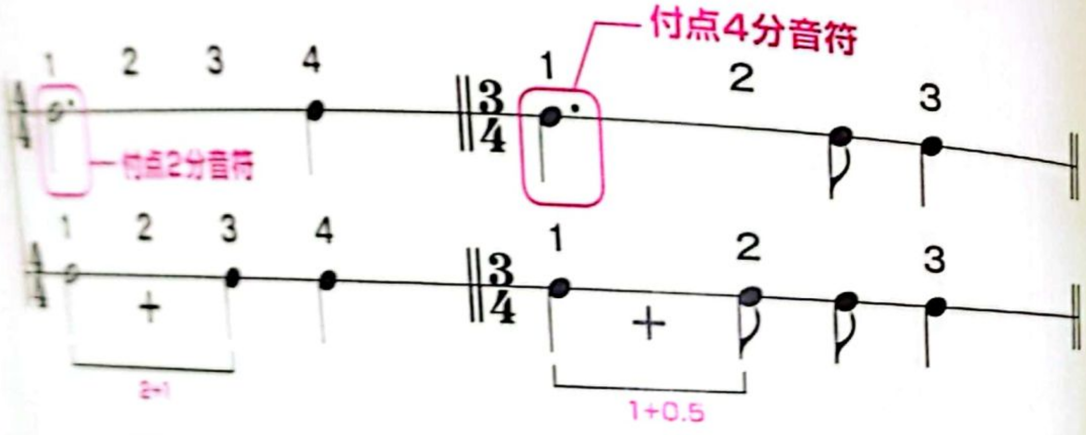
キーワード 付点

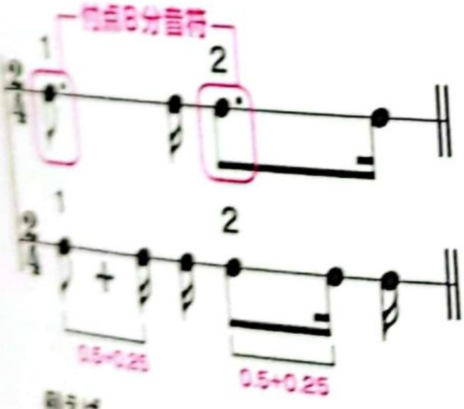
第1章で覚えた、音符の長さの種類と形ですが、その基本の音符の長さを少しだけ延長して使うことがあります。ここでは、そのパターンを覚えましょう。

半分の長さが追加されるのが「付点音符」です

玉のすぐ「右側」に「点」がつけられた音符は、基本の長さの5割増し、つまり1.5倍の長さになります。

1.5倍は、他の表現に言い換えると「基本の長さ＋その半分の長さ」ということです。



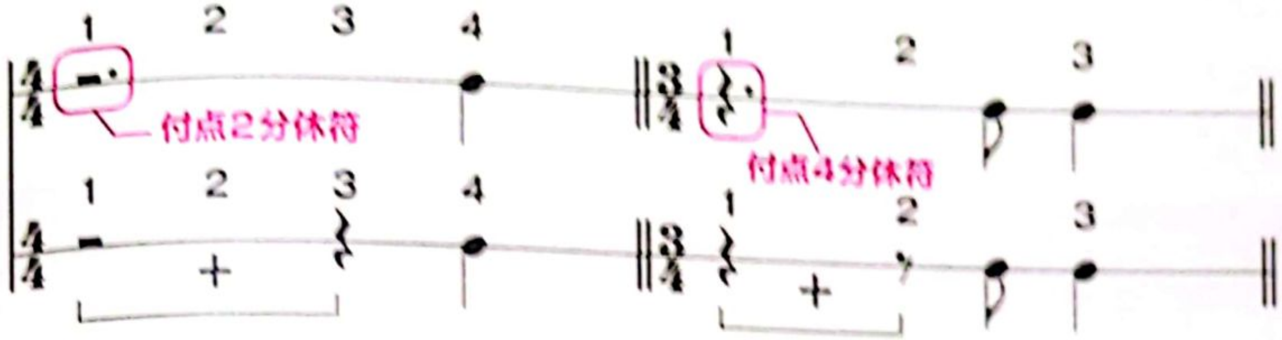


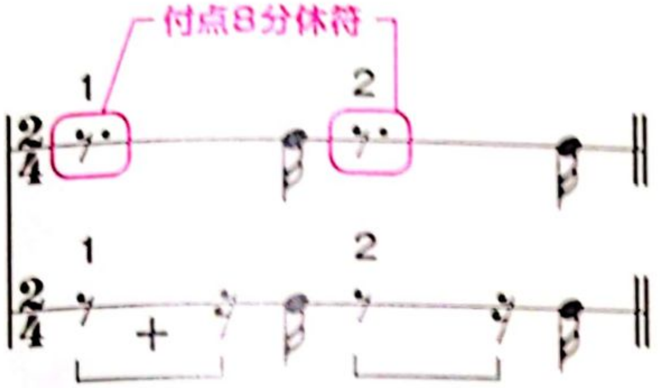
※各譜例の下段「音符＋音符」が上段の付点の音符の長さを示しています

例えば
「付点2分音符」は、2+1=3拍
「付点4分音符」は、1+0.5=1.5拍
「付点８分音符」は、0.5＋0.25=0.75拍（3/４拍）となります。

音符と同じく休符にも付点がつけられますが、ちょっと珍しいです

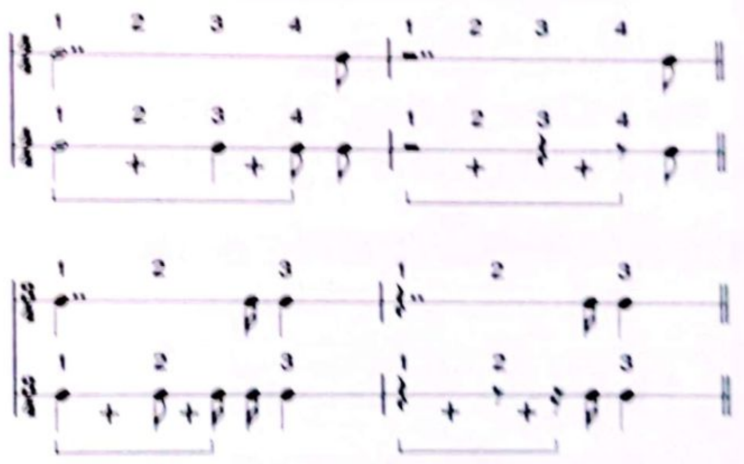
「付点休符」も付点音符と同じ仕組みで考えられますが、どちらかというと、休符の場合は付点をなるべく使わずに、下の譜例のそれぞれの下段のように、複数の休符を使って書かれることも多いというのが、楽譜の慣例です。





※各譜例の下段「休符＋休符」が上段の付点の休符の長さを示しています

ヒント

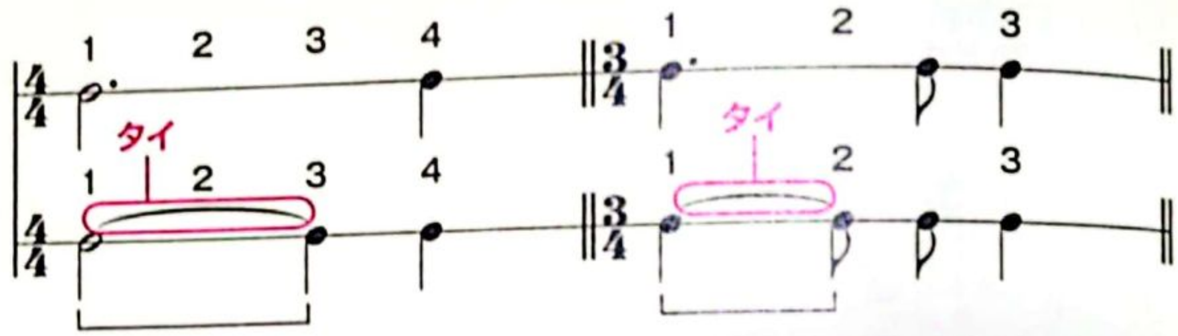
付点が2つつく「複付点音符(休符)」というのも考えられます。「基本の長さ＋その半分の長さ＋さらに半分の長さ」ということですから、1＋0.5＋0.25＝1.75の長さになります。ただし、一目で把握しづらいことも事実ですので、複付点が使われることは稀です。

終わり

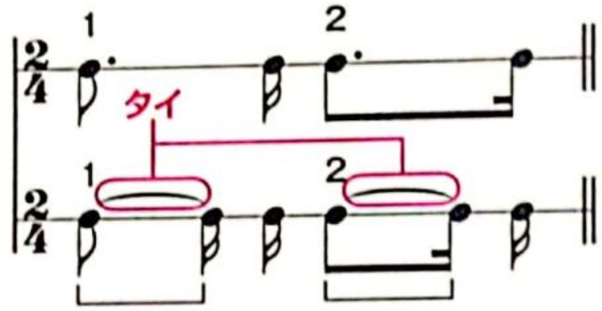
レッスン18 タイの使い方を覚えよう

キーワード タイ

レッスン17の付点音符（休符）の他にも、音符の長さを延長するための書き方があります。それが「タイ」です。ここでは、その方法も覚えておきましょう。

2つの音の長さを繋ぐには「タイ」を使います

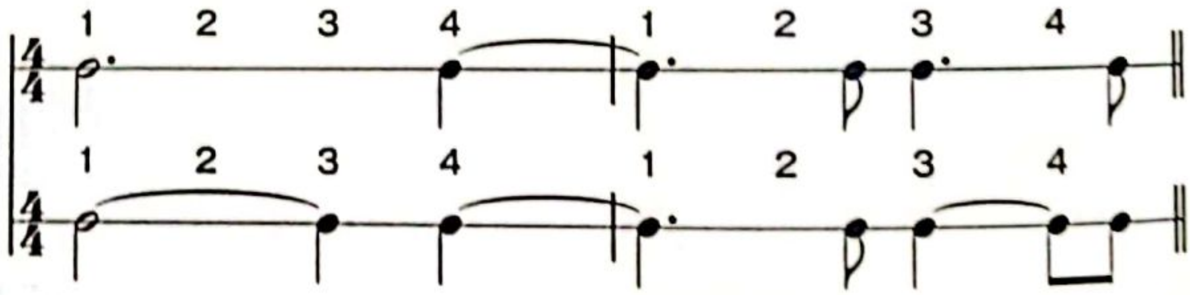




上の段の付点と、下の段のタイでは、書き方は異なりますが、同じ長さになっています

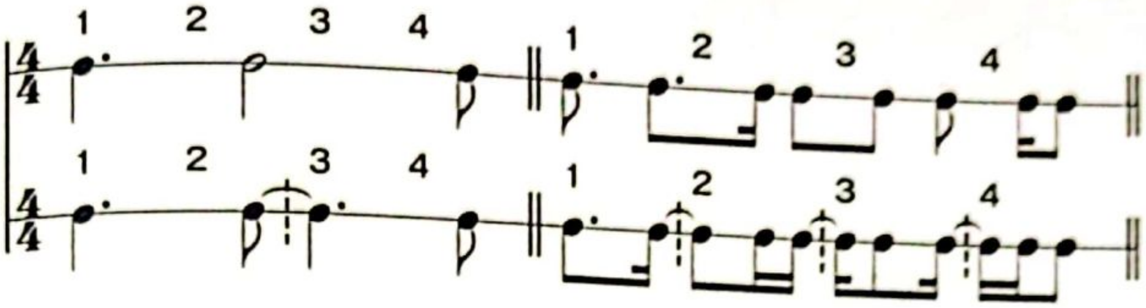
ちなみに「タイ」は音符の玉と玉を繋ぐものなので、休符では「タイ」は使われません。「付点音符で書く時」と「タイで書く時」との区別は、主に次のパターンです。

❶小節線をまたいで音符を繋ぐ時



CamScannerでスキャン

❷仮想小節線をまたいで音符を繋ぐ時

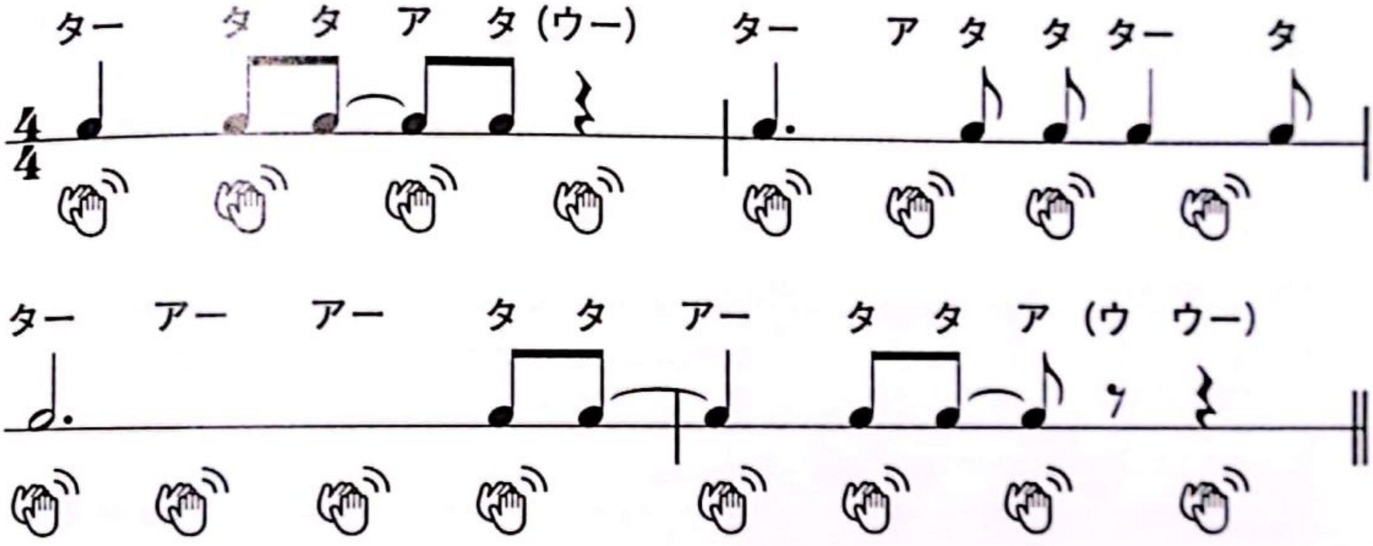


❶の上段のように付点で書ける箇所はなるべく付点で書きますが、小節線をまたぐ箇所はタイでしか書けません。❷の場合は、譜例下段のようにタイを用いて２拍のまとまりや１拍のまとまりで音符を組み合わせたほうが、断然読みやすいです。

このように、本来の小節線ではない仮の小節線があるように感じることがポイントです。

1 付点音符とタイの音符を読んでみよう

TRACK 39 テンポ♩60　TRACK 40 テンポ♩120



手やメトロノームで拍をカウントしながら、「ター」「タ」で歌う、あるいは楽器で音を鳴らしてみましょう

track39のテンポ♩60のパターンとtrack40のテンポ♩120のパターンで、テンポと拍の感覚を感じてみましょう

終わり

CamScannerでスキャン

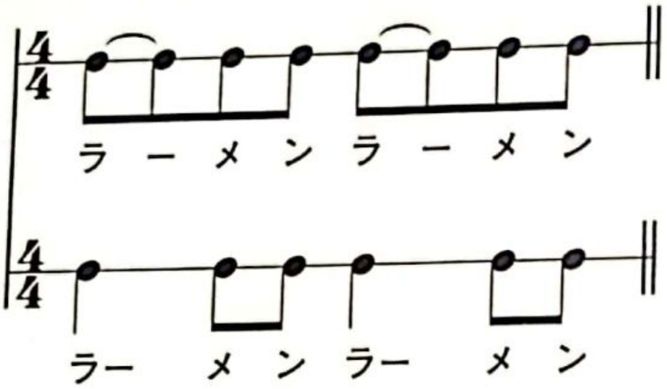
レッスン 19

【ラーメン】のリズム、ターータタを覚えよう

キーワード タータタ

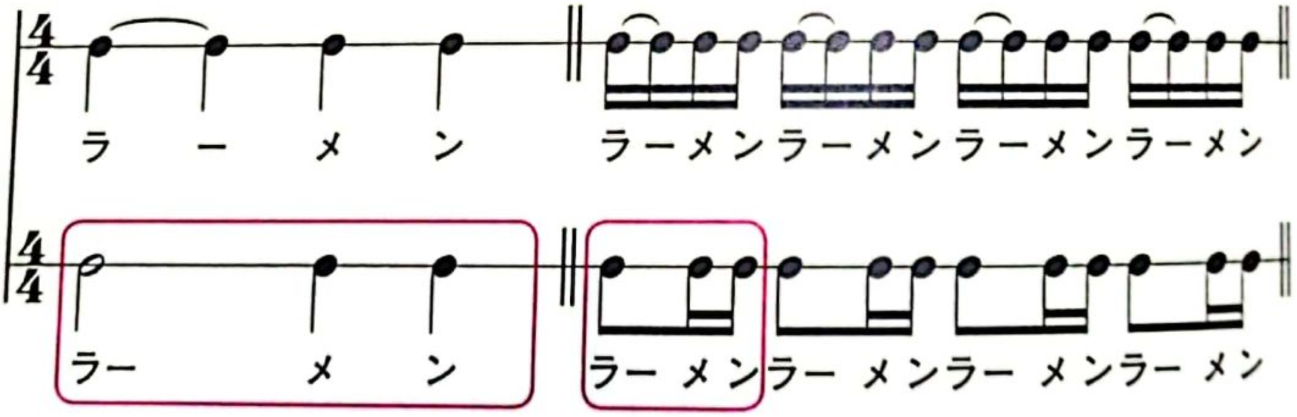
ここからは、長さの違う音符や休符を組み合わせたリズムを、わかりやすいひとまとまりで考える方法と、便利にとらえていく練習を紹介していきます。

リズムの形に「ラーメン」の言葉を当てはめて覚えましょう



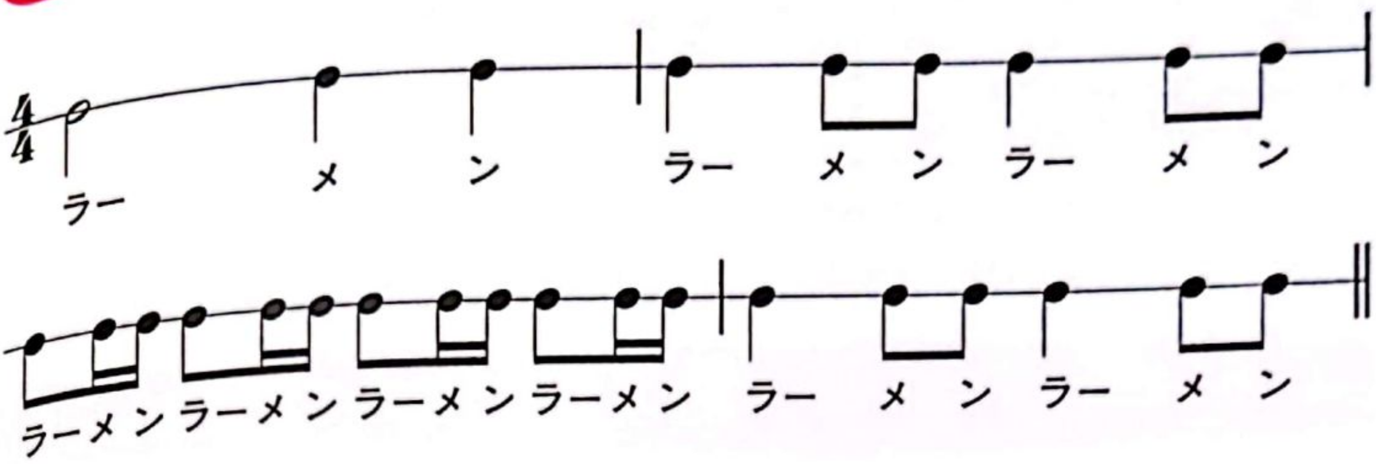
8分音符4つで2拍になりますが、最初の8分音符をタイで繋ぐと4分音符になります。つまり、4分音符+8分音符+8分音符で、ちょうど2拍分のリズムの形として把握すると便利なのです。

さらに「ラーメン」のように言葉を当てはめると、この「タータタ」のリズムを感覚的に覚えられそうです。もちろん「ソーメン」でも「アーメン」でかまいません。



この基準の8分音符を、倍の4分音符（譜例左側）、あるいは半分の16分音符（譜例右側）で考えても、お互いの相対的なリズムは変わりません。ここでは「リズムの相似形」（拡大・縮小パターン）として併せて覚えてしまいましょう。

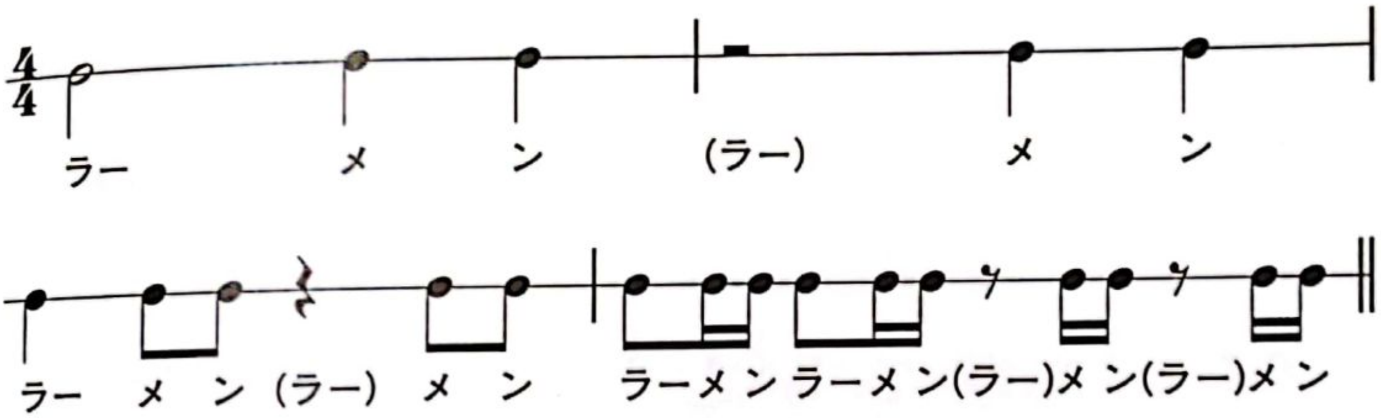
① 「ラーメン」のリズムの形を口ずさんでみます

TRACK 41

手やメトロノームで拍をカウントしながら、口ずさむ、あるいは楽器で音を鳴らしてみましょう

リズムの相似形（拡大・縮小パターン）を繰り返すことで感覚的に覚えます

② 休符に置き換わったリズムの形も口ずさんでみます

TRACK 42



手やメトロノームで拍をカウントしながら、口ずさむ、あるいは楽器で音を鳴らしてみましょう

リズムの相似形（拡大・縮小パターン）を繰り返すことで感覚的に覚えます

終わり

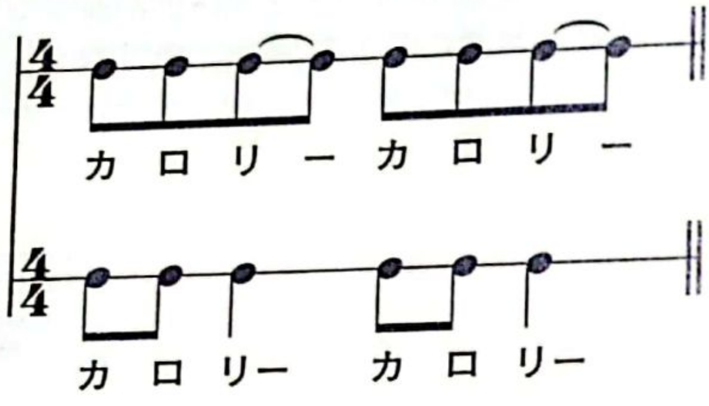
CamScannerでスキャン

レッスン 20 【カロリー】のリズム、タタターを覚えよう

キーワード タタター

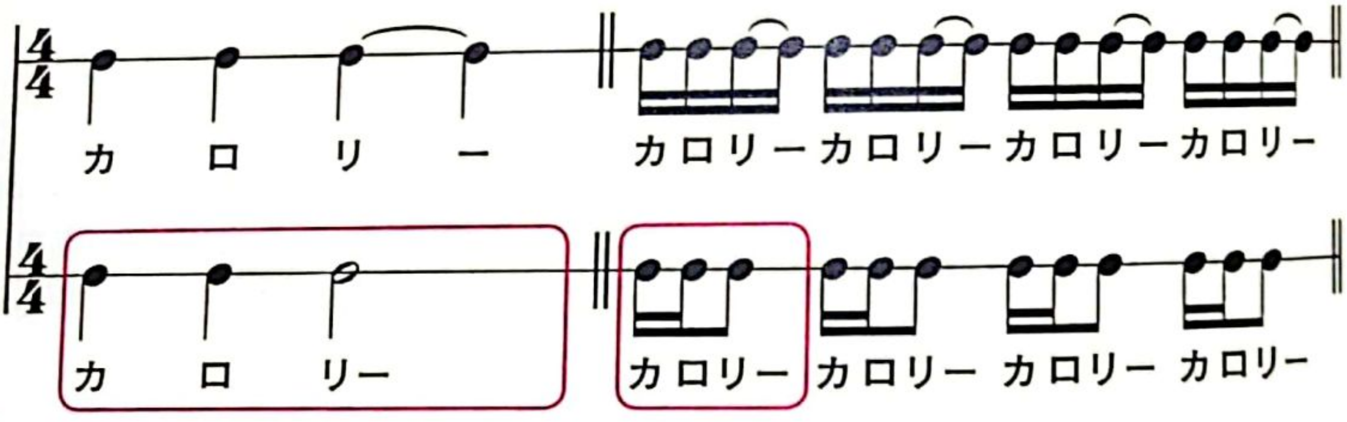
長さの違う音符や休符を組み合わせたリズムを、ひとまとまりで考えて便利にとらえていく練習法。ここでは、その2つめのパターン「タタター」を覚えていきましょう。

リズムの形に「カロリー」の言葉を当てはめて覚えましょう



8分音符4つで2拍になりますが、3つめと4つめの8分音符をタイで繋ぐと4分音符になります。8分音符+8分音符+4分音符で、ちょうど2拍分のリズムの形として把握すると便利です。

ここでも「タタター」の言葉を当てはめると、感覚的に覚えられそうです。もちろん「マロニー」でもかまいません。

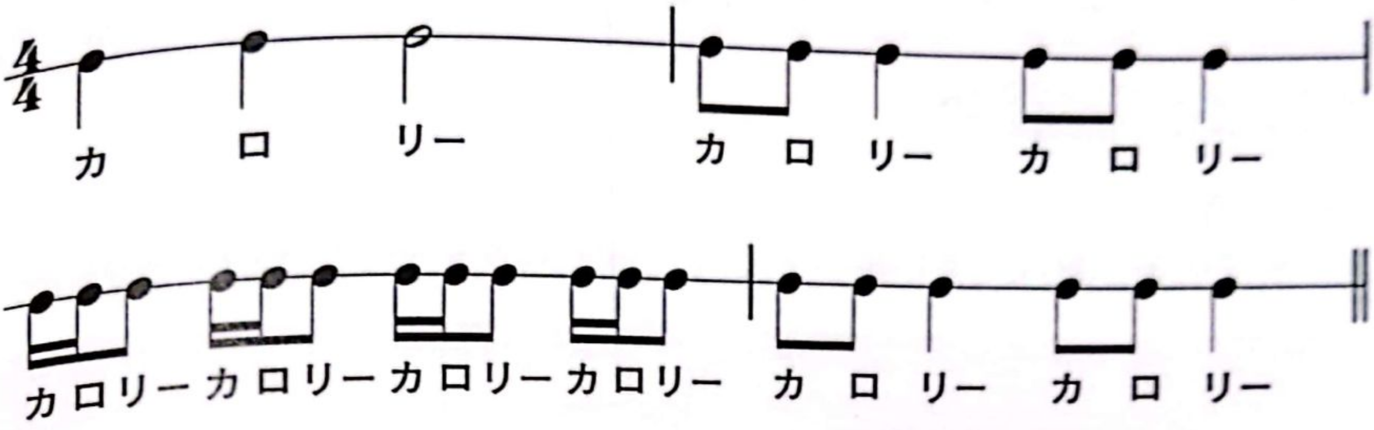


同じく8分音符を、倍の4分音符（譜例左側）、あるいは半分の16分音符（譜例右側）で考えても、お互いの相対的なリズムは変わりません。やはり「リズムの相似形」（拡大・縮小パターン）として併せて覚えてしまいましょう。

CamScannerでスキャン

1 「カロリー」のリズムの形を口ずさんでみます

TRACK 43

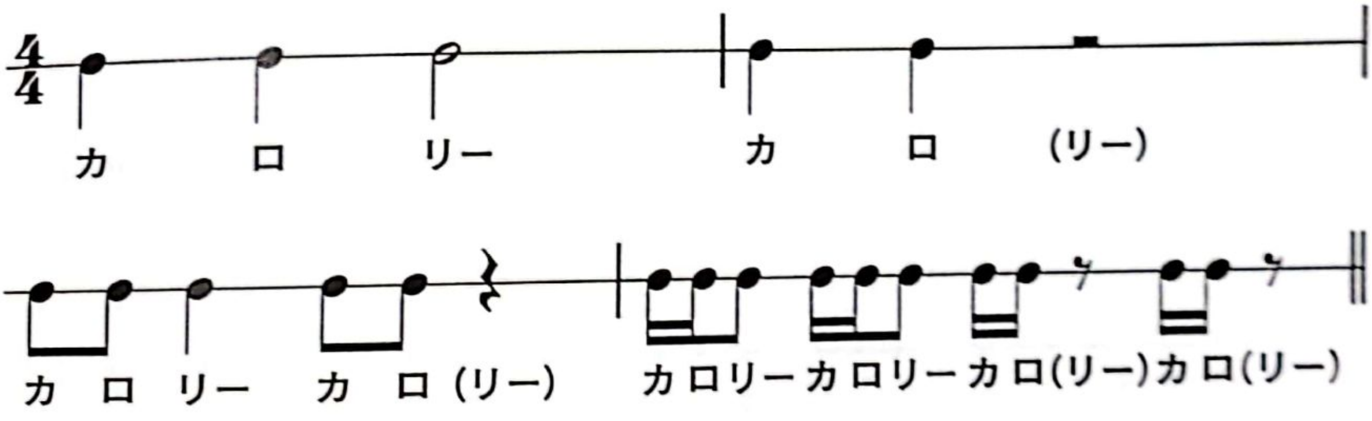


手やメトロノームで拍をカウントしながら、口ずさむ、あるいは楽器で音を鳴らしてみましょう

リズムの相似形（拡大・縮小パターン）を繰り返すことで感覚的に覚えます

2 休符に置き換わったリズムの形も口ずさんでみます

TRACK 44



「(リー)」は心の中で声を出さずに感じてみます（楽器などでも試してみましょう）

音符の「リー」と休符の「(リー)」を交互に置き換えながら覚えましょう

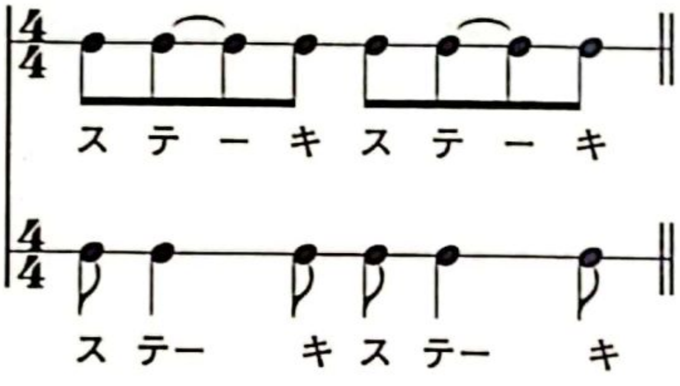
終わり

レッスン 21 【ステーキ】のリズム、タタータを覚えよう

キーワード タタータ

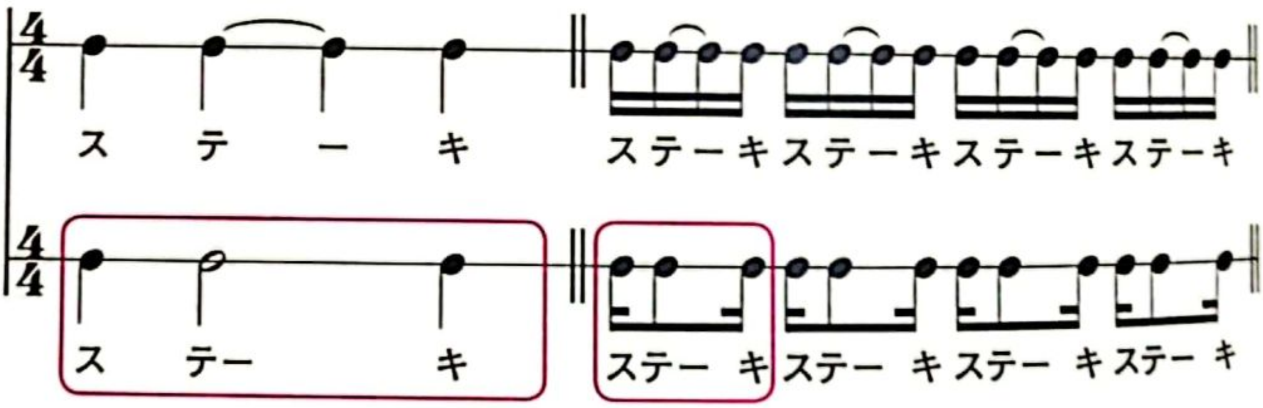
長さの違う音符や休符を組み合わせたリズムを、ひとまとまりで考えて便利にとらえていく練習法。ここでは、その3つめのパターン「タタータ」を覚えていきましょう。

リズムの形に「ステーキ」の言葉を当てはめて覚えましょう



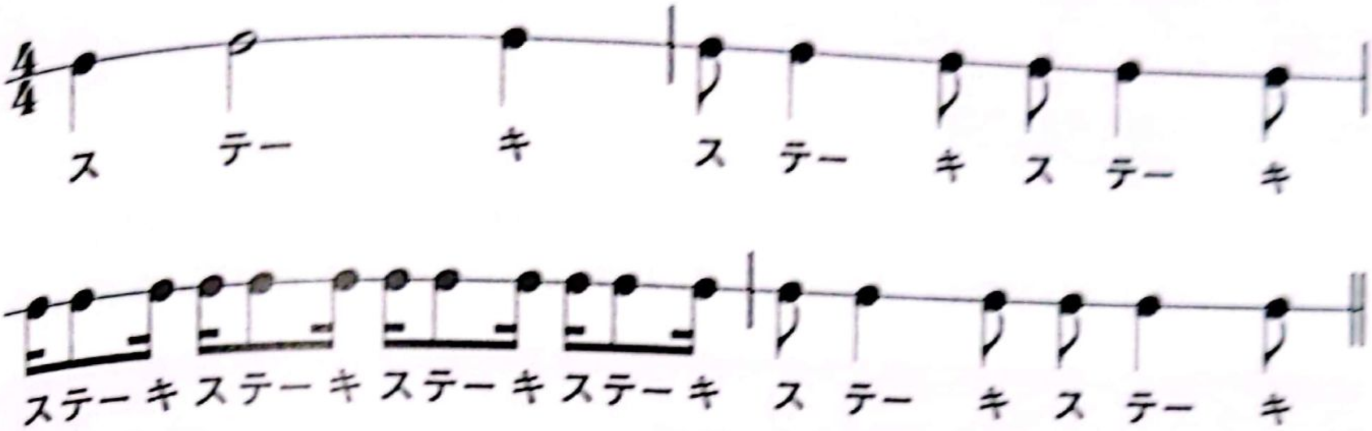
8分音符4つで2拍になりますが、2つめと3つめの8分音符をタイで繋ぐと4分音符になります。8分音符+4分音符+8分音符で、ちょうど2拍分のリズムの形として把握すると便利です。

ここでも「ステーキ」などの言葉を当てはめると、「タタータ」を自然かつ感覚的に覚えられそうです。「アパート」や「リモート」などでもかまいません。



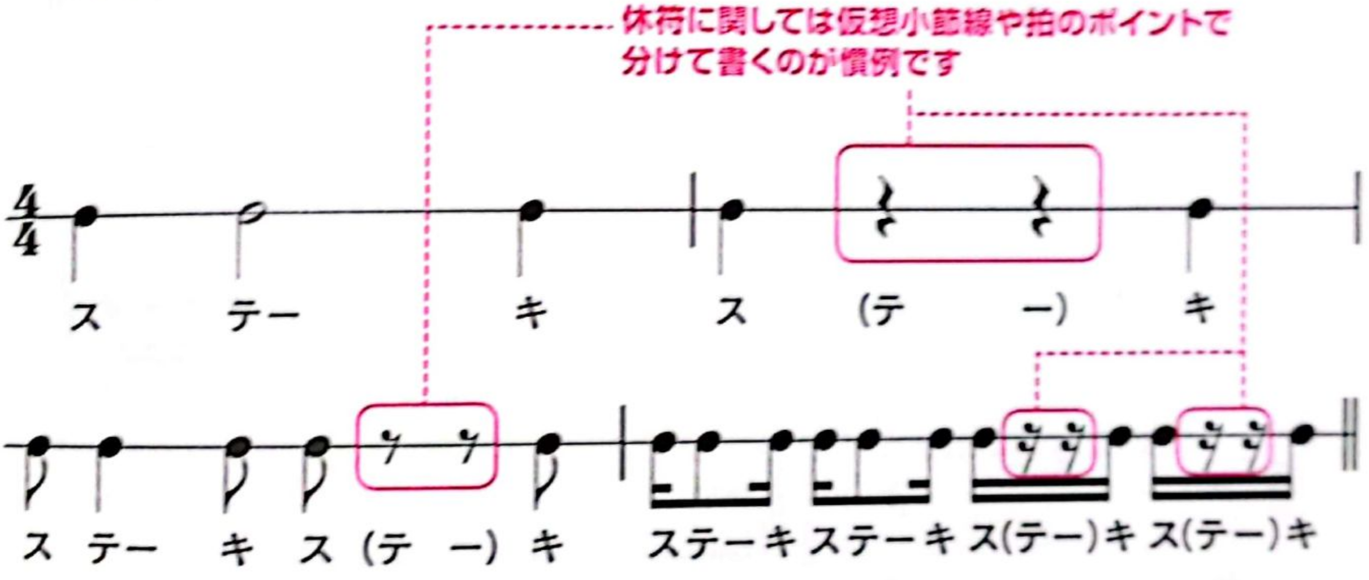
同じく8分音符を、倍の4分音符（譜例左側）、あるいは半分の16分音符（譜例右側）で考えても、お互いの相対的なリズムは変わりません。やはり「リズムの相似形」（拡大・縮小パターン）として併せて覚えてしまいましょう。

CamScannerでスキャン

① 「ステーキ」のリズムの形を口ずさんでみます TRACK 45

手やメトロノームで拍をカウントしつつ口ずさむor楽器で音を鳴らそう

リズムの相似形（拡大・縮小パターン）を繰り返すことで感覚的に覚えます

② 休符に置き換わったリズムの形も口ずさんでみます TRACK 46



「(テー)」は心の中で声を出さずに感じてみます（楽器などでも試しましょう）

音符の「テー」と休符の「(テー)」を交互に置き換えながら覚えましょう

終わり

CamScannerでスキャン

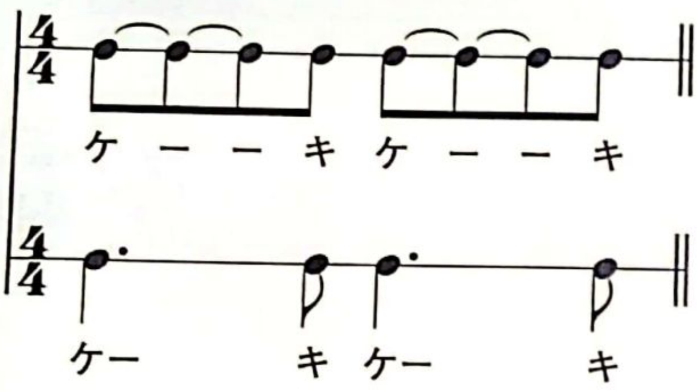
レッスン 22

【ケーキ】のリズム、ターータを覚えよう

キーワード ターータ

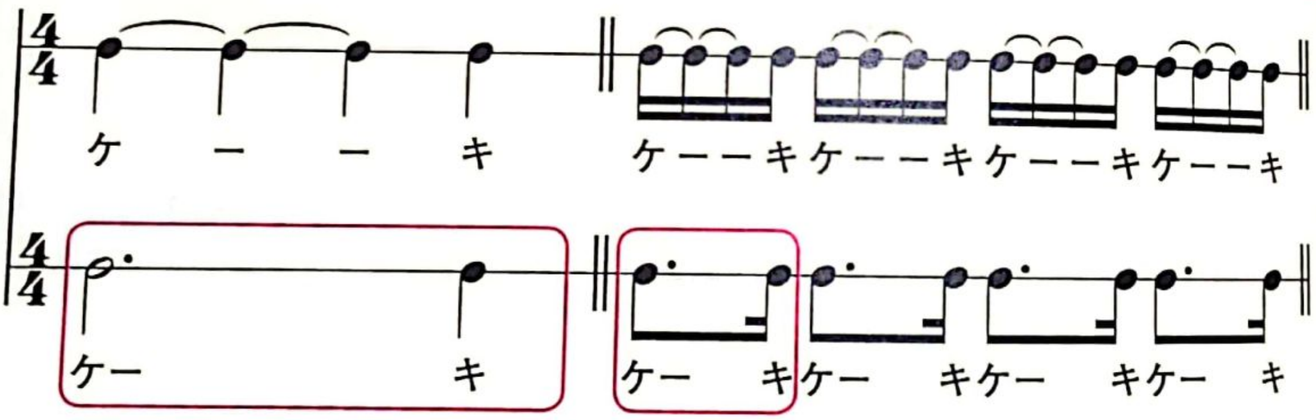
長さの違う音符や休符を組み合わせたリズムを、ひとまとまりで考えて便利にとらえていく練習法。ここでは、その4つめのパターン「ターータ」を覚えていきましょう。

リズムの形に「ケーキ」の言葉を当てはめて覚えましょう



8分音符4つで2拍になりますが、1つ目と2つ目と3つ目の8分音符をタイで繋ぐと付点4分音符になります。付点4分音符＋8分音符で、ちょうど2拍分のリズムの形として把握すると便利です。

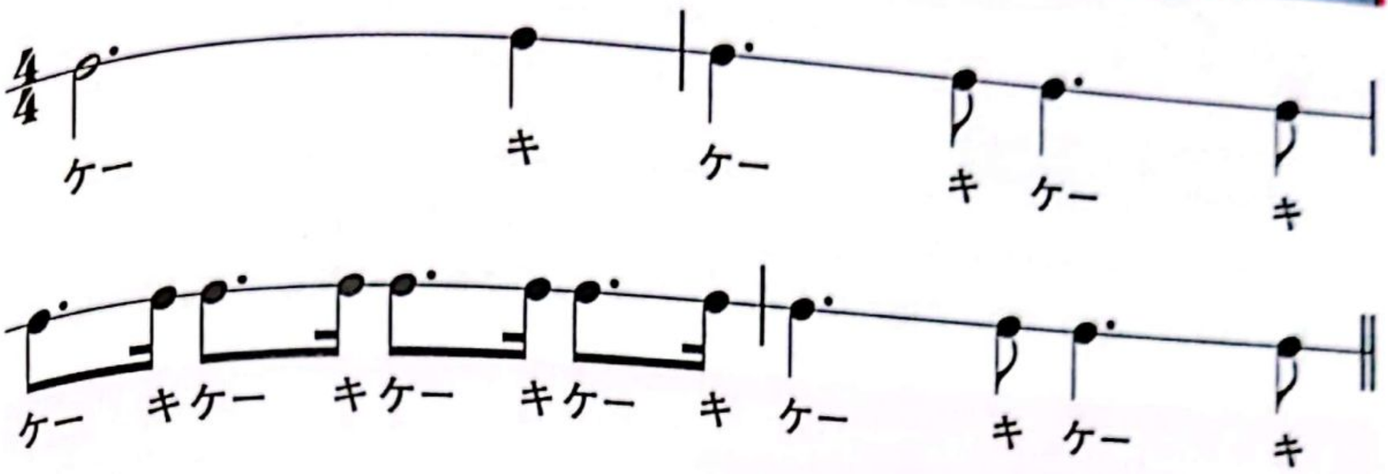
「ケーキ」などの馴染みのある言葉を「ターータ」に当てはめると、自然かつ感覚的に覚えられそうです。「ソース」や「ピース」などでもかまいません。



同じく8分音符を、倍の4分音符（譜例左側）、あるいは半分の16分音符（譜例右側）で考えても、お互いの相対的なリズムは変わりません。やはり「リズムの相似形」（拡大・縮小パターン）として併せて覚えてしまいましょう。

① 「ケーキ」のリズムの形を口ずさんでみます

TRACK 47



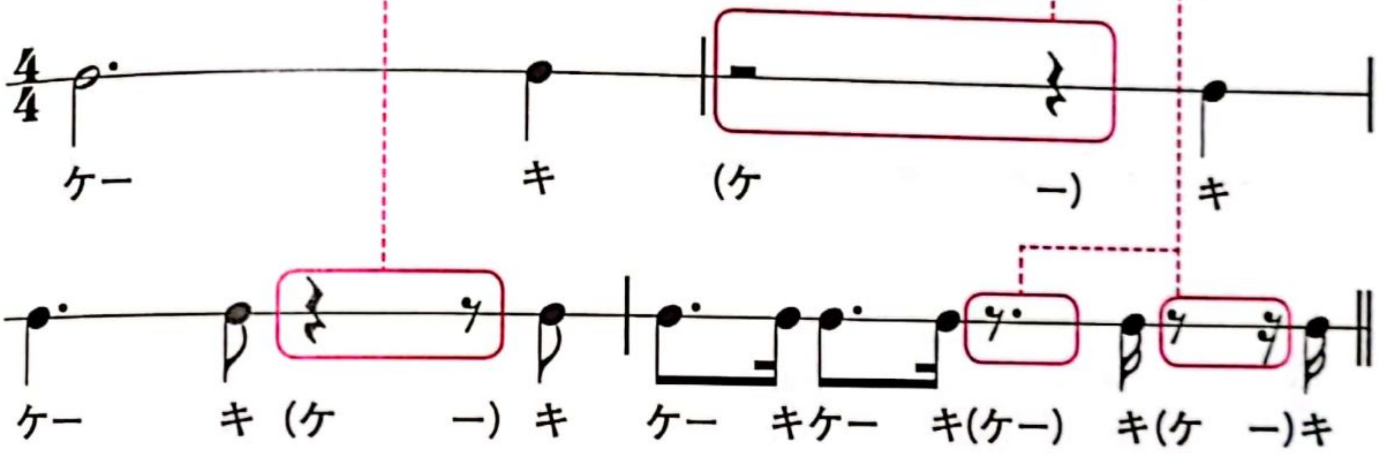
手やメトロノームで拍をカウントしつつ口ずさむor楽器で音を鳴らそう

リズムの相似形（拡大・縮小パターン）を繰り返すことで感覚的に覚えます

② 休符に置き換わったリズムの形も口ずさんでみます

TRACK 48

休符に関しては、やはり仮想小節線や拍のポイントで分けて書くのが慣例ですが、1拍に満たない休符の場合は煩雑になるため、付点が使われることもあります。



「（ケー）」は心の中で声を出さずに感じてみます（楽器などでも試しましょう）

音符の「ケー」と休符の「（ケー）」を交互に置き換えながら覚えましょう

終わり

CamScannerでスキャン

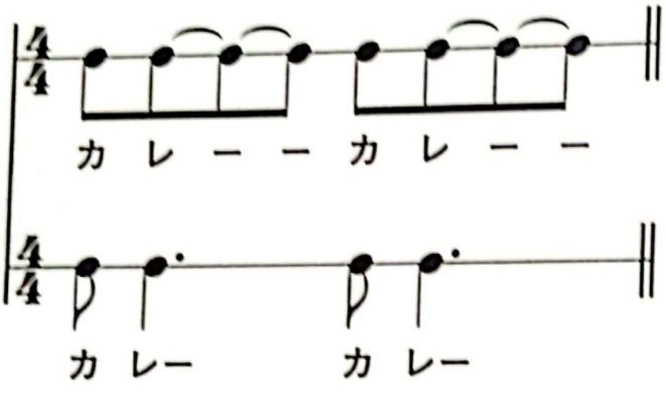
レッスン 23

【カレー】のリズム、タターーを覚えよう

キーワード タターー

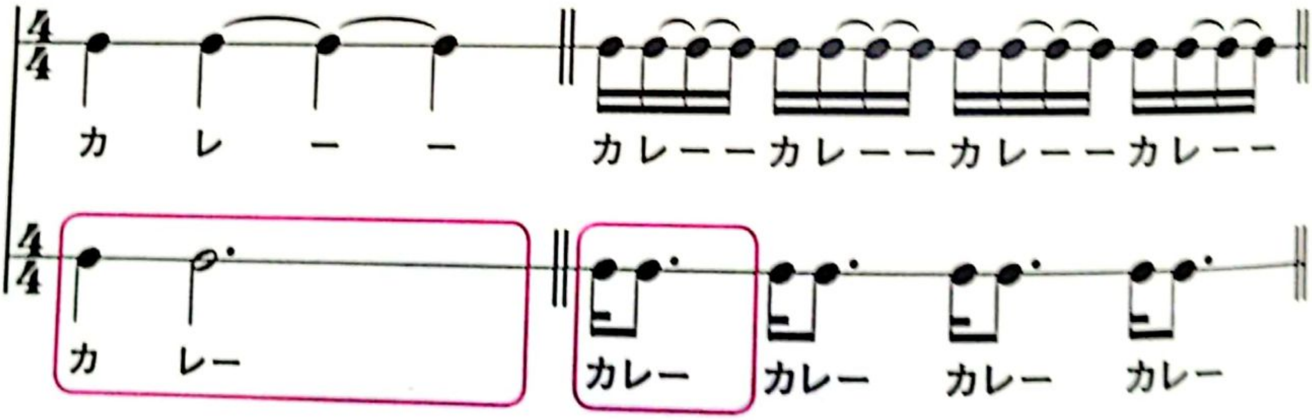
長さの違う音符や休符を組み合わせたリズムを、ひとまとまりで考えて便利にとらえていく練習法。ここでは、その5つめのパターン「タターー」を覚えていきましょう。

リズムの形に「カレー」の言葉を当てはめて覚えましょう



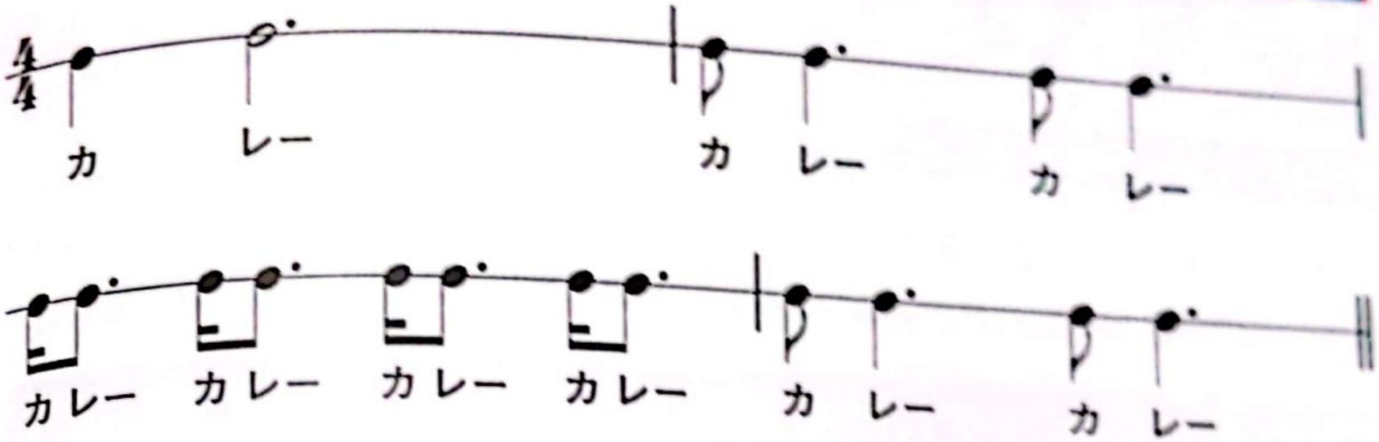
8分音符4つで2拍になりますが、2つ目と3つ目と4つ目の8分音符をタイで繋ぐと付点4分音符になります。8分音符＋付点4分音符で、ちょうど2拍分のリズムの形として把握すると便利です。

「カレー」などの馴染みのある言葉を「タターー」に当てはめると、自然かつ感覚的に覚えられそうです。「カヌー」や「サワー」などでもかまいません。



同じく8分音符を、倍の4分音符（譜例左側）、あるいは半分の16分音符（譜例右側）で考えても、お互いの相対的なリズムは変わりません。やはり「リズムの相似形」（拡大・縮小パターン）として併せて覚えてしまいましょう。

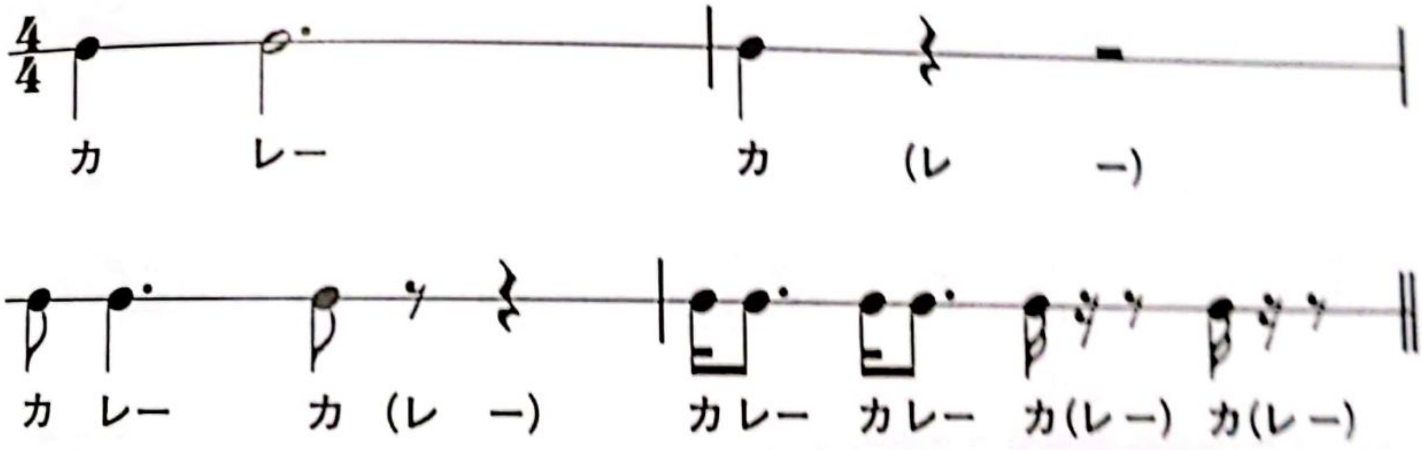
① 「カレー」のリズムの形を口ずさんでみます TRACK 49



手やメトロノームで拍をカウントしつつ口ずさむor楽器で音を鳴らそう

リズムの相似形（拡大・縮小パターン）を繰り返すことで感覚的に覚えます

② 休符に置き換わったリズムの形も口ずさんでみます TRACK 50



「(レー)」は心の中で声を出さずに感じてみます（楽器などでも試しましょう）

音符の「レー」と休符の「(レー)」を交互に置き換えながら覚えましょう

ヒント

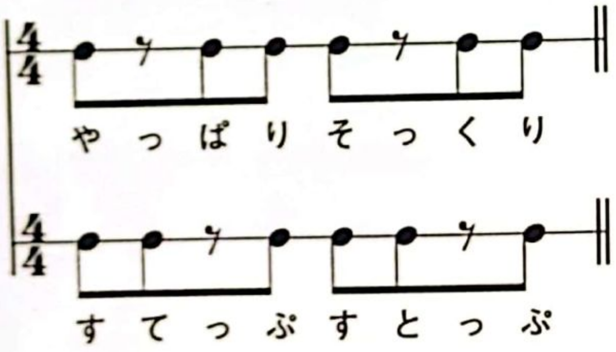
「カレー」のような引きずるリズムを跛行（はこう）リズムといいます。

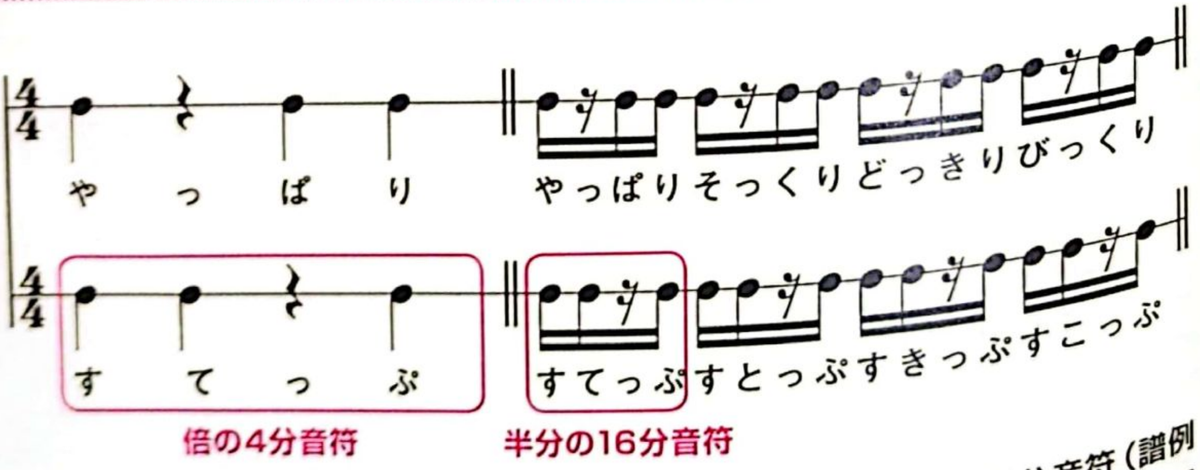
終わり

レッスン 24 休符を含んだリズムを覚えよう

キーワード 休符を含んだリズム

ひとかたまりのリズムの形で、一部が休符に置き換えられたパターンについても、馴染みのある言葉のリズムで覚えてしまいましょう。

休符を含んだリズムにも言葉を当てはめて覚えましょう

８分音符４つで２拍になりますが、２つ目、あるいは３つ目が休符になった休符を含んだリズム、「歯ぬけのリズム」は小さい「っ」のような「つまる音(促音)」の言葉を当てはめると楽しく感覚的に覚えられそうです。

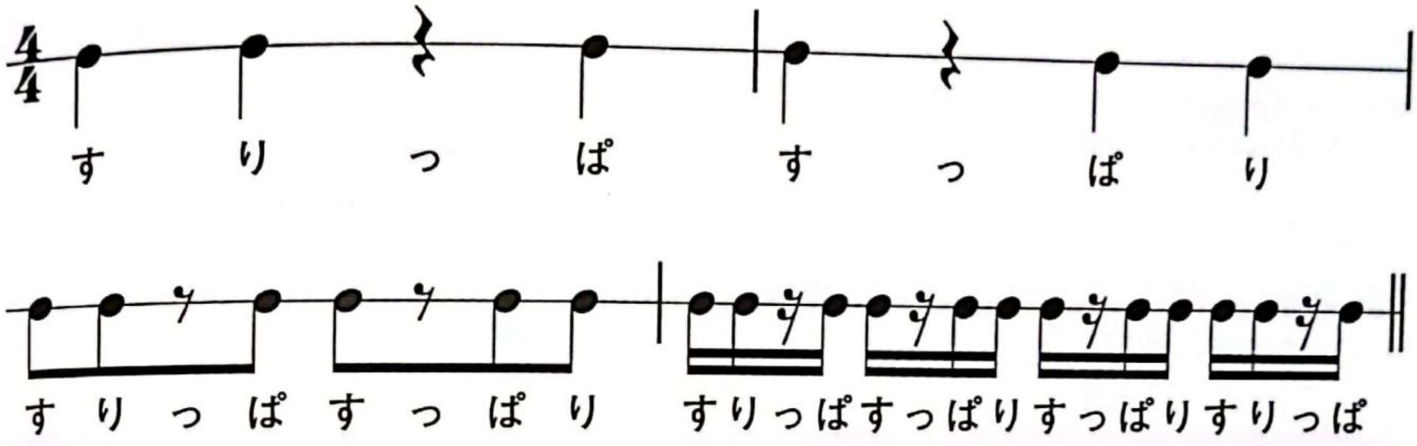


同じく８分音符を、倍の４分音符（譜例左側）、あるいは半分の16分音符（譜例右側）で考えても、お互いの相対的なリズムは変わりません。やはり「リズムの相似形」（拡大・縮小パターン）として併せて覚えてしまいましょう。

CamScannerでスキャン

① 「つまる音」のリズムの形を口ずさんでみます

TRACK 51

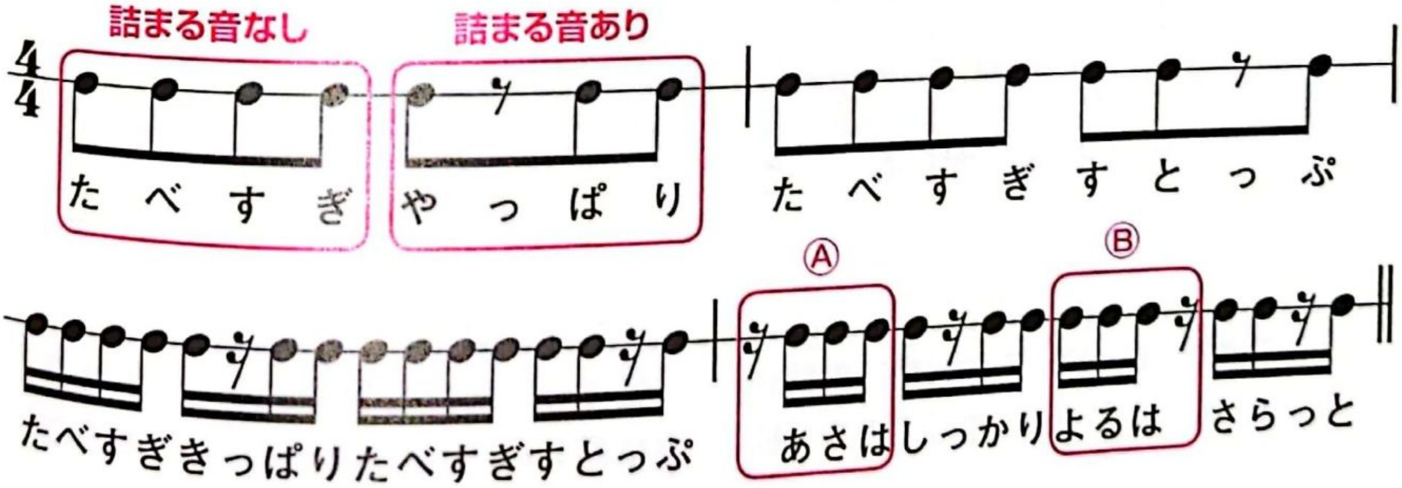


手やメトロノームで拍をカウントしながら、口ずさむ、あるいは楽器で音を鳴らしてみましょう

リズムの相似形（拡大・縮小パターン）を繰り返すことで感覚的に覚えます

② 「つまる音」の有無で交互に口ずさんでみます

TRACK 52



手やメトロノームで拍をカウントしながら、口ずさむ、あるいは楽器で音を鳴らしてみましょう

4音ひとかたまりの場合の、1つ目が休符（Ⓐ）、4つ目が休符（Ⓑ）のパターンも併せて覚えましょう

終わり

CamScannerでスキャン

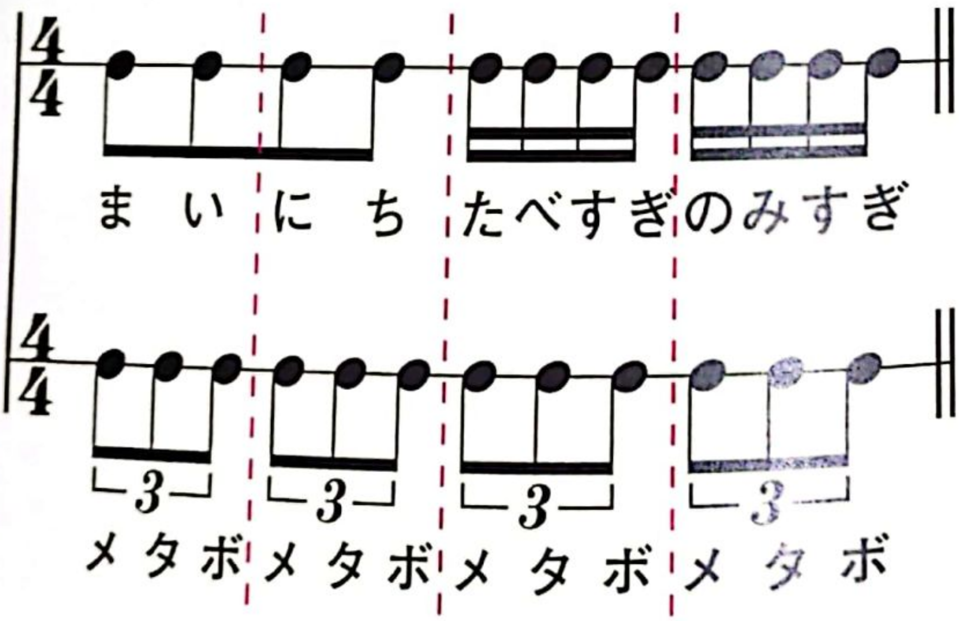
レッスン 25

【メタボ】のリズム、3連符を覚えよう

キーワード 3連符、タタタ

ここまでは、音符の長さを2や4などの割り切れる数で分割したリズムに言葉をはめてきました。

ここでは、特殊に分割されたリズムの3連符にも言葉をはめてマスターしてしまいましょう。

ひとかたまりを三分割したリズムが「3連符」です

ここまでのレッスンでは、音符の長さを、半分にしたり2倍にすることで、基準の音符の形が変わっていきました。

例えば、4分音符を2倍にすると2分音符、1/2にした場合は8分音符、そして1/4にした場合は16分音符になります（レッスン5～7参照）。

では4分音符を1/3に等分にした長さは何でしょう？ 4分音符（1拍）を1/3に等分して、「タタタ」と鳴らしたリズムを「3連符（1拍3連）」といいます。

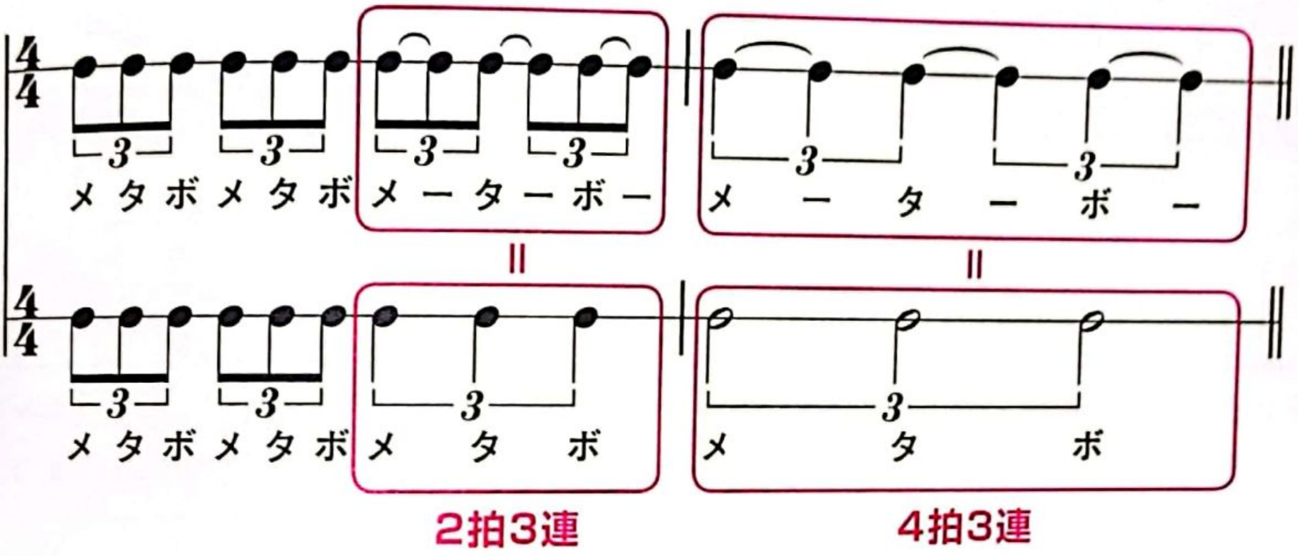
上の譜例の下段のように「メタボ」などの3文字の言葉をはめて、リズムを覚えてしまいましょう。

CamScannerでスキャン

●リズムの相似形も覚えましょう

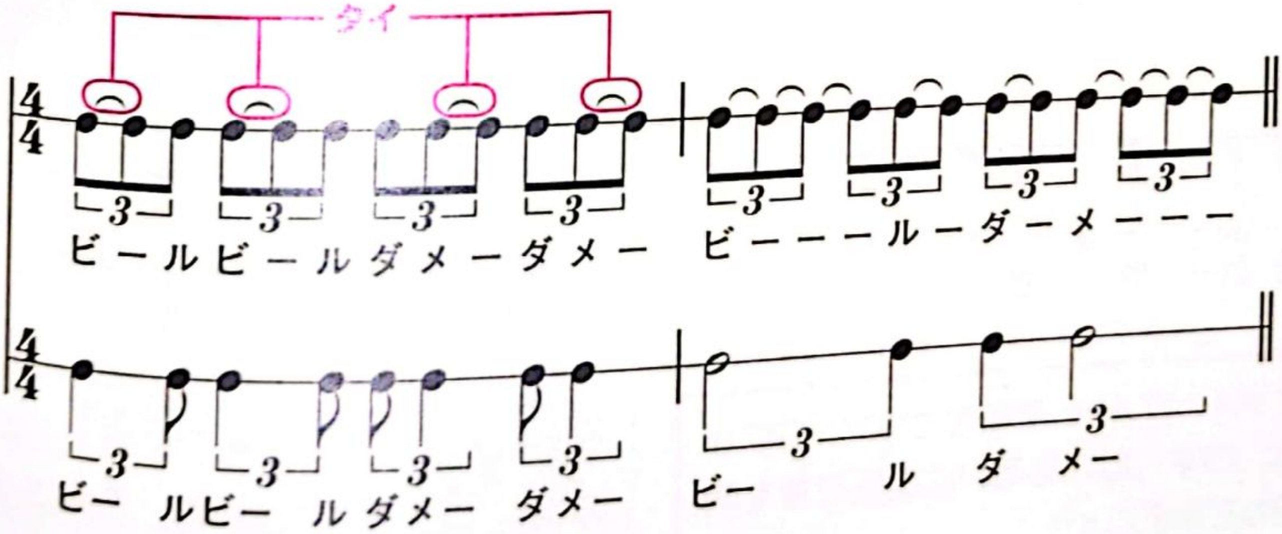
さらに1拍3連を、2つずつ繋げば「2拍3連」となります。そしてその2拍3連を2つずつ繋いでいけば、4拍3連となります。

これらも「リズムの相似形」（拡大パターン）として覚えてしまいましょう。



●「3連符＋タイ」も言葉をはめて覚えましょう

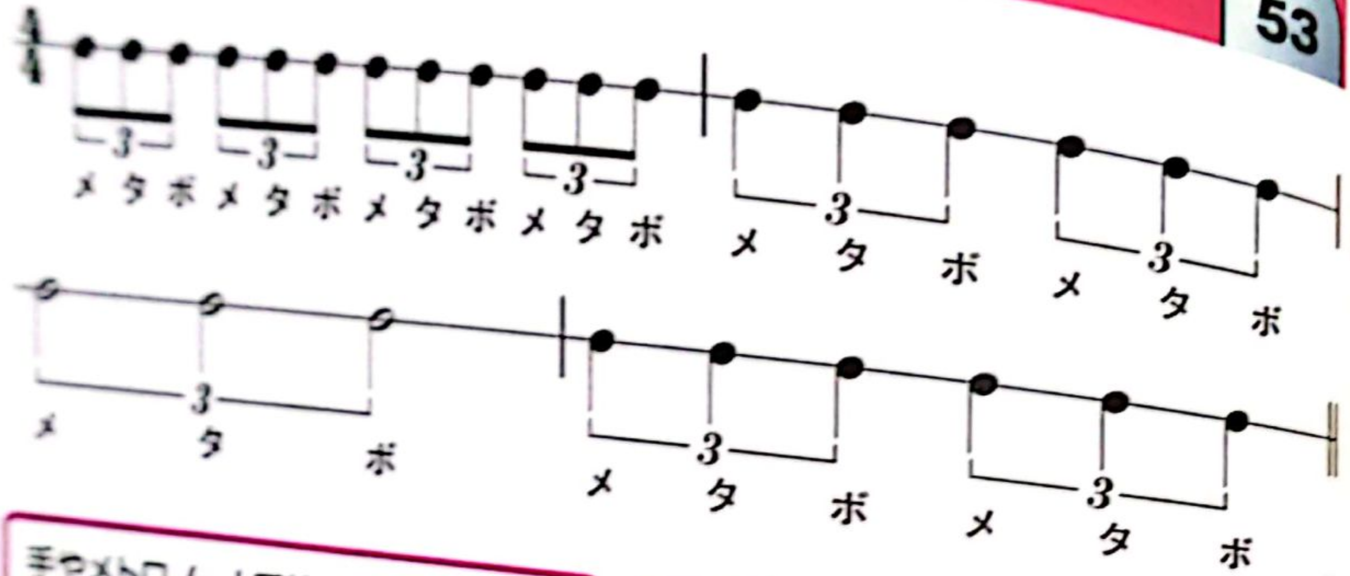
3連符の3つの音のうち、1つ目と2つ目、あるいは2つ目と3つ目をタイで繋いだ長さは、下の譜例下段のように表記されることもあります（つまり上段と下段のリズムは同じです）。やはり言葉をはめて覚えていきましょう。



次のページに続く▶▶▶

①「メタボ」のリズムの形を口ずさんでみます

TRACK 53

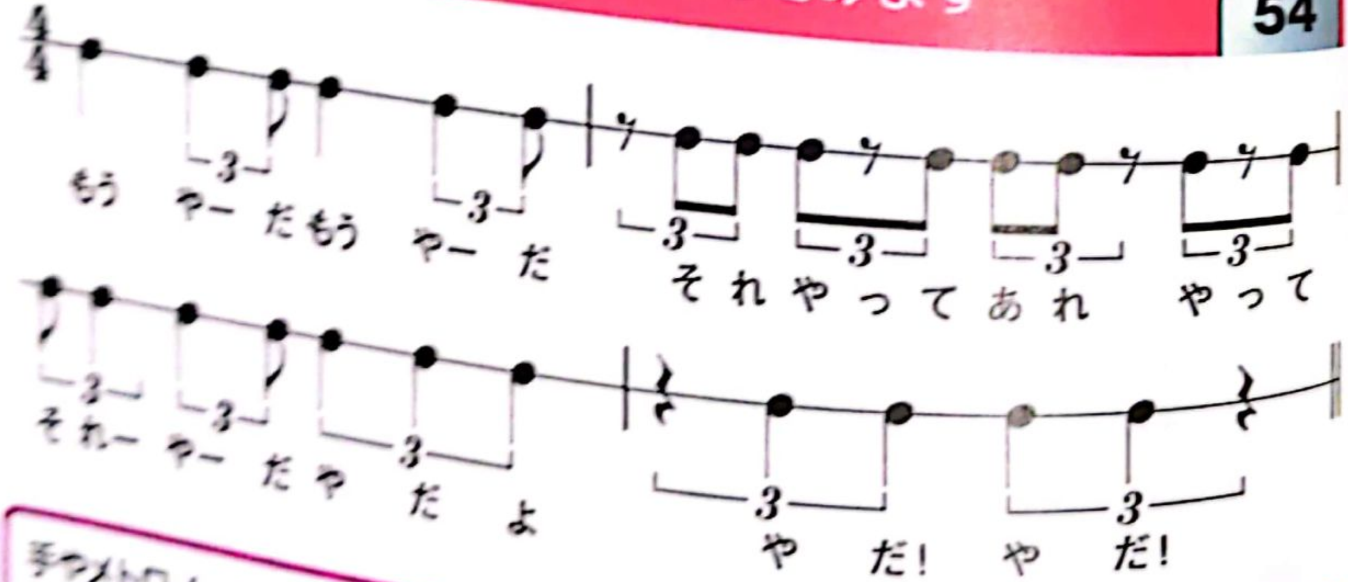


手やメトロノームで拍をカウントしながら、口ずさむ、あるいは楽器で音を鳴らしてみましょう

リズムの相似形（拡大・縮小パターン）を繰り返すことで感覚的に覚えます

②休符が入るパターンも口ずさんでみます

TRACK 54



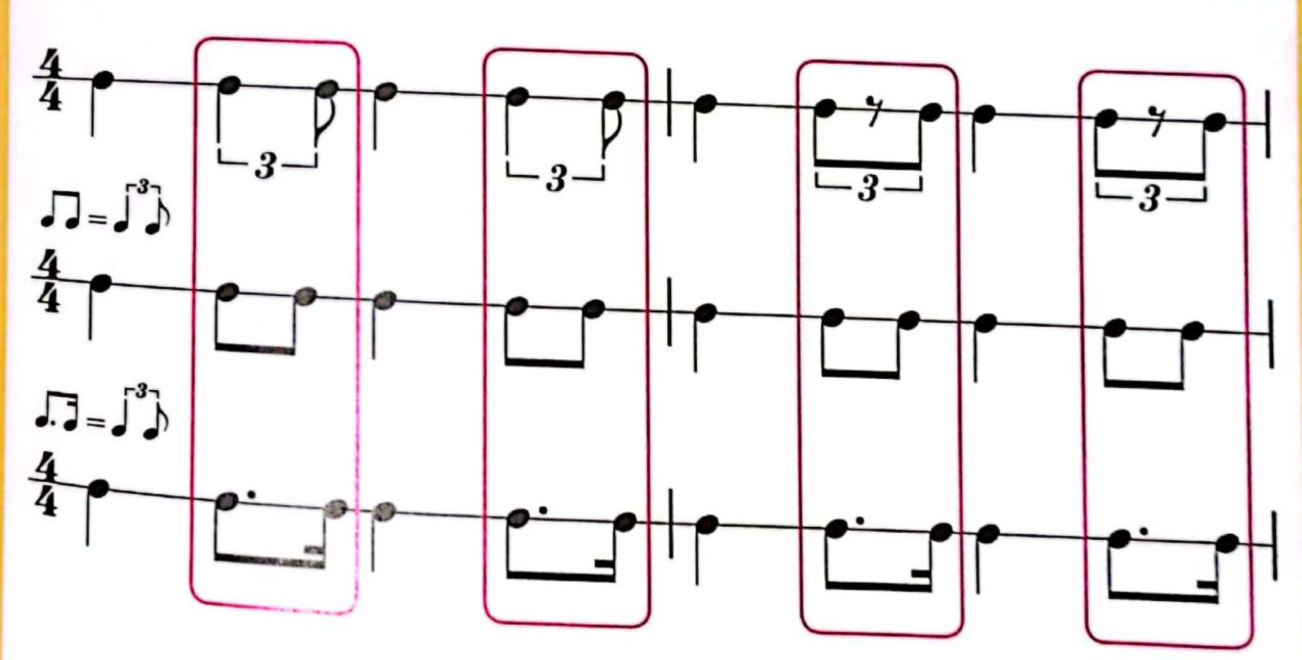
手やメトロノームで拍をカウントしながら、口ずさむ、あるいは楽器で音を鳴らしてみましょう

ひとかたまりの拍を感じながら、連符の相似形や休符に置き換えたリズムに慣れます

ヒント

3連符を2：1で分けると、スキップのようなハネるリズムになります。左ページ下の譜例の「やーだ」や「やって」の部分のようなリズムです。そのリズムは「スウィング」とか「シャッフル」と呼ばれますが、曲全体を通じて同じようなリズムが続くことが多いので、わざわざすべての譜面を3連符で表記しないことも多々あります。

つまり下の譜例の中段や下段のように楽譜の冒頭に省略する意味の記号を書くことによって、上段にあるような「3」の表記などを使わずにリズムの譜面をシンプルに書いてしまうわけです。



CamScannerでスキャン

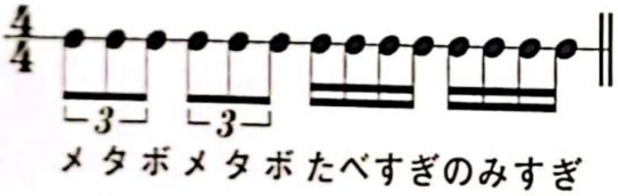
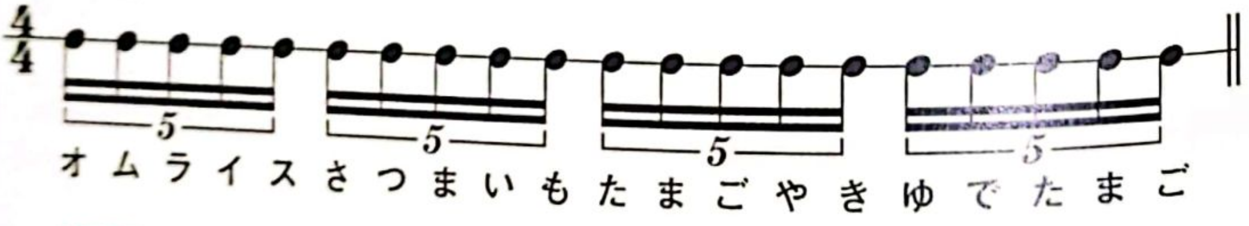
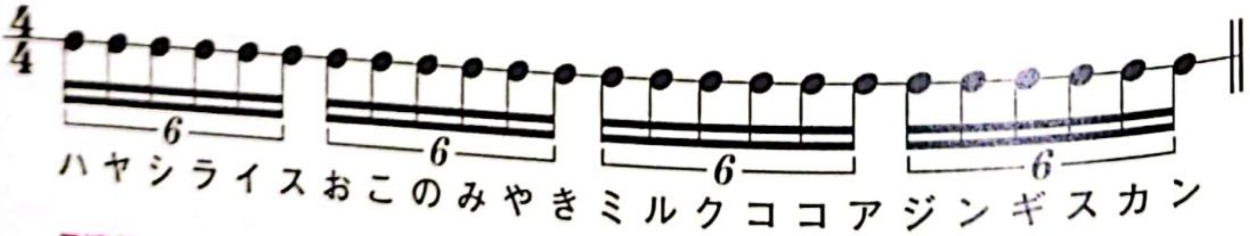
レッスン26 5連符、6連符、7連符を覚えよう

キーワード 連符

特殊な3連符の他にも、連符が用いられることがあります。ここでは簡単な紹介だけにしておきますが、併せて覚えておきましょう。

ひとかたまりを、さらに分割する連符もあります

3連符と同じ考え方で、ひとかたまりの拍を、5つ、6つ、7つ……などと分割する連符もあります。

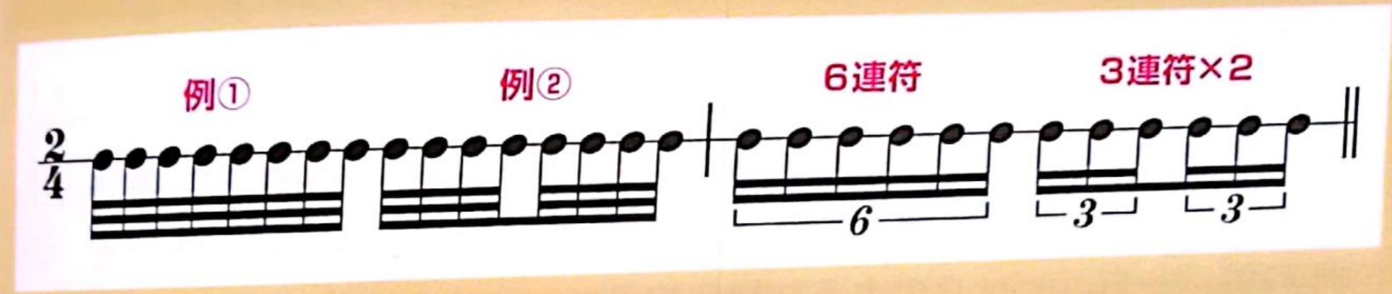
それぞれ「5連符」「6連符」「7連符」ですが、「オムライス」「ハヤシライス」「フライドポテト」など、やはり日常生活で馴染んでいる言葉を当てはめて練習すると覚えやすいでしょう。

5連符

6連符

7連符

CamScannerでスキャン

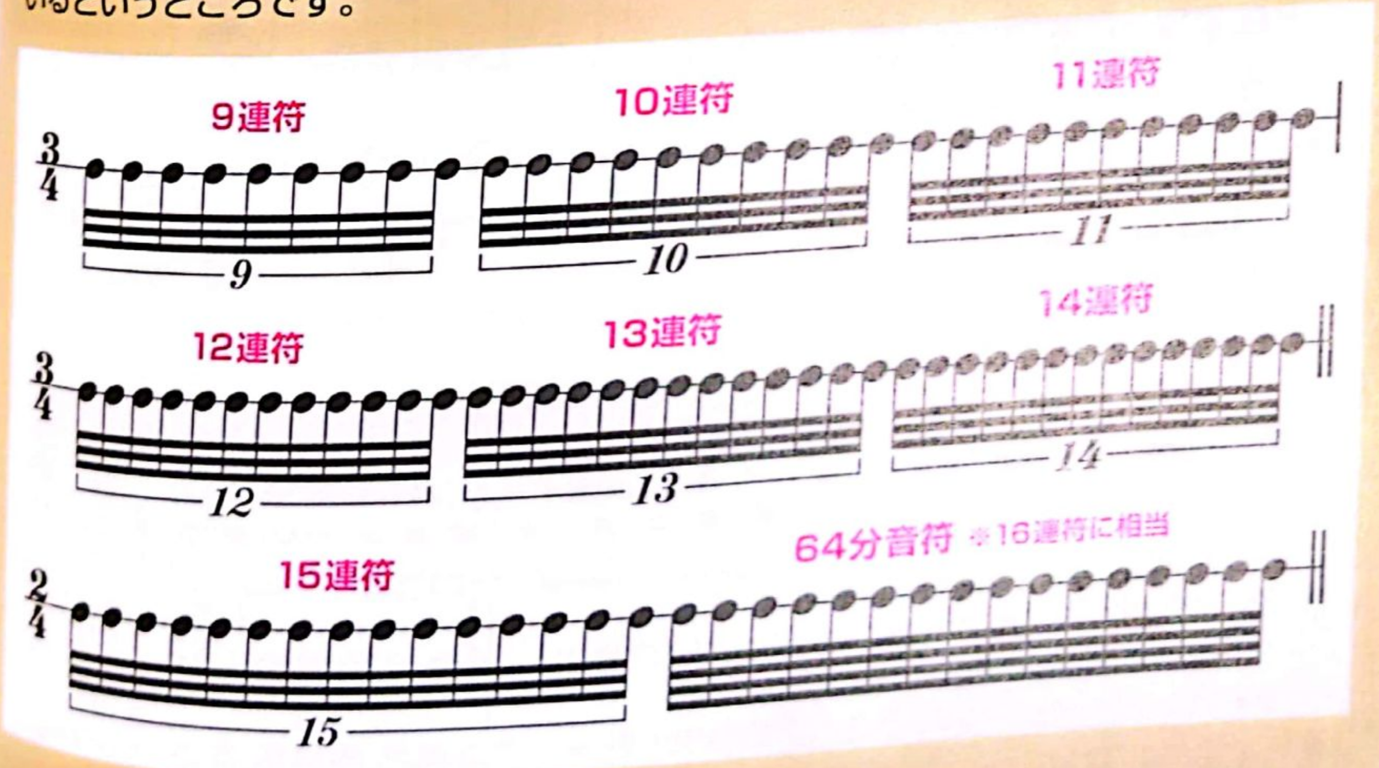
ヒント！

8連符はないのでしょうか？

「8連符」は、単純拍子では使われません。なぜなら4分音符を基準とした1拍の時、8連符は16分音符のピッタリ半分の長さの「32分音符」で表現できるからです（例①）。

※32分音符8つは、32分音符4つ×2と同じです（例②）。ちなみに「6連符」の場合もリズムだけで考えれば半拍(8分音符分)の3連符×2と同じです(下譜例右)。

9連符以上の表記は？

「9連符」「10連符」、それ以上の連符もありますが、注意するべきは、32分音符より短い長さの連符になるために桁（連桁）の本数が3本で表記されているというところです。

この法則に沿って考えれば、15連符までは3本ですが、16連符に相当するのは「64分音符」になりますので、繋がれる桁も4本になります。

終わり

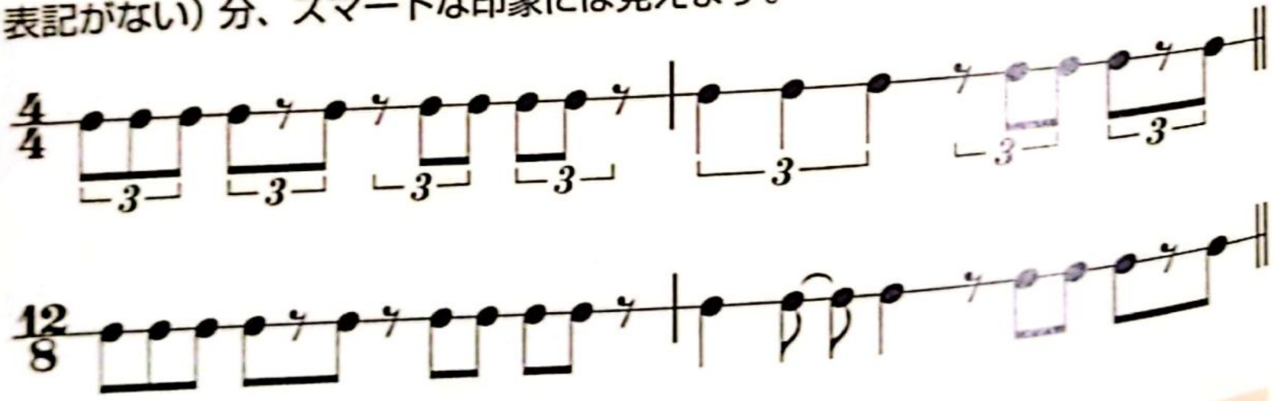
CamScannerでスキャン

Q 「３連符が４つ」と12/ 8拍子の違いは？

A 譜面の見た目の印象が異なります

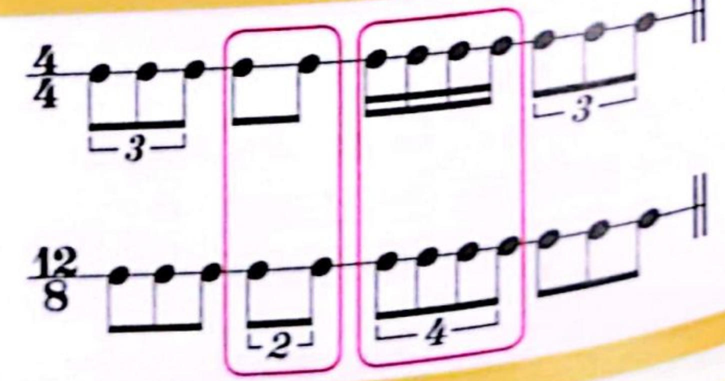
３つの音符のかたまりで１拍とする考え方は、「３連符」と「12/ 8」で共通しているため、お互いに書き換えることが可能です。ポピュラー系では4分音符基準を崩さずに、すべて「３連符」で表記することが一般的です（譜例上段）。一方、12/ 8のような複合拍子は、小さな３拍子が組み合わさった拍子ですので、4分音符基準の３連符に書き換えることができます。

１拍のテンポが同じであれば、どちらも同じリズムになりますが、4/ 4はポピュラー系ではお馴染みの書き方です。12/ 8では、連符がない（「3」表記がない）分、スマートな印象には見えます。



ヒント

ちなみに複合拍子では、３分割が基準となっているため、2、4などに分割するものは数字が付いた「連符」の扱いとなります。



CamScannerでスキャン

第4章

音の【高さ】を読んでみよう

ここからは、いよいよ楽譜の「音の高さ」について知っていきましょう。最初は大変かもしれませんが、音源に合わせて何度も繰り返し読み、慣れることが重要です。

この章の内容

27 五線の仕組みを知ろう …… 80
28 ト音記号を覚えよう …… 82
29 ヘ音記号を覚えよう …… 84
30 「ドレミファソラシ」をおさらいしよう …… 86
31 ト音とヘ音の組み合わせを覚えよう …… 88
32 その他の音部記号を知っておこう …… 90
33 半音上げる記号を覚えよう …… 92
34 半音下げる記号を覚えよう …… 94
35 変化した「ドレミ～」の読み方を知ろう …… 96
36 臨時記号のルールを覚えよう …… 98
37 まとめて変化させる記号を覚えよう …… 100
楽譜&リズムの素朴な「?」に答えるQ&A …… 104

CamScannerでスキャン

レッスン27 五線の仕組みを知ろう

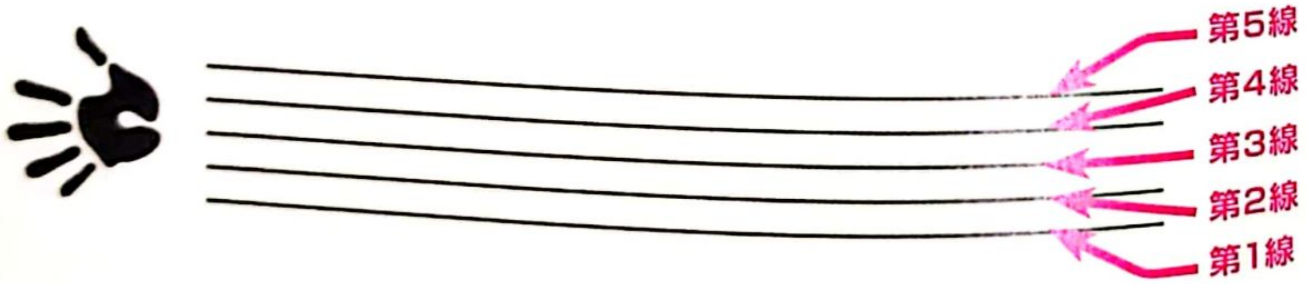
キーワード 五線、加線

これまでは「音の長さ」「リズム」などを覚えてきましたが、いよいよ「音の高さ」にチャレンジしていきます。まずは「五線」について知っておきましょう。

音の高さは「五線」の玉の位置で表します

長い歴史の中で、時代とともに譜面の横線の数は変化してきましたが、現代では「五線」が一般的です。

手や足の指は5本、人間が一度に把握しやすい数ともいえるかもしれません。「一番小さな小指が第１線」で「親指に当たるのが第５線」となり、下にある第１線よりも、上にある第５線に行くに従って、相対的に高い音になります。



●「線」と「間」があります

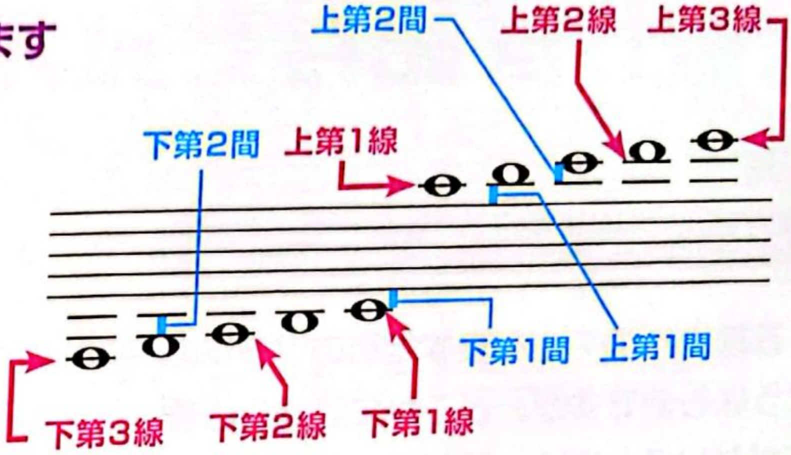
「線」、線と線の「間」には名称があり、どの位置に音符があるのかによって音の高さが決まります。「線」は5本「間」は4つになります。

それぞれにシンプルな音符を乗せた場合、第１線にぶら下がる音、第５線に乗る音を含めると、五線だけで１１個の高さの音が表現できます。

CamScannerでスキャン

「加線」で五線を拡張します

実際の音楽では、五線を超えた音域（音の高低の範囲）も使われます。その時には上下に線を付け足して（「加線（かせん）」といいます）、五線を拡張することがあります。



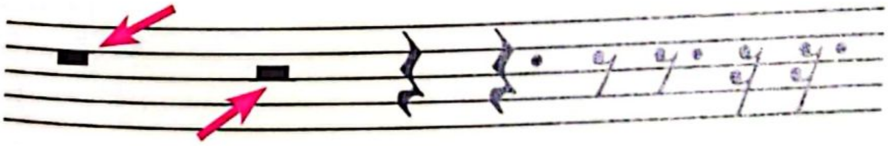
付点と休符の高さを覚えておきます

付点は線の上に書けませんので、線の上の高さにある音符に付点がつく場合はひとつ上の「間」に付点をズラして表記します。

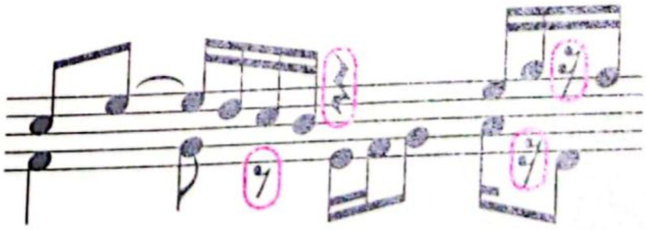
「間」にある音符の付点は、玉のすぐ真横に書かれます。

休符の標準の高さ

下の譜例はいろいろな休符の基本の高さと付点の位置です。形が似ていて紛らわしいのが「全休符」と「2分休符」。「全休符」は第４線にぶらさがる位置、「2分休符」は第３線に乗る位置という違いでも区別しましょう。



休符の高さの例外

ただし、右のように五線の中に、上下2つのライン（「声部」といいます）が同時に書かれる時には、休符の位置は、上記の限りではありません。

終わり

レッスン
28 ト音記号を覚えよう

キーワード ト音記号、高音部記号

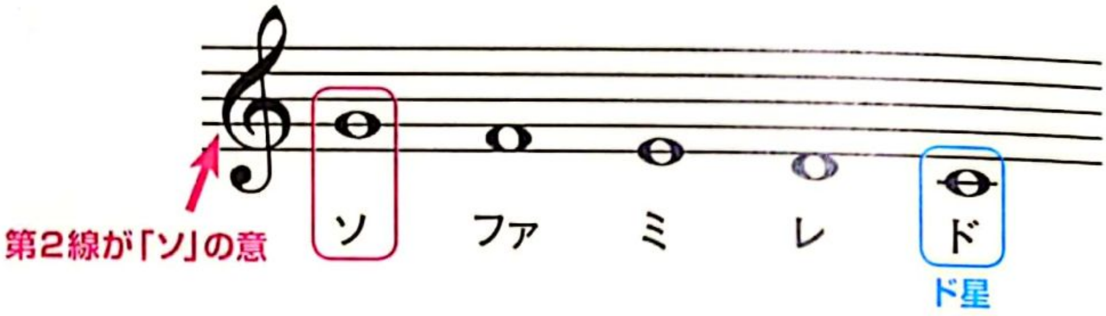
五線は音の高さを表すためのグラフのようなものですが、どこかに目盛りの基準がないことには、絶対的な高さがわかりません。

五線に対して音の高さの基準を示す音部記号を覚えましょう。

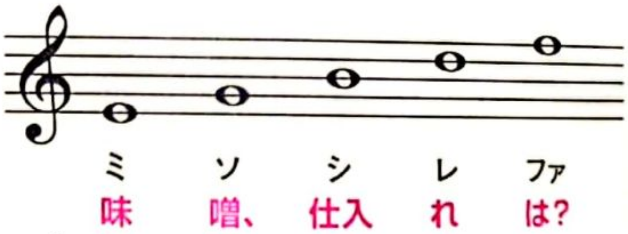
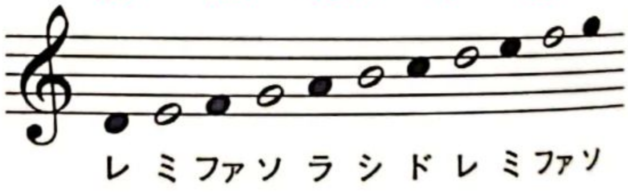
「ト音記号」は「ト（ソ）」の基準を示す記号です

お馴染みの「ドレミファソラシ」の音名は日本の音名で書くと「ハニホヘトイロ」になります（レッスン30を参照）。この５番目の「ト」は、つまり「ソ」のことです。英語の音名ですと「CDEFGAB」の「G」となり、「G Clef（ジー・クレフ）」と呼ばれています。

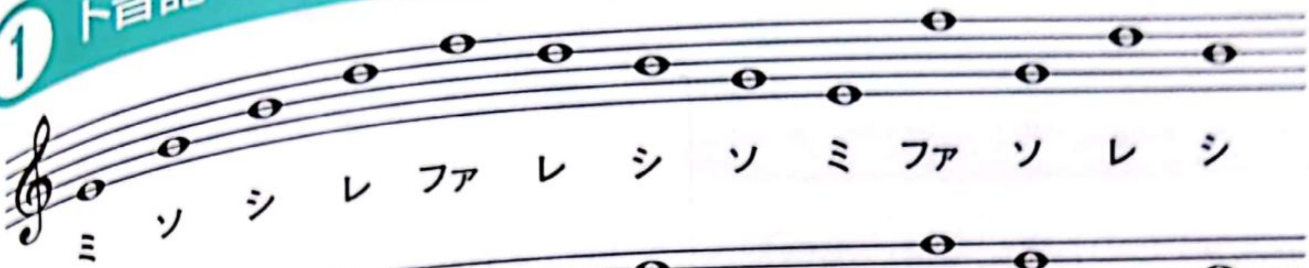
「ト音記号」はアルファベットの「G」が変形した記号で、【五線の第2線が「G（ソ）」である】ということを意味しています。別名を「高音部記号」といいます。「ト音記号」では、下第１線の加線上の「土星」のような輪（環）のついた音が「ド」です。「ド星」と覚えましょう。



「線」にある音を覚えます

素早く音の高さを読むコツは、まず線上の音名を覚えてしまうこと。下から「ミソシレファ」です。語呂で「味噌、仕入れは？」と覚えましょう。「間」にある音（右譜例の●）は隣の線上の音名から導くと楽です。

CamScannerでスキャン

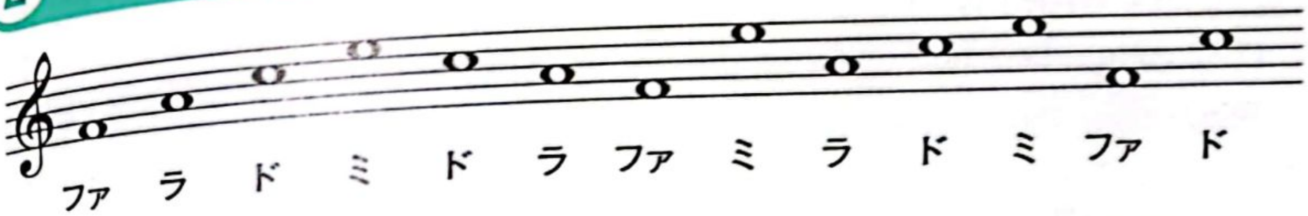
① ト音記号の線上にある音名に慣れましょう

TRACK 55

最初は音名を読んでみて、慣れてきたら
楽器で音を鳴らしてみましょう

線の上の音名をストレスなく読めるまで繰り返して慣れましょう

② ト音記号の線と線の間にある音名に慣れましょう

TRACK 56

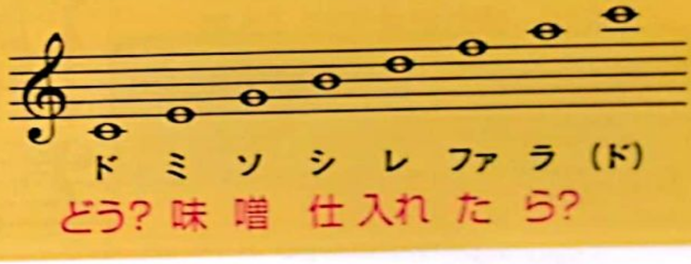


最初は音名を読んでみて、慣れてきたら
楽器で音を鳴らしてみましょう

線と線の間の音名をストレスなく読めるまで繰り返し慣れましょう

ヒント

通常の音階とは別に「一段飛ばしの音階」を覚えておくと便利です。「どう？味噌仕入れたら」とゴロ合わせで覚えてしまいましょう。



終わり

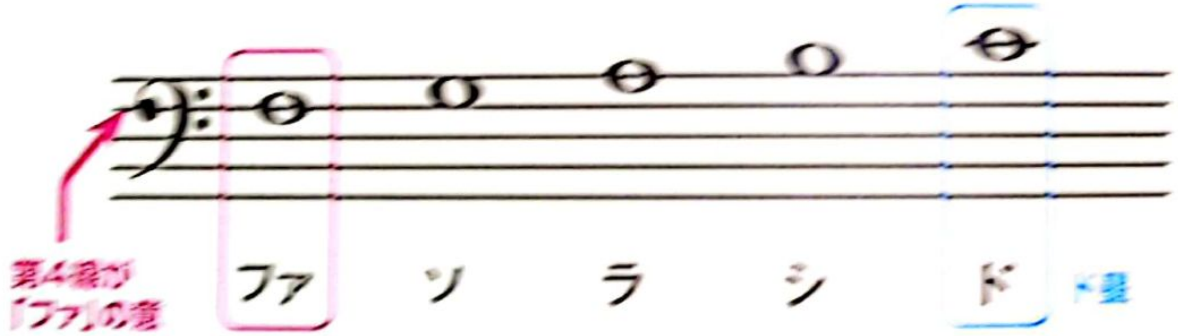
レッスン29

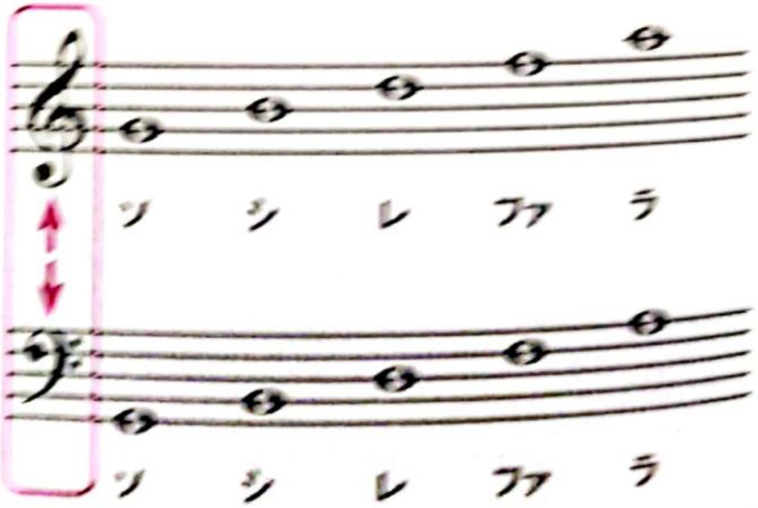
ヘ音記号を覚えよう

キーワード ヘ音記号、低音部記号

レッスン28のト音記号は、高音部を表すために使われるものでした。ここでは、それに対して低音部の基準を示す記号を覚えましょう。

「ヘ音記号」は「ヘ（ファ）」の基準を示す記号です

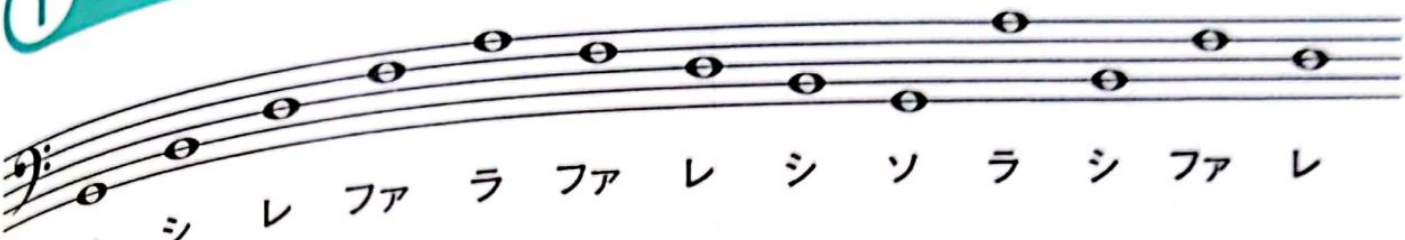
「ドレミファソラシ」の音名を日本の音名で表現した「ハニホヘトイロ」（レッスン30参照）。この4番目の「ヘ」は、つまり「ファ」のことです。英語の音名ですと「CDEFGAB」の「F」となり「F Clef（エフ・クレフ）」と呼ばれます。「ヘ音記号は」アルファベットの「F」が変形した記号で、五線の第4線が「F（ファ）」であることを意味しています。別名「低音部記号」です。「ヘ音記号」では、上第1線の加線上の「土星」のような輪（環）のついた音が「ド」です。（レッスン28に合わせて）「ド星」と覚えましょう。

●ト音記号とヘ音記号

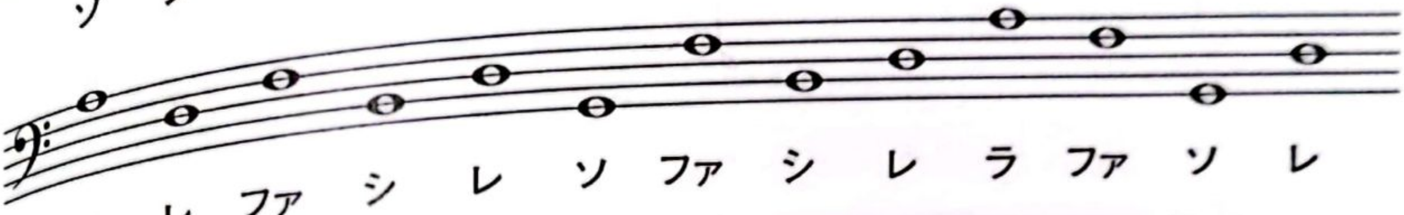
「ヘ音記号」の高さを読むコツですが、慣れるまでは「ト音記号」と比較して、「線が1本ズレた」と考えてもよいかもしれません。

第4章 音の「高さ」を読んでみよう

CamScannerでスキャン

① ヘ音記号の線上にある音名に慣れましょう

TRACK 57



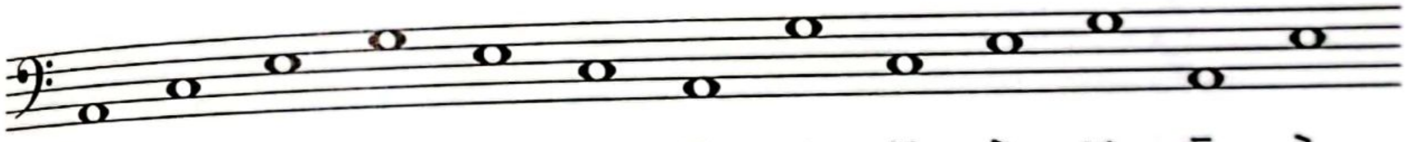


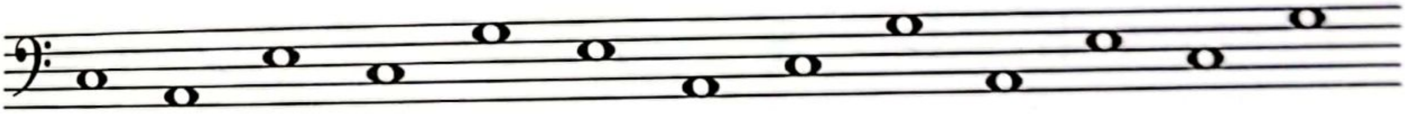
最初は音名を読んでみて、慣れてきたら楽器で音を鳴らしてみましょう

線の上の音名をストレスなく読めるまで繰り返して慣れましょう

② ヘ音記号の線と線の間にある音名に慣れましょう

TRACK 58





最初は音名を読んでみて、慣れてきたら楽器で音を鳴らしてみましょう

線と線の間の音名をストレスなく読めるまで繰り返して慣れましょう

終わり

レッスン30 「ドレミファソラシ」をおさらいしよう

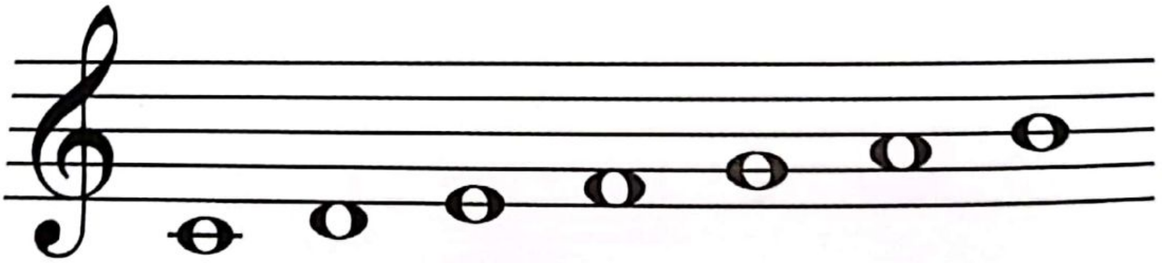
キーワード 音名、幹音

お馴染みの「ドレミファソラシ」は、それぞれ音の高さを表す「音名」です。

レッスン29とレッスン30でも登場したので、ト音記号とヘ音記号の五線譜のドレミファソラシの位置は把握できているかもしれませんが、ここでいま一度、五線との関係をおさらいしておきましょう。

ト音記号の音の高さと音名

五線上の「ドレミファソラシ」はピアノの白い鍵盤にあたる音名で、「幹音」といいます。「ドレミ……」はイタリア語の音名ですが、下表のように他の国の音名もシチュエーションによって使い分けられますので、覚えておくと便利です。



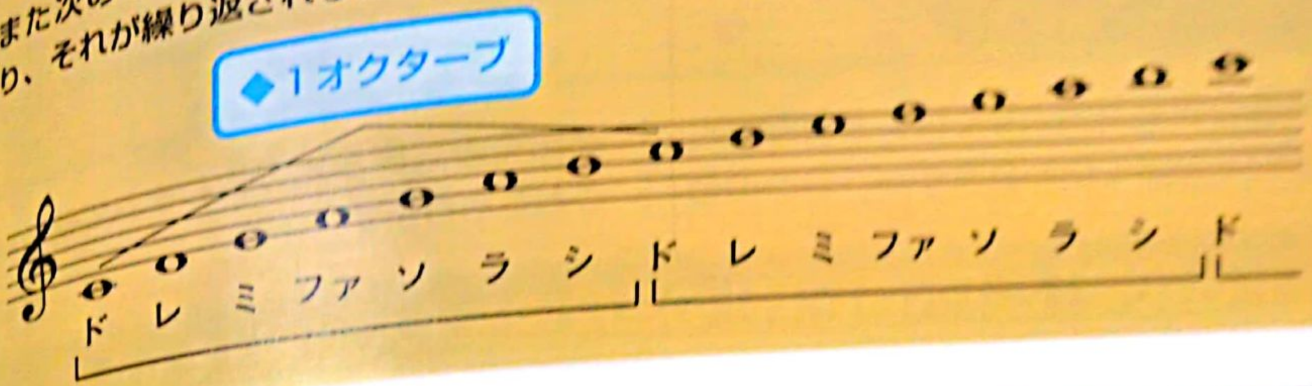
イタリア語	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ
日本語	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ
英語	C	D	E	F	G	A	B
ドイツ語	C	D	E	F	G	A	H
※ドイツ語の読み方	ツェー	デー	エー	エフ	ゲー	アー	ハー

CamScannerでスキャン

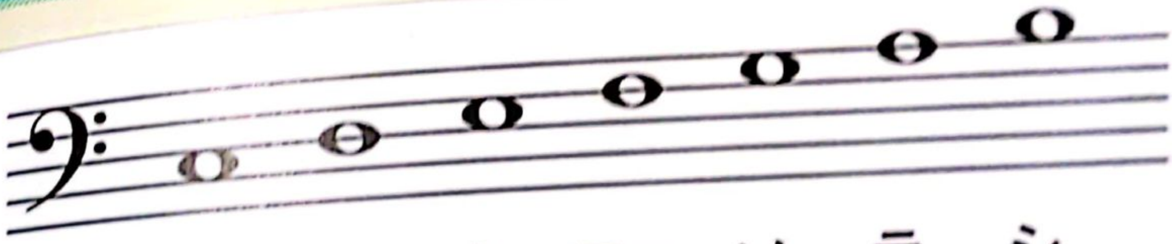
ヒント

「ドレミファソラシ」の7つの幹音が、また次の「ドレミファソラシ」に繋がり、それが繰り返されることで音が高くなります。

上の「ド」と下の「ド」の関係を「オクターブ」といいます。



ヘ音記号の音の高さと音名



イタリア語	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ
日本語	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ
英語	C	D	E	F	G	A	B
ドイツ語	C	D	E	F	G	A	H
※ドイツ語の読み方	ツェー	デー	エー	エフ	ゲー	アー	ハー

ヒント

国別の音名の使い分けシチュエーションの例です。

- イタリア語→学校教育、あらゆる音楽で使用
- 英語→ポピュラー、ジャズ、DTMなど
- ドイツ語→クラシック、オーケストラや吹奏楽
- 日本語→クラシックの曲名として（「交響曲第５番 ハ短調」など）

レッスン 31

ト音とヘ音の組み合わせを覚えよう

キーワード 大譜表

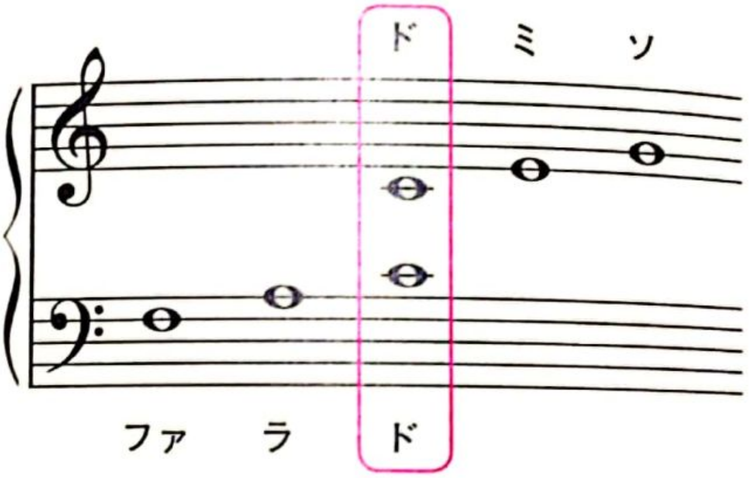
単独の音部記号としては、ト音記号とヘ音記号が多く使われますが、2つの音部記号の譜表が組み合わされて使われることもあります。

「ト音記号」と「ヘ音記号」の2段組を「大譜表」といいます

ピアノやハープなど、両手で演奏したり楽器の音域が広い時には、2段の五線をカッコでくくり、ト音記号とヘ音記号のどちらも同時に使われることがあります。

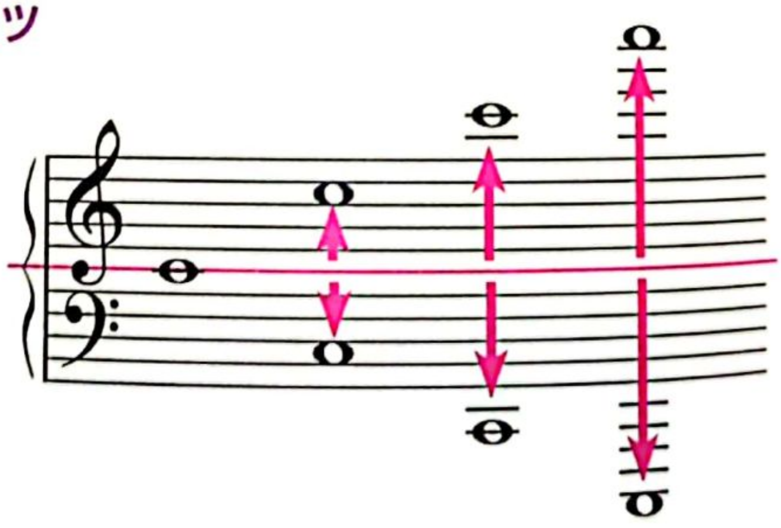
●大譜表の高さの関係

「ト音記号」の下第１線の「ド星」と「ヘ音記号」の上第1線の加線上の「ド星」は、同じ高さの「ド」になります。



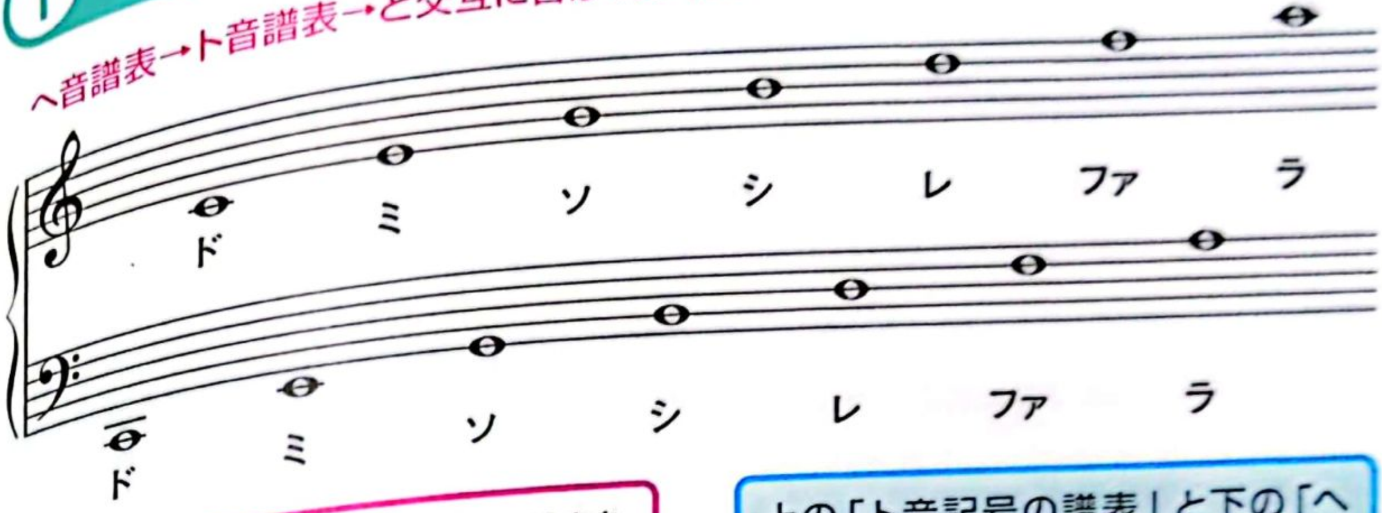
●オクターブをすばやく読むコツ

大譜表によるオクターブの位置関係を把握するため、2段の間隔を狭めて「ド星」を重ねて表示してみました。すべて「ド」のオクターブ違いを表していますが、中央の「ド星」を折り目にすると、上下対称になっていることにお気づきでしょうか？



① 大譜表に慣れましょう

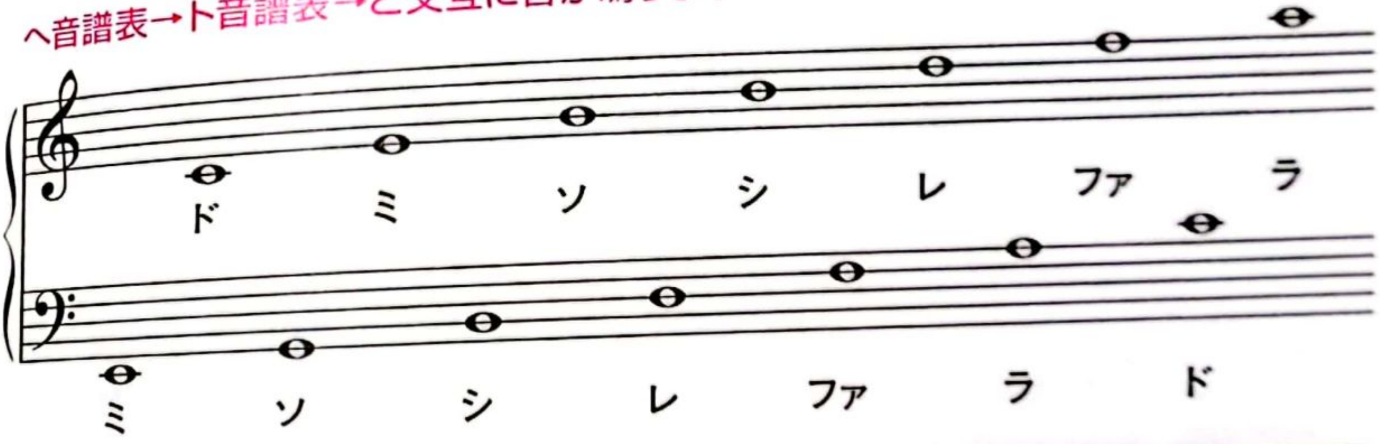
TRACK 59

ヘ音譜表→ト音譜表→と交互に音が鳴ります

最初は音名を読んでみて、慣れてきたら楽器で音を鳴らしてみましょう

上の「ト音記号の譜表」と下の「ヘ音記号の譜表」の音名をストレスなく読めるまで繰り返して慣れます

② さらに大譜表に慣れていきましょう

TRACK 60

ヘ音譜表→ト音譜表→と交互に音が鳴ります

最初は音名を読んでみて、慣れてきたら楽器で音を鳴らしてみましょう

「ト音記号の譜表」と「ヘ音記号の譜表」の音名をストレスなく読めるまで繰り返して慣れます

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 32

その他の音部記号を知っておこう

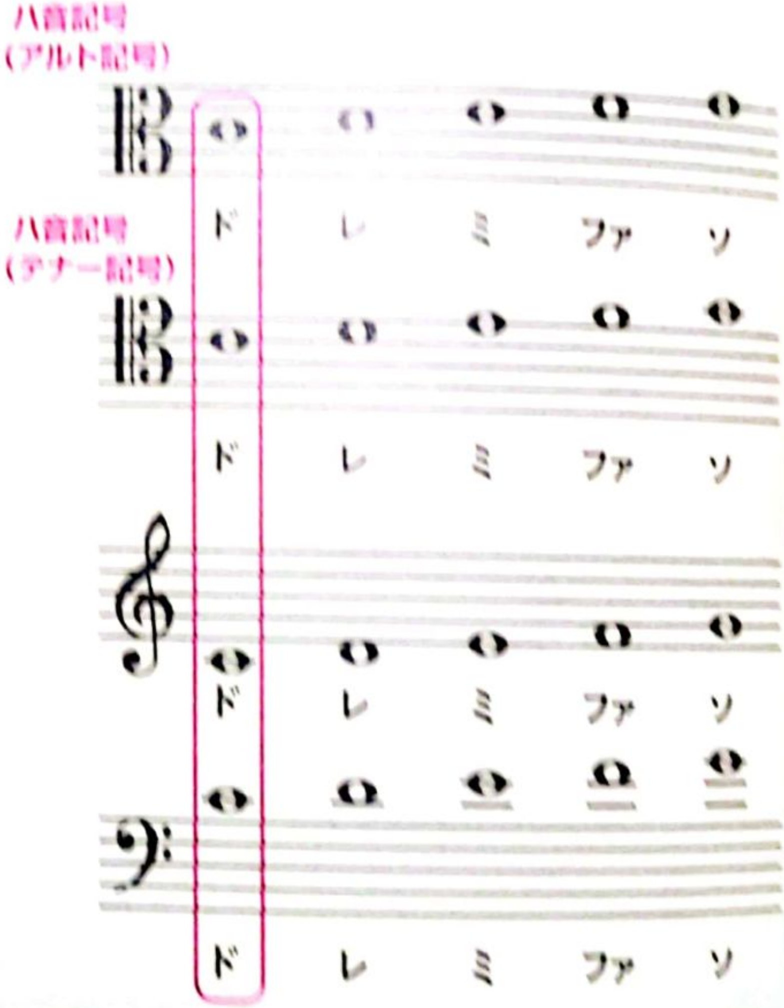
キーワード ハ音記号

ト音記号とヘ音記号以外にも、オーケストラなどの楽器によって使われる別の記号がありますので、ここでまとめておきましょう。

中音域の楽器で用いられる「ハ音記号」

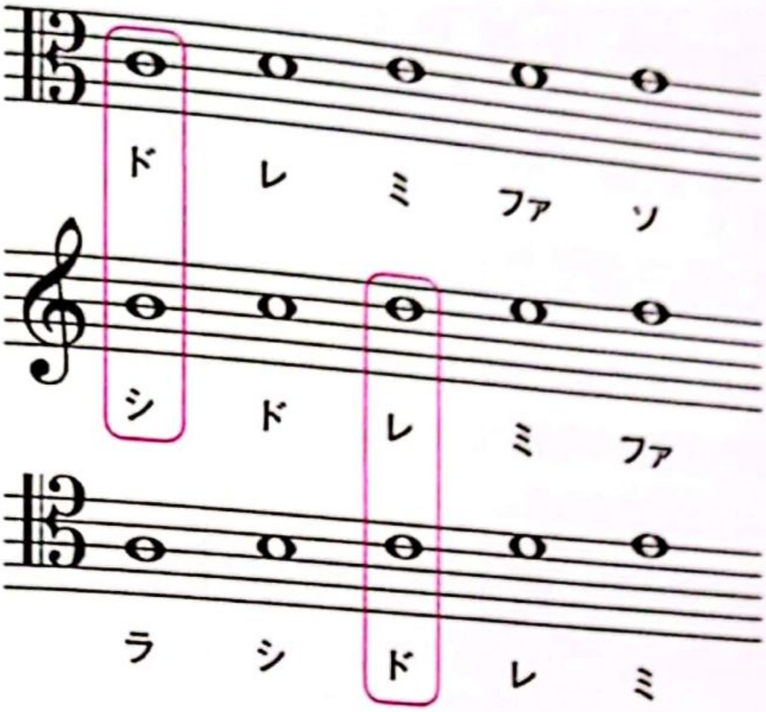
おもに中音域の楽器やパートに「ハ音記号」が用いられることがあります。日本の音名表記「ハニホヘトイロハ」の「ハ」、つまり「ド」のことです。英語の音名「CDEFGAB」の「C」で「C Clef（シー・クレフ）」と呼ばれます。

「ハ音記号」はアルファベットの「C」が変形した記号で、記号の中央が「ド」であることを意味しています。「ハ音記号」は、ト音記号やヘ音記号と異なり、その時々に応じて位置が変動します。

ハ音記号の中央が第3線にあるものは「アルト記号」といって「ビオラ」など、そしてハ音記号の中央が第4線にあるものは「テナー記号」といって「トロンボーン」「チェロ」「ファゴット」などで用います。また音域に応じて「ヘ音記号」と併用されます。

第4章 音の「高さ」を読んでみよう

「ハ音記号」を読むコツ

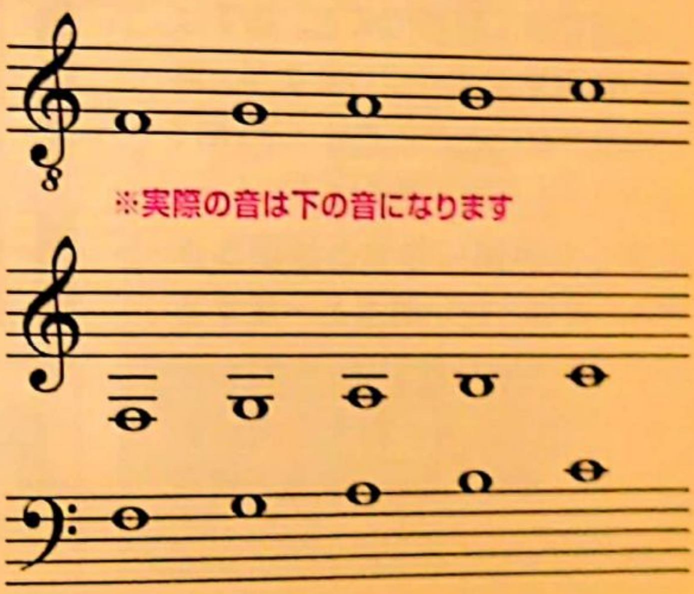
「アルト記号」や「テナー記号」の高さを読むコツですが、慣れるまでは「ト音記号」と比較して、音名がひとつズレたと考えてもよいかもしれません。ただし、ト音記号とハ音記号の「ド」の位置は、そもそも1オクターブ、ズレている（左ページ参照）ことに注意してください。



ここで紹介した音の高さの基準を表す記号の他にも、最近ではあまり使われなくなったものもありますが、すべて「音部記号（おんぶきごう）」といいます。

ヒント

音名は変わりませんが、オクターブがズレる音部記号もあります

「ト音記号」や「ヘ音記号」に数字の「8」が添えられた記号もあります。記号の下に「8」がついていれば、実音は記譜された音よりちょうど1オクターブ（低いドから高いドは、ドレミファソラシドで8つ違いになりますね）下の音で演奏します。合唱の「テナー／テノール（男声）」など、実際には1オクターブ下の音であることを意味する音部記号になります。

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 33

半音上げる記号を覚えよう

キーワード シャープ、ダブルシャープ

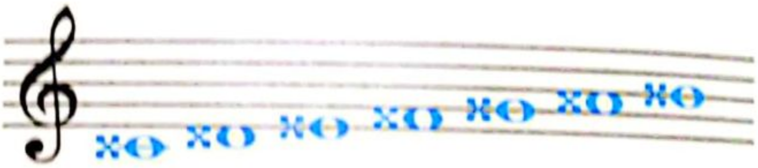
ここまで音の高さや名称に関して、ピアノの白い鍵盤（白鍵）にあたる音に限って取り扱ってきました。

ここからはピアノの黒い鍵盤（黒鍵）にあたる音を読むための仕組みを覚えていきましょう。

「#（シャープ）」は、半音上に変化させる記号です

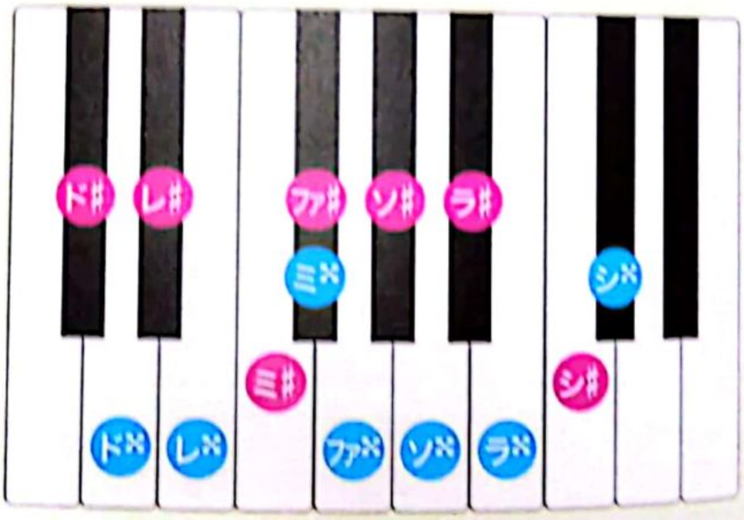
音符の玉のすぐ左側に#（シャープ）の記号をつけると、半音（ピアノの鍵盤ひとつ分）高い音という意味になります。

半音2つ分上の音に変化させる記号は「𝄪（ダブルシャープ）」です。



●変化した音と鍵盤の位置

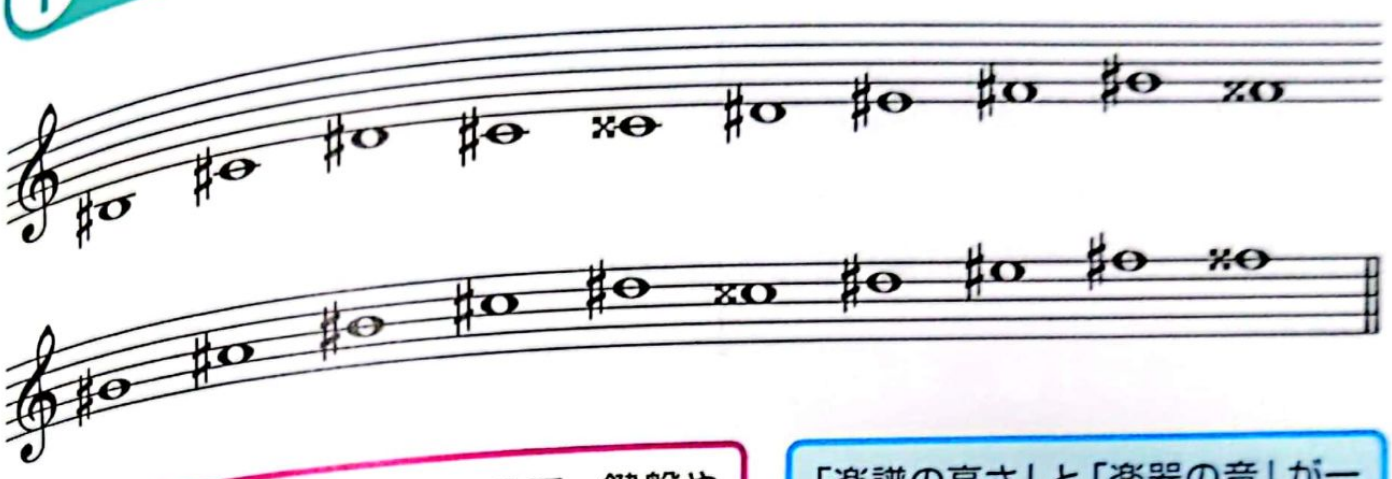
鍵盤では「#（シャープ）」がつくと、まずは黒い鍵盤をイメージしますが、黒い鍵盤がないところでは「ミ」の#は「ファ」、「シ」の#は「ド」と、必ずしも黒鍵になるとは限りません。𝄪（ダブルシャープ）は、白い鍵盤と一致することが多くなりますが、わざわざ「𝄪」で表現する一番の理由は調（キー）を変更しても、前後で繋がる音同士の上がり下がりのライン（旋律線）を崩さないためです（本章末のQ&A参照）。



CamScannerでスキャン

① ト音譜表で♯と𝄪を弾いてみよう

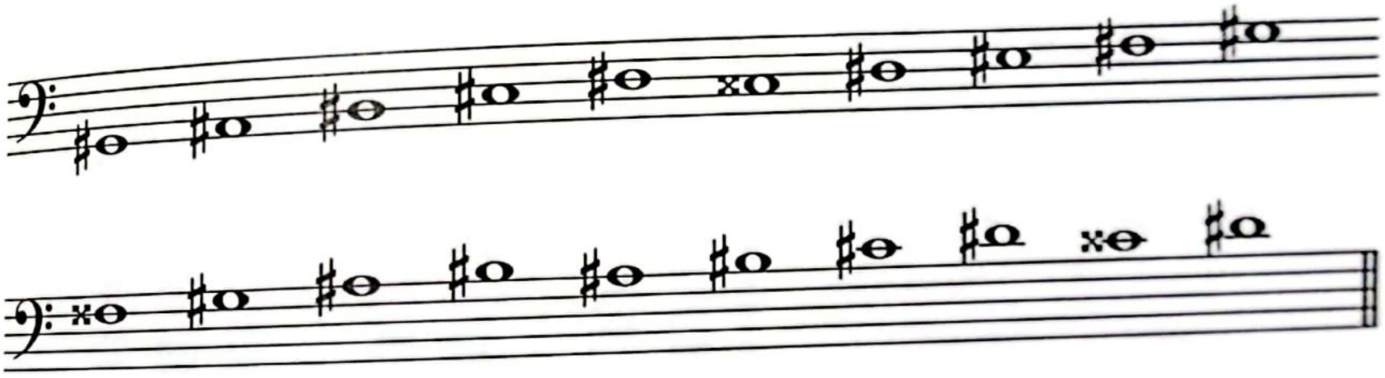
TRACK 61



ゆっくり確かめながらでよいので、鍵盤やギターなどの楽器で鳴らしてみましょう

「楽譜の高さ」と「楽器の音」が一致するまで繰り返して慣れます

② ヘ音譜表で♯と𝄪を弾いてみよう

TRACK 62

①と同様に、ゆっくり確かめながらでよいので、鍵盤、そしてギターなどのヘ音譜表を使わない楽器でも、音名だけを読みとって楽器で鳴らしてみましょう

やはり①同様に「楽譜の高さ」と「楽器の音」が一致するまで繰り返して慣れます

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 34 半音下げる記号を覚えよう

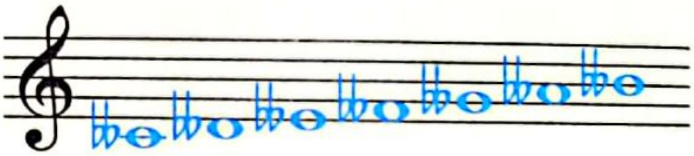
キーワード フラット、ダブルフラット

レッスン33で「半音」上に変化させる記号を覚えました。半音上に変化させる記号があれば、下に変化させる記号もあります。セットで覚えていきましょう。

「♭（フラット）」は、半音下に変化させる記号です

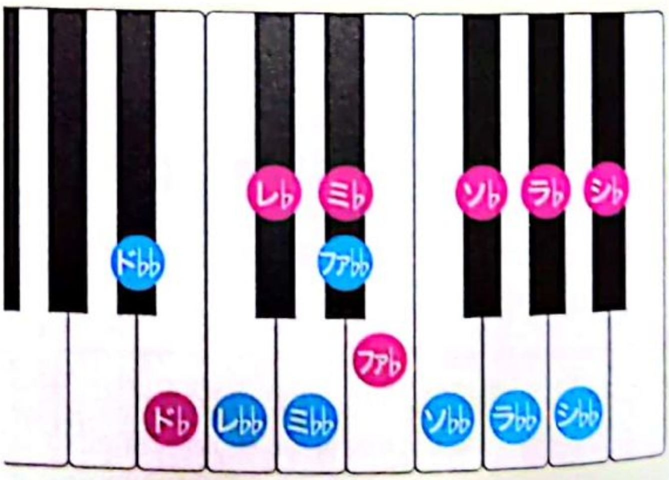
音符の玉のすぐ左側に♭（フラット）の記号をつけると、半音低い音を表します。

半音2つ分下に変化させる記号は「♭♭（ダブルフラット）」です。

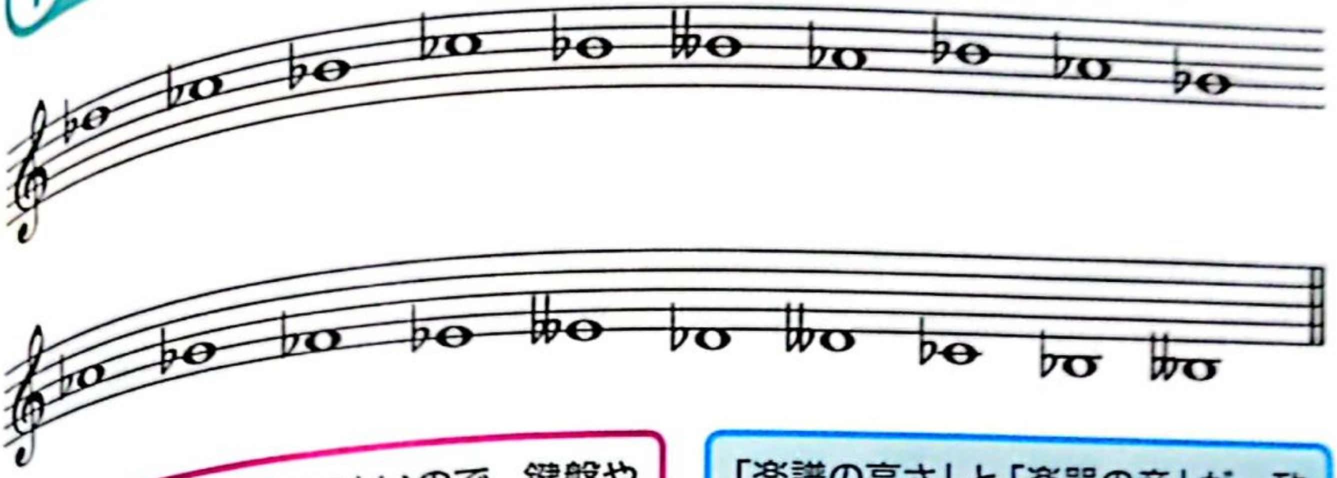


●変化した音と鍵盤の位置

鍵盤では「♭（フラット）」がつくと、まずは黒い鍵盤をイメージしますが、黒い鍵盤がないところでは「ファ」の♭は「ミ」、「ド」の♭は「シ」と、必ずしも黒鍵になるとは限りません（シャープの場合と逆の関係です）。♭♭（ダブルフラット）は、白い鍵盤と一致することが多くなりますが、わざわざ「♭♭」で表現する一番の理由、それもダブルシャープと同様です（本章末のQ&A参照）。

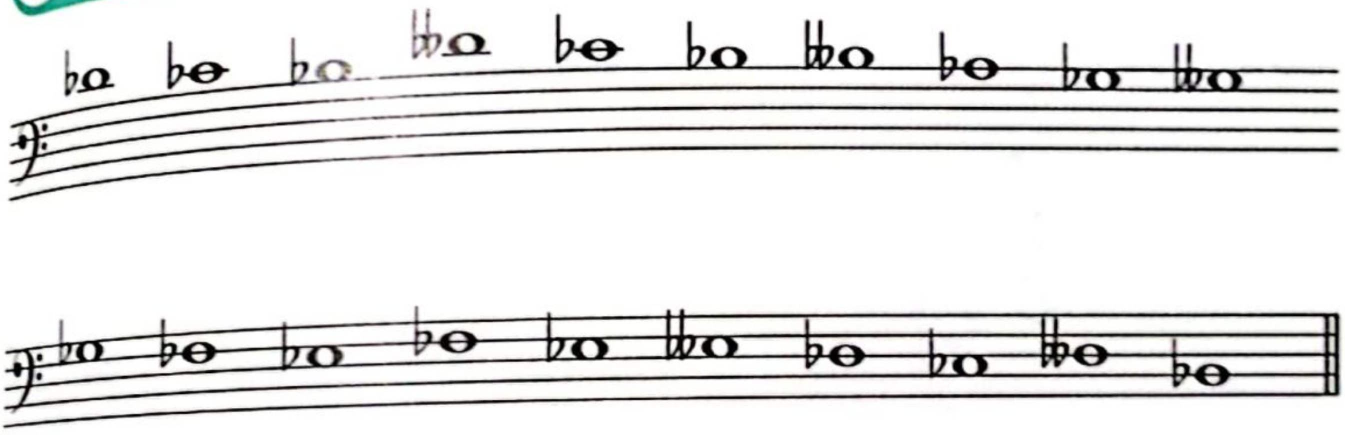


① ト音譜表で♭と𝄫を弾いてみよう

TRACK 63

ゆっくり確かめながらでよいので、鍵盤やギターなどの楽器で鳴らしてみましょう

「楽譜の高さ」と「楽器の音」が一致するまで繰り返して慣れましょう

② ヘ音譜表で♭と𝄫を弾いてみよう

TRACK 64

①と同様に、ゆっくり確かめながらでよいので、鍵盤、そしてやギターなどのヘ音譜表を使わない楽器でも、音名だけを読みとって楽器で鳴らしてみましょう

やはり①と同様、「楽譜の高さ」と「楽器の音」が一致するまで繰り返して慣れます

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 35

変化した「ドレミ～」の読み方を知ろう

キーワード 派生音

「シャープ」や「ダブルシャープ」、「フラット」「ダブルフラット」について理解したところで、それらの変化した音名の呼び方についてをこのレッスンで確認しておきましょう。

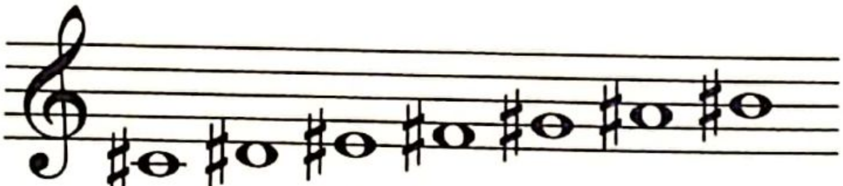
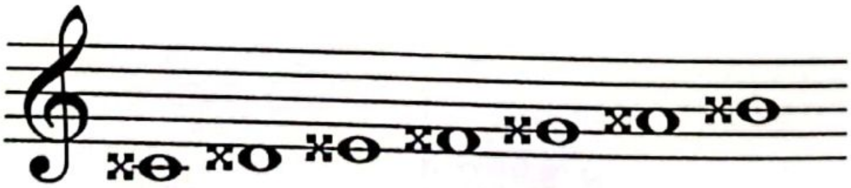
ピアノの白い鍵盤にあたる音名を「幹音」といいましたが、それに対して変化した音を「派生音（はせいおん）」といいます。

「シャープ」や「ダブルシャープ」がついた音名

シャープのついた音名の呼び方ですが、日本国内に限っては、イタリア語、英語ともに「ドのシャープ」あるいは「Cシャープ（シー・シャープ）」のように「音名+シャープ」で呼ばれます。ダブルシャープも同じで「音名+ダブルシャープ」です。

日本語の音名は「嬰（えい）+音名」「重嬰（じゅうえい）+音名」が使われます。

※例えば「嬰ハ（=Cシャープ）」や「重嬰ヘ（=Fダブルシャープ）」です。

ドイツ音名では、語尾が変化して「is」や「isis」がつくことで、読み方が変化します（下譜例）。

Cis Dis Eis Fis Gis Ais His
チス ディス エイス フィス ギス アイス ヒス

Cisis Disis Eisis Fisis Gisis Aisis Hisis
チシス ディシス エイシス フィシス ギシス アイシス ヒシス

「フラット」や「ダブルフラット」がついた音名

フラットのついた音名の呼び方も、イタリア語、英語ともに「レのフラット」、あるいは「Dフラット（ディー・フラット）」といったように「音名＋フラット」で呼ばれます。ダブルフラットも同じで「音名＋ダブルフラット」です。

日本語の音名は「変（へん）＋音名」「重変（じゅうへん）＋音名」が使われます。

※例えば「変ロ（Bフラット）」や「重変イ（Aダブルフラット）」となります。

ドイツ音名では、やはり語尾が変化して「es」や「eses」がつくことで、読み方が変化します。シャープとは異なり、変則的なところがあるので注意しましょう。

Ces	Des	Es	Fes	Ges	As	B
ツェス	デス	エス	フェス	ゲス	アス	ベー

Ceses	Deses	Eses	Feses	Geses	Ases	Bes
ツェセス	デセス	エセス	フェセス	ゲセス	アセス	ベス

ヒント

B♭♭は、上記の「Bes（ベス）」以外にも「Hisis（ヒシス）」や「BB（ドッペル・ベー）」といった読み方もあります。

ヒント

英語音名の「B（ビー）」は「シ」のことですが、ドイツ音名の「B（ベー）」は「シ♭」になるので要注意です。

終わり

レッスン 36

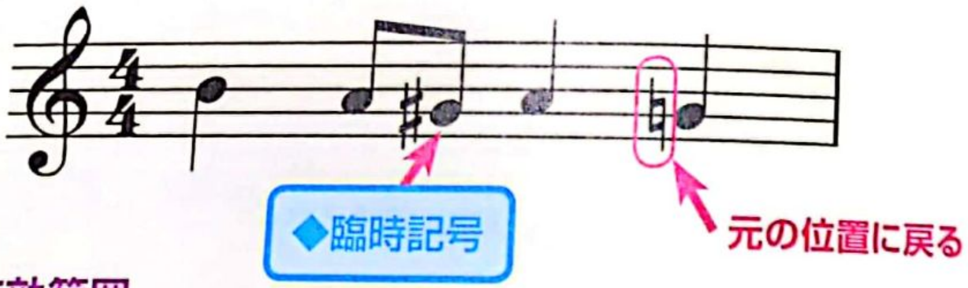
臨時記号のルールを覚えよう

キーワード 臨時記号

シャープ、ダブルシャープ、フラット、ダブルフラットのことを「変化記号」といいますが、曲の途中で臨時に音を変化させる「臨時記号」のタイプを覚えましょう。

「臨時」に使われる変化記号

個別の音符の玉の左側に記される変化記号を「臨時記号」といいます。

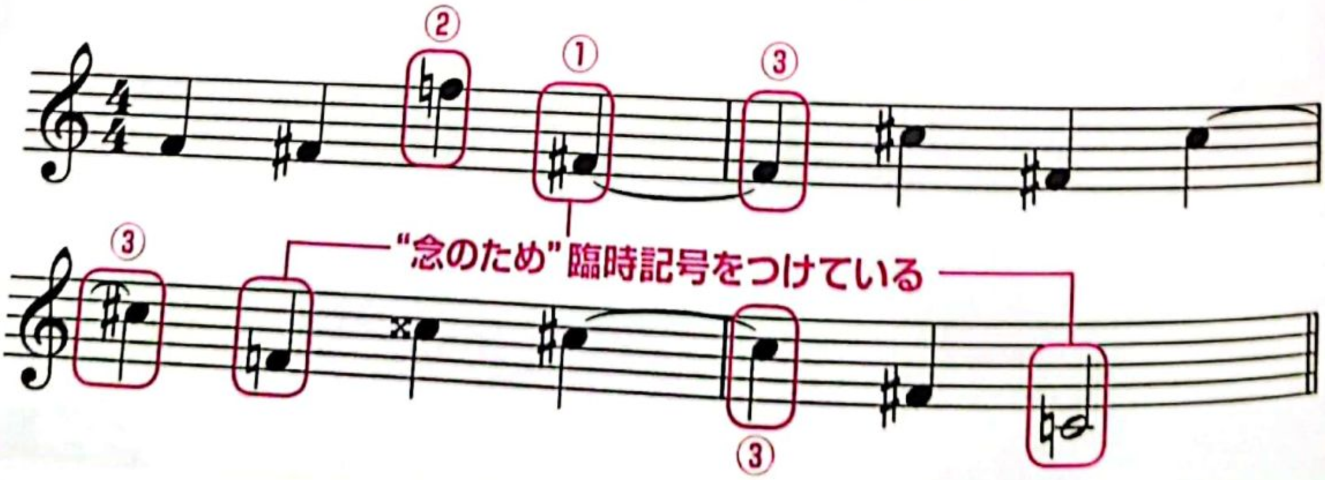
実際の音楽では「臨時記号」がついたあと、同じ小節内ではその音は変化されたままのケースが多いのですが、リセットしたいところでは「♮（ナチュラル）」が使われます。

●臨時記号の有効範囲

臨時記号のルールをまとめておきます。

①同じ小節の中では、ナチュラルがなければ変化を維持します

②同じ音名でもオクターブが離れていれば、変化はしません

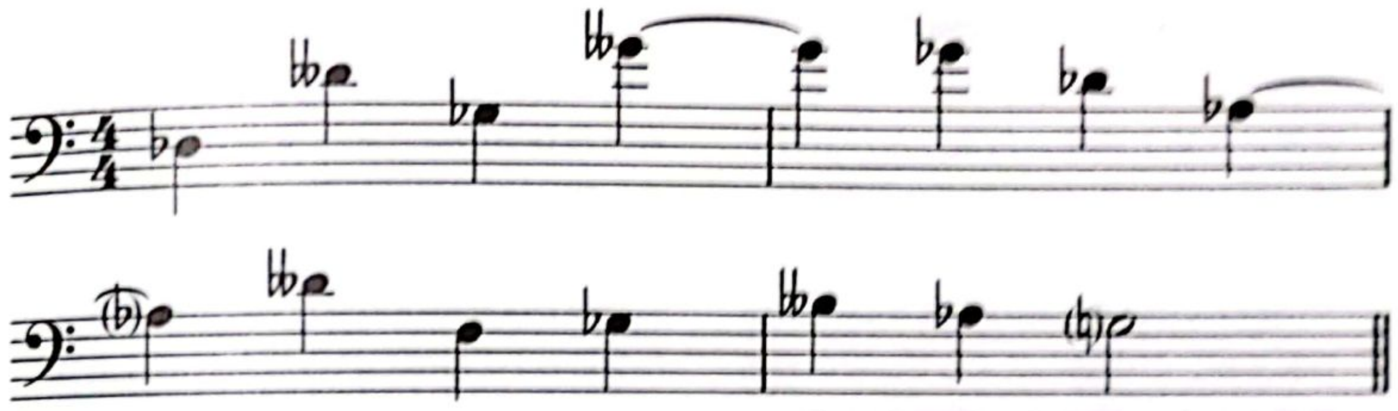
③タイで繋がれているものは、変化が引継がれます。

これが、本来の臨時記号の原則ですが、近年では、あまりに紛らわしい時に、前後での確認や"念のため"的な意味合いで、臨時記号をつけるケースが多くなっています。

① 臨時記号を弾いてみよう

TRACK 65

② さらに臨時記号を弾いてみよう

TRACK 66

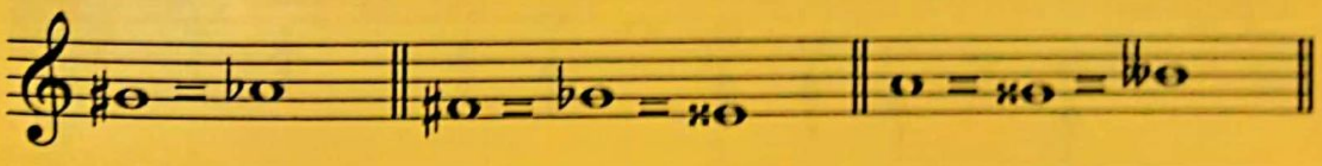


ゆっくり確かめながらでよいので、①と②を鍵盤やギターなどの楽器で鳴らしてみましょう

①と②は、1オクターブこそ違いますが、同じ音のフレーズです

ヒント

音名は違っても、実際同じ高さの音になる関係を「異名同音（いめいどうおん）」「エンハーモニック」といいます。



終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 37

まとめて変化させる記号を覚えよう

キーワード 調号、キー

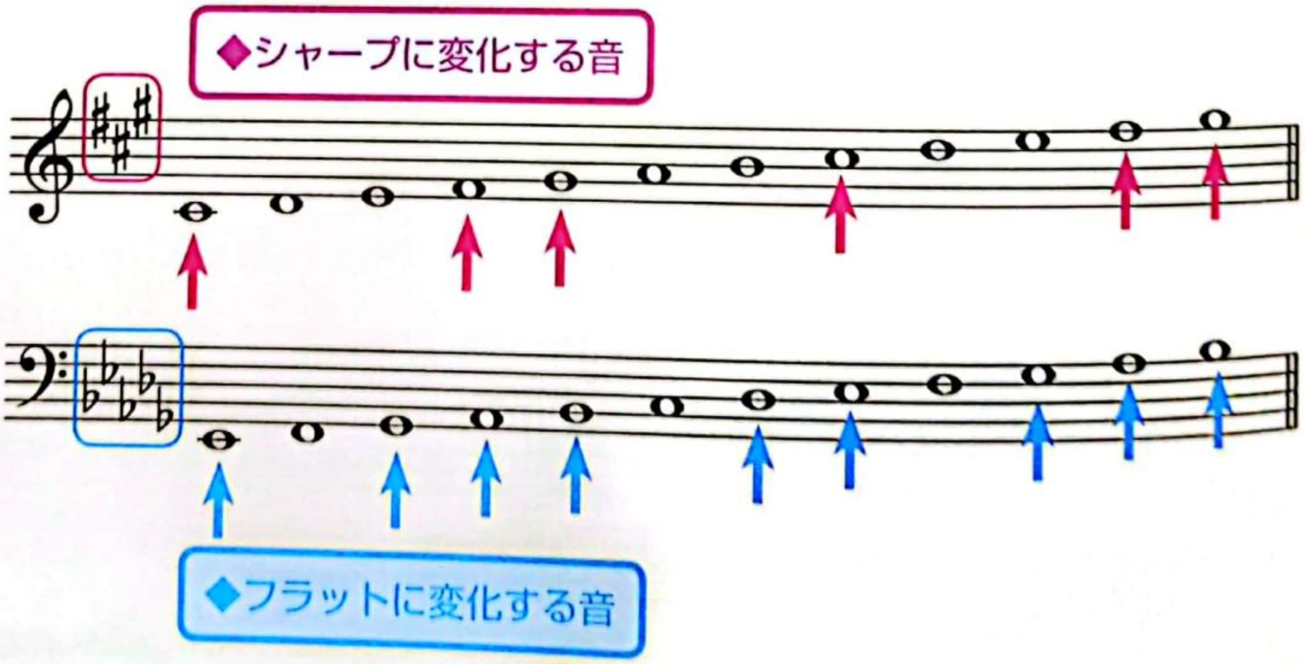
レッスン36では、曲の途中で音を変化させる臨時記号のパターンを覚えてもらいましたが、ここでは変化記号のもうひとつの使い方である、"楽譜の最初にまとめて記される変化記号のケース"について覚えましょう。

「キー（調）」に使われる変化記号

「ト音記号」や「ヘ音記号」の音部記号の右側に、「シャープ」や「フラット」が数個まとめて表記されることがあります。これは曲の「調」を意味しており、「調号」と呼ばれます。

「調」について、細かな説明は別に譲りますが、この調号によって、どの音を基準とした音階で曲が構成されているかを判断することができます。複数のシャープやフラットは冒頭の指示通り、1曲を通してすべて変化します。臨時記号と異なるのは、オクターブに関係なく、"同じ音名についてはすべて変化する"ということことです。

調号では「ダブルシャープ」や「ダブルフラット」が使われることはありませんし、シャープとフラットが混在することもありません。



ヒント❗

調号は、数が増えると複雑に見えますが、一定のパターンがあるので、それをマスターしまうのがコツです。

♯も♭も、調号がつく数は最小0～最大7つまでとなります。

7つの場合、ドレミファソラシのすべての音が変化します。

変化記号が増えていく時の場所もランダムではなく、一定のパターンになっています。

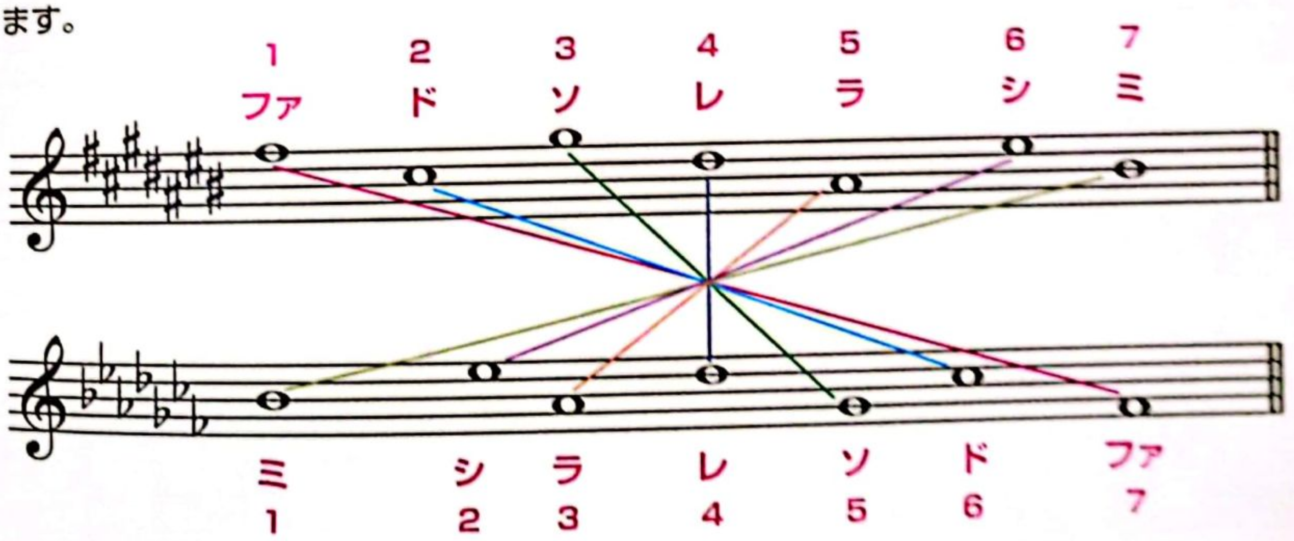
●シャープの場合

レッスン28のヒントの「一段とばしの音階」（ド・ミ・ソ・シ・レ・ファ・ラ）を、さらに「ひとつ飛ばした順番」で増えていきます。ド[2]・ミ[6]・ソ[3]・シ[7]・レ[4]・ファ[1]・ラ[5]の順です（最初はファから。文字の上の数字）。1つ目は「ファ」で、以降→「ド」→「ソ」→「レ」→「ラ」→「ミ」→「シ」（オクターブ以内に収まるように、オクターブを越えたら戻る形です）となります。

●フラットの場合

「一段とばしの音階」（ド・ミ・ソ・シ・レ・ファ・ラ）を、さらに「ひとつ飛ばした順番」で増えていきます。最初はシからで、シャープの逆方向の順番になります。

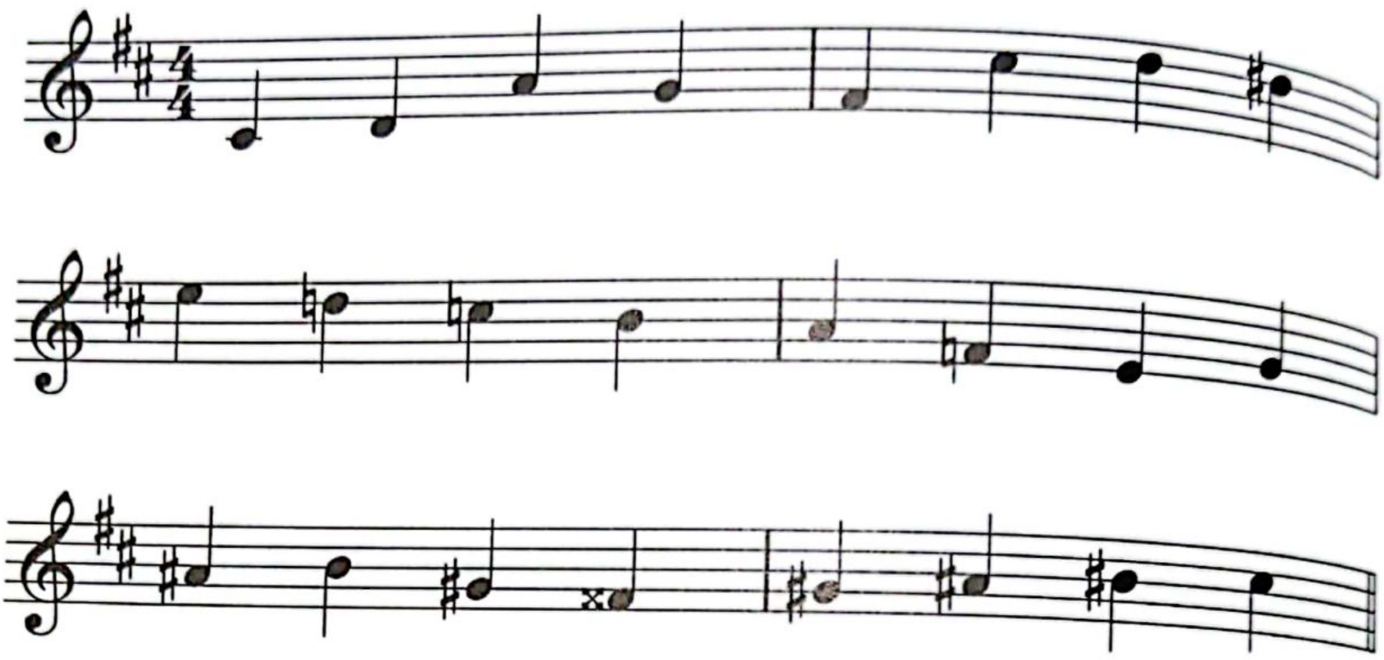
ド[6]・ミ[2]・ソ[5]・シ[1]・レ[4]・ファ[7]・ラ[3]の順です（文字の上の数字）。1つ目は「シ」、以降→「ミ」→「ラ」→「レ」→「ソ」→「ド」→「ファ」となります。



次のページに続く ▶▶▶

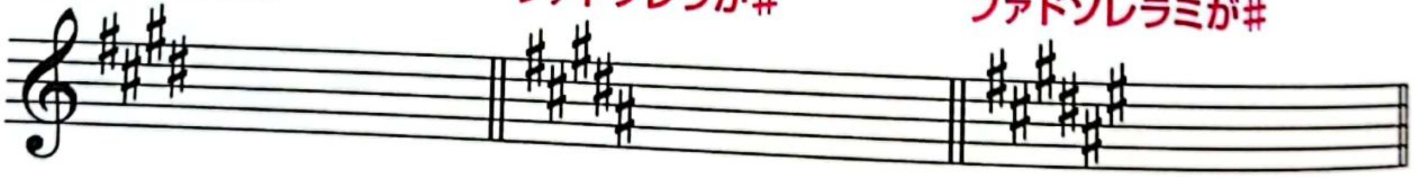
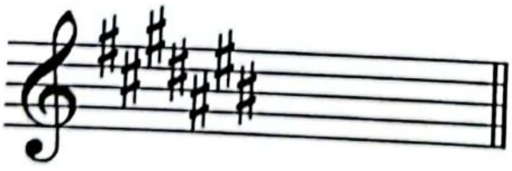
① ♯の調号を弾いてみよう

TRACK 67

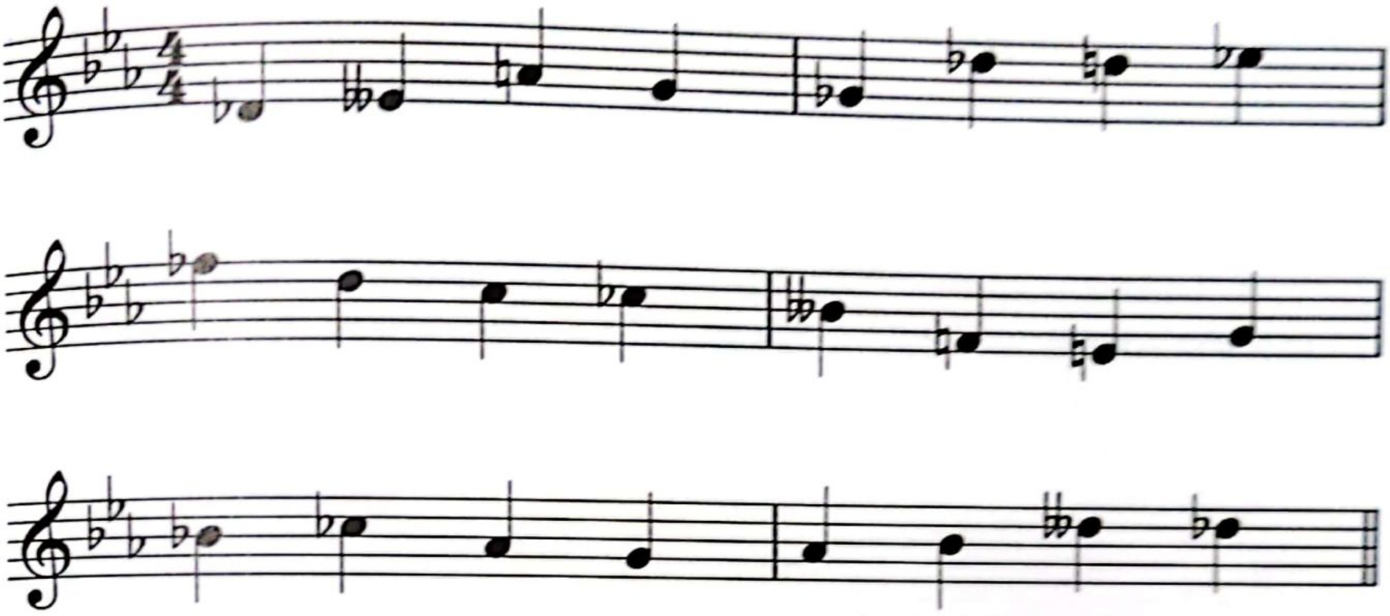
※調号を入れる位置は拍子記号の左側になります

ゆっくり確かめながらでよいので、鍵盤やギターなどの楽器で鳴らしてみましょう

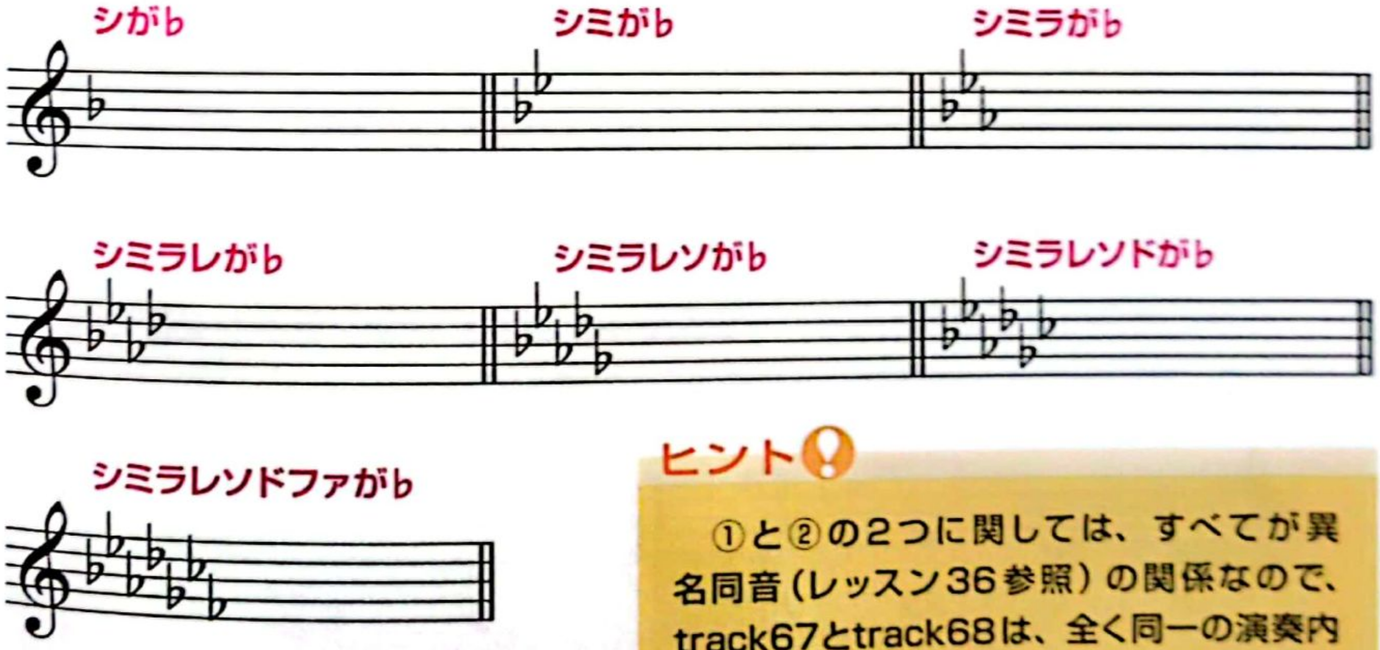
♯の調号を念頭に置きながら、その都度、臨時記号にも反応する練習をしましょう

ファが♯　ファドが♯　ファドソが♯

ファドソレが♯　ファドソレラが♯　ファドソレラミが♯

ファドソレラミシが♯

シャープが1～7つまでの調号の実例です

② ♭の調号を弾いてみよう

TRACK 68

ゆっくり確かめながらでよいので、鍵盤やギターなどの楽器で鳴らしてみましょう

♭の調号を念頭に置きながら、その都度、臨時記号にも反応する練習をしましょう

フラットが1～7つまでの調号の実例です

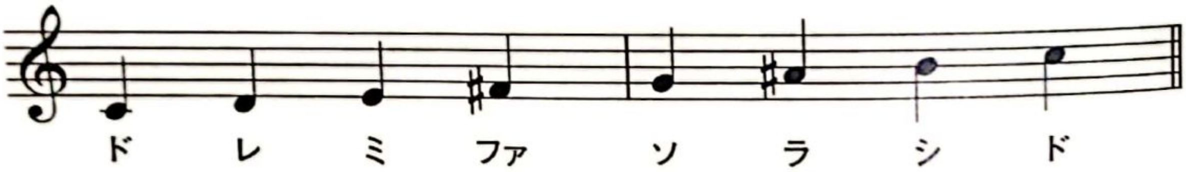
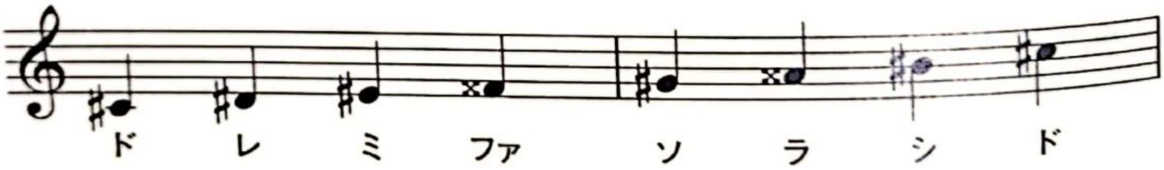
ヒント

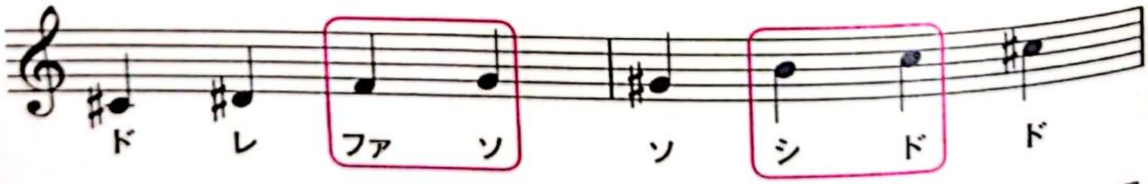
①と②の2つに関しては、すべてが異名同音（レッスン36参照）の関係なので、track67とtrack68は、全く同一の演奏内容となっています。

終わり

Q なぜ「ダブルシャープ」や「ダブルフラット」を使うの？

A フレーズ前後の音の繋がりの上がり下がりのラインを崩さず、あらゆる調（キー）に対応するために必要です

「ダブルシャープ」や「ダブルフラット」の記号を使わずに、異名同音（名称は異なるが同じ高さの音）に書き換えることもできますが、フレーズのライン（玉の位置関係）は変わってしまいます。例えば、次のような臨時記号を含む音階順に並んだフレーズがあったとします。

半音上に調（キー）を変更するには、すべての音を「シャープ」させればよいので、下のようになります。元々シャープがついていた音はダブルシャープになります。

しかし異名同音で書き換える（ダブルシャープやダブルフラットを使わない）と、音階のラインは崩れて（変わって）しまいます。



このように書き換えることが、すべてミスとは言い切れませんが、時と場合によって使い分けるセンスが必要になる記号なのです。

CamScannerでスキャン

第5章

楽譜の記号を読んでみよう

第4章では楽譜の読み方のベーシックな要素を説明しました。この第5章では、楽譜に表記されている記号に関して、実例と併せてその意味を解説していきます。正確で表情豊かな演奏をするためのポイントを、ここでしっかり身につけましょう。

この章の内容

38 速度を表す記号を覚えよう …… 106

39 速度の変化を表す記号を覚えよう …… 108

40 強弱を表す記号を覚えよう …… 110

41 強弱の変化を表す記号を覚えよう …… 112

42 演奏する感情を表す記号を覚えよう …… 116

43 音を飾る記号とパターンを覚えよう …… 120

44 省略を表す記号を覚えよう …… 122

45 繰り返しの記号を覚えよう …… 126

楽譜&リズムの素朴な「?」に答えるQ&A …… 128

CamScannerでスキャン

レッスン 38

速度を表す記号を覚えよう

キーワード 速度記号、メトロノーム記号

これまで見てきたように、楽譜には主に「音の高さ」と「音の長さ」が記されていますが、その他にも、曲に関する情報が書かれています。

まずは「テンポ」を表す記号を覚えましょう。

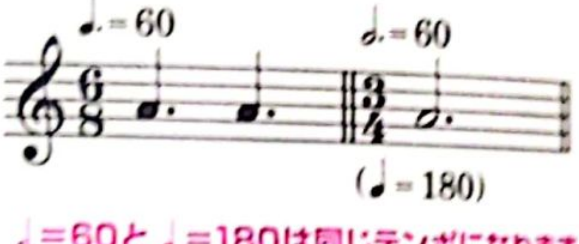
絶対的なテンポは「メトロノームの数字」で表されます

曲の雰囲気は「テンポ」でも大きく変わるため、必ず指示されるものです。「拍子の基準となる音符の種類＝メトロノームの数字」のテンポ記号を、①楽譜の冒頭 ②五線の上 ③拍子記号の左揃えという位置に記します。

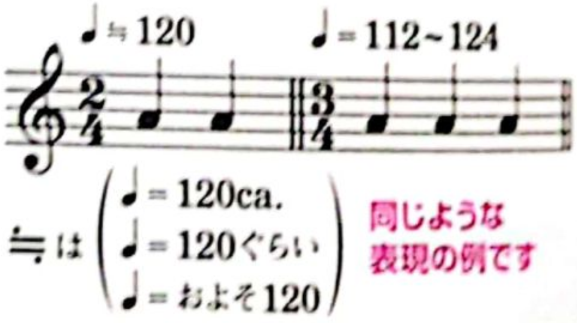
4分音符が1分間に60回打つテンポ

●付点音符が使われるケース

6/8などの「複合拍子」では、基準となる音符の長さが8分音符3つ分となることが一般的です。あるいは、極端に速い（遅い）テンポの場合は、基準となる音符の単位を変更することもあります。

例えば付点2分音符=60は、4分音符=180と同じテンポですが、1小節で1拍のように「大きなノリや流れ」が欲しいという意図も感じられます。

𝅗𝅥.=60と♩=180は同じテンポになります

●さまざまな表記

テンポに幅を持たせた、いろんな表記のヴァリエーションが考えられます。ca.はイタリア語で「チルカ」と読みます。意味は「およそ、約」です。

同じような表現の例です

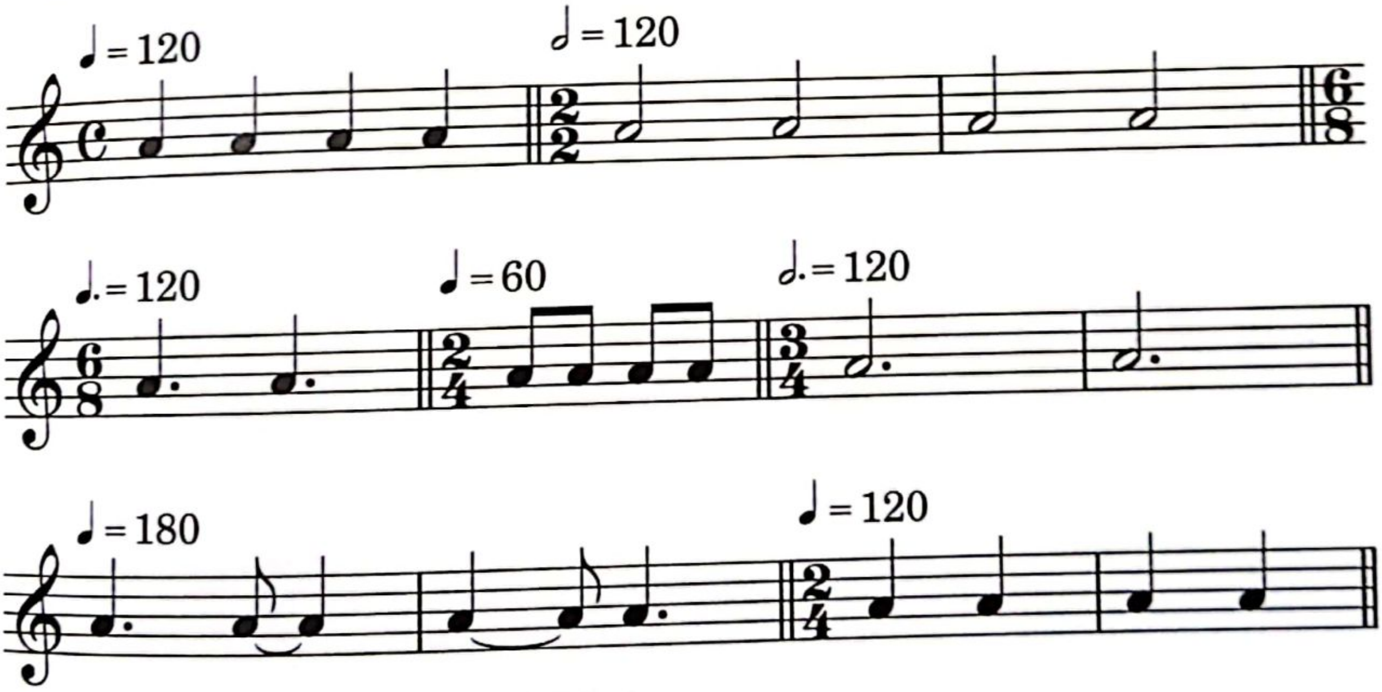
ヒント!

およそのテンポに相応しい雰囲気を「用語」として表すこともあります

イタリア語の表記は、クラシックなどではお馴染みですが、単純なテンポだけでなく、曲のニュアンスや雰囲気を含めた用語になります。ポピュラー系では、英語やジャンル（Fast SwingやFunk）といった表現もあります。そういった用語は絶対的なテンポではなく、あくまで目安です。時代や曲のタイプ、作曲家によってテンポが異なることはよくあることです。

参考のBPM	イタリア語	英語
40〜52	Lento	Very Slow
56〜66	Largo	Very Slow
69〜80	Adagio	Slow
84〜96	Andante	Medium Slow
100〜120	Moderato	Medium
120〜132	Allegretto	Medium
132〜144	Allegro	Medium Fast
152〜168	Vivace	Fast
176〜192	Presto	Very Fast

1 テンポと拍の関係を感じてみます

TRACK 69

テンポに気をつけて、手拍子や楽器でリズムをとってみます

譜例ではリズムや拍子とテンポが次々と変化していきますが、実際に演奏しているリズムは、すべて同じタイミングというサンプルとなっています。

終わり

CamScannerでスキャン

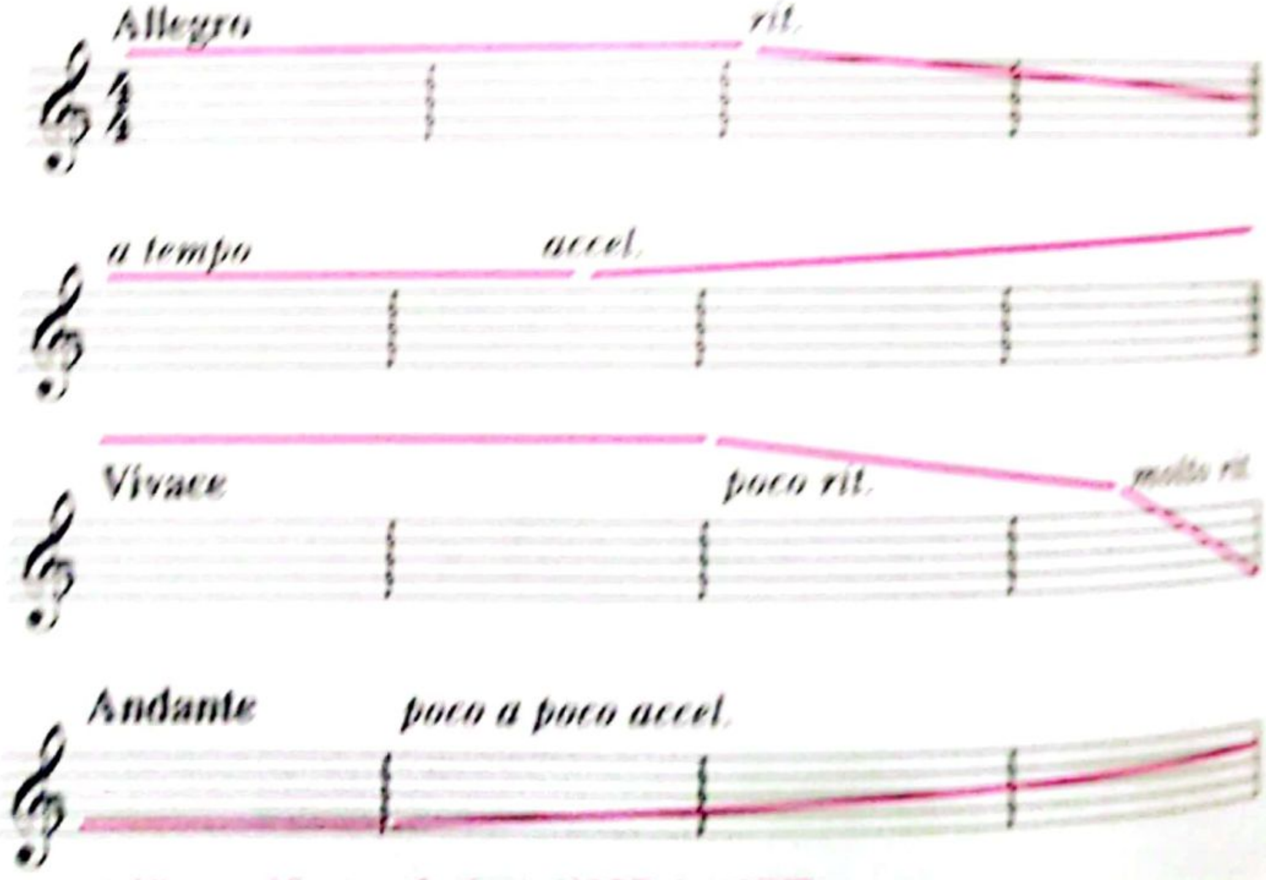
レッスン 39 速度の変化を表す記号を覚えよう

キーワード テンポの変化

曲頭のテンポが曲の途中で変わる時には、新たにテンポを表示すればよいのですが、ここでは、それ以外のテンポ変化のパターンを覚えていきましょう。

徐々に変化するのが「rit.」と「accel.」

ritardando、略して「rit.」は「だんだん遅く」。反対に「だんだん速く」は、accelerando、略して「accel.」。これらは対としてセットで覚えてしまうと便利です。

「rit.」や「accel.」で変化したテンポを、元に戻すのが「a tempo」。「rit.」や「accel.」の変化の度合いを、さらに強調するには「poco=少し」や「molto=きわめて」を組み合わせて使います。あるいは「poco a poco」で「すこ～しずつ」という意味を追加します。

※Allegro、Vivace、Andanteは107ページ参照

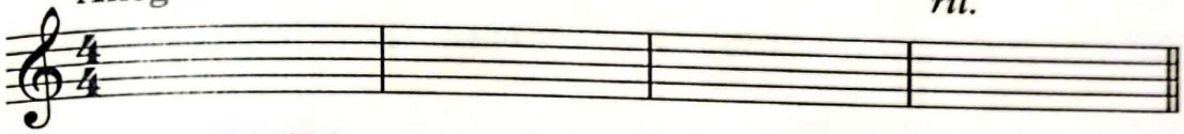
前後と比較される「テンポ」の表現

「*meno mosso*（メノ モッソ）」は「より遅く」、「*più mosso*（ピュウ モッソ）」は「より速く」、直前のテンポとの比較でテンポの違いを表しています。これもセットで覚えましょう。

「Tempo Iº（テンポ プリモ）」は、一番最初のテンポに戻る。「Tempo Rubato（テンポ ルバート）」は「テンポを自由に揺らして（伸び縮みさせて）」です。

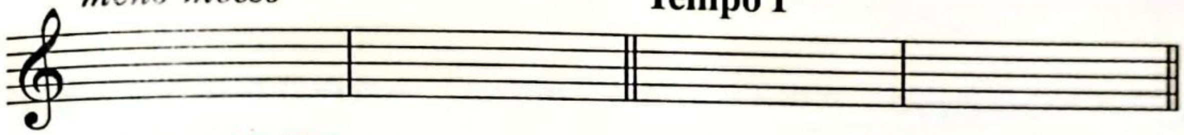
※プリモを表す「º」は、1番目の序数を示す上付き文字（添え字）です。

Allegro *rit.*



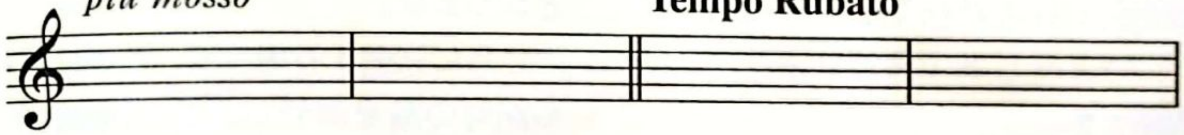
Allegroより遅く
meno mosso

Allegroに戻る
Tempo Iº



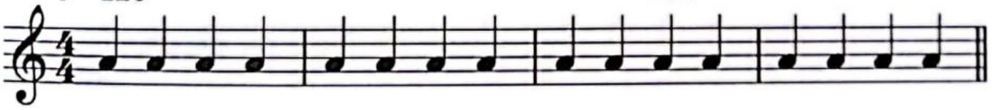
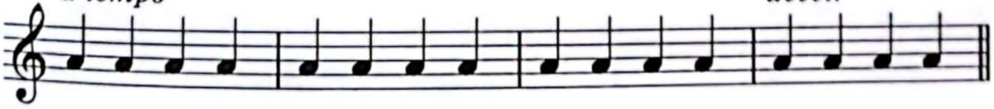
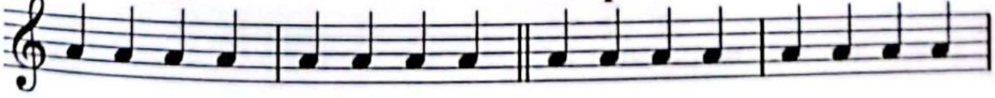
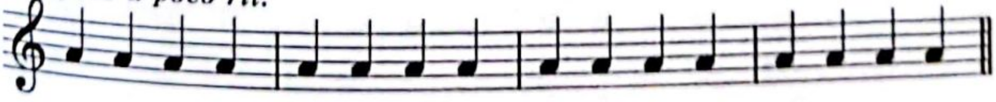
Allegroより速く
più mosso

Allegroに近いですが、やや自由に
Tempo Rubato



① テンポ変化を感じてみます

TRACK 70

♩= 120 *rit.*

a tempo *accel.*

più mosso **Tempo Iº**

poco a poco rit.

テンポの変化に気をつけて、手拍子や楽器でリズムをとってみます

テンポ変化が始まる開始位置と終わり位置にも気を配りましょう

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 40 強弱を表す記号を覚えよう

キーワード 強弱記号、ダイナミクス

音楽の表現には「音の強弱」も大事な要素です。
音の強弱を「ダイナミクス」といいますが、楽譜では絶対的な数字で音の大きさを示すことはありません。しかし前後で相対的に指示する方法があります。

基本の記号は「*p*」と「*f*（フォルテ）」

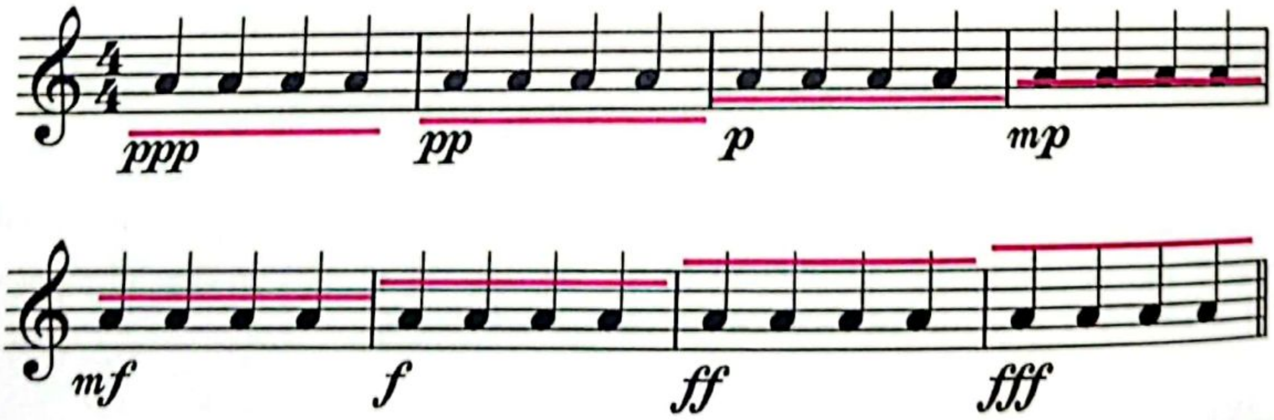
ピアノという楽器は、本来正式には「ピアノフォルテ」という名称です。それは、弱い音「*p*（ピアノ）」から強い音「*f*（フォルテ）」まで可能な楽器、という意味です。

「*p*」と「*f*」に*mezzo*（メゾ：中くらいの意）をつけると「*mp*（メゾ・ピアノ）＝やや弱く」「*mf*（メゾ・フォルテ）＝やや強く」という意味になります。

もっとピアノやフォルテを強調する場合は、それぞれを重ねて「*pp*（ピアニッシモ）」や「*fff*（フォルテッシモ）」となります。

さらに強調する場合は、同様にどんどん記号の数を増やします。「*ppp*（ピアニッシッシモ）」「*ffff*（フォルテッシッシッシモorフォルテ・フォルテ・フォルテッシモ）」などなど……いろいろあります（普通は3つくらいまでが多いです）。

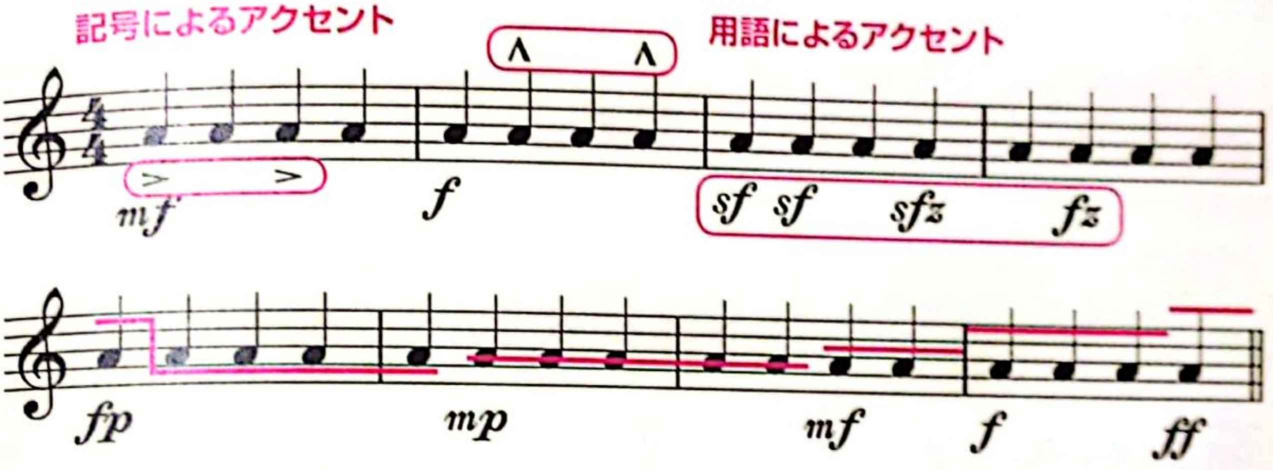
強さの度合い



特別に強調したい音にはアクセント記号or言葉による記号

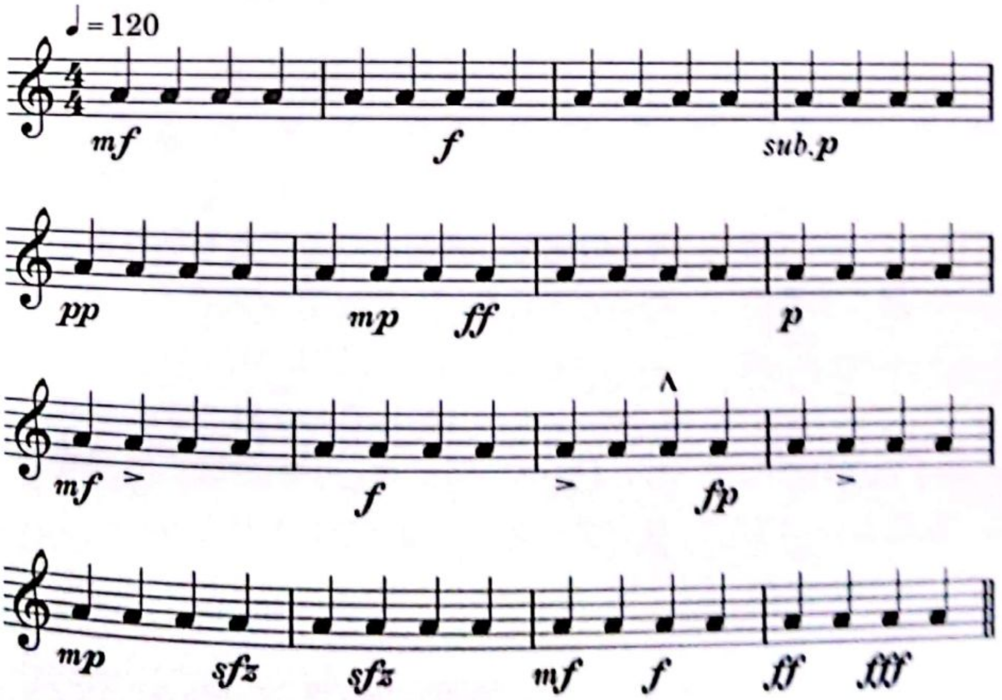
強弱記号は、次の強弱記号が登場するまでは基本的にそのまま有効ですが、その強さの中でも特別に強めて演奏したい音にはアクセント（＞）記号を使います。

より強いアクセントは山型の記号（∧）です。記号よりも強調させたい時は「*sf* や *sfz*（スフォルツァンド）」「*fz*（フォルツァート）」などが用いられます。「*fp*」は *f* のあとすぐに *p* とさせる二段階の変化です。



※下段の赤線は強弱の度合いを示しています

① 音の強弱を感じてみます

TRACK 71

強弱に気をつけて、手拍子や楽器でリズムをとってみます

絶対的なものではありませんので、演奏する自分の中にも基準となる曲想や発想が必要です

終わり

レッスン 41

強弱の変化を表す記号を覚えよう

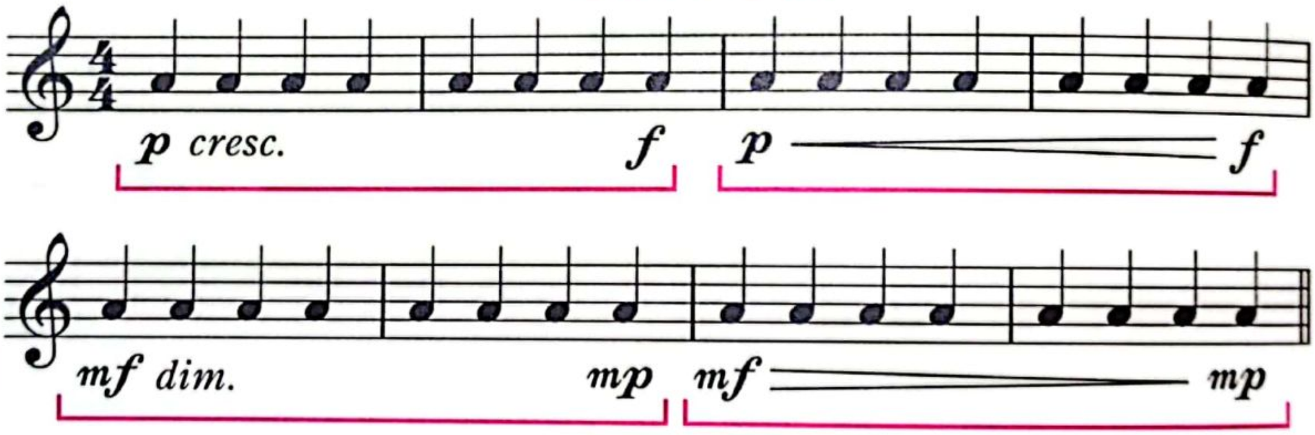
キーワード 強弱の変化

テンポと同じように、強弱にも連続的に徐々に変化させる指示が使われます。

ここでは、それらの表現を覚えていきましょう。

「クレッシェンド」と「デクレッシェンド」

ほぼ同じ表現

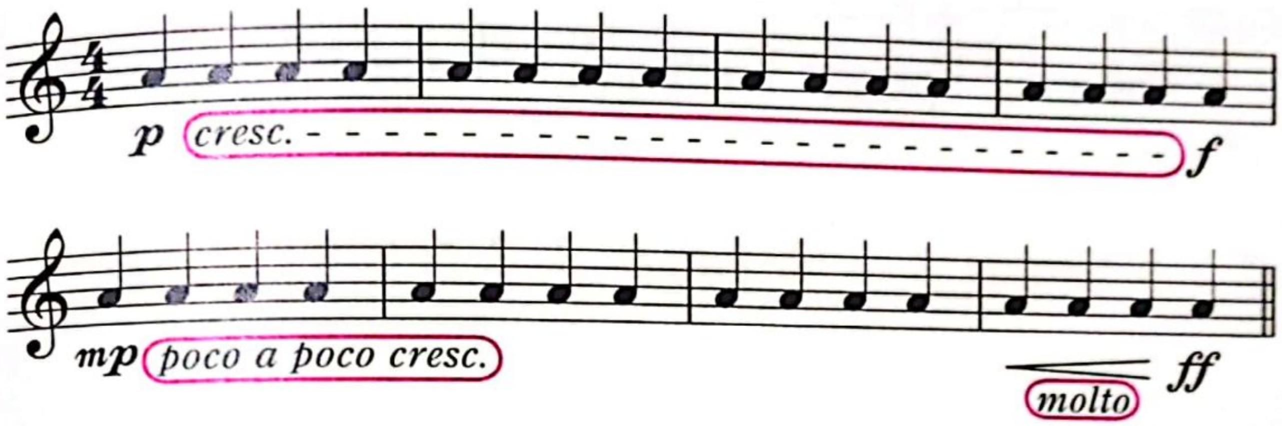


徐々に強くするのは「crescendo（略してcresc.）」、反対に徐々に弱くするのは「decrescendo（略してdecresc.）」といった用語を用います。

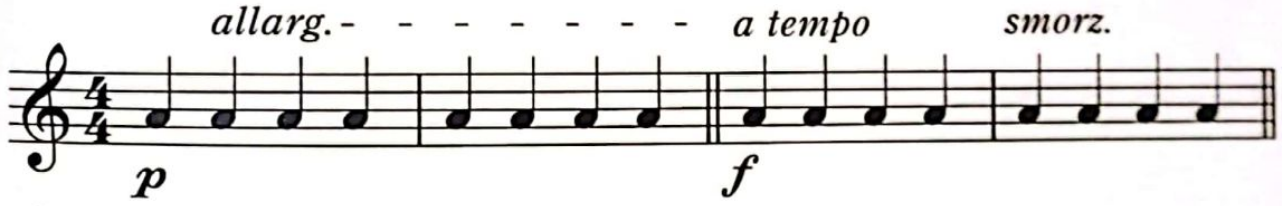
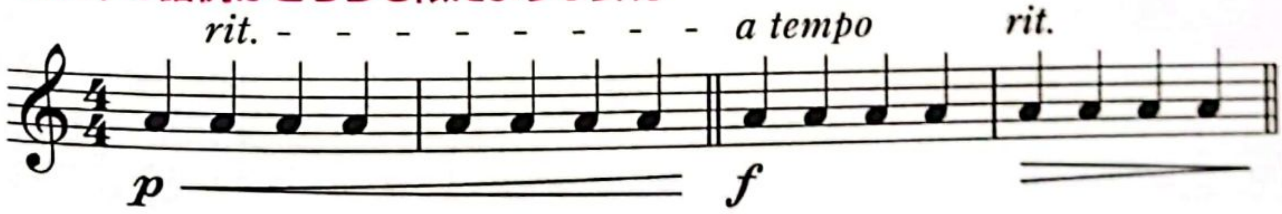
このように、強弱を用語で書かれることもありますし、<>（松葉といいます）の記号で表記されることもありますが、どちらも同じニュアンスです。

「decrescendo」と同じ意味の言葉に「diminuendo（略してdim.）」がありますが、「徐々に弱くする」場合はこちらを使うケースが多いかもしれません。

●ニュアンスを付加する用語



変化の区間が長い時には、譜例上段のように点線で長さを示したり、速度の変化記号の際にも使われた「*poco a poco*」「*poco*」「*molto*」など、ニュアンスを付加する用語を合わせて譜例下段のように使うこともあります。

●強弱の変化とテンポの変化を併せ持つ用語もあります

上と下の譜例はどちらも似たような表現

音楽の表現では、強弱の変化と同時に、テンポの変化を伴うことがあります。譜例上段前半の「*allargando*(アラルガンド)、略して*allarg.*」は「*rit.*+*cresc.*」の表現と同じです。また、譜例上段後半の「*smorzando*(スモルツァンド)(略して*smorz.*)」は「*rit.*+*dim.*」の表現と考えられるでしょう。

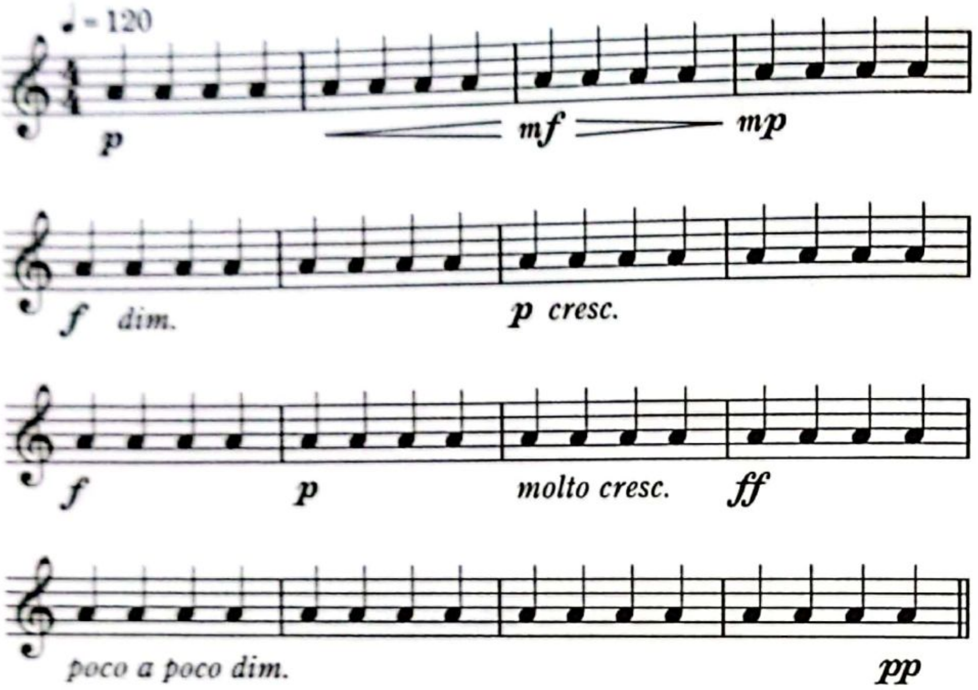
表現としては譜例の上段と下段は同様となります。

次のページに続く▶▶▶

CamScannerでスキャン

① 強弱の変化を感じてみます

TRACK 72

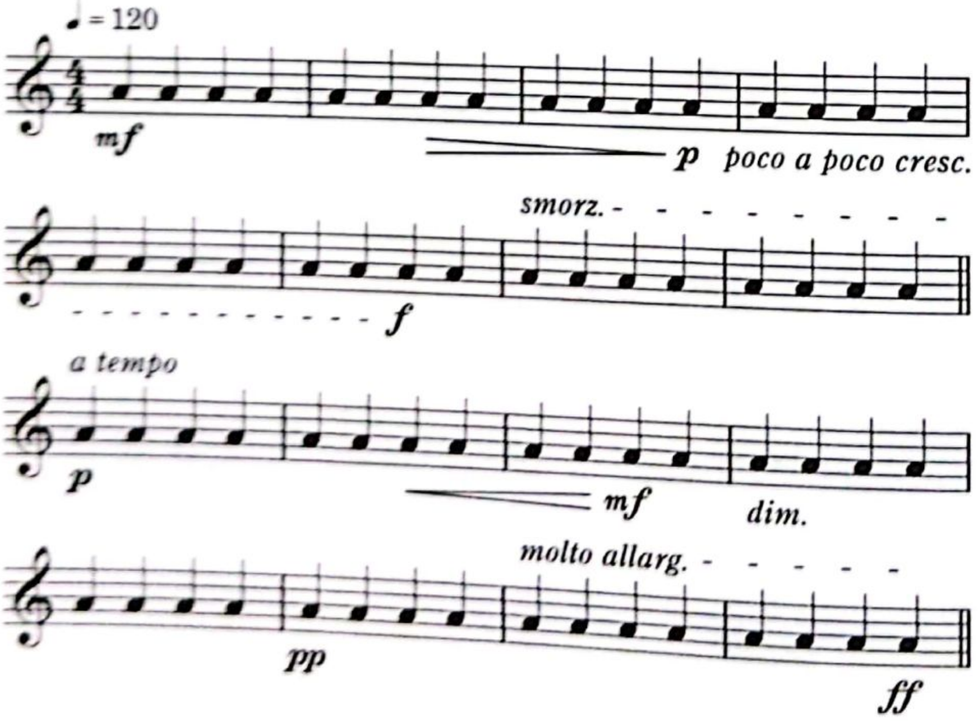


強弱の変化に気をつけて、手拍子や楽器でリズムをとってみます

絶対的なものではありませんので、演奏する自分の中にも基準となる曲想や発想が必要です

② 強弱&テンポの変化を感じてみます

TRACK 73



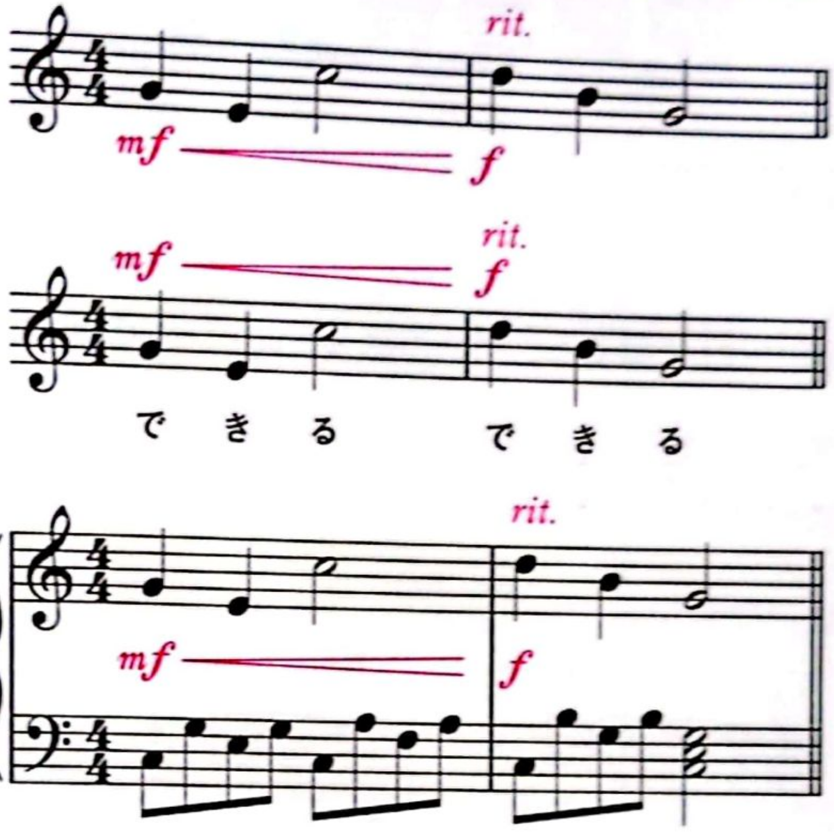
強弱とテンポの変化に気をつけて、手拍子や楽器でリズムをとってみます

やはり絶対的なものではありませんので、演奏する自分の中にも基準となる曲想や発想が必要です

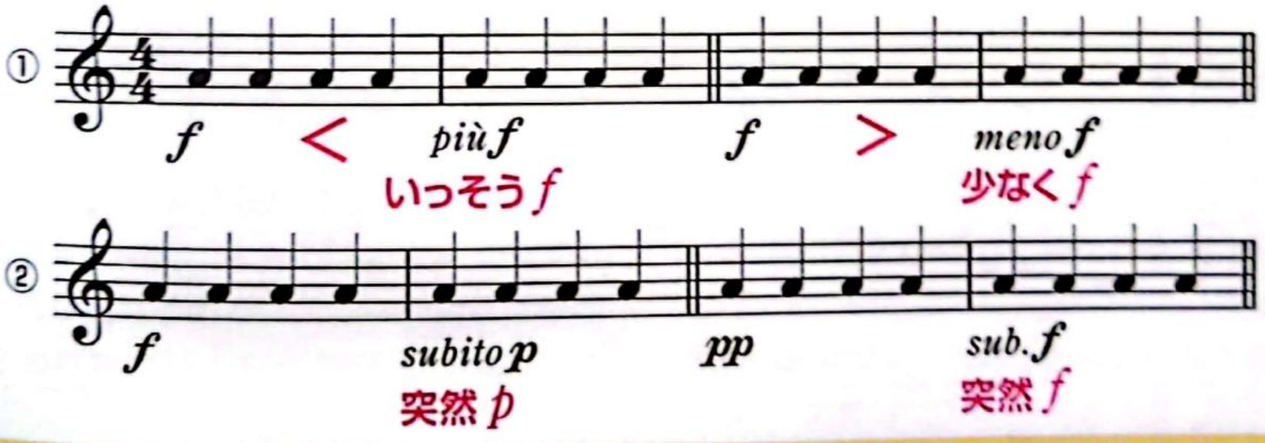
CamScannerでスキャン

ヒント

強弱に関する記号は、通常は段の下、歌詞がある時には段の上、大譜表の時には、段と段の中央の位置に表記されます。

一方でテンポに関する記号は、段の上に、まとめて書かれることが多いです。

ヒント

①「*più*」や「*meno*」を強弱記号にも使うことがあり、これまでの強弱との比較として表現されます。

②「*subito*（スビト）（略して*sub.*）」は、突然の変化を強調する用語で、注意をうながすような意味も含まれます。

終わり

CamScannerでスキャン

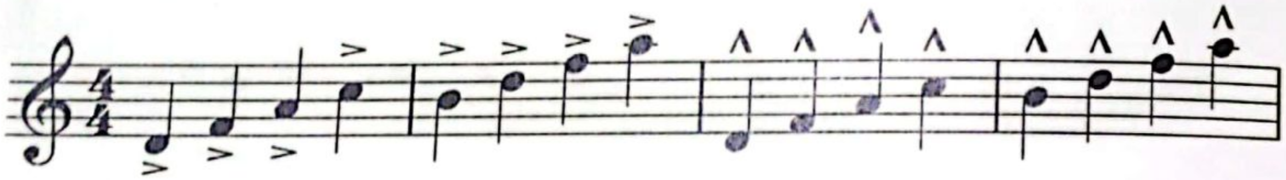
レッスン 42

演奏する感情を表す記号を覚えよう

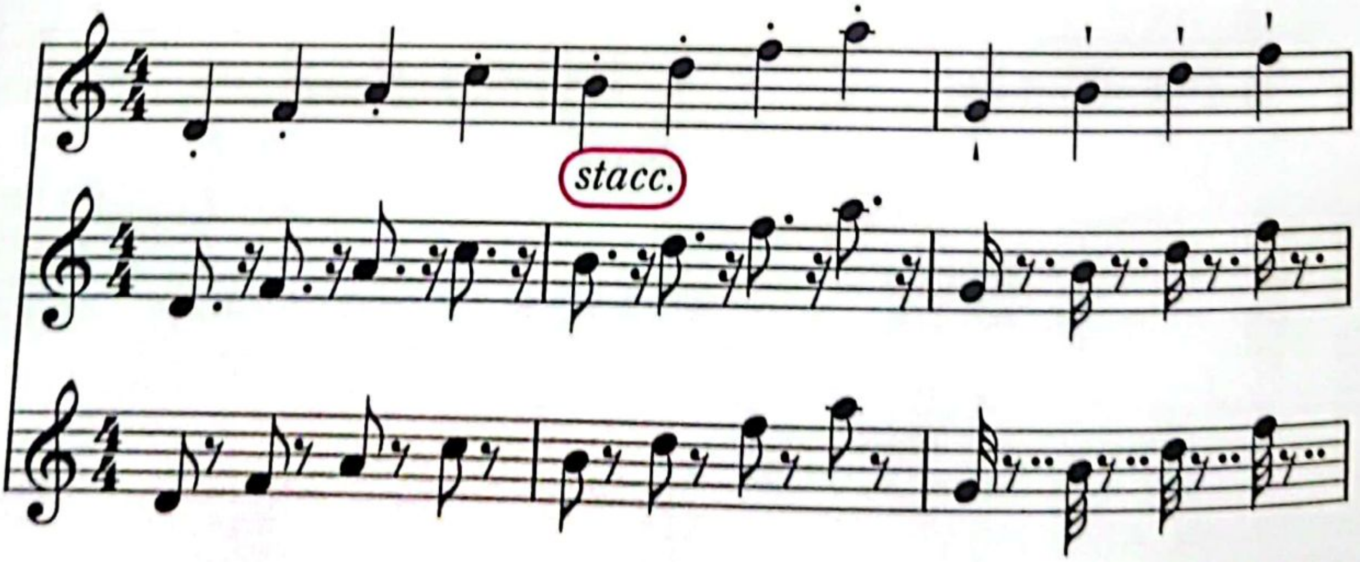
キーワード アーティキュレーション

「テンポ」や「強弱」だけでなく、「演奏の表情づけ」に関する記号や用語も使われます。今回はそれらの記号の代表的なものを覚えていきましょう。

音のニュアンスを伝えるための記号が「アーティキュレーション」

●アクセント

アクセント　より強いアクセント

レッスン38の「アクセント」記号も、音符それぞれを強調するためにつけられた「アーティキュレーション」記号のひとつです。

●スタッカート

CamScannerでスキャン

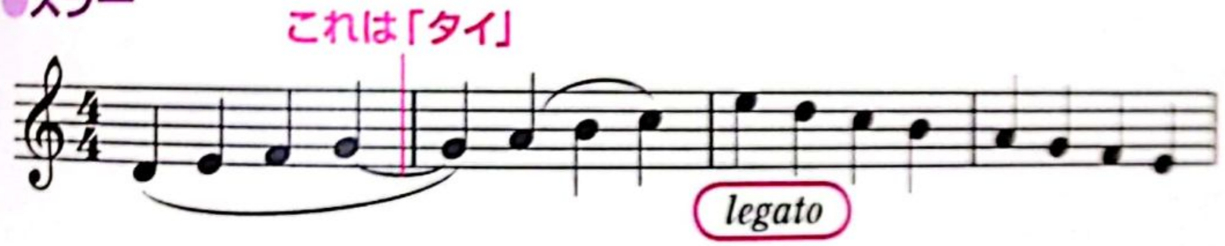
「・」は「スタッカート」、「▼」は「スタッカーティシモ」。どちらも音を短め（より短め）に演奏するという記号です。実際には次の音の前に少し隙間ができるので、休符が挟まる形ですが、すべての音符の隣に休符を書くと表記上煩雑になってしまいます。

しかしスタッカートやスタッカーティシモの記号で書くと、リズムはすっきりと見えます（左ページ下譜例の上段）。譜例の下2段は、実際の演奏パターンの一例ですが、このように、どの程度短くするのかは曲の雰囲気やテンポによります。

ちなみに、略した用語で「*stacc.*」と書くこともあります。

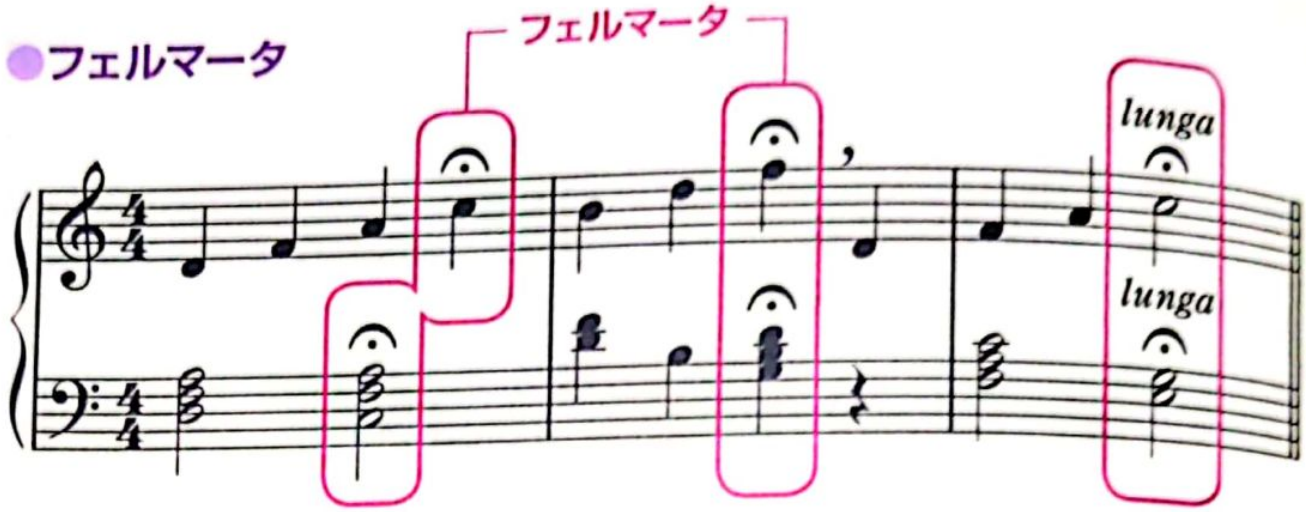
●テヌート

「—」は「テヌート」。音の長さを十分保って演奏します。スタッカートと反対の表現ですが、長さと同時に「やや強調して」演奏するような表現の意味もあります（アクセントまではおおげさでない程度）。略した用語で「*ten.*」と書くこともあります。「*sempre*（センプレ）」は「常に」という意味で、アーティキュレーション全般に用いられ、音符ひとつずつへの記入を省略することができます。

●スラー

「スラー」は「なめらかに演奏する」記号です。楽器によって滑らかに演奏する方法が異なるので、スラーの解釈は楽器によりますが、音が繋がって聴こえるように「ひとかたまりのフレーズ」を意識して演奏します。似たような意味で「*legato*（レガート）」と書かれることもあります。似たような曲線の記号、同じ高さの音を繋ぐ「タイ」と似ていますので、しっかりと区別しましょう。

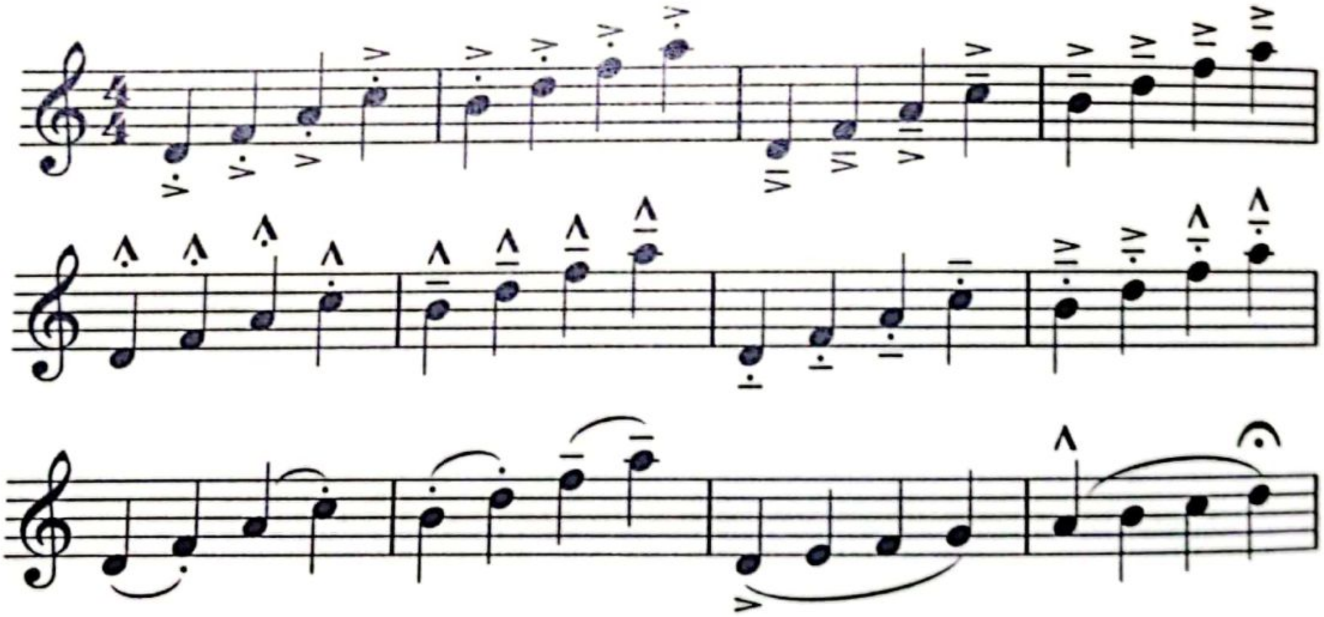
次のページに続く ▶▶▶

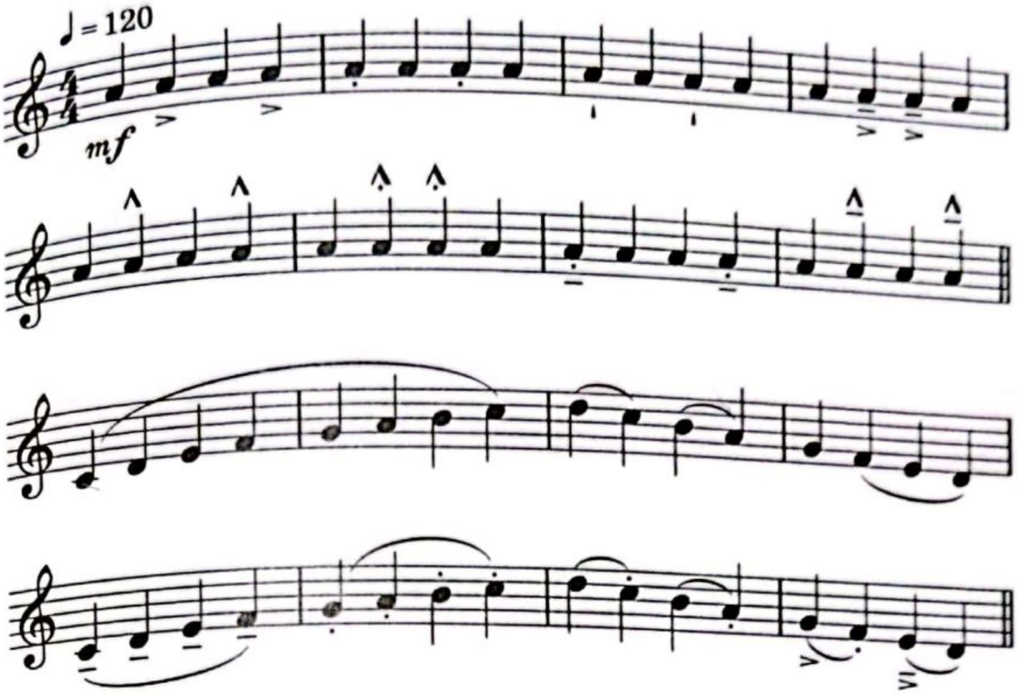
●フェルマータ



「フェルマータ」は「停止」させるという記号です。その拍で音符の長さを十分に延長することで、流れがいったん止まったように表現します。大譜表や譜表が何段もある場合は、すべてに共通して記す必要があります。「*lunga*(ルンガ)」は「十分長く保つ」という用語で、フェルマータと一緒に用いられることが多いです。

●アーティキュレーションの組み合わせも考えられます

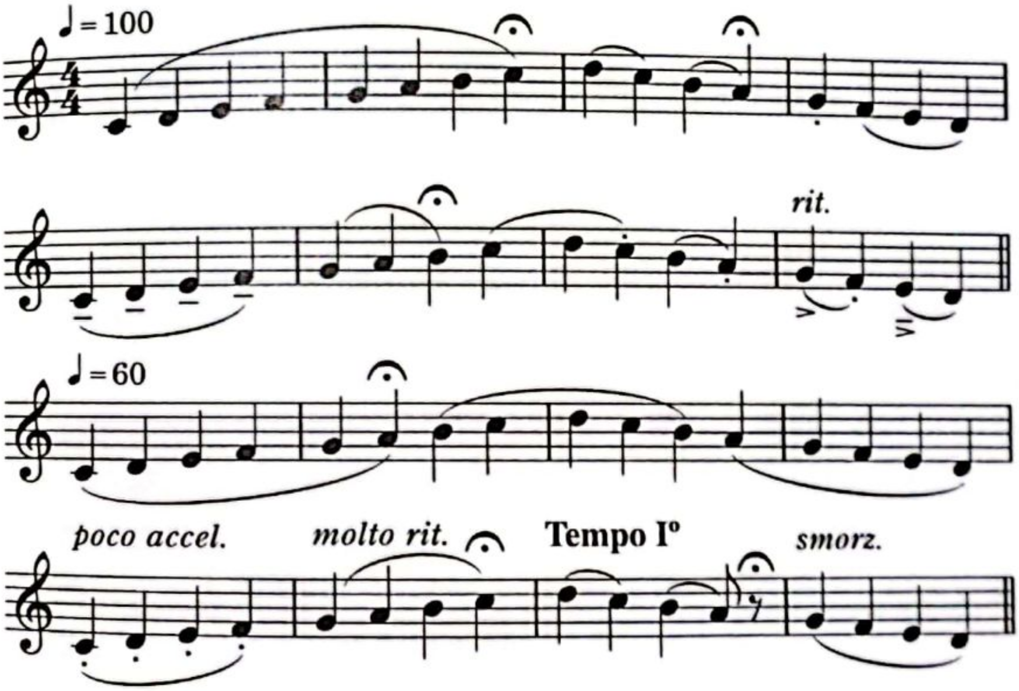
ひとつの音符の「長さ」と「強さ」の表現を組み合わせて、より細かなニュアンスを伝えることもできます。意図を解釈した上で曲の雰囲気に合わせて演奏します。もちろん「スラー」と組み合わせて用いられることもあります。

① 表情を感じて演奏してみます

TRACK 74

アーティキュレーションの違いに気をつけて、楽器で演奏してみます

絶対的なものではありませんので、演奏する自分の中にも基準となる曲想や発想が必要です

② フェルマータを感じて演奏してみます

TRACK 75



フェルマータの印象に気をつけて、楽器で演奏してみます

やはり絶対的なものではないので、演奏する自分の中に、あらかじめフレーズのイメージを持つことが必要です

終わり

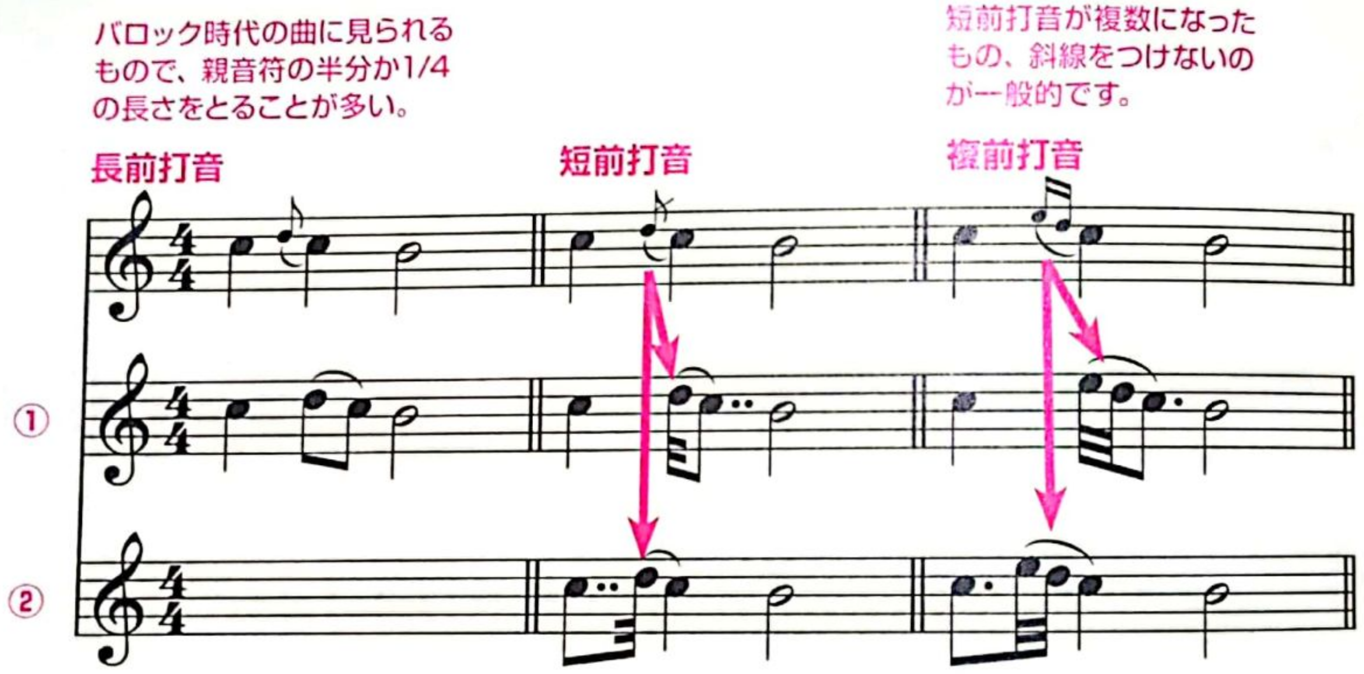
CamScannerでスキャン

レッスン 43

音を飾る記号とパターンを覚えよう

キーワード 装飾音符、装飾記号

フレーズを装飾するために使われる、小音符による「装飾音符」、お隣の音を使って飾るタイプの「装飾記号」について覚えましょう。

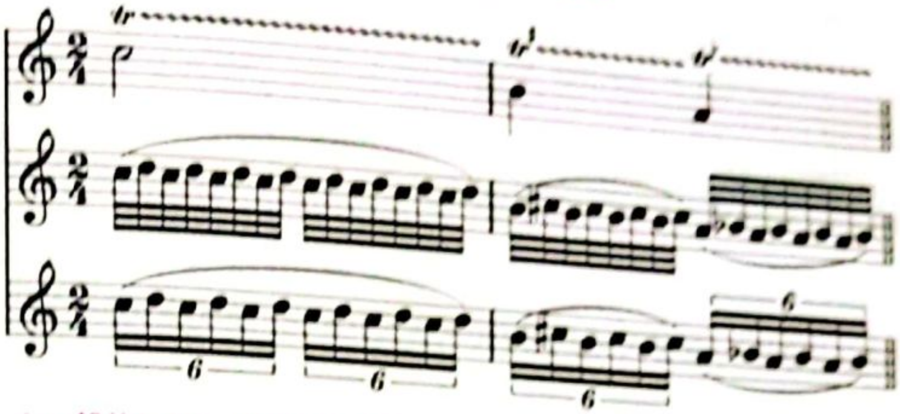
「装飾音符」にもパターンがあります

通常のサイズに対して、やや小さな音符で書かれるのが「装飾音符」です。基本的には、常に棒が上向きになり、小音符の長さは小節の拍にカウントしません。

小音符に斜線がつかない「長前打音」は最近はあまり使われませんが、古典の曲ではお目にかかります。

小音符に斜線がつく「短前打音」は、現在でもよく使用されます。演奏の解釈は、**①装飾音符を拍の頭のタイミングに置く ②親の音符を拍頭にして装飾音符を直前の拍の後ろにくっつける**、などがあります。どちらが正解ということもありませんし、テンポや曲想によって、どのくらいの長さや速さで演奏するかは異なります。

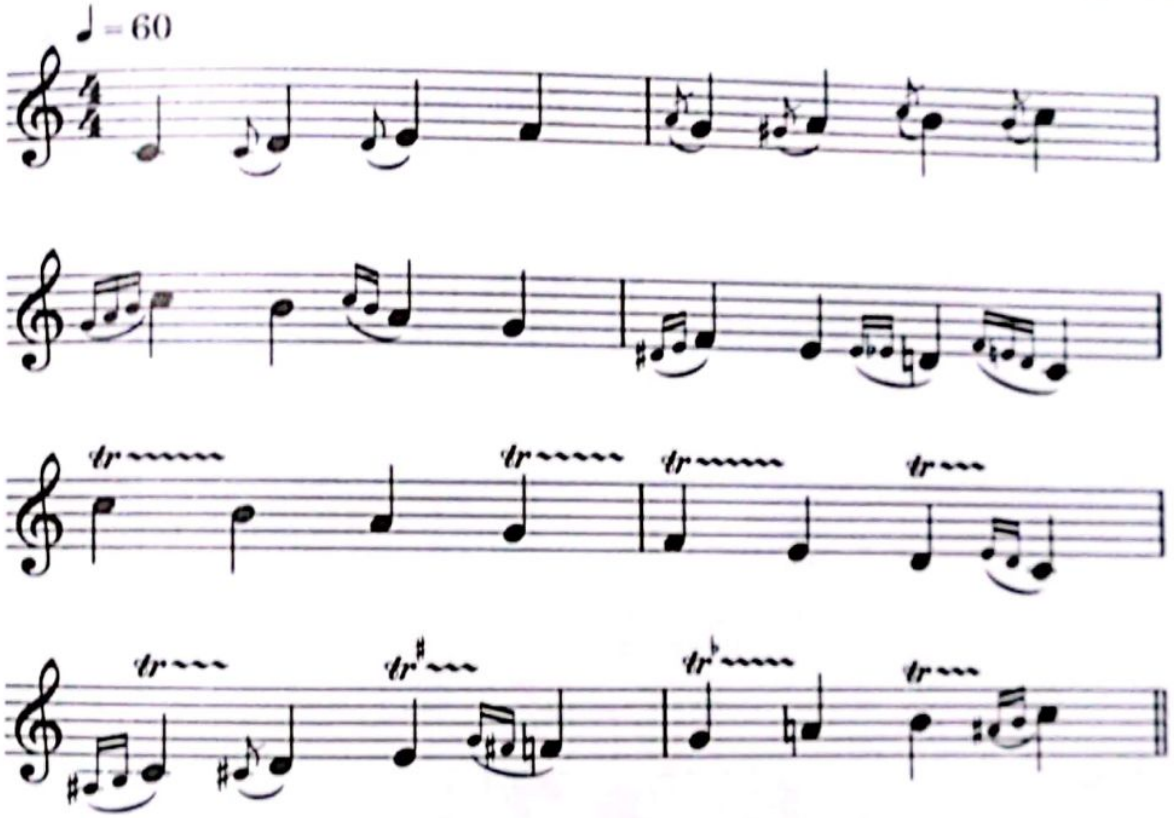
CamScannerでスキャン

「トリル」とは2つの音を交互に素早く演奏すること

任意の2つの音を素早く何度も交互に演奏するため、揺れ動くような華麗な雰囲気になるのが「トリル」です。「tr.」の記号に「シャープ」や「フラット」がつけられることがあります。

※一般的には、すぐ隣上の音（調号の影響も受けますが、半音上か、半音2つ分上の音）と交互に反復させます。

1 装飾しながら演奏してみます

TRACK 76



装飾のパターンに気をつけながら、楽器で演奏してみましょう

参考演奏は絶対的なものではなく、あくまで一例です

終わり

レッスン44 省略を表す記号を覚えよう

キーワード 省略記号

文字でも省略して表現することがあるように、音楽、楽譜でも省略記号を活用することがあります。よく使われる代表的なものを覚えておきましょう。

音のタイミングをズラして演奏するパターン

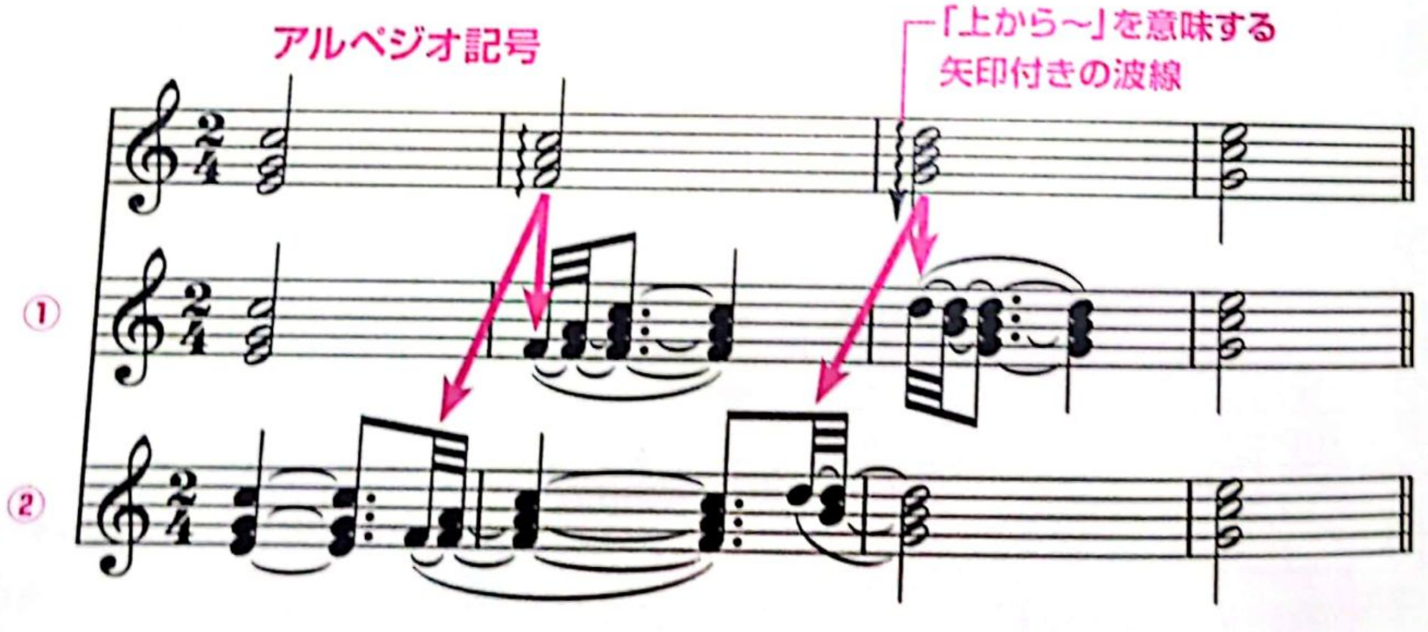
●音のタイミングをズラして演奏する「アルペジオ」

同時に複数の音を鳴らすことを「和音」と言いますが、ちょっとだけ鳴らすタイミングをズラす指示が「アルペジオ」です。

和音の左側に波線をつけますが、ズラすタイミングにも2つあって、装飾音符と似たように、次の2つが考えられます。

① 拍ちょうどからズラす
② 前の拍の後ろからズラしはじめる

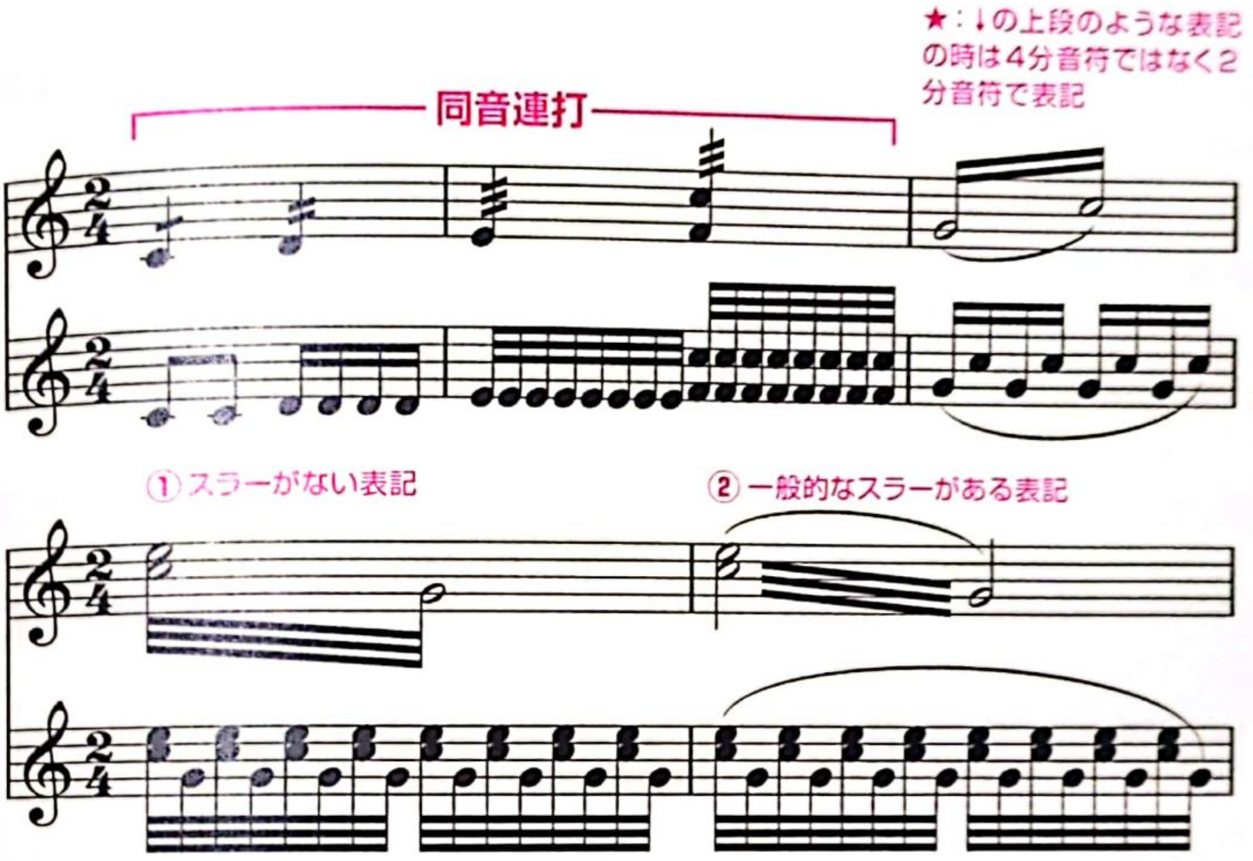
通常は、和音の下（最低音）から上に向かってズラしますが、上（最高音）から下に向かってズラしてほしい時は、波線に下向きの矢印をつけます。



第5章

●音を素早く反復させて、震わせたような奏法の「トレモロ」

ひとつの棒に斜線が入るタイプは斜線の数が連桁の本数と同じ音の長さと考え、同じ音をその長さで反復させます。ふたつ以上の音を交互に繰り返すタイプはふたつの書き方があります。

①通常の連桁のように玉と桁を繋げて書く ②玉と桁を離して書く。いずれにしても意味合い的には同じです。

★箇所のように玉の種類を倍の長さとして（ここでは4分音符が2分音符に）で書くことに要注意。

ちなみに桁が3本以上ある場合は、32分音符というよりは「できるだけ速く」と解釈するのが一般的です。この「できるだけ速く」のトレモロには、スラーがついているのが自然です。

次のページに続く ▶▶▶

CamScannerでスキャン

加線を省略する記号と繰り返しを意味する省略記号

●加線を省略するための記号

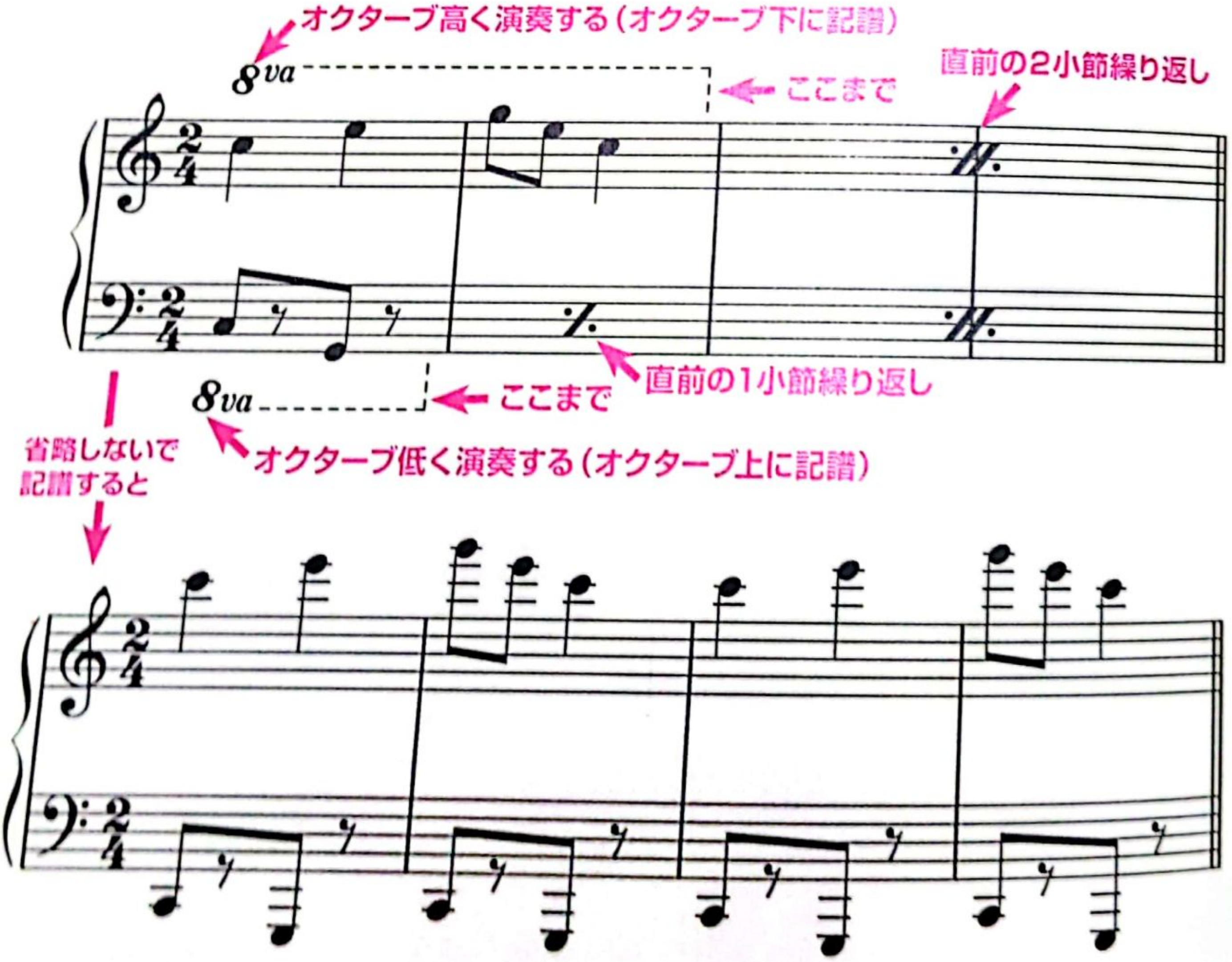
「*8va*（オクターバ）」という記号に点線をつけることで、オクターブの関係をシンプルに書くことができます。

五線の上に「*8va*」を書いたら「譜面よりもオクターブ高い音で演奏する」、五線の下に「*8va*」を書いたら「譜面よりもオクターブ低い音で演奏する」という意味になります。

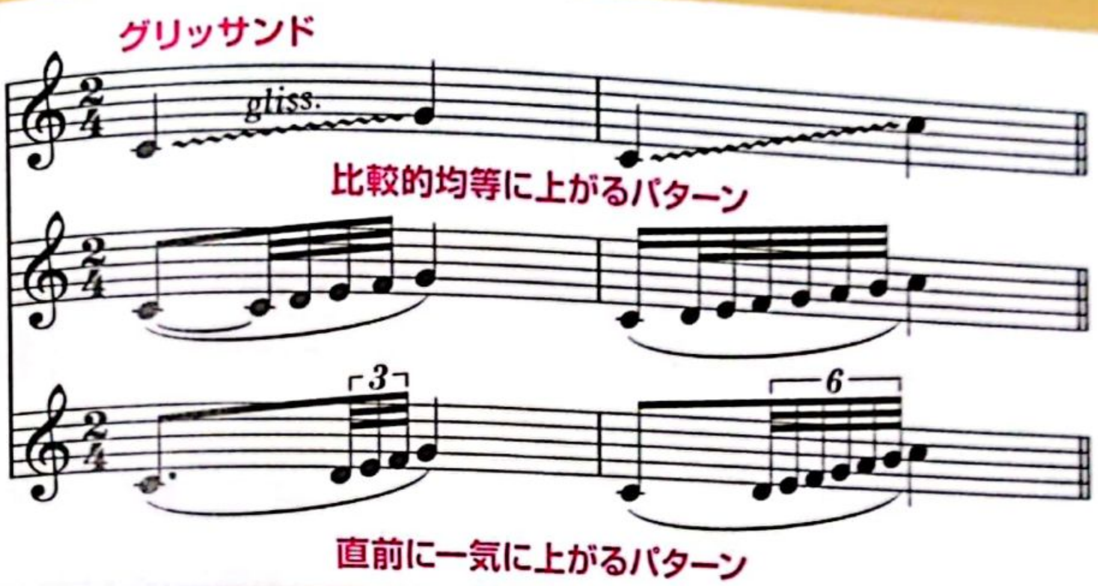
ただし楽器によっては、加線だらけの譜面のほうが、むしろ読みやすいというケースもあるので、必ずしも便利とは限りません。

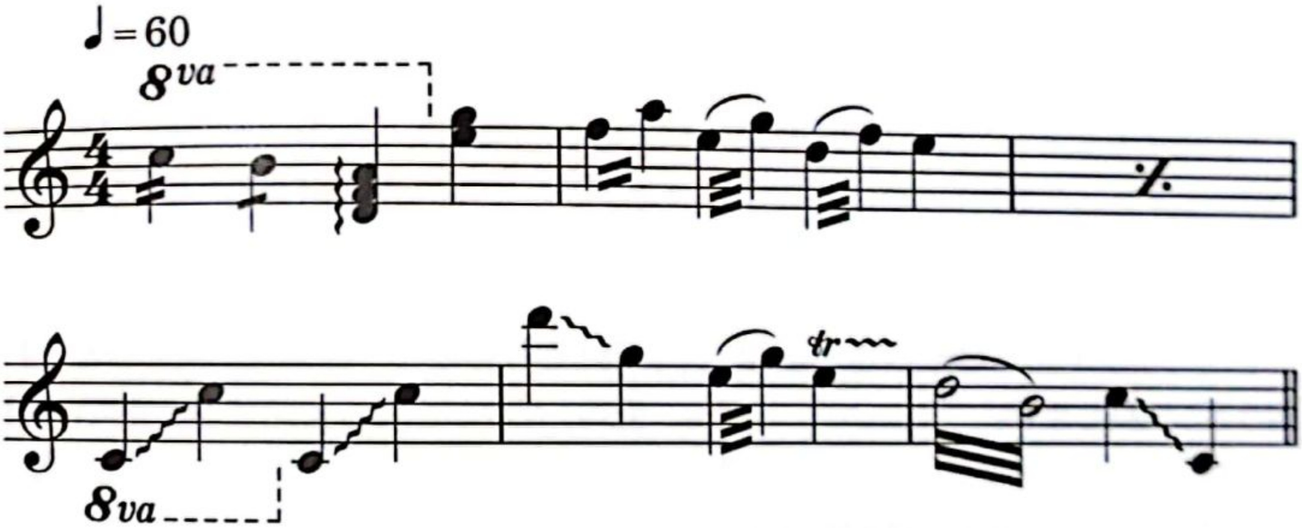
●繰り返しを意味する省略記号

もうひとつは小節の内容を繰り返すタイプの記号です。

「𝄎」は、直前の１小節と同じ内容を繰り返します。「𝄏」は、その前の２小節と同じ内容を繰り返すという意味になります。

ヒント!

アルペジオと似たような波線ですが、別の拍にある高さの違う音符同志を繋いだものは「*glissando*(グリッサンド)」といいます。

演奏例のサンプルは一例ですが、音と音の間にあるすべての音を滑らすように素早く弾きます。「*gliss.*」の文字は省略されることもあります。

① 省略記号を実演してみます

TRACK 77

※右下がりの波線は下がるグリッサンドです

省略のパターンに気をつけながら、楽器などで演奏してみます

楽器によっては、音域が足りなかったり、それぞれの奏法の難易度が違ってくるかもしれません

終わり

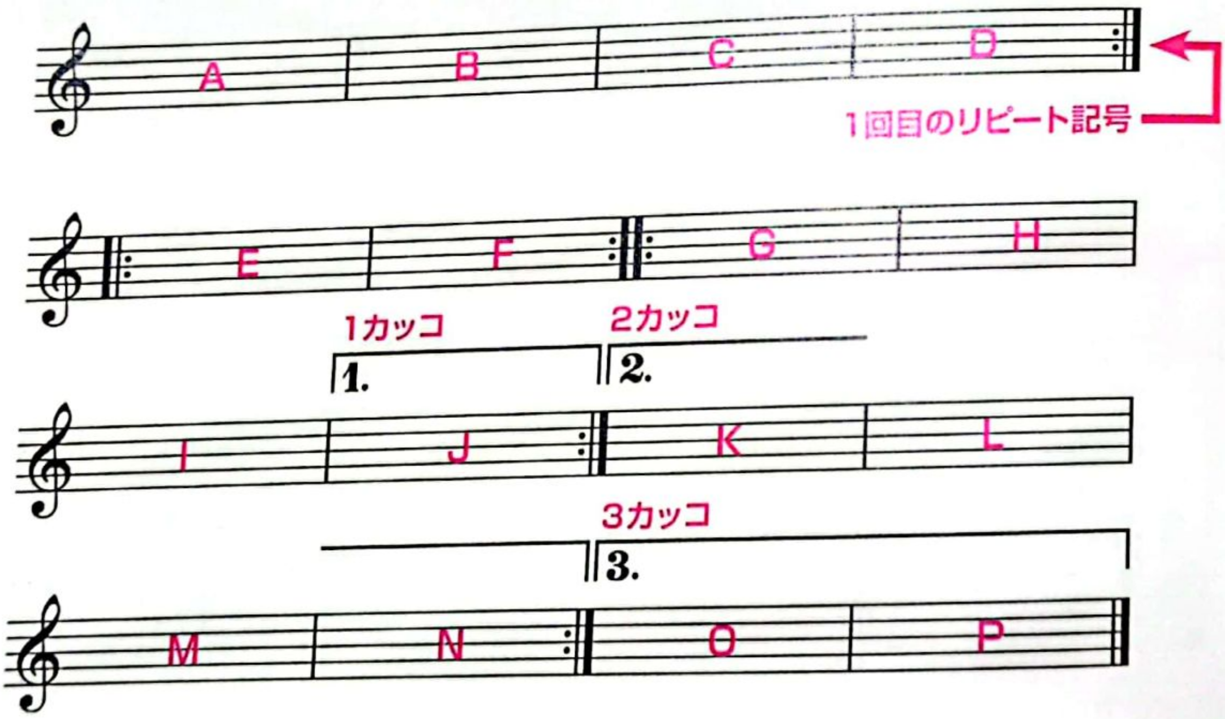
ッスン
45

繰り返しの記号を覚えよう

キーワード 反復記号、繰り返し記号

曲によっては、1番と2番など、まとまった小節数の同じメロディを繰り返すこともよくあります。基本的には楽譜は小節の順番に進みますが、記号によって手前に戻ったり、途中でジャンプしたりします。楽譜の進み方のルールを覚えましょう。

演奏する順番を確認しましょう



𝄆 𝄇 リピート記号で挟まれた小節は、繰り返し演奏します。

リピートでは1カッコや2カッコを同時に使うこともあります。最初は1カッコに入り、リピート記号で戻ったら、次は2カッコに入って……あとはカッコの数字分繰り返します。

曲の冒頭では始まりのリピート記号が省略されるので、最初に「戻るリピート記号」だけが出てきた時には、曲の一番始めに戻るという点にも注意しましょう。

上の例の演奏順は、

A-B-C-D ／ A-B-C-D ／ E-F ／ E-F ／ G-H-I-J ／ G-H-I-K-L-M-N ／ G-H-I-O-P

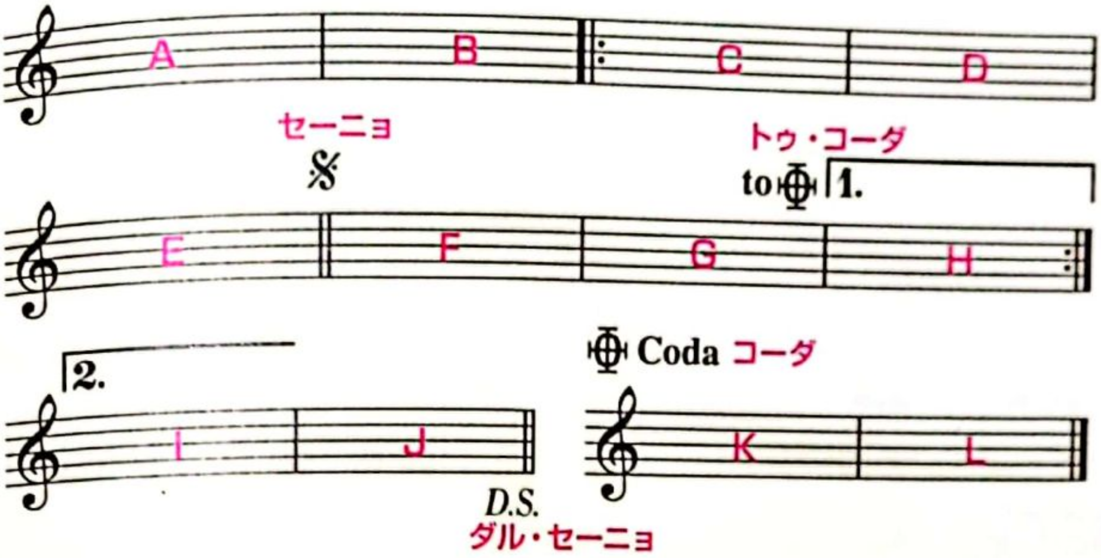
となります。

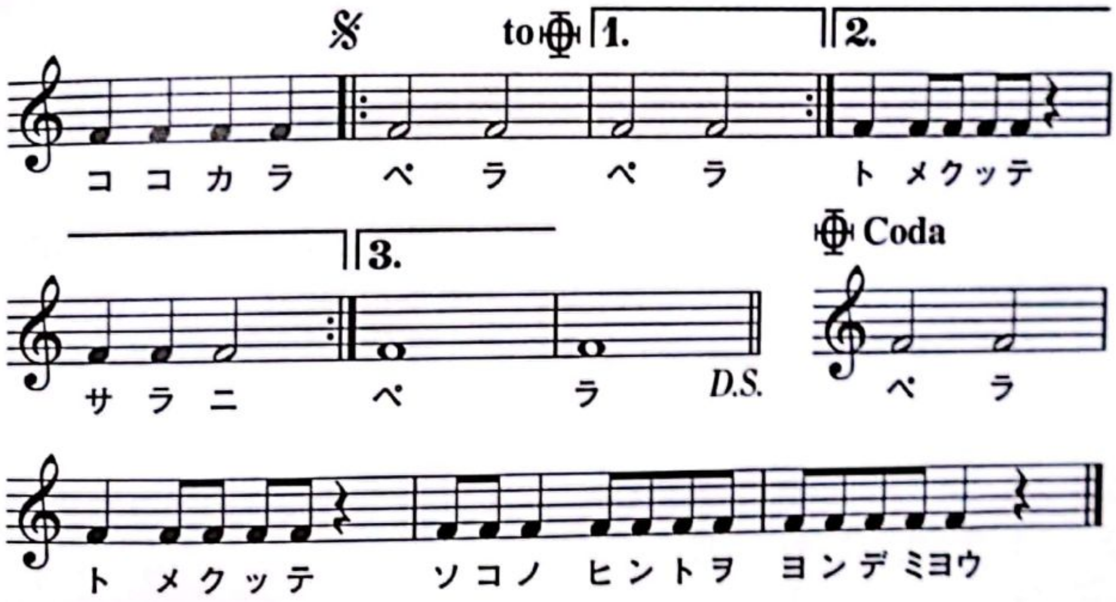
CamScannerでスキャン

小節ワープの記号

「D.S.(ダル・セーニョ)」の複縦線まで行ったら、手前にある「𝄋(セーニョ)」の記号まで一気にジャンプして戻ります。戻った後は「to 𝄌(トゥ・コーダ)」から「𝄌 Coda(コーダ)」にジャンプします。また、曲の先頭まで一気に戻る記号として「D.C.(ダ・カーポ)」があります。下の例の演奏順は下記の通り。

A-B-C-D-E-F-G-H/C-D-E-F-G-I-J/F-G/K-L



1 楽譜の進み方を確認しよう

反復記号に気をつけて楽譜の進み方を確認しましょう

楽譜の通りに歌詞を読んで、その文章の指示に従ってみてください

終わり

Q なぜ楽譜はイタリア語の指示が多いの？

A クラシック音楽が発展してきた歴史で「イタリア」が重要だったからです

長い音楽の歴史を経た結果、近年ではいろいろな国の言葉が使用されるこ…も増えてきました。
…本書でもここまでに強弱や速度の用語がいくつも登場してきましたが、基…的に「イタリア語」がベースになっています。
…現在の「五線」スタイルの記譜が確立していったのが、17世紀のイタリア…。その後も、教会、そしてイタリア周辺のヨーロッパがクラシック音楽…中心だったという事情もあり、そのままでは公用語として楽譜でも使われ…たのでしょう。

♪

…かし、長い長い歴史の中で、徐々に母国語を使う各国の作曲家が現れて…ため、ドイツ語、フランス語、英語など、複数の言語が混在している楽…あります。ドビュッシーやラヴェルといったフランスの作曲家の楽譜に…ランス語の指示が多いですね。
…譜に言葉で書かれている指示のことを「発想標語」といいますが、それ…てをあげていくとキリがありません。
…を読んでいて、わからない意味の用語が出てきたら、英語の辞書のよ…音楽用語辞典」や「楽語辞典」などを使って調べて、よく使われる用…、ひとつずつ覚えていきましょう。

♪

…みに日本の作曲家は、あまり楽譜に日本語を使わないようです。でも…日本語を使ってはいけないというルールはありません。
…“他の国でも演奏してほしい”ということなら、楽譜はやはり公用語…リア語」で書くのがよいのではないでしょうか。

CamScannerでスキャン

第6章

楽器別の楽譜を読んでみよう

前章までで楽譜&リズムの読み方の基礎を説明しました。その他に「ピアノ」「ギター」「ドラム」「弦楽器」「管楽器」など、楽器ごとにも楽譜や読み方の違いとポイントがあります。最終章ではその要点を解説していきましょう。

この章の内容

46 コードについて知っておこう …… 130
47 ピアノの楽譜を知ろう …… 132
48 ギターやベースの楽譜を知ろう …… 134
49 ドラムの楽譜を知ろう …… 136
50 弦楽器の楽譜を知ろう …… 138
51 管楽器の楽譜を知ろう …… 140
52 オーケストラの楽譜を知ろう …… 142
楽譜&リズムの素朴な「?」に答えるQ&A …… 144

CamScannerでスキャン

レッスン46

コードについて知っておこう

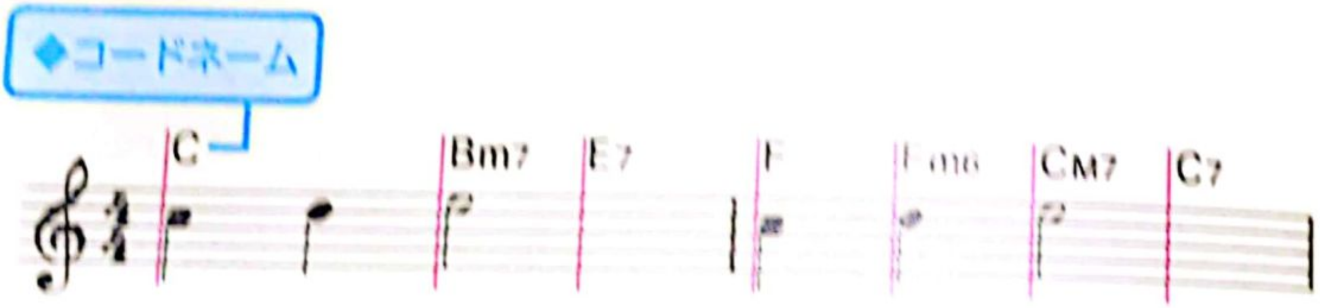
キーワード　コードネーム、和音

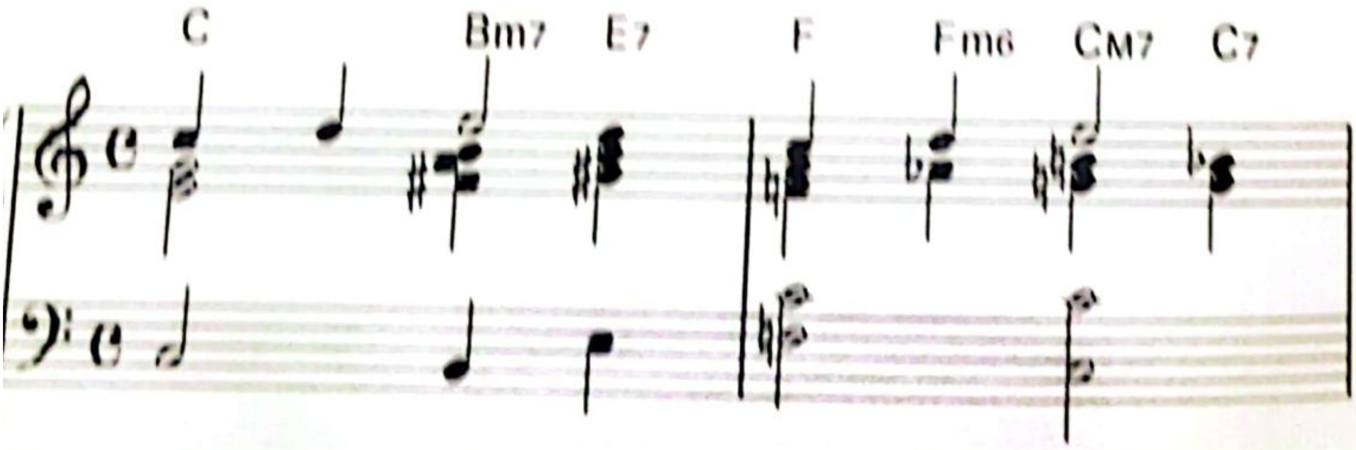
ギターやピアノ、あるいはメロディだけの楽譜の上に、アルファベットや数字、記号の組み合わせなどが書かれていることがあります。それらは「コードネーム」と呼ばれるものです。楽器別の譜面を読む前に少し解説しておきます。

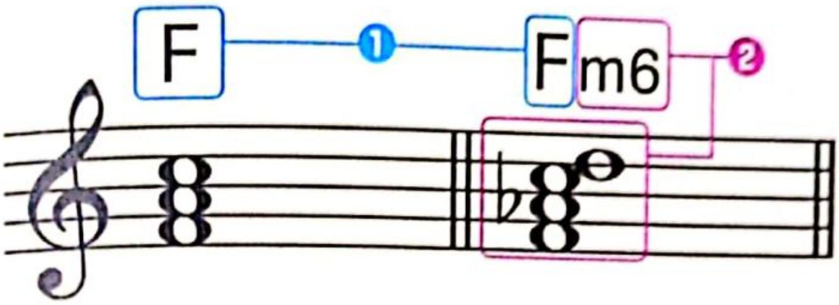
和音のタイプを記号として表したものが「コードネーム」です

「和音」とは、同時に2つ以上の高さの音が重なって鳴ることで、それによって「ハーモニー」を感じます。

和音は「コード」ともいいます。和音（コード）のひとつずつの音を楽譜に音符として記す代わりに、便宜上、ひとかたまりの記号として表したものが「コードネーム」です。



コードが変わるタイミング（拍）がわかるように、音符の左端に揃えて書かれます。ギターはコードネームを頼りに弦を押さえる手の形が決まりますし、ピアノなどの鍵盤楽器でも、コードネームで「和音」が理解できれば、練習次第では音符を読まなくても簡単な伴奏の演奏が可能になります。

●コードネームは「土台になる音と+響きの種類」の組み合わせで表現されます



❶左側の大きなアルファベットが、和音の土台（「ルート」といいます）になる音名です。

例えば例の「F」は、土台の音が「ファ」の音であるということを示しています。

❷その土台の音の右側に添えられた、小さなアルファベットや数字・記号は、そのコードの響きのタイプ（種類）を示しています。

●「F」だけの場合は「F（Major）」ということになります。和音の基本となる「メジャー（長和音）」の和音を構成する3つの音名の組み合わせによる響きである、ということを表しています。

●「Fm」のように「m」が付いた場合は「F（Minor）」ということになります。もうひとつの和音の基本である「マイナー（短和音）」の和音を構成する3つの音名の組み合わせによる響きである、ということを表しているのです。

●上の譜例の「Fm6」のように数字がつくものもあります。「F minor 6 th(Fマイナーシックス)と読みます。これは「短和音にスケールの6番目の音を混ぜた和音」という意味になります。基本の3和音にもうひとつ音を加えた4つの音名の組み合わせによる響きを表す時に、こういった数字が付きます。

以上が基本的な考え方です。

ヒント

コードの響きのタイプ(種類)をすべて紹介すると、それだけで1冊の本になってしまいますので、音楽理論の本に細かな内容は譲ります。ちなみにコードネームから音名の組み合わせは把握できても、それらの細かな音の重ね方までは明確にされていません。演奏する楽器や演奏者によって、微妙に和音の響きのニュアンスが変化することも知っておきましょう。

終わり

CamScannerでスキャン

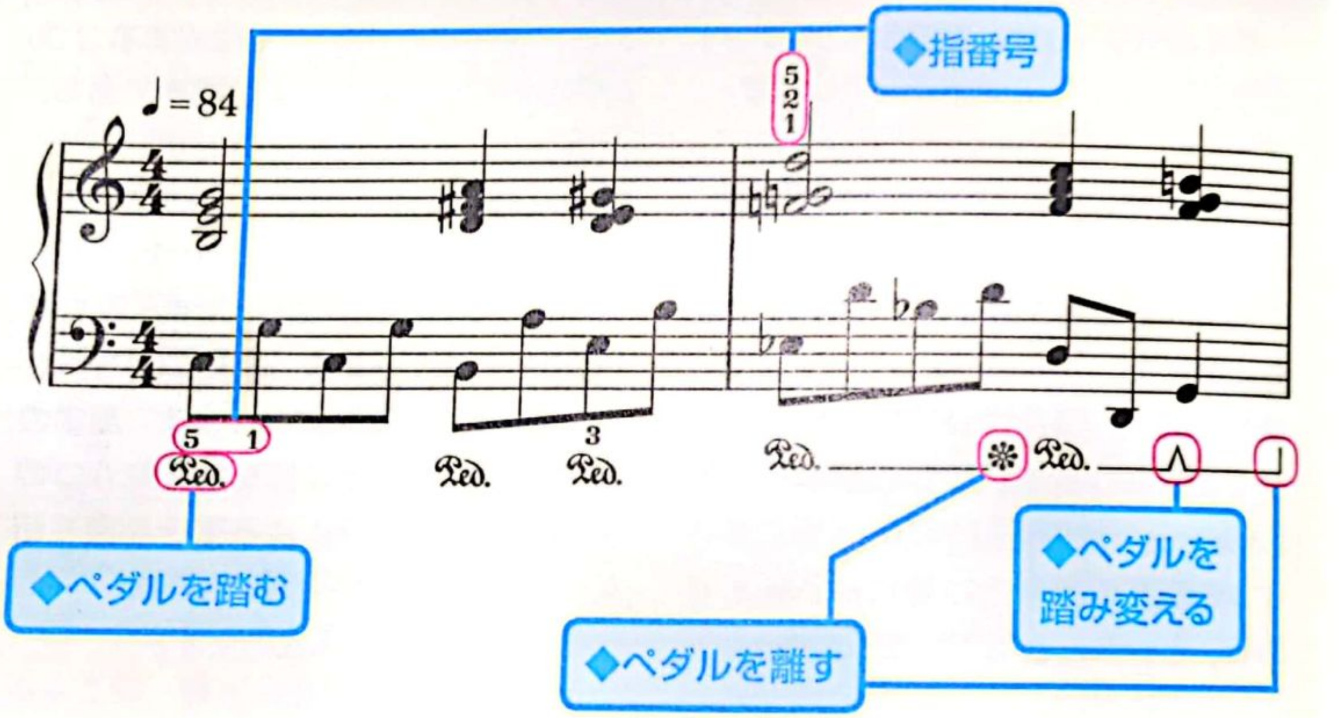
レッスン

47 ピアノの楽譜を知ろう

キーワード ペダル、指番号

ここまでの楽譜の読み方は、およそすべてに共通する一般的な知識でした。ここではピアノの楽譜において、必要な知識を覚えていきましょう。

ピアノや鍵盤楽器の楽譜



ピアノは広い音域をカバーするので、ト音記号とヘ音記号の二段を組み合わせた「大譜表」を使います。

ピアノには足下に「ペダル」の装置がありますので、このペダルを踏む指示なども楽譜に指定されることがあります。

使用頻度が高いのは「ダンパーペダル」で、「サスティンペダル」ともいいます。

踏んでいる間は、鍵盤から指を離しても音を持続させる仕掛けで、ピアノの表現ではとても重要なものです。

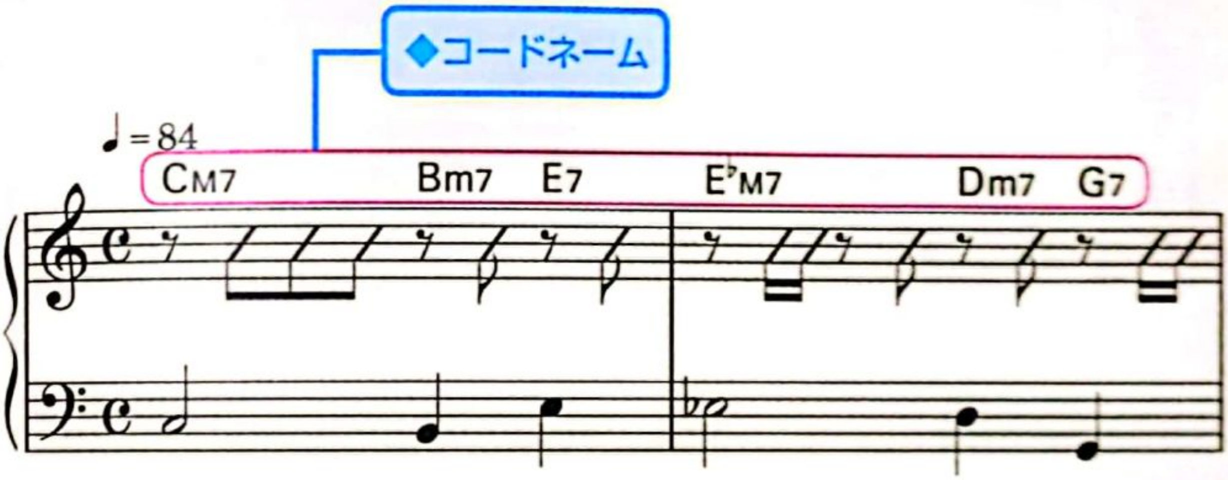
ペダルを踏む(踏み直す)／離すの記号、ペダルの持続や踏み変えのタイミングを示す直線でペダルの指示が表されます。その表記はシンセサイザーやキーボードでも使われます。

CamScannerでスキャン

●「運指」を数字で表す

左ページの「指番号」のように運指を数字で表している楽譜もあります。

鍵盤楽器共通ですが、左右どちらも親指から小指に向かって1、2、3～と順番がつけられます。

コードネームを表記する

ポピュラー系の楽譜では「コードネーム」を頼りに、“自由に演奏してほしい”という意味合いの表記も見受けられます。

コードネームについてのレッスン46以上の詳細は、別の機会に譲りますが、“和音の形や構成を表す記号である”ということは覚えておきましょう。

上の譜例の上段は、和音の音はコードネームだけで表現して、その演奏のリズムだけを「／（スラッシュ）」で表記しているパターンの例です。

終わり

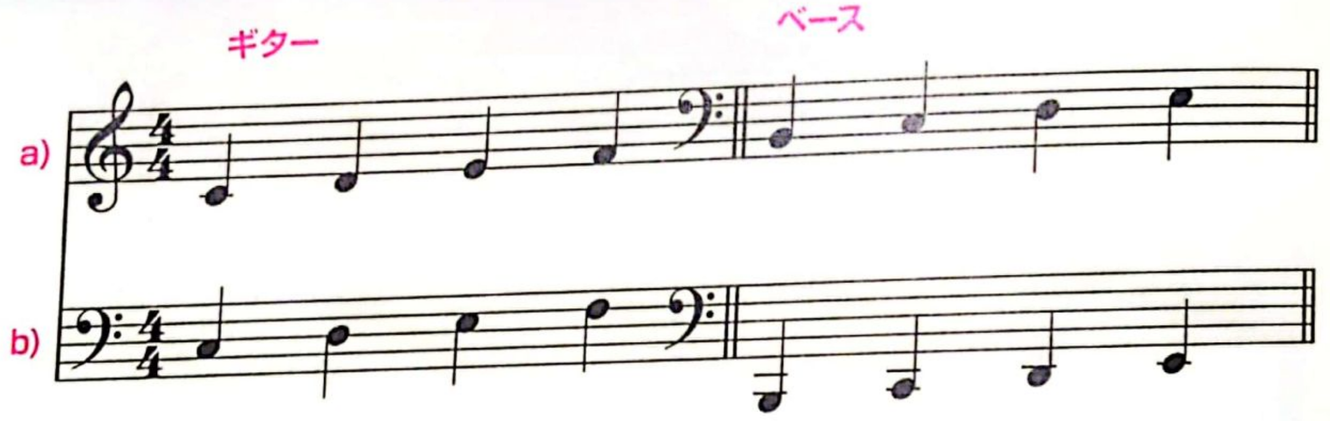
CamScannerでスキャン

ッスン 48

ギターやベースの楽譜を知ろう

キーワード タブ譜

ギターやベースなどのフレットのある楽器では、これまでの五線の楽譜も用いられますが、それ以外にも専用の楽譜が使われることがあります。ギターやベースではポピュラーな楽譜であるタブ譜を使います。簡単に紹介しておきます。

楽譜の音の高さと実際の音の高さ

●楽譜の音の高さと実際の音の高さは、1オクターブ、ズレています

ギターやベースの譜面では、五線譜に書かれている音の高さと、実際に鳴っている音の高さが、1オクターブ、ズレています。

a)が楽譜の音の高さ、b)が実際に鳴っている音の高さです。

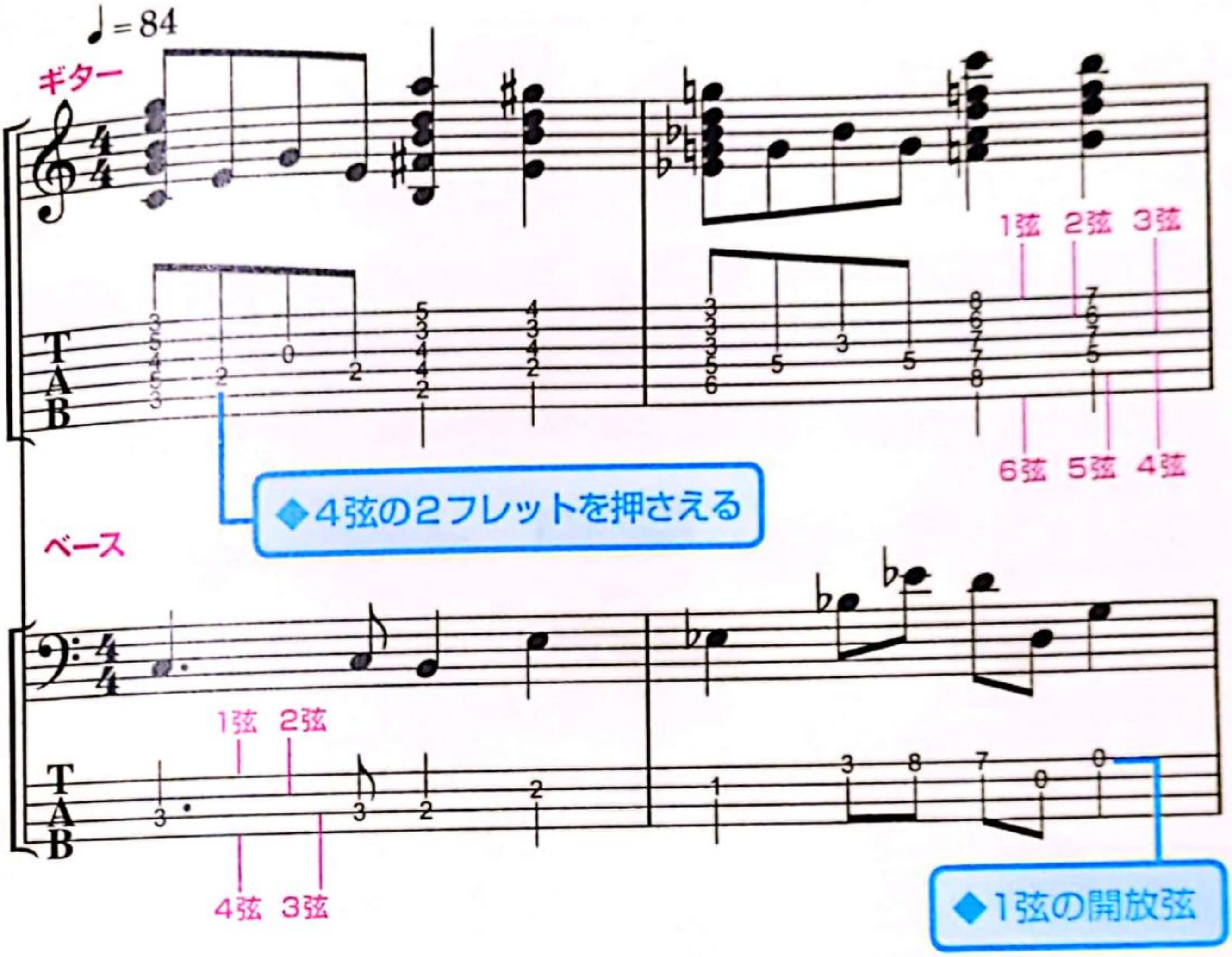
そもそも音色自体がギターやベースになりますので、単独の楽器で演奏している時は、あまりオクターブ分ズレているという意識はないものです。しかし機会があったら実際にピアノで音を鳴らして音の高さを比較してみてください。そうすると確かに上の譜例のような関係になってることがわかると思います。

このことはDTM(コンピューターなどを用いた音楽制作)などで、ギターやベースのサウンドを入力する時には、知っておくとよいでしょう。

CamScannerでスキャン

下の図解のような「タブ譜（TAB譜）」があります

※タブ譜（それぞれの下段）の横の線は弦を示しています
※タブ譜の数字は何フレットを押さえるかを示しています



ギター、ベース、ウクレレ、三味線などの弦楽器のために、①弾く弦 ②指で押さえる場所の2つを示した楽譜「タブ譜（タブラチュア譜、TAB譜）」があります。

実際に、どこの弦の何フレット（勘所）を押さえるかを示しているので、リズムさえ読めれば、五線の高さを読めなくても演奏できるという代物です。確かに演奏するには便利ですが、実際の音の高さがわからないので、どんなフレーズでどんなハーモニーかは、五線よりもつかみづらいです。どちらも読めるようにしておきましょう。

終わり

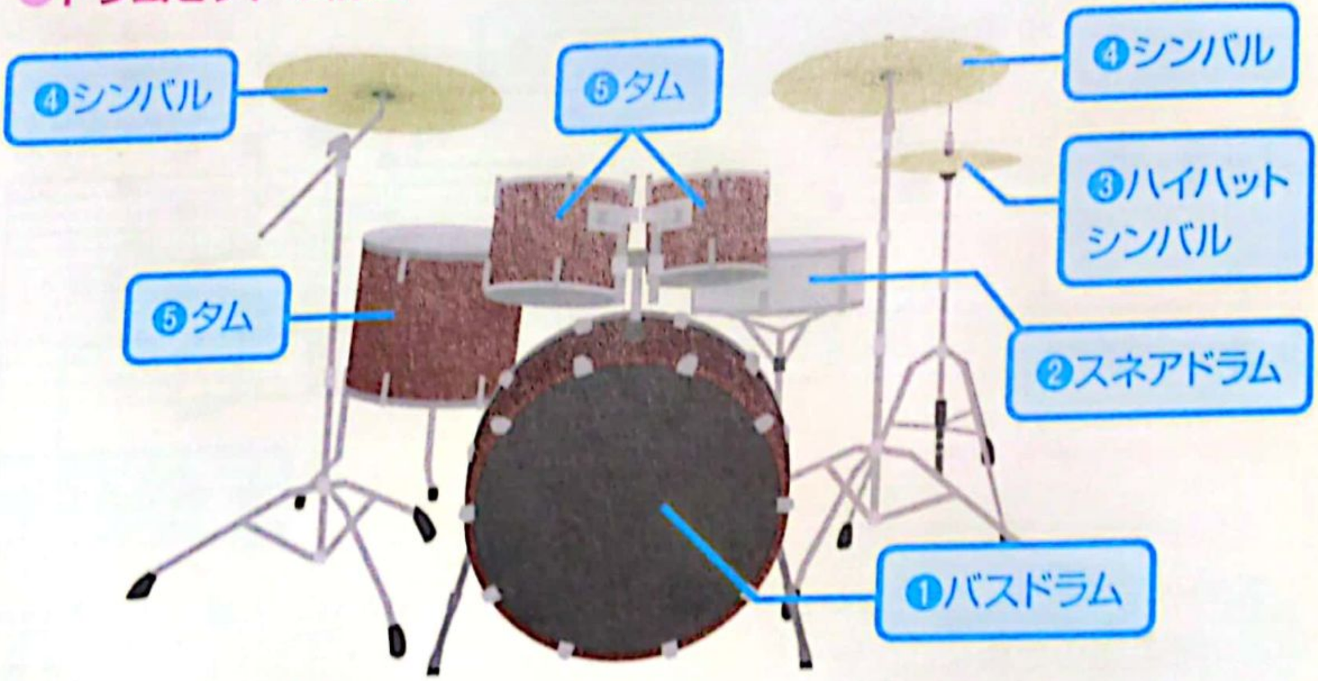
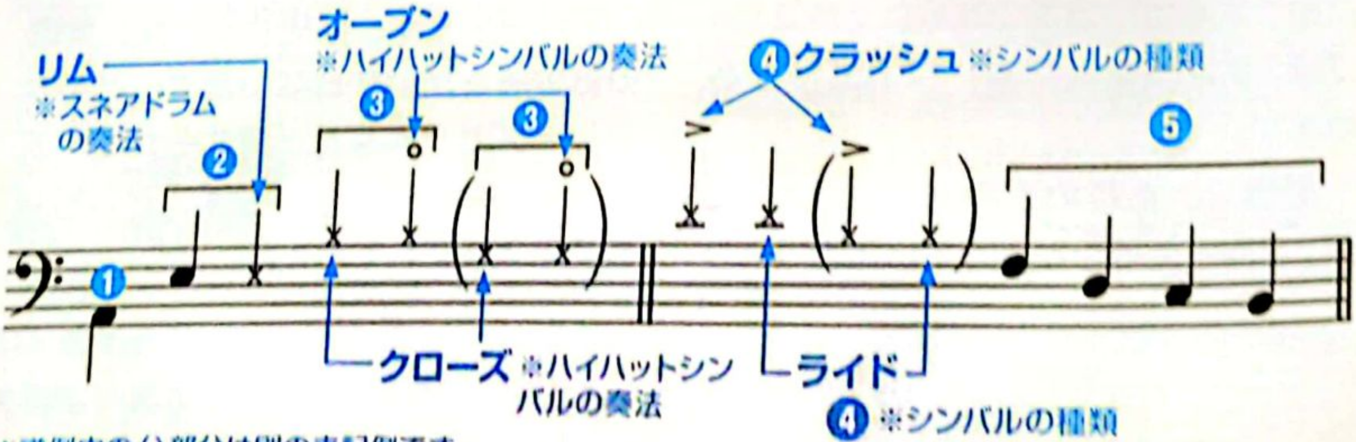
レッスン 49 ドラムの楽譜を知ろう

キーワード ドラム譜

ドラムの譜面は音程がありませんが、いろんな打楽器がセットになっているため、ひとつの五線譜上に、あらゆるパーツがまとめて書かかれています。

統一されていない部分もありますが、ひとつの目安を紹介します。

国内のドラム楽譜の主要な例

●ドラムセットの構成



※譜例内の()部分は別の表記例です。

楽器別の楽譜を読んでみよう

ドラムの譜面の音部記号

●ドラムの譜面の音部記号は、慣例で「ヘ音記号」が使われます

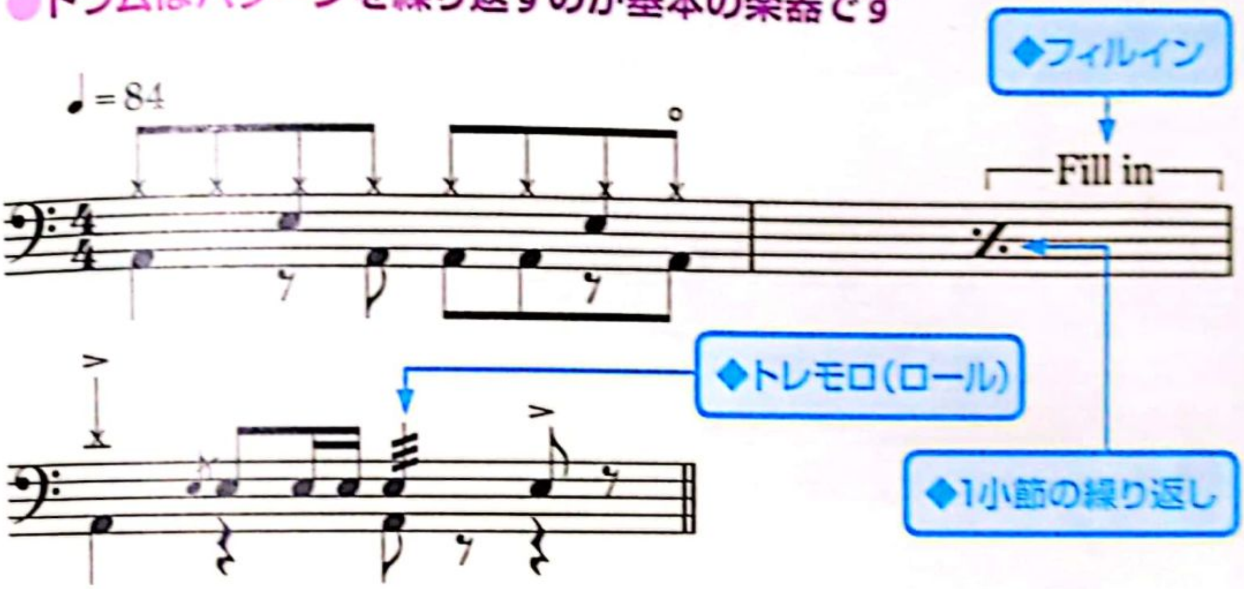
バスドラム、スネアドラムは、五線譜ではおよそ固定されていますが、それ以外の楽器は、記譜した人や出版社によって記譜法が異なります。

まず、1本の五線に上下2つのライン(声部)を書きます。符尾の上下の向きで区別します。

上のほうのラインは両手のスティックを使って叩くもの、一番下のラインは足で踏む、つまり「バスドラム」です。

両手で複数を同時に叩くことも可能なので、ハイハットシンバルとスネアドラムなどは、同じタイミングになることもあります。

●ドラムはパターンを繰り返すのが基本の楽器です



ドラムはドラムパターンといって、1小節や2小節などのパターンを繰り返し演奏することが多いので、楽譜も繰り返しの省略記号(レッスン44参照)がよく用いられます。

さらに、次のフレーズの橋渡しとしてドラムがアクセントフレーズを叩くところを「フィルイン」といいますが、ここの細かなフレーズ内容はプレイヤーに任せて、その拍数だけを示すようにします。

スネアドラムやシンバルなどの、素早く連打するトレモロ奏法(レッスン44参照)のことを「ロール」といいますが、これもよく使われます。

終わり

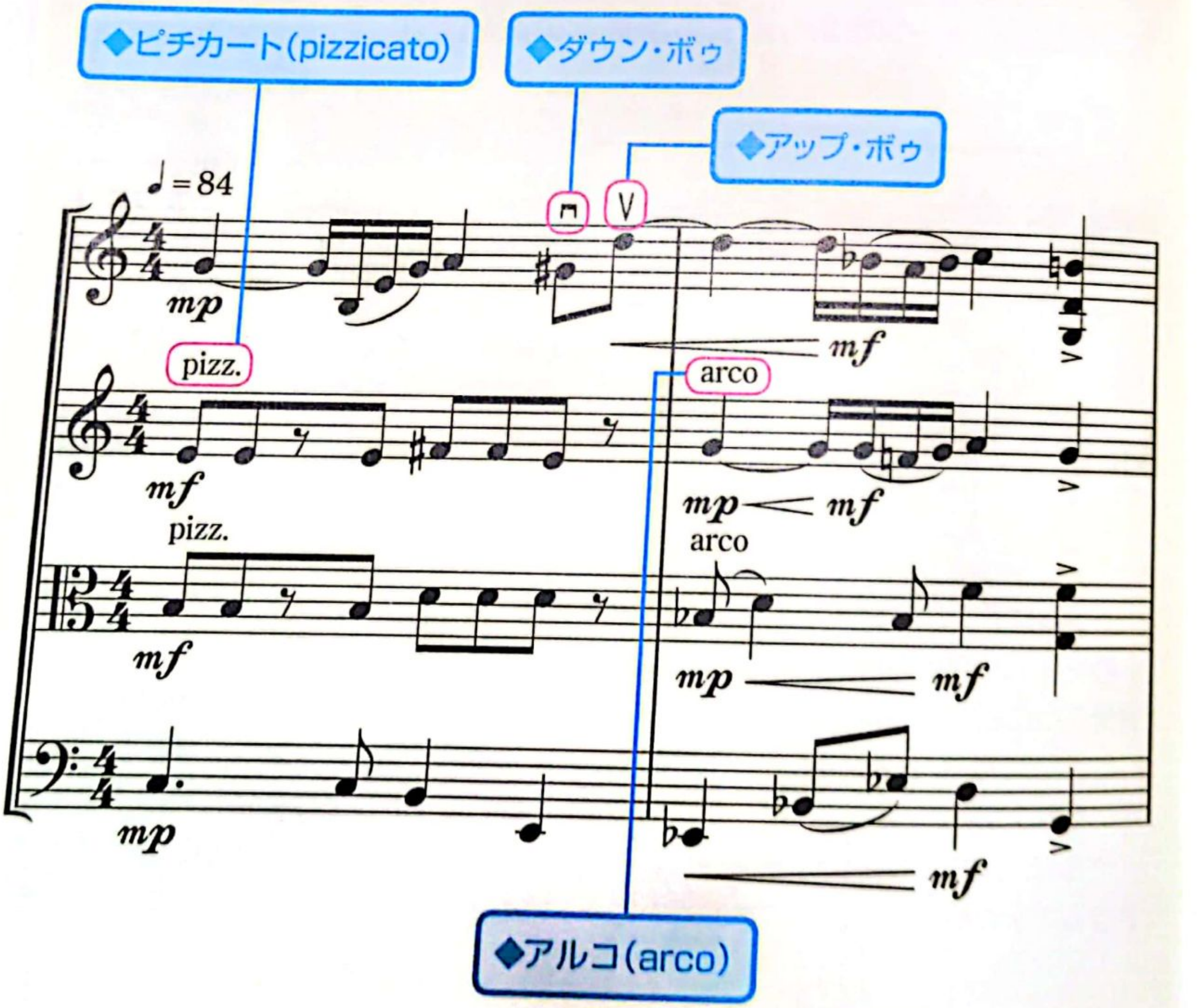
CamScannerでスキャン

レッスン 50 弦楽器の楽譜を知ろう

キーワード ピチカート、アルコ

ヴァイオリンなどの弦楽器（ストリングス）の楽譜には、楽器特有の解釈や奏法を示す記号などが使われます。ここでは代表的なものを紹介しておきます。

弓を使う弦楽器の楽譜です



●2種類の演奏方法

ヴァイオリンに代表されるように、弓を使って演奏する弦楽器ですが、ギターのように指で弦を直接弾く奏法も使用されます。その奏法は「ピチカート(pizzicato)」と呼ばれ、楽譜には、略して「pizz.」と表記されます。

それに対して、通常の弓で演奏することを「アルコ(arco)」といい、ピチカートから戻る時に、指示として譜面に表記されます。

●弓の動かし方

弓(ボウ)の動かし方は、腕を上→下(弓元から弓先)、下→上(弓先から弓元)と交互に動かすのが基本となります。

弓の上→下の動きを「ダウン・ボウ」、弓の下→上の動きを「アップ・ボウ」といいます。

通常の譜面には書かれませんが、動きによる音の表情を特別に指定したい時には、記号がつけられることもあります。

●弦楽器のスラー

弦楽器の「スラー」には、本来の「できるだけ滑らかに」という意味に加えて、さらに重要な奏法が含まれます。

弦楽器のスラーは「一弓で演奏する」という意味合いになるのです。先に解説した弓の上→下、下→上、それぞれ一方向の動きの範囲内のみで、ひとつのスラーを表現するわけです。

弓先～弓元の範囲でスラーを表現することになりますので、ピアノのような長いスラーは、弦楽器ではあまりふさわしくありません。

●基本的な楽器編成

左ページのサンプルの楽譜は、基本的な「弦楽四重奏(ストリングス・カルテット)」の楽器編成(楽器の組み合わせ)のスタイルです。4段の五線が同時に演奏されることになります。楽器は上から順に、第一ヴァイオリン、第二ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの4パートとなります。

ヴィオラの音部記号が「ハ音記号」(レッスン32参照)、チェロの音部記号が「ヘ音記号」であることにも着目してください。

終わり

CamScannerでスキャン

レッスン 51

管楽器の楽譜を知ろう

キーワード 移調楽器

管楽器には、木管/金管などの種類がありますが、主に息を使って演奏する楽器のことです。ここでは管楽器特有の楽譜について見ておきましょう。

管楽器の「ド」が、ピアノの「ド」でないケースも!?

簡単にいってしまうと、楽譜の「ド」を吹いた時に、ピアノの「ド」と異なる高さの音が鳴る楽譜を使っているものが管楽器には多くあります。

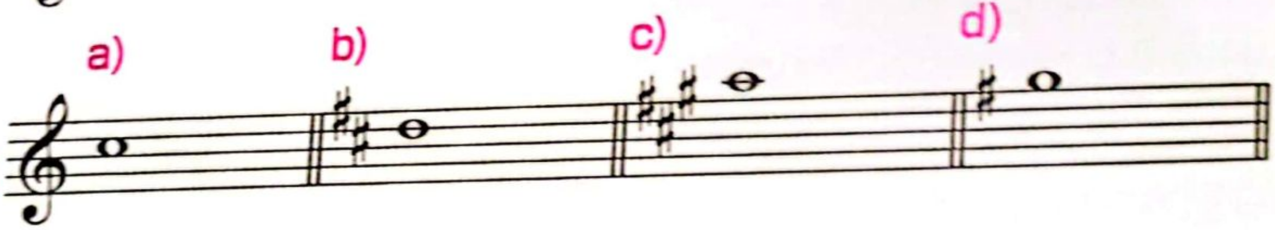
このような楽器のことを「移調楽器」といいます。

●代表的な例

1 の音をそれぞれの楽器で演奏するには 2 のような楽譜になります

1

2



a)フルートやオーボエなどで使われます。ピアノと同じく、「ド」は「ド」です。

b)ほとんどのクラリネットやトランペットはこれです。楽譜の「ド」は、実際の音としてはピアノの「シ♭」に相当します。ピアノと同じ「ド」を鳴らしたい場合、b)の楽譜では「レ」になります。

c)アルトサックスの楽譜です。この楽譜の「ド」は、実際の音としてはピアノの「ミ♭」です。ピアノと同じ「ド」を鳴らしたい場合、c)の楽譜では「ラ」になります。

d)ホルンの楽譜です。「ド」は、実際の音としてはピアノの「ファ」に相当します。ピアノと同じ「ド」を鳴らしたい場合、d)の楽譜では「ソ」になります。

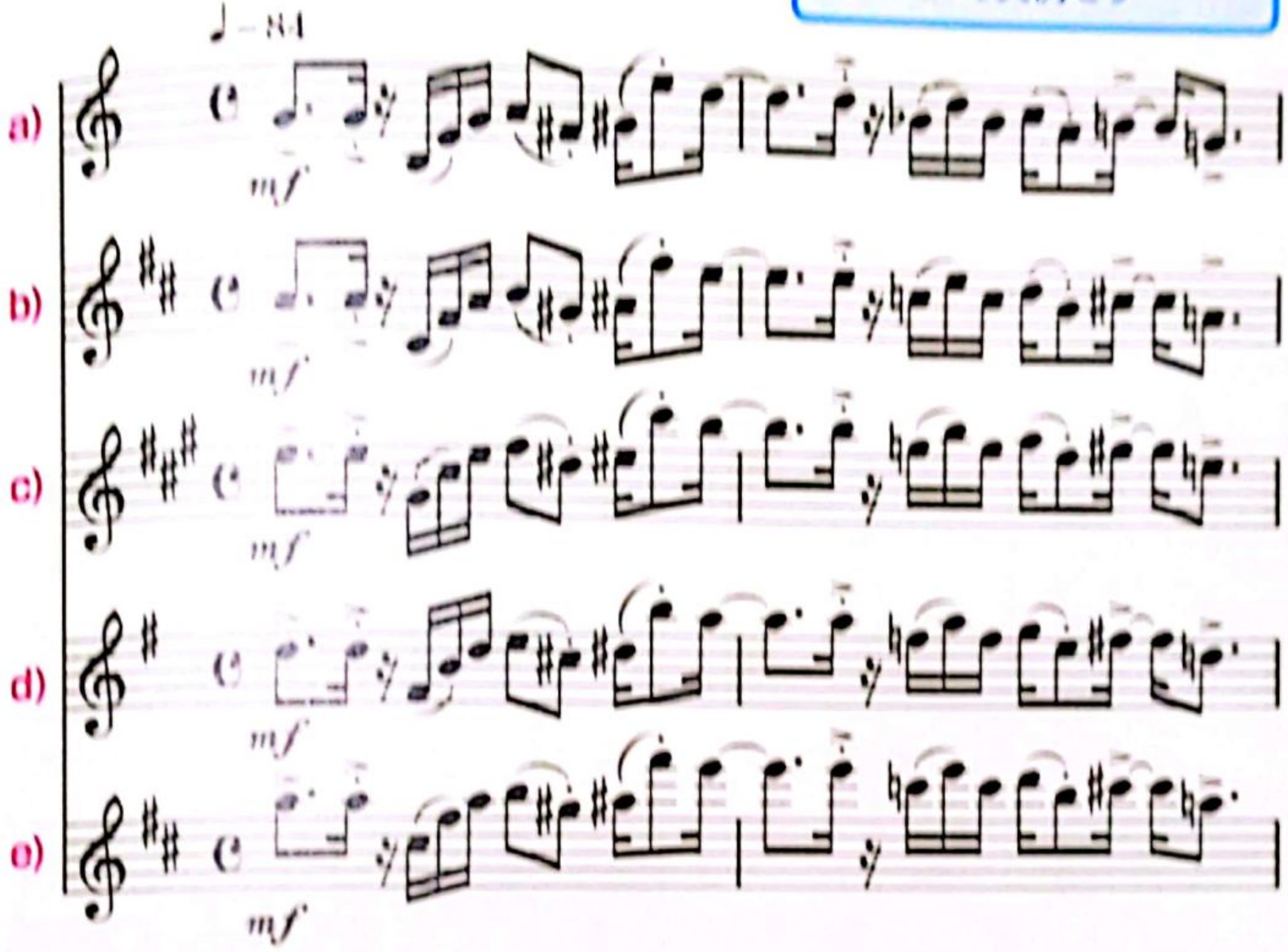
CamScannerでスキャン

それぞれの楽譜上の「ド」が、ピアノで鳴らす実際の音の「ド」とはズレている楽譜を使う楽器があることを説明しました。

そのズレている楽器同士が、ピアノと同じメロディなどを一斉に鳴らすために、左ページのようにそれぞれ、あらかじめキーをズラして書かれた楽譜、つまり「調号」が違う楽譜があるのです。

●移調楽器ごとの楽譜サンプル

先ほどのa)、b)、c)、d)のパターンの実例です



楽譜上の音は異なりますが、実際に演奏される音はすべて同じ音になります

e)は、b)のパターンのさらにオクターブがズレている例で「テナーサックス」などがこれに相当します

ヒント

127ページから7回ページをめくって、ここに辿り着いたあなたは、ハイ、正解です！ 楽譜の進み方をしっかり理解できていますね！

終わり

P127「」の正解：ココカラペラペラペラトメクッテサラニペラペラペラペラトメクッテソコノヒントヲヨンデミヨウ

CamScannerでスキャン

オーケストラの楽譜を知ろう

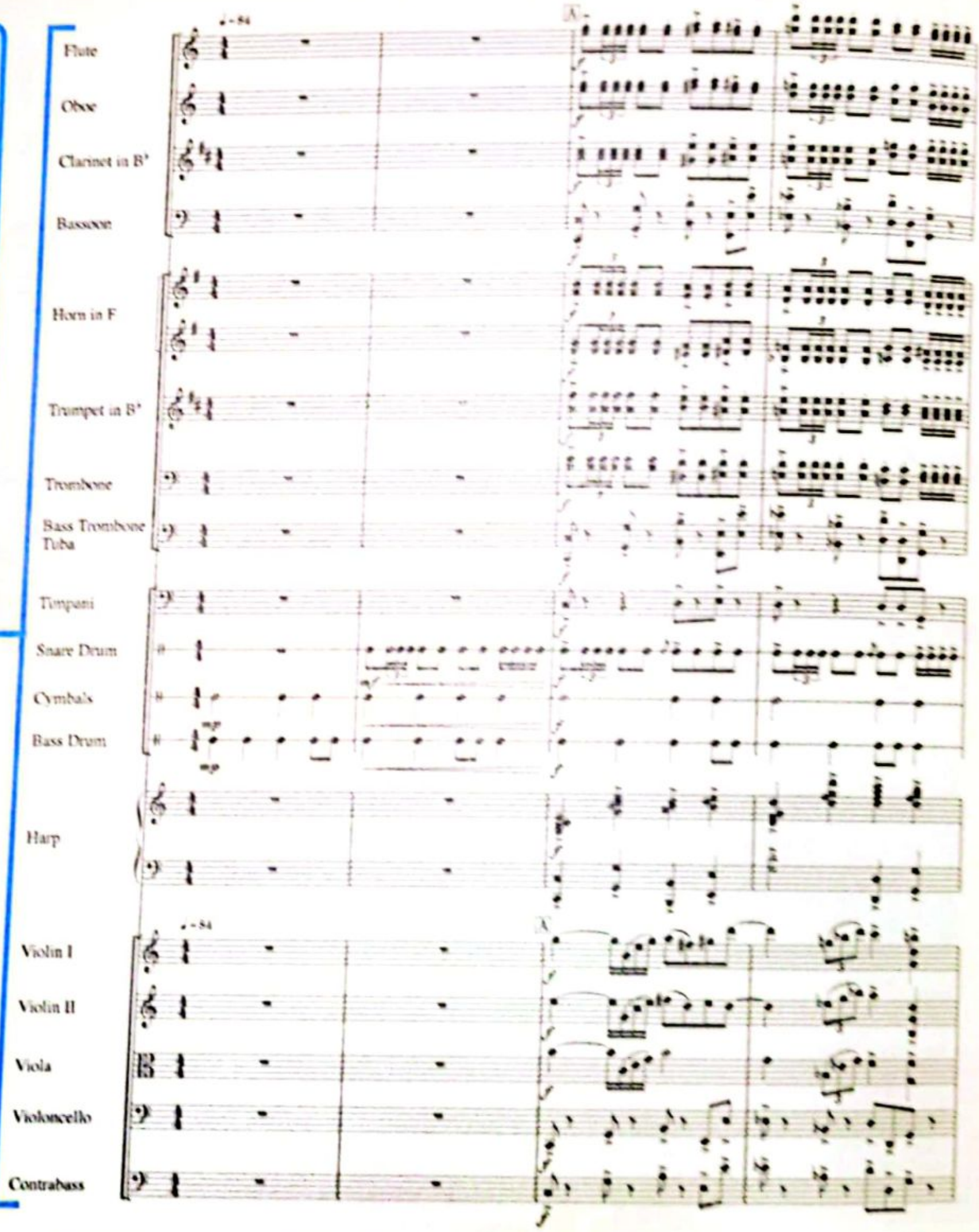
キーワード スコア、パート譜

この章では、いろんな楽器別の楽譜の例を紹介してきましたが、やはり最後は、楽器や人数ともに最大である「オーケストラ」の楽譜を見てみましょう。

「オーケストラ」の楽譜

このように演奏に必要な全部の楽器がまとめて書かれた楽譜を「スコア」といいます

◆パート名



CamScannerでスキャン

●「パート譜」と「スコア（総譜）」

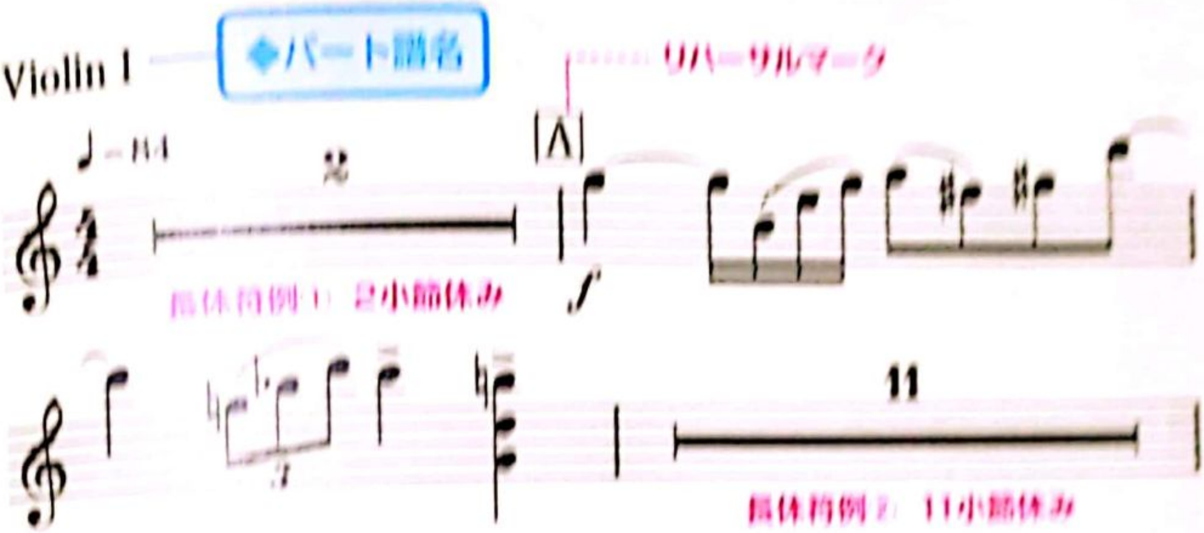
たくさんの楽器で合奏する時、ひとつずつの楽器のことを「パート」といいます。

左ページのようにそのパートをすべて縦に並べた楽譜を「スコア（総譜）」といいます。

オーケストラの指揮者などは、この楽譜を読んだり、暗譜したりして指揮をしています。

この「スコア」は、編成の大きい小さいに関わらず、2つ以上のパートが組み合わされたものから、室内楽、吹奏楽など、あらゆる合奏の楽譜に使われる形態です。

「スコア」から各パートごとに抜き出したものが「パート譜」



演奏者は「スコア」を用いて演奏するのが望ましいのですが、譜面台に載せられる楽譜のサイズや譜めくりといった問題で、現実的には無理が生じます。そこでそれぞれの担当の段だけを抜き出した楽譜「パート譜」を使用します。

パート譜には、曲の段落に「リハーサルマーク（練習番号）」が付いていたりします。編成の大きなスコアでは、パートによっては長い小節の休みの場合がありますが、そういった箇所は「長休符」を使うことで省略して書かれたりします。

終わり

CamScannerでスキャン

Q なぜこんなにわかりにくい「移調楽器」があるの？

A 楽器の仕組みの違いや演奏者の負担軽減が発端です

歴史的には、曲のキー（調性）に調整された楽器を使い分ける（持ち替える）ことで、運指や鳴り方などを最適化して用いていました。現代では楽器も改良され演奏者の技術も向上するなど、やや事情は変わってきましたが、以前の名残が楽譜として残ってしまったのです。

ピアノなどの鍵盤楽器は、キーによって黒鍵と白鍵の組み合わせが違うだけですが、管楽器などでは、息や唇を使って音を出すために、指使い以外にもコントロールする要素が多くなってきます。そのためキーによって、楽器の鳴りが良かったり悪かったりします。ちなみにギターなども♭系のキーになると演奏しにくくなるのは、運指による理由もありますし、開放弦が使いにくくなるため、響きがややクスんでしまうという事態も想像できますね。

例えば、現在使われているクラリネットには、B♭のキーに最適化されたもの（B管：ドイツ語読みで「ベー管」といいます）と、A（同じく「アー」管）のキーに最適化されたもの、あるいは小型のE♭（Es管「エス管」）のキーに最適化されたものがあります。いずれも共通の運指で、それぞれのキーの音階や曲が演奏しやすく、音質も良好になるように設計されています。

ホルンなども、かつてはもっと楽器の仕組みがシンプルだったために、曲に合わせて、いろんなキー（調性）のものが作られて使われていましたが、現在では、楽器も改良が進み、Fのキーに最適化されたもの（F管）がメインになっています。

このような背景があるので、その楽器のキーに合わせて楽譜を用意していた歴史が伝統・慣例として、現在まで残っています。ただし近現代では、スコアの譜面は実音（実際に鳴るピッチ）で書いて、演奏用のパート譜は移調譜にするといった試みも行われています。

CamScannerでスキャン

あとがき

楽譜は、音楽の「設計図」と言えるでしょう。音楽を聴いたりする分には楽譜は必要ありませんが、その音楽に入り込んで、自分で演奏してみたり、手を加えたりする時には、おおよその設計図が必要になってくるのではないかと思います。それはその音楽を創作する側の立場に立って、楽譜を通じて、より深く「考えたり」「味わったり」することができるということです。

パソコンの普及によって、文章を手書きすることが少なくなってきたように、楽譜もパソコンのソフトを使って作られることが多くなっています。それでも文章ならば、あらかじめ文法を意識しながら書き進めますが、楽譜の場合は、基本的なルールや知識をもたないまま、ソフトの機能に沿って疑いもなく作成された楽譜が世の中にはびこっていることに、いくらかの懸念を持っています。本書を通じて、わずかでも、そのような現状に歯止めがかけられればといういいなー、という、ちっぽけな野望も感じとっていただければ、苦労は報われます。

それでは皆様、これからも素敵な音楽ライフを！

佗美秀俊

CamScannerでスキャン

付録

ここからは付録コーナーになっています。
確認したいことや、わからない用語があった場合、
こちらのページもご利用ください。

付録コーナーの内容

- 楽譜の書き方と基本的なルール …………… 147
- よく使われるコードネーム一覧 …………… 158
- 楽譜でよく使われる用語集 ………………… 170
- 索引 ……………………………………………… 173

CamScannerでスキャン

付録1

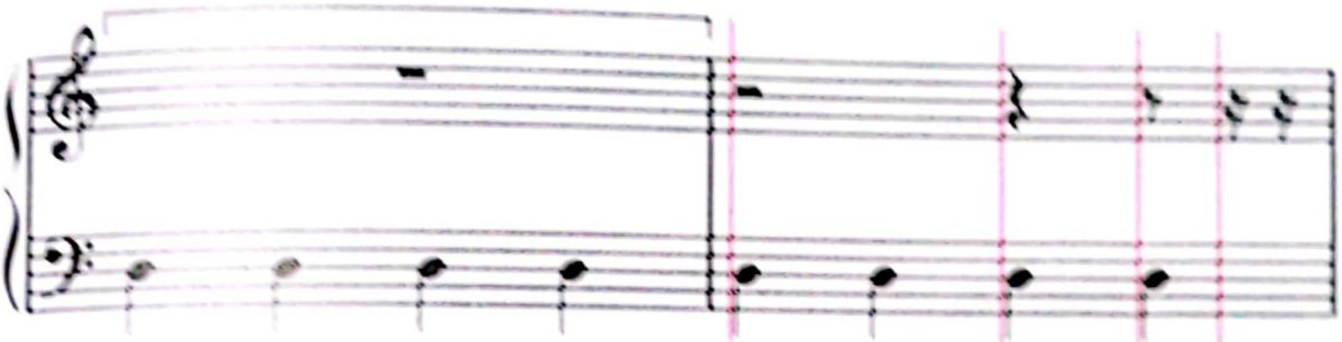
楽譜の書き方と基本的なルール

この付録では、手書き、あるいはパソコンのソフトを使って、
楽譜を書いたり作成したりする時に必要な基本的なルールをまとめておきます。

1 音符／休符の配置のルール

●全休符と他の休符

全休符だけは小節の中央に配置、それ以外の休符はそれぞれの拍の開始位置に置かれます。



楽譜ソフトの「弱起（アウフタクト）」の設定によって、下記譜例の上側のような配置になっているケースが見られますが、これはNGです。

✕

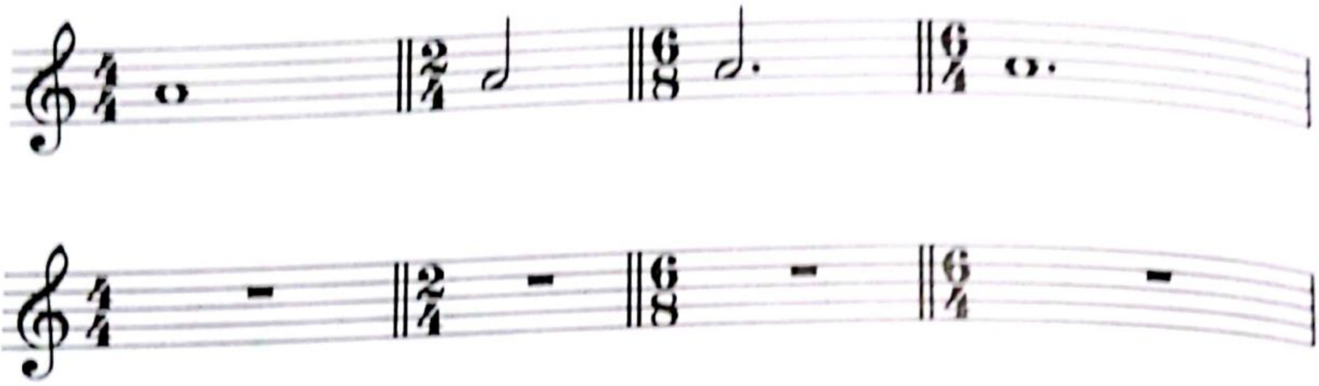
休符は音符と同じ位置に

○

●全音符と全休符

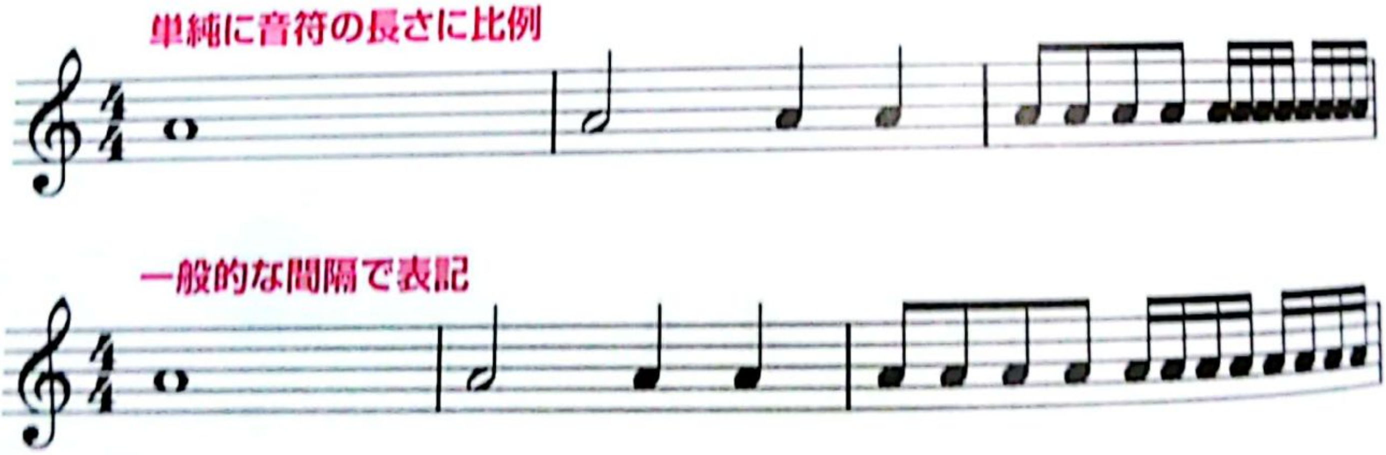
全音符は「4拍の長さ」として使われるのに対して、全休符は「1小節休み」として使われることが多く、特別な意味を含みます。

単なる「1小節休み」的な意味合いが強い場合でも、休符の1小節の左右幅は、音符の長さに対応させて伸び縮みさせる必要があります。



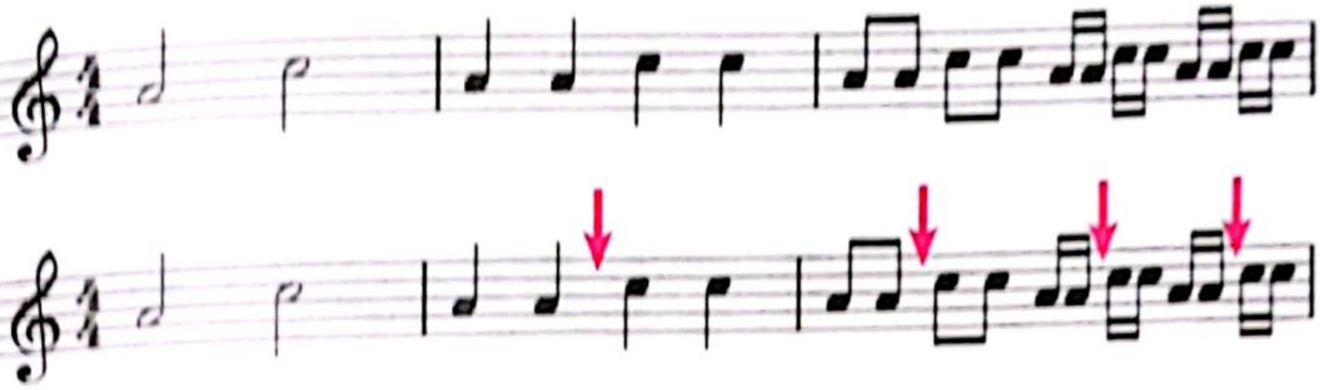
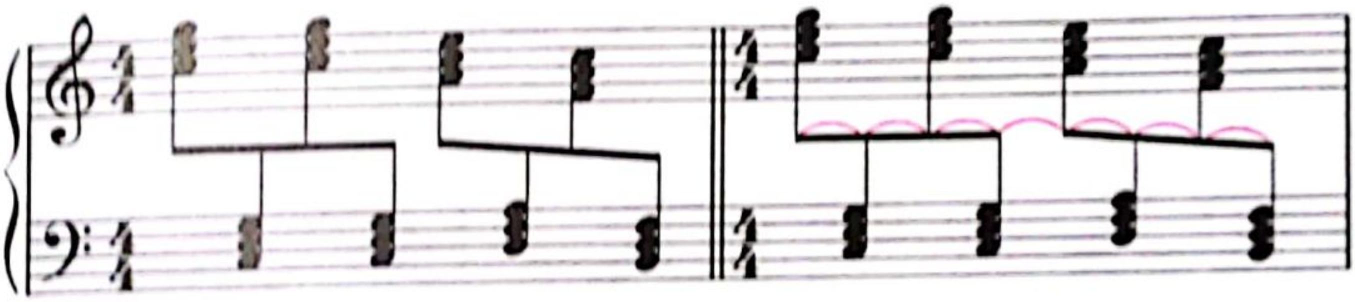
●音符のスペーシング

音符同士の間隔を「スペーシング」といいます。もちろん音符の長さによって、音符同士の間隔は変わりますが、音符の長さが2倍だからといって、単純にその間隔を2倍にしないところに「楽譜の妙」があります。

下の譜例上段は音符同士の間隔を単純に音符の長さで比例にしたもの、譜例下段は一般的な間隔で表記したスペーシングです。

CamScannerでスキャン

●背合わせのスペーシング

符頭が均等に並んでいても、符尾の向きによる目の錯覚で、同じ間隔に見えないことがあります（譜例上段）。

例えば楽譜ソフトを使う場合もソフト任せにしないで、このようなところまで意識して、音符を手動で調整して配置することが、譜面の達人／職人的なテクニックの見せどころになります（譜例下段）。

例えば、大譜表で上下の五線をまたいで配置される時にも、同様の間隔調整が必要なことが多いです（左が修正前、右が修正後）。

付録

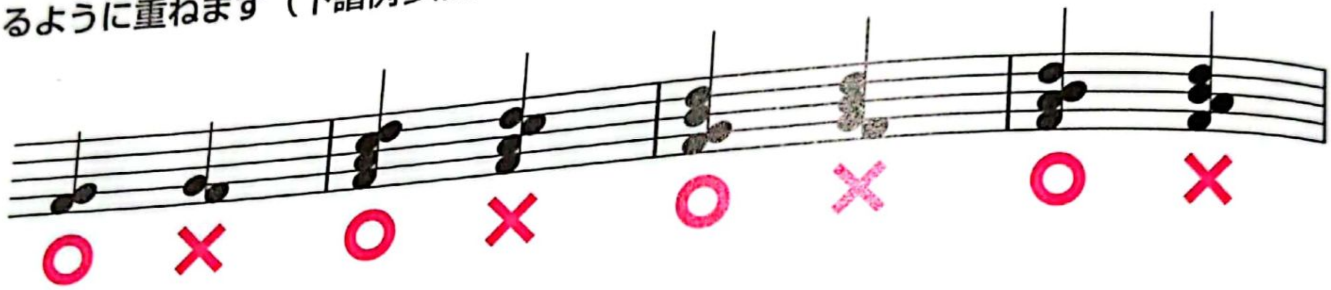
CamScannerでスキャン

② 符頭／休符のルール

●符頭のズラし方

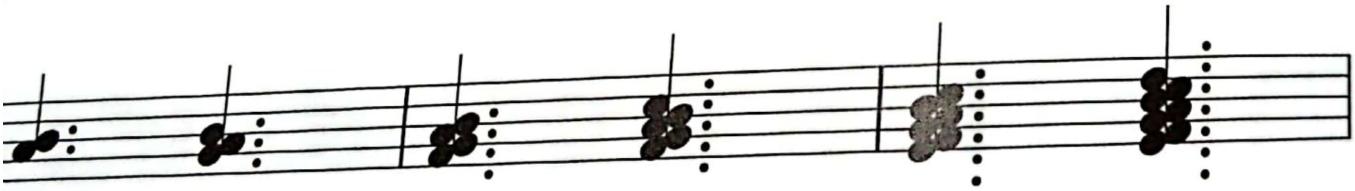
同時に複数の音を演奏する「和音」を書く時に、線と間が隣り合った高さの音は、符頭をズラして書く必要があります。

この時にズラし方で迷うことがよくあります。符頭のデザインが「右上がりの楕円」になっていることを考えて、隣り合ってズレる符頭同士が、符尾を挟んで右上がりに接触するように重ねます（下譜例参照）。



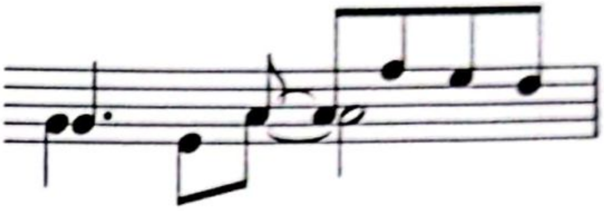
●付点の数

付点の位置はレッスン27で解説したように「間」の高さに書かれます。和音になった場合、符頭の数と付点の数を揃えなければいけませんので、符頭が多くなった場合、下記のように例外の高さの付点が出現します。



●1本の五線に2つ以上のラインが入る時

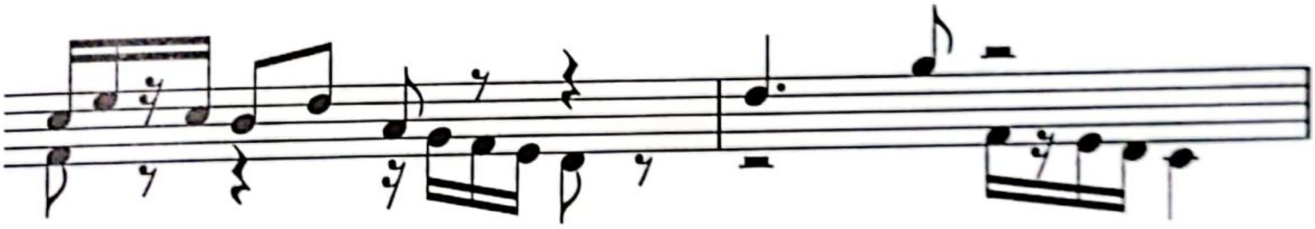
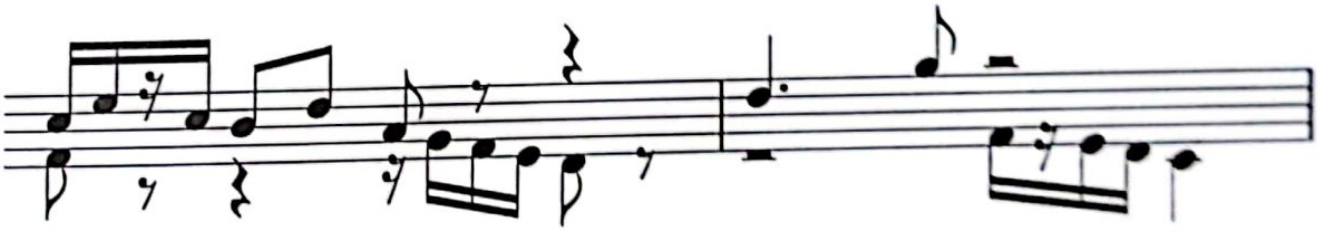
黒い符頭同士（あるいは白い符頭同士）が重なる時には、そのまま重ねて構いませんが、どちらかが付点アリの時には、ズラして配置しなければいけません。もちろん、黒い符頭と白い符頭の時も重ねられませんので、ズラして書きます。

どちらを基準にしてズラかは、読みやすさを重視しましょう。右の譜例は、1拍目なら付点アリを右に配置したほうが符頭が離れなくてすみますし、3拍目なら2分音符を右にズラしたほうが、8分音符のリズムの均等が崩れなくてすむということです。

○

×

●休符の例外の高さ

1本の五線に2つ以上のメロディラインが入る時に、休符の標準の高さがズレることがありますが、この時も「間」の単位で垂直にズラしていきます。

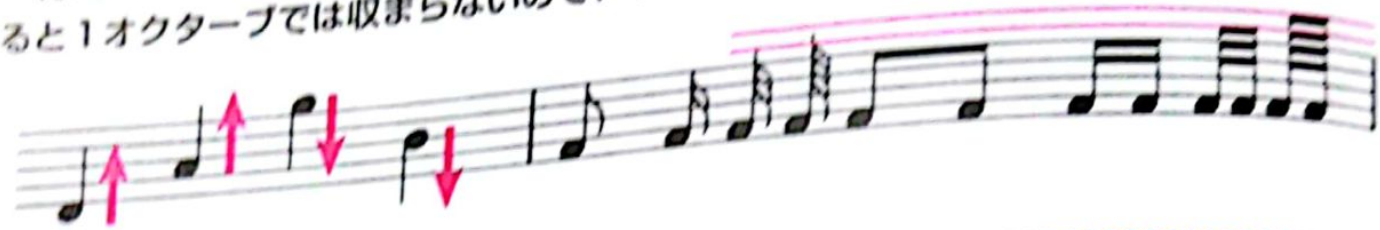
この時に楽譜ソフトによっては、線上の位置（半間の高さ）に配置されてしまうもの（譜例下段）もありますので注意が必要です。

○

×

付録

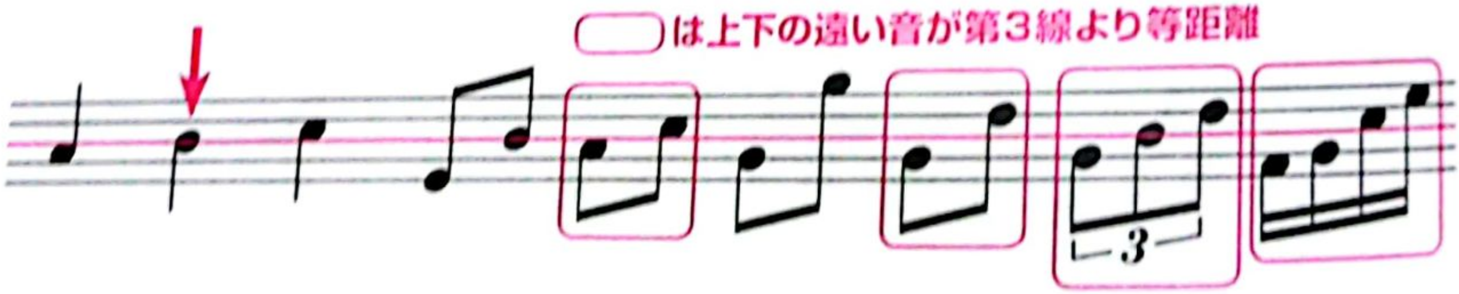
3 符尾／連桁のルール

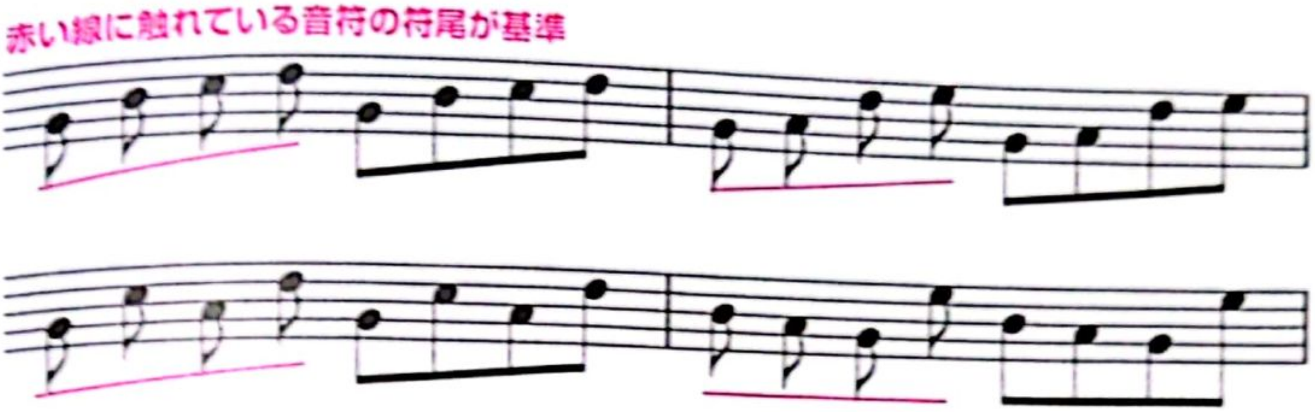
●符尾の長さ

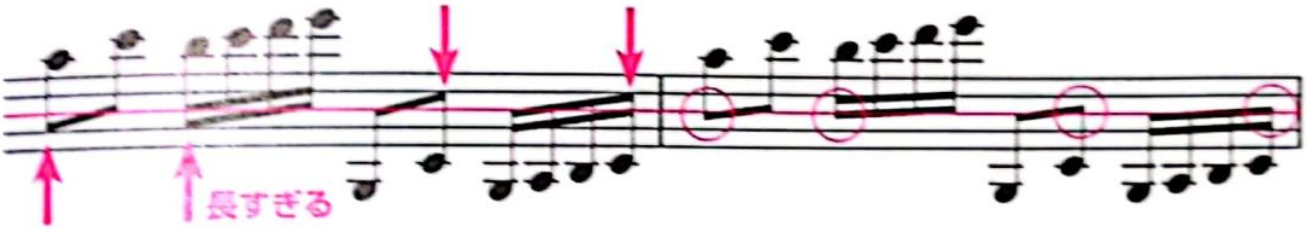
符尾の長さは1オクターブの長さが基準になります。ただし、旗や連桁が3つ以上になると1オクターブでは収まらないので、増えるごとに1間分長くしていきます。

●加線の音の符尾

しかし上下に「加線」がある音などは、1オクターブではなく、五線譜の第3線に接するまで延長するのが約束事です。低い加線の装飾音符なども、短すぎると読みにくいので、第2線まで延長すると収まりがよくなります。

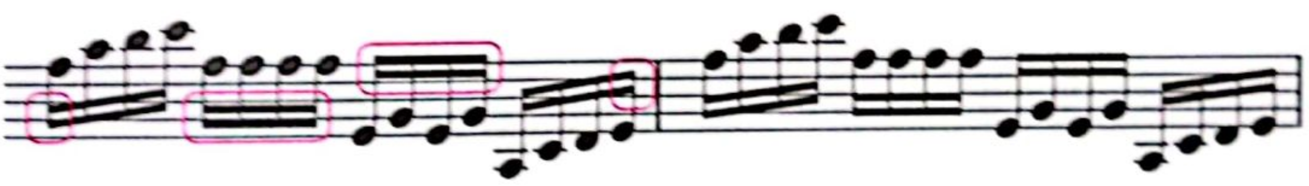
●符尾や連桁の向き

1本の五線に1つのメロディライン（単声部）の場合は、第3線を基準に符尾の向きが変わります。第3線は上下どちらでもよいという記述がある本も多いですが、近年では「下向き」に統一されるのが一般的です。同様に、連桁で繋がれているパターンも第3線からの距離が遠い音を基準に向きが決まり、等距離のパターンは「下向き」となります。

●連桁の傾き

基本的には、両端の音符を直線で結んだものが連桁の傾きになります。その際に、両端に挟まれた音符の符尾の長さが1オクターブに満たなくなってしまうのは避けなければなりませんので、その場合、符尾が満たなくなる可能性がある音符を基準として、傾きを減らすか、水平に連桁を引くことになります。

●長すぎる符尾

上下に加線がつく音が含まれる連桁で、第3線に延長するルールを適用したため、一方が長すぎる結果になることがあります。楽譜ソフトなどでよく見られる現象ですが、これはNGです。符尾の長さや連桁の傾きを減らすことによって修正する必要があります。

●連桁と五線との隙間

16分音符以下の連桁で、五線と交わる時に不要な隙間ができることがあります。

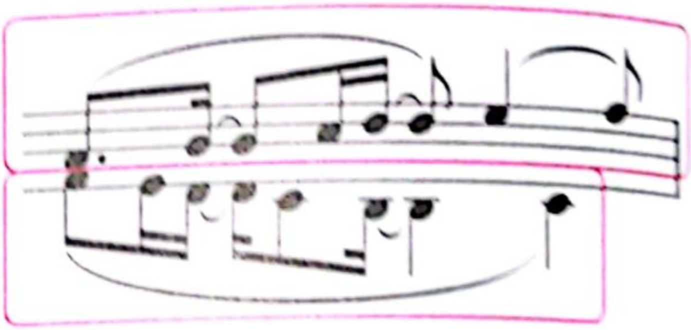
これも楽譜ソフトなどでよく見られる現象ですが、やはり連桁の長さや傾きを調整して、見やすくすることが必要です。

CamScannerでスキャン

④ タイ／スラーのルール

●タイもスラーも符頭側につきます

符尾の反対側、つまり符頭側につけるのが基本です。連桁や符尾が上下入り混じっている時のスラーなどは「上向き」に統一されるケースが多いです。

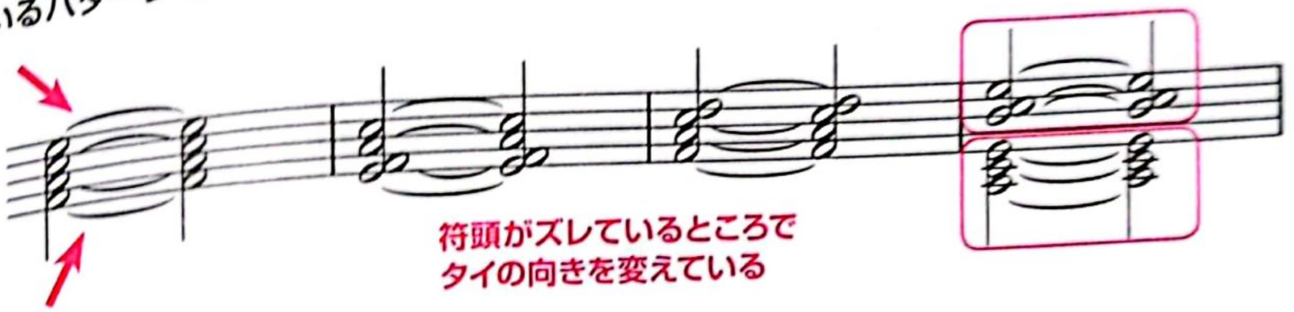
●1つの五線譜に2つ以上のラインが入る時

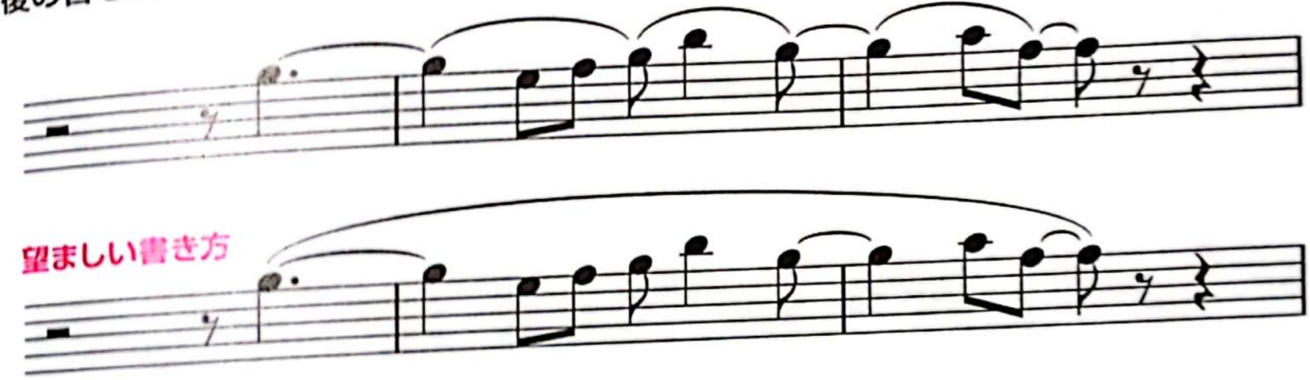
タイもスラーも、それぞれのラインごとに、上向き、下向きで統一されます。

●和音の時のタイの向き

2つの音の和音では、タイは上下に1つずつに反対向きにします。3つの音の和音では、第3線を基準に上向き下向きを決めます。ただし、音の距離が離れているケースでは、「近い音」と「遠い音」で、向きを揃えるのもよいかもしれません。

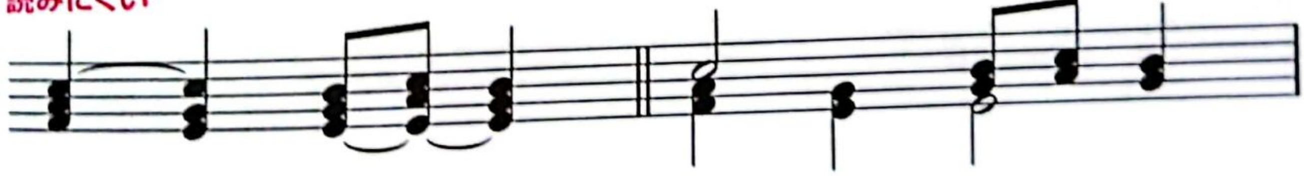
付録

4つの音の和音では、タイは上下にそれぞれ2つずつ反対向きで揃えますが（1小節目）、隣り合った音で符頭がズレているケースでは、ズレている符頭同士で向きを分けることもあるかもしれません（2〜3小節目）。

1つの五線に2つ以上の和音の声部が入る時、つまり上向きと下向きの符尾が分かれているパターンでは、タイも声部ごとに上向き、下向きでまとめられます（4小節目）。

●タイとスラーが重なるところ

スラー同士やタイとスラーの始点・終点が一致するところでは、原則として、タイの前後の音もスラーの中に含めて書くのがよいでしょう。

●和音の一部がタイで繋がれているケース

和音の一部の音だけが、次の和音の共通音とタイで繋がれている表記（譜例左）は、できれば避けたいところです。このような場合は、譜例の右のように2つの声部を使って書けばスッキリと見やすくなります。



5 臨時記号／調号のルール

●和音につく臨時記号

縦に並べて書ける臨時記号は、原則同じ位置に書きます。重なって縦に並べられない臨時記号は左側にずらして書くのが基準となります。まず先に上の音に臨時記号をつけて、下の音に向かって臨時記号をつけていくと、比較的うまく収まります。

●1本の五線に2つ以上のラインが入る時

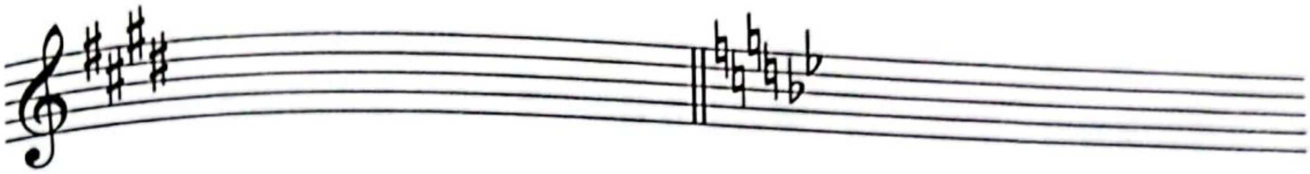
このような例では、上のラインと下のラインの音が、同じタイミングに演奏すべき音としてとらえにくくなりがちなので（譜例左）、音符と臨時記号はやや離れてしまいますが、符頭を近づけることを優先して配置します（譜例右）。

左側の臨時記号はピアノのようにひとりで演奏する時には不都合はありませんが（譜例左）、上下のメロディラインを別の演奏者が担当する場合には、それぞれのラインごとに臨時記号をつけるべきです（譜例右）。

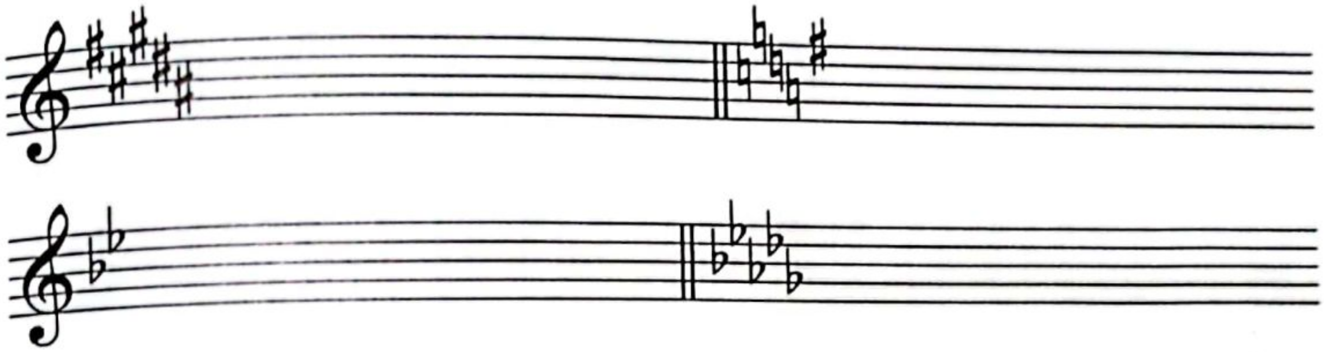
CamScannerでスキャン

●転調する時の調号

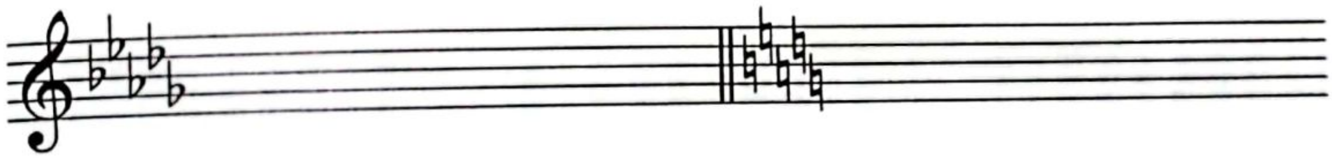
シャープからフラット、あるいはフラットからシャープの調号に変わるところでは、複縦線を挟んで、前の調号をいったんナチュラルでリセットしてから、新しい調号を書きます。



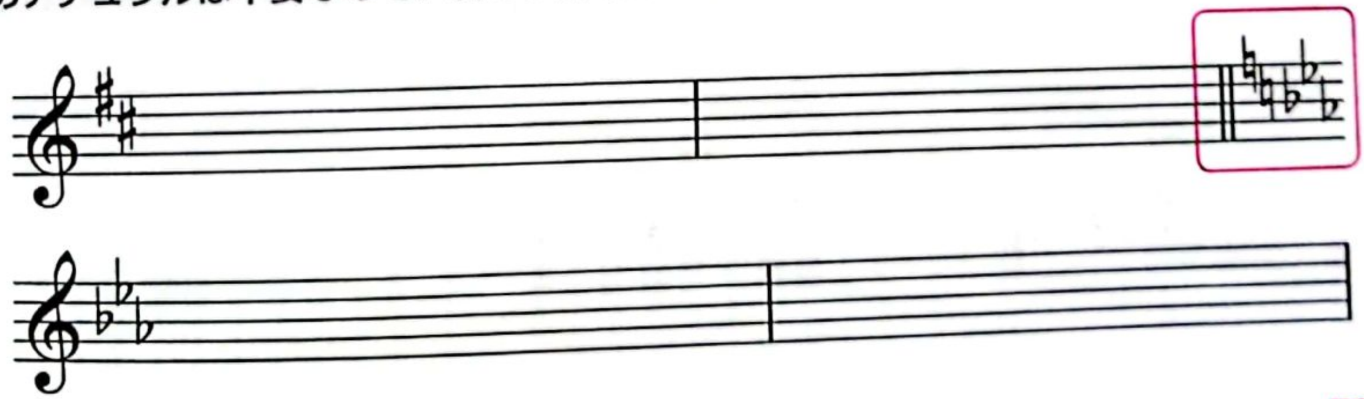
同じシャープ同士やフラット同士の調号の場合、数が減る時には、減る箇所にナチュラルを付けて、残りの新しい調号を書きます(譜例上段)。増える時は、そのまま新しい調号を書くだけです（譜例下段）。



調号にシャープ・フラットがつかない「Cメジャー・Aマイナー」に転調する時には、もちろんナチュラル表記が必要になります。

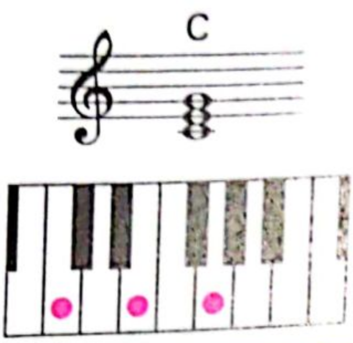


段末で転調する時には、そこに予告を書いておきます。次の段のはじまりではリセットのナチュラルは不要なので、新しい調号だけを書きます。

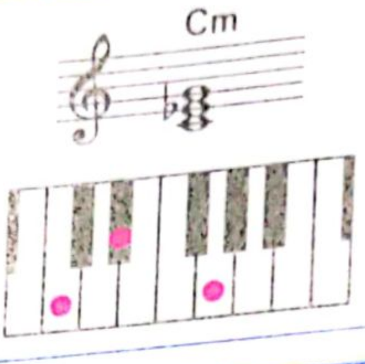


付録2 よく使われるコードネーム一覧

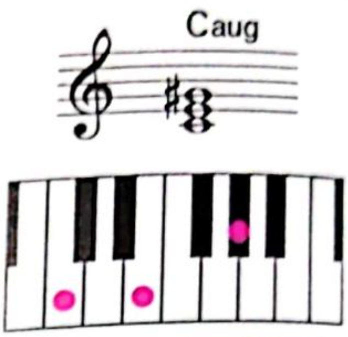
C



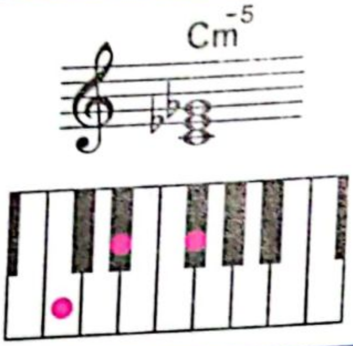
Cm



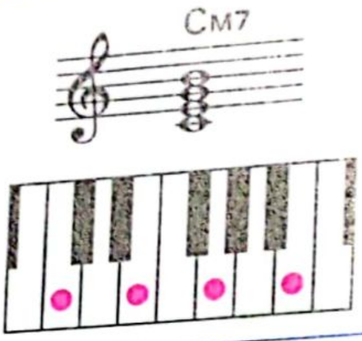
Caug



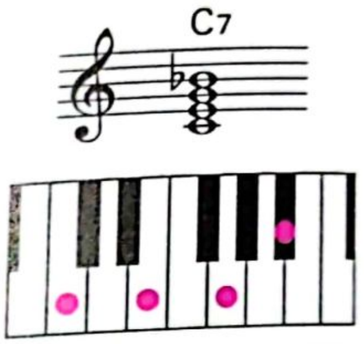
Cm^{-5}



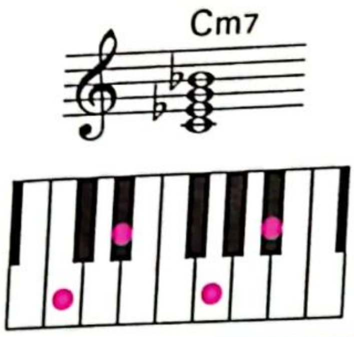
CM7



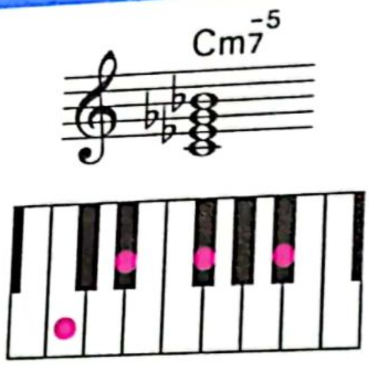
C7



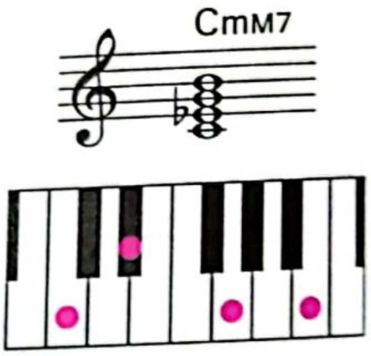
Cm7



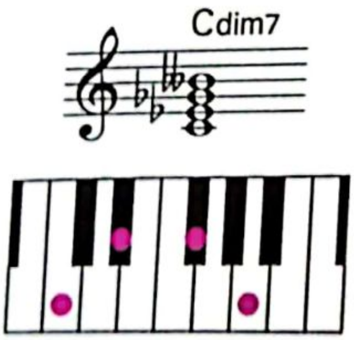
Cm7^{-5}



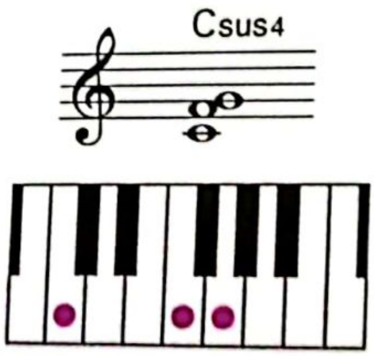
CmM7



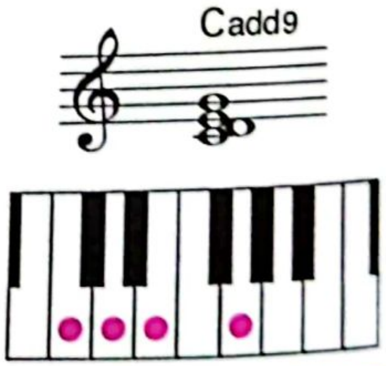
Cdim7



Csus4

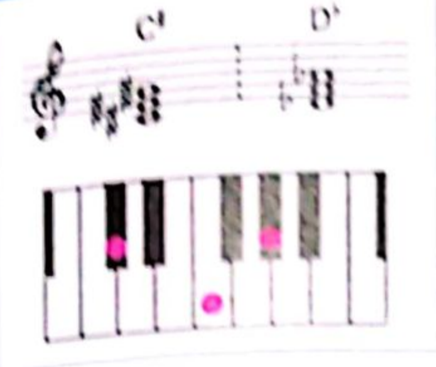
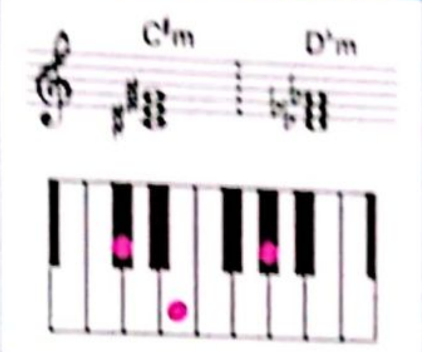


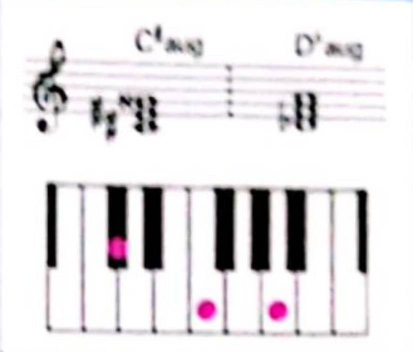
Cadd9



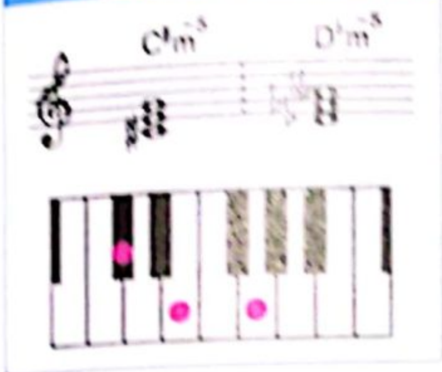
CamScannerでスキャン

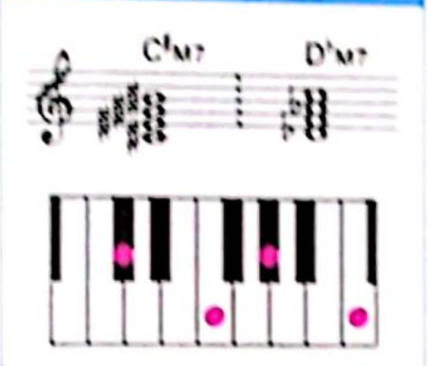
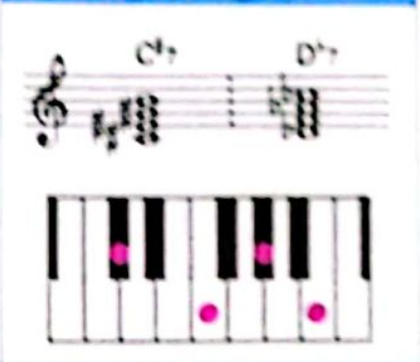
※[illegible]

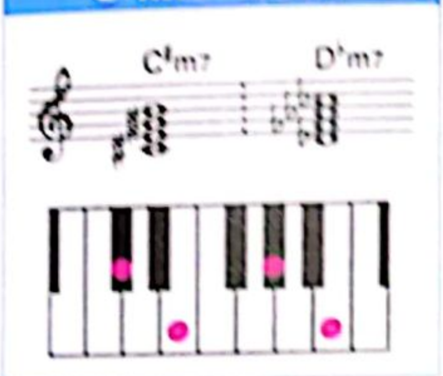
C♯ / D♭

C♯m / D♭m

C♯aug / D♭aug



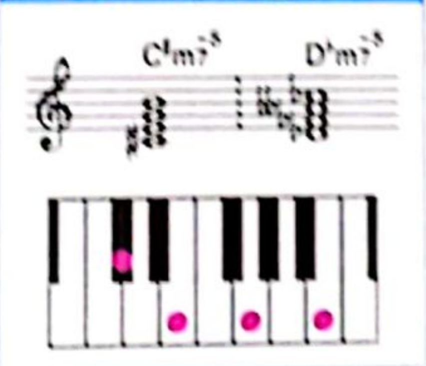
C♯m-5 / D♭m-5



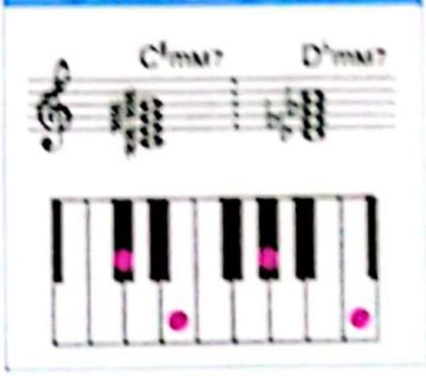
C♯M7 / D♭M7

C♯7 / D♭7

C♯m7 / D♭m7



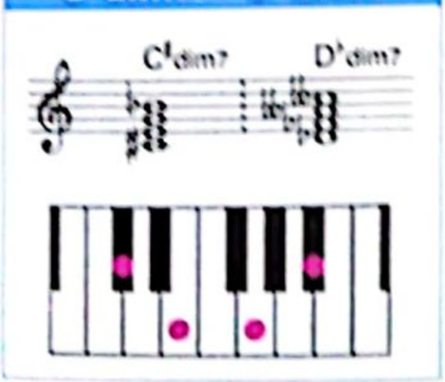
C♯m7-5 / D♭m7-5

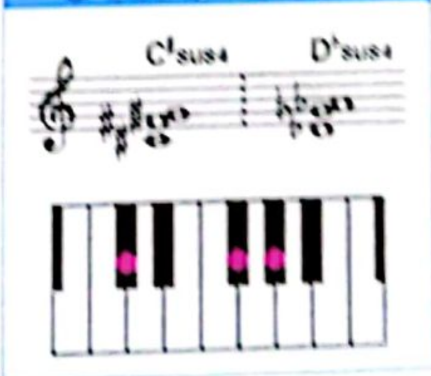
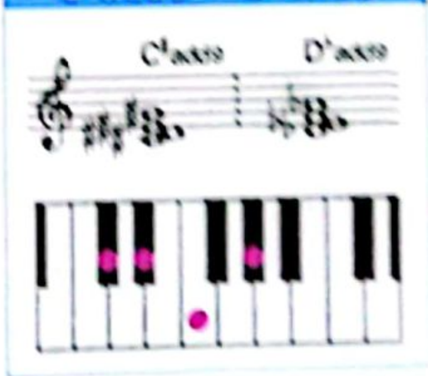


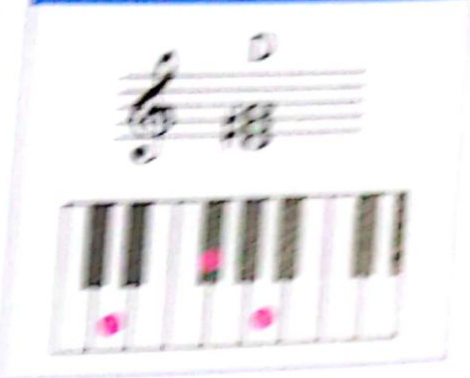
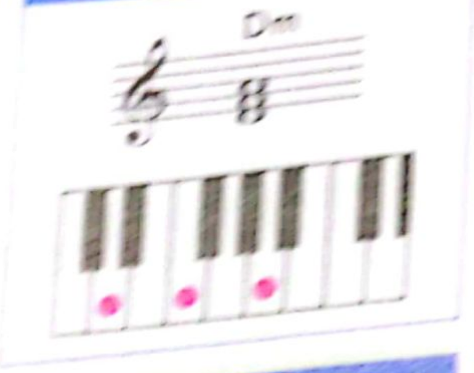
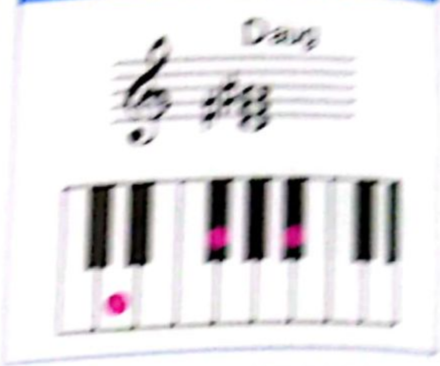
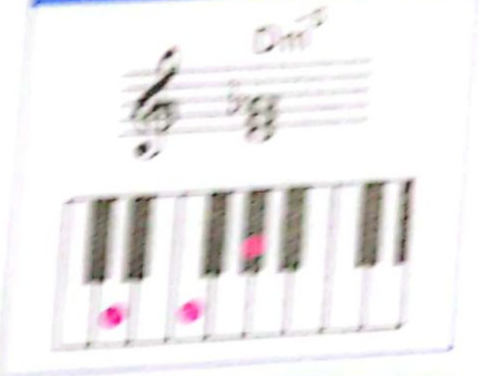
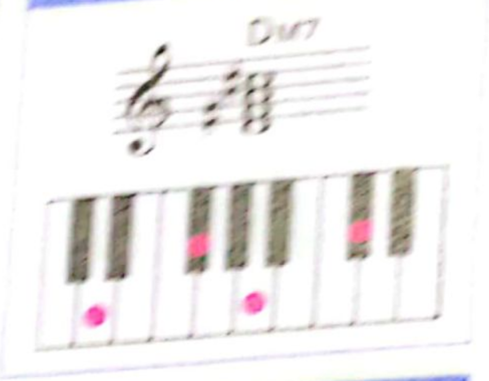
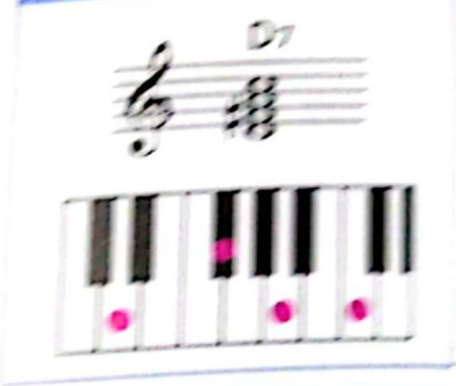
C♯mM7 / D♭mM7

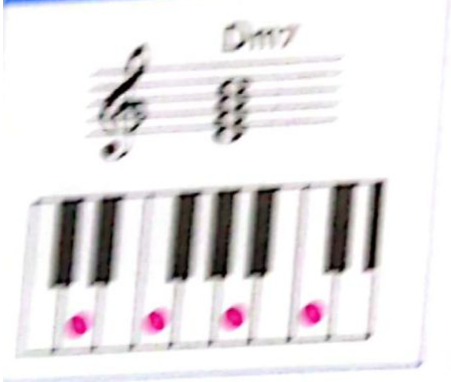


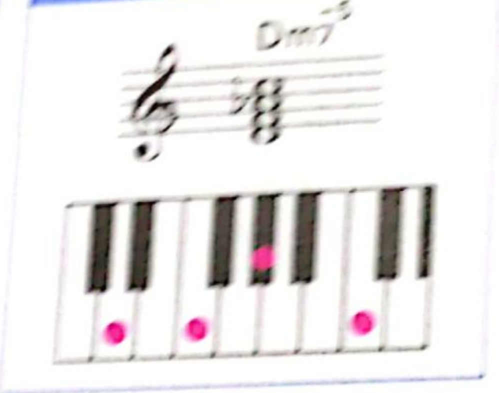
C♯dim7 / D♭dim7

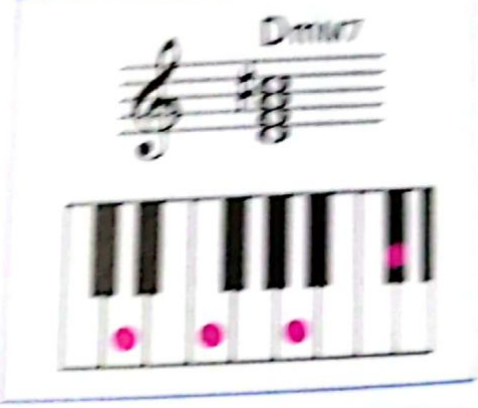


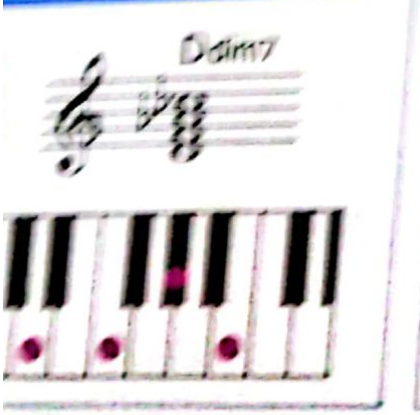
C♯sus4 / D♭sus4

C♯add9 / D♭add9

CamScannerでスキャン

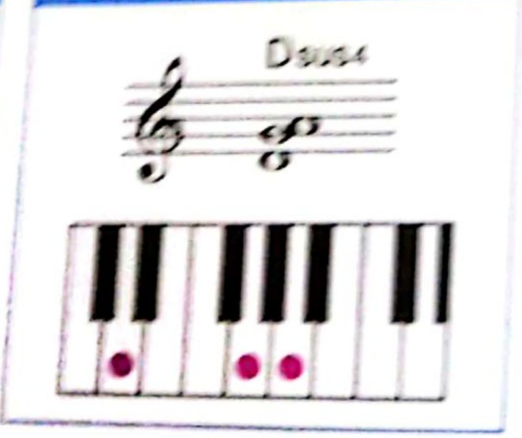
D

Dm

Daug

Dm-5

DM7

D7

Dm7

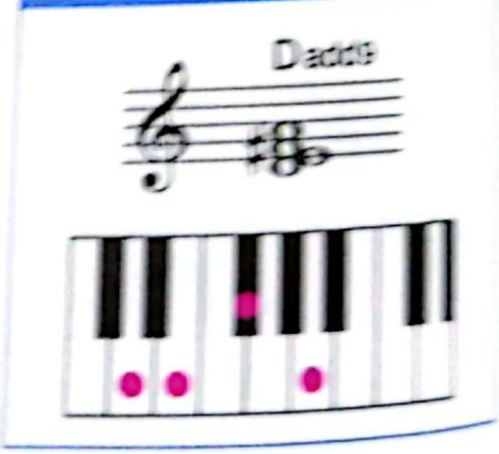


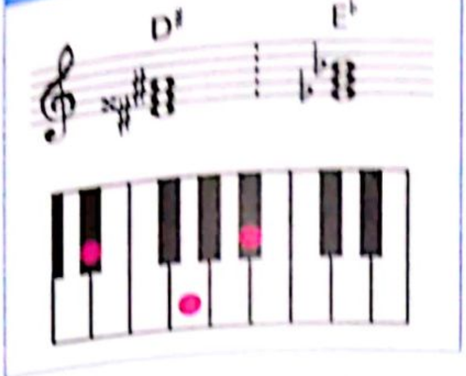
Dm7-5

DmM7

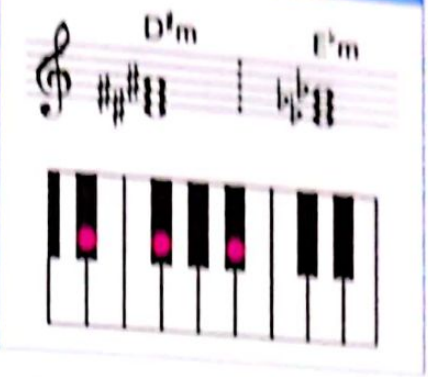


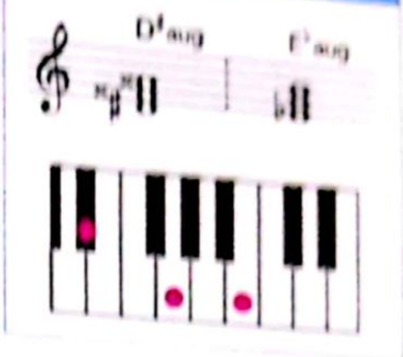
Ddim7

Dsus4

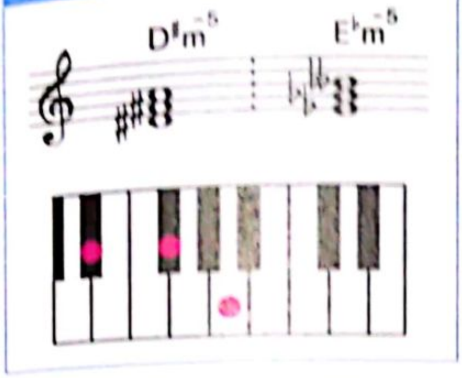


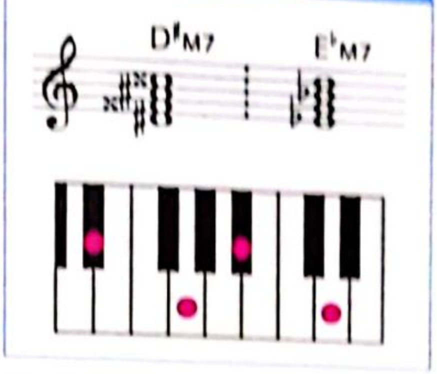
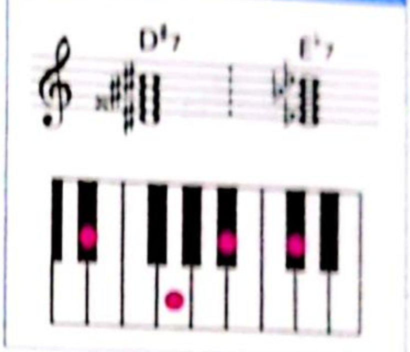
Dadd9

CamScannerでスキャン

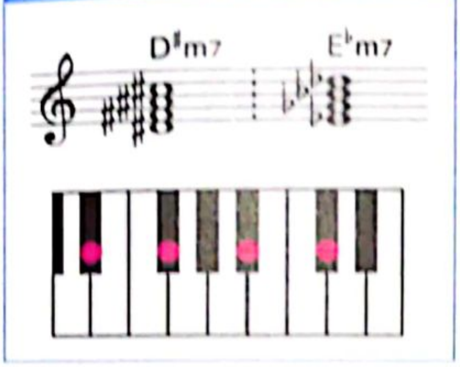
D♯ / E♭

D♯m / E♭m



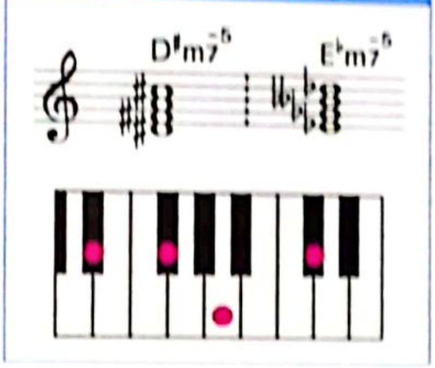
D♯aug / E♭aug

D♯m-5 / E♭m-5



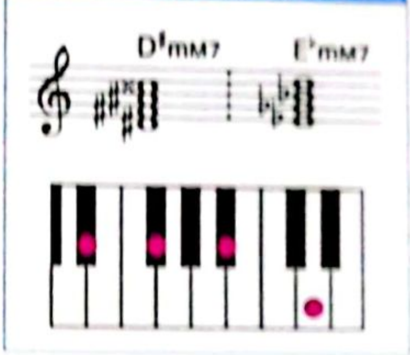
D♯M7 / E♭M7

D♯7 / E♭7

D♯m7 / E♭m7



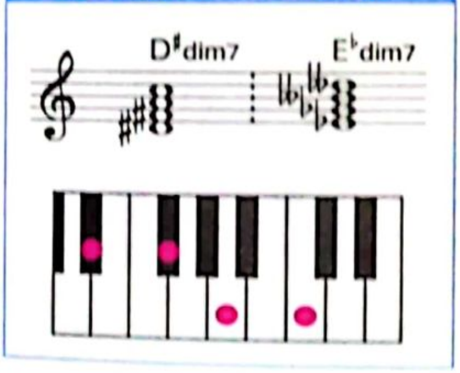
D♯m7-5 / E♭m7-5

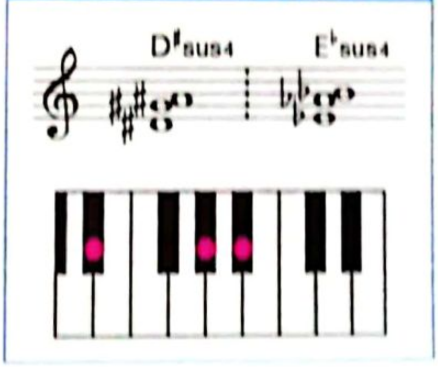


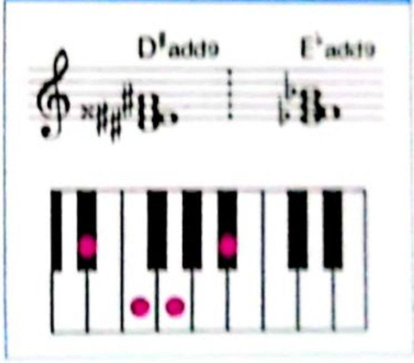
D♯mM7 / E♭mM7



D♯dim7 / E♭dim7

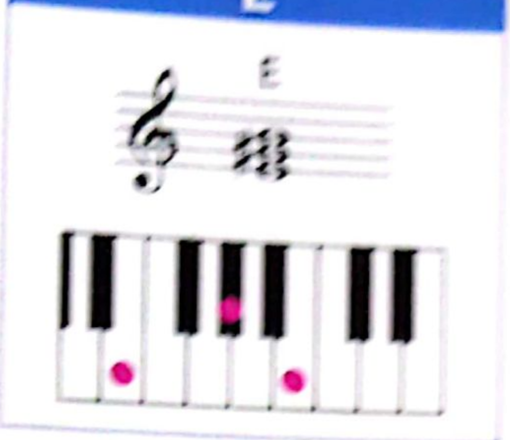


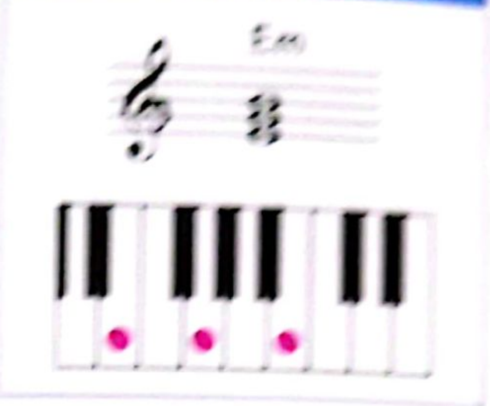
D♯sus4 / E♭sus4

D♯add9 / E♭add9

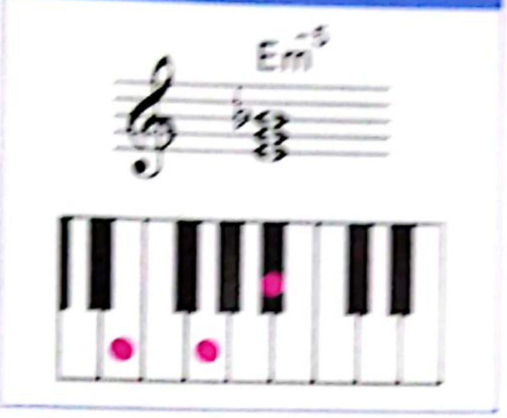
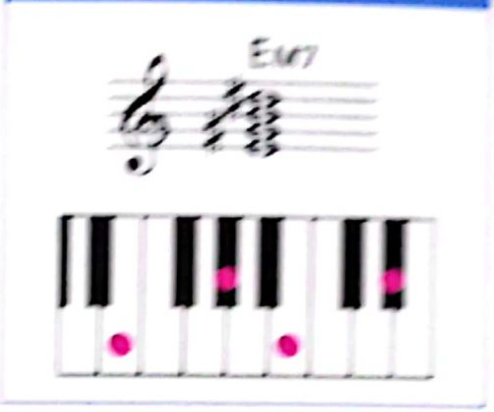


E

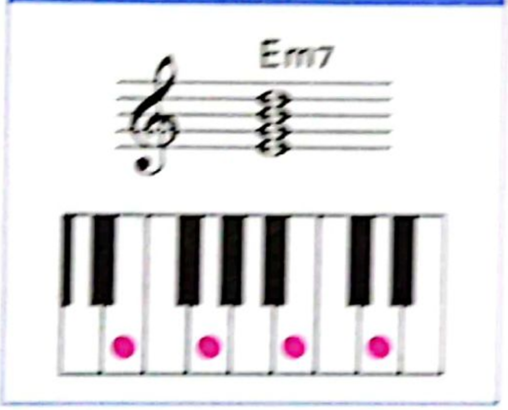
E

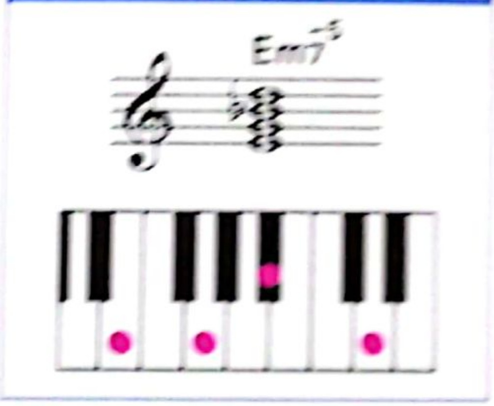


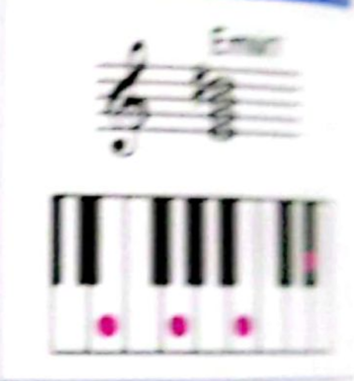
Em

Eaug

Em-5

EM7

E7

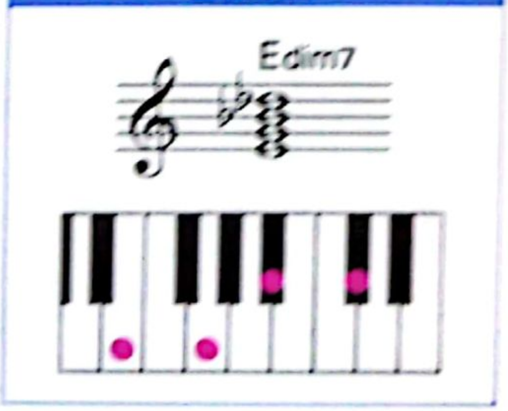
Em7

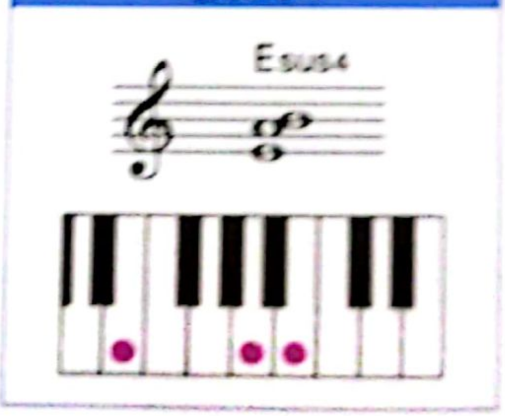


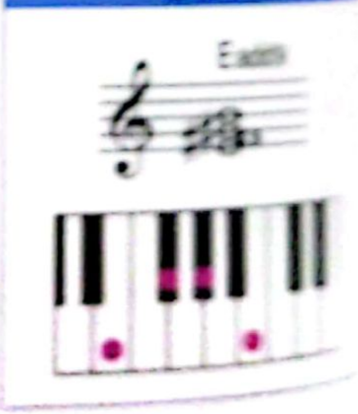
Em7-5

EmM7



Edim7



Esus4

Eadd9

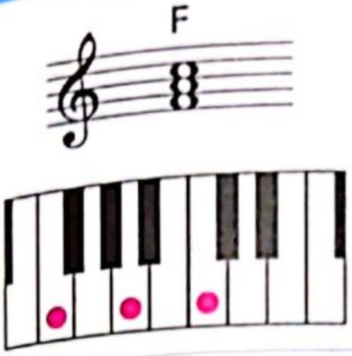


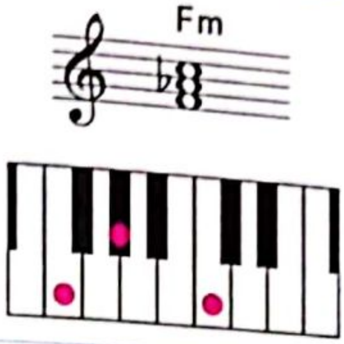
付録

※「-5」は「♭5」、そして「aug」は「♯5」あるいは「+5」と同じ意味です。
「M7」は「△7」や「Maj7」とも表記されます。
「dim」は4音の和音「dim7」と混同することを避けるために、
ここでは忠実に3音による和音として「m-5」の表記を採用しています。

F

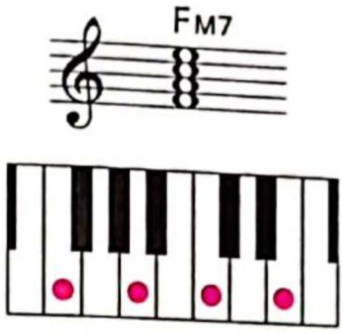
F



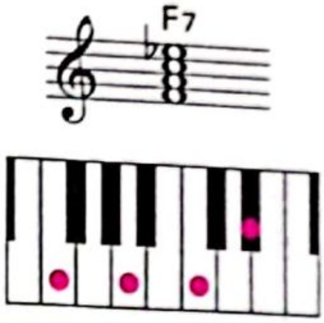
Fm

Faug

Fm-5

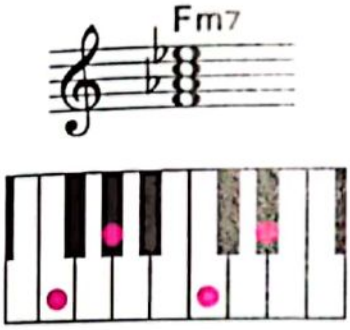
FM7



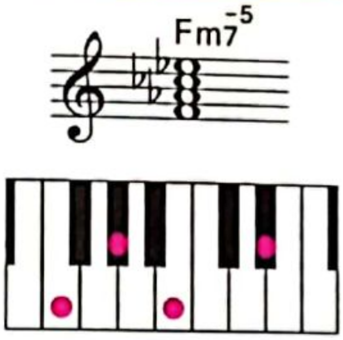
F7



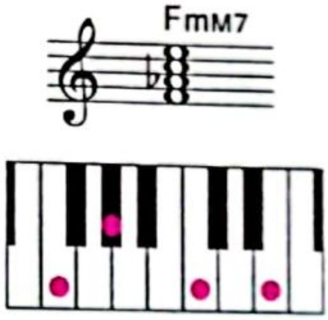
Fm7



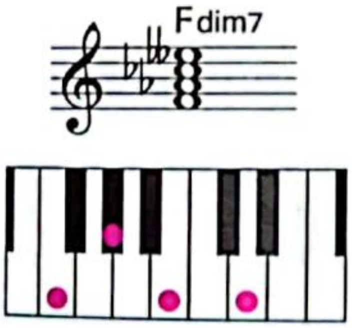
Fm7-5



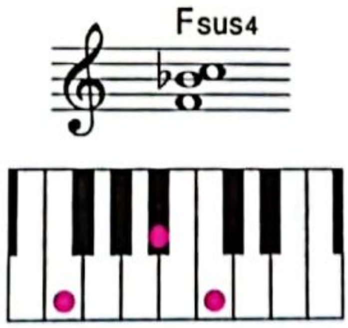
FmM7



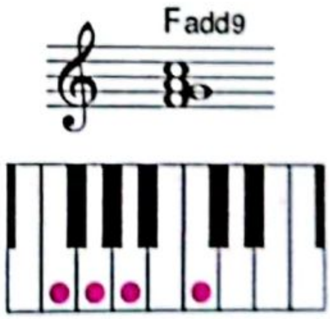
Fdim7



Fsus4



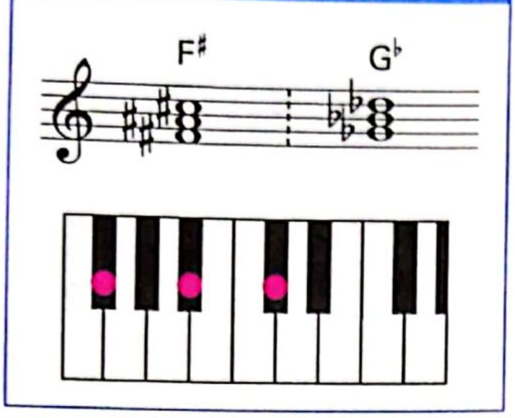
Fadd9



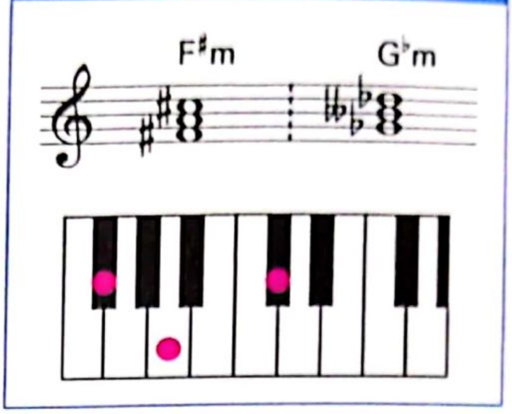
付録

CamScannerでスキャン

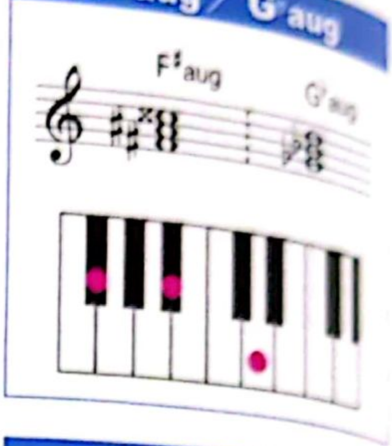
F♯／G♭



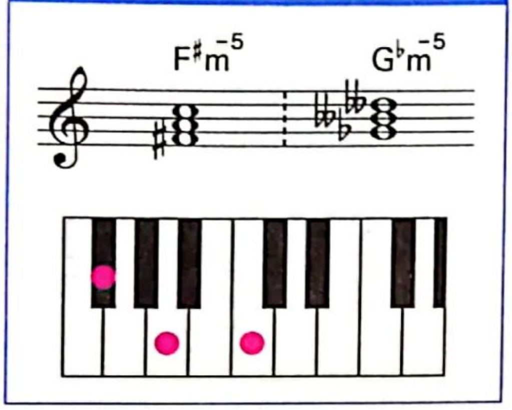
F♯m／G♭m



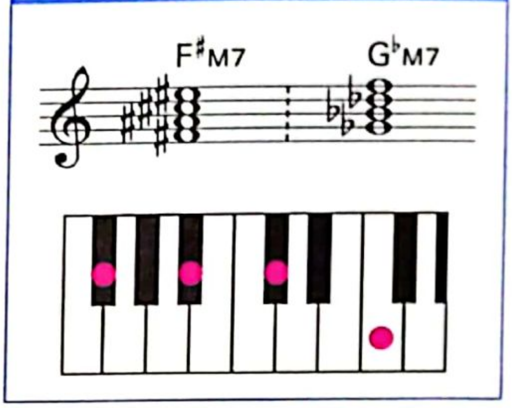
F♯aug／G♭aug



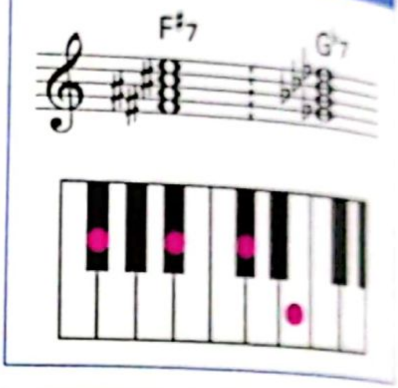
F♯m-5／G♭m-5



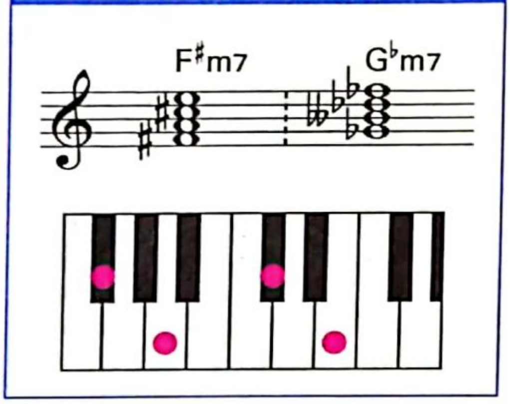
F♯M7／G♭M7



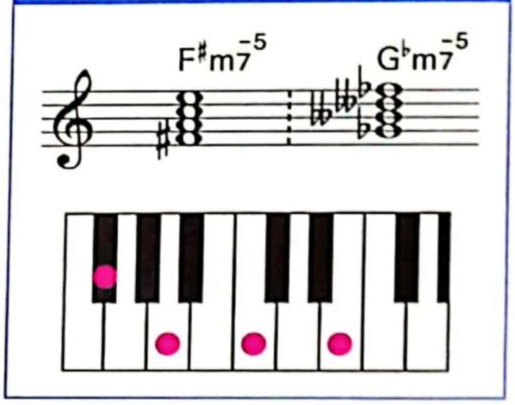
F♯7／G♭7



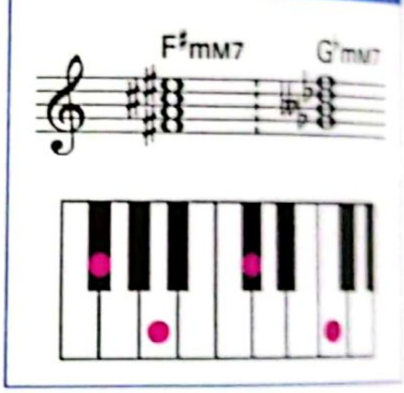
F♯m7／G♭m7



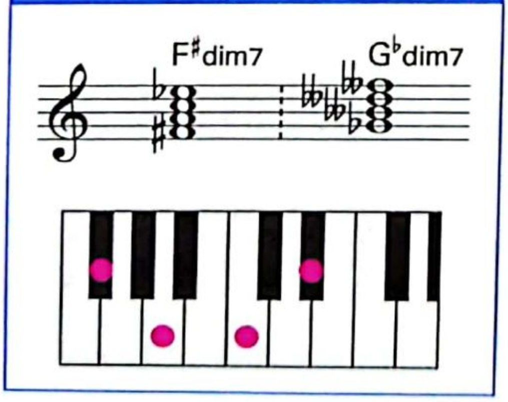
F♯m7-5／G♭m7-5



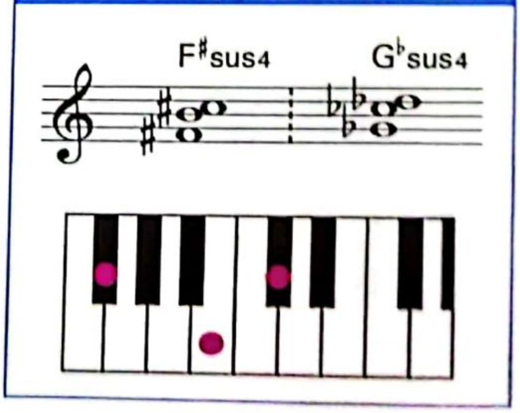
F♯mM7／G♭mM7

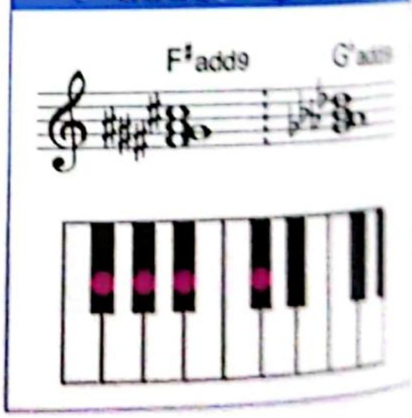


F♯dim7／G♭dim7

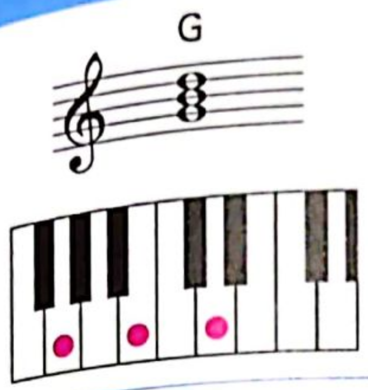


F♯sus4／G♭sus4

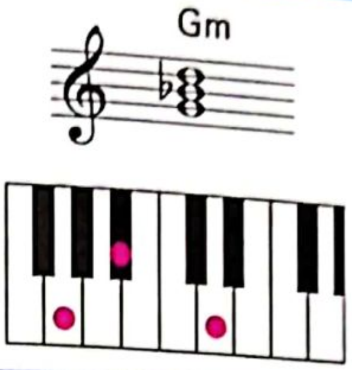


F♯add9／G♭add9

※「-5」は「♭5」、そして「aug」は「♯5」あるいは「+5」と同じ意味です。
「M7」は「△7」や「Maj7」とも表記されます。
「dim」は4音の和音「dim7」と混同することを避けるために
ここでは忠実に3音による和音として「m-5」の表記を採用しています。

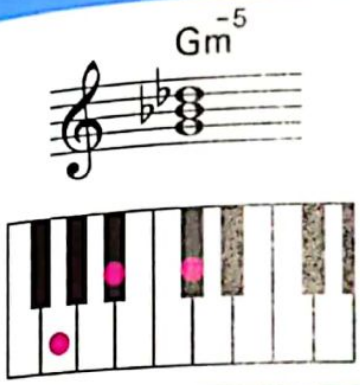
G

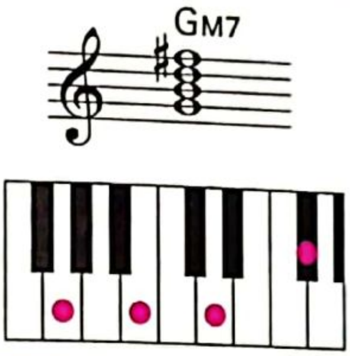


Gm

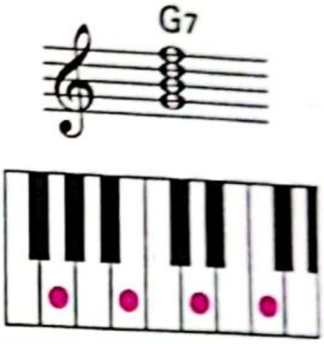


Gaug

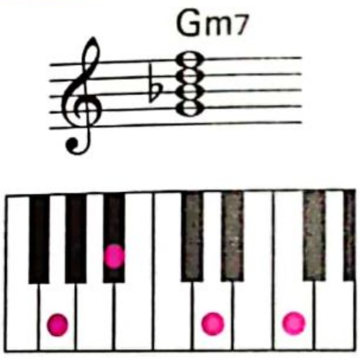
Gm-5

GM7



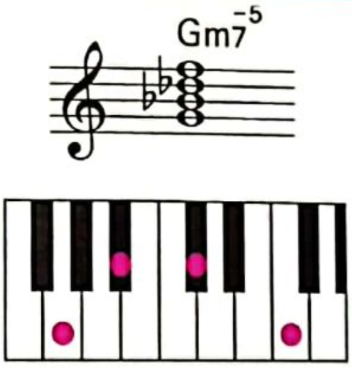
G7



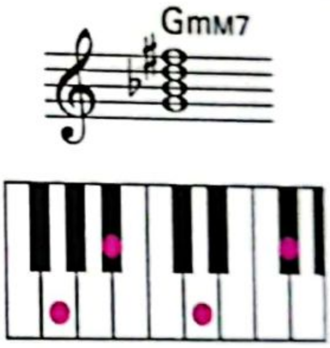
Gm7



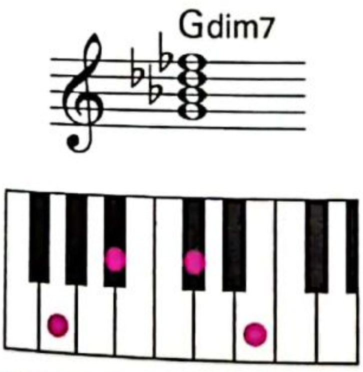
Gm7-5



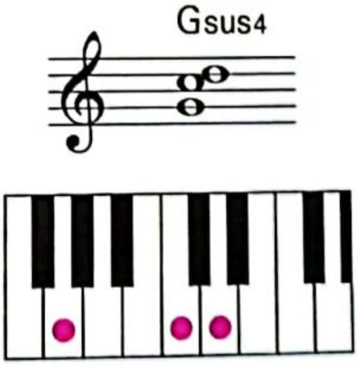
GmM7



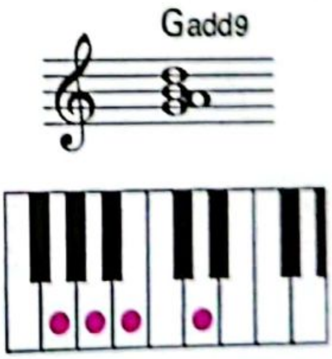
Gdim7



Gsus4

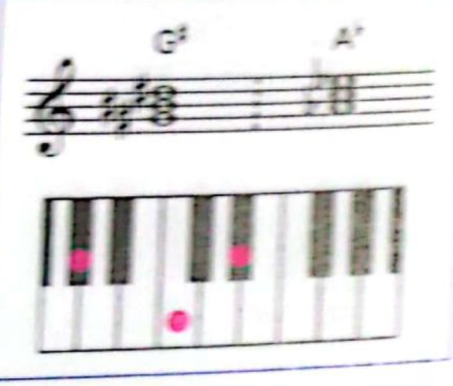


Gadd9

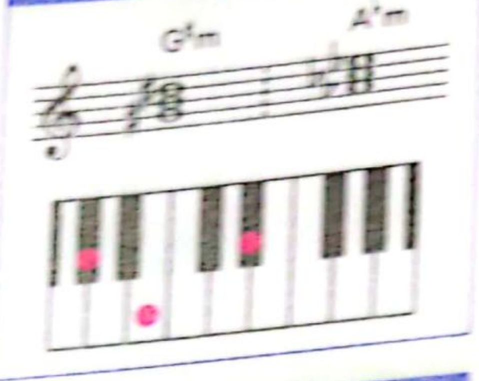


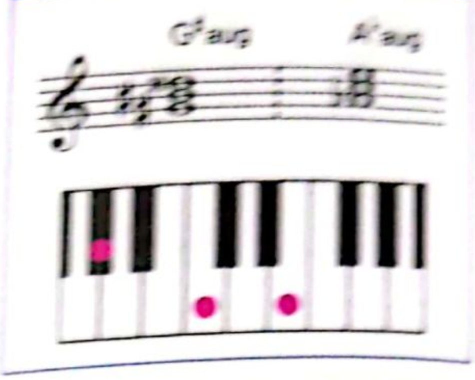
CamScannerでスキャン

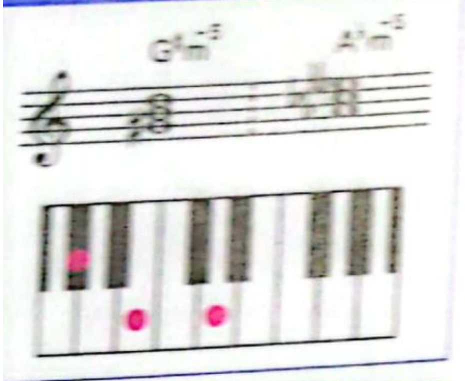
G♯ / A♭



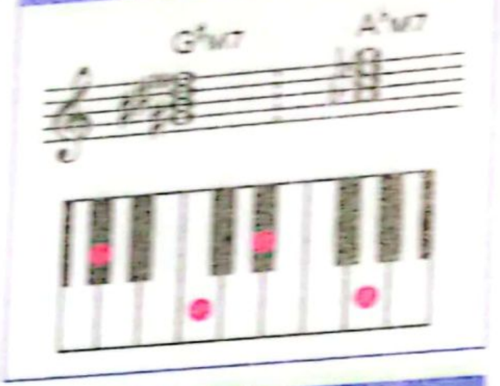
G♯m / A♭m



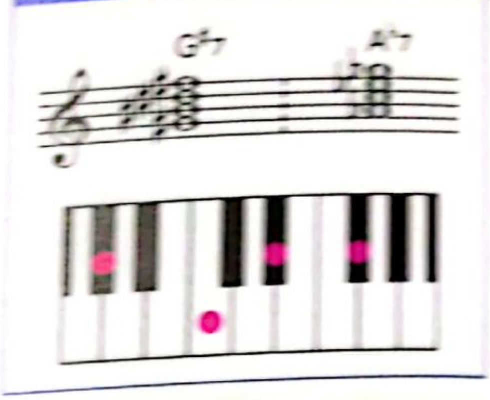
G♯aug / A♭aug

G♯m-5 / A♭m-5



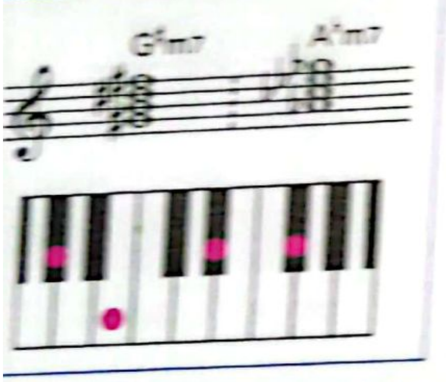
G♯M7 / A♭M7



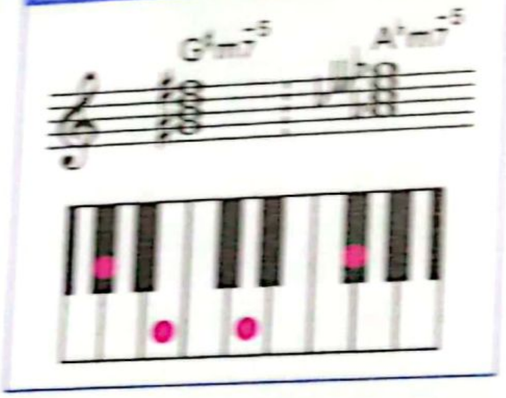
G♯7 / A♭7



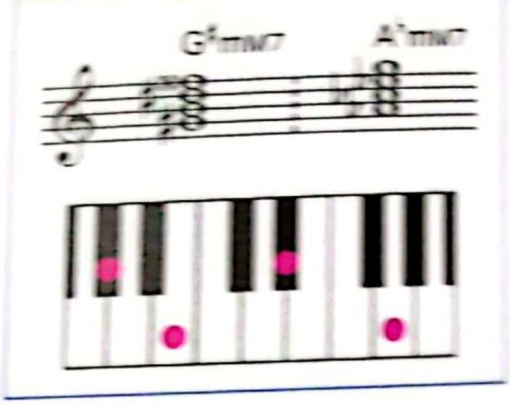
G♯m7 / A♭m7



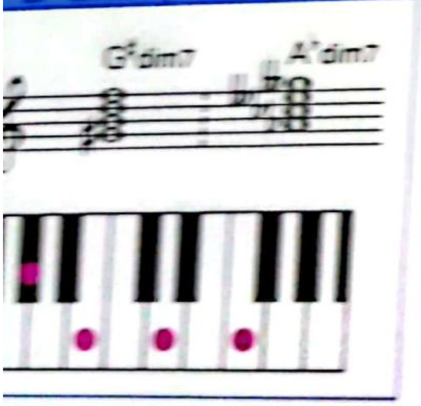
G♯m7-5 / A♭m7-5



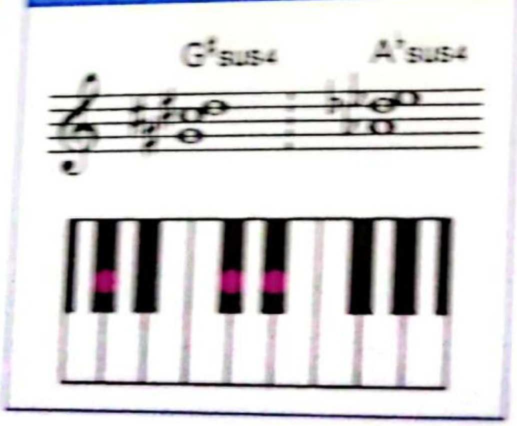
G♯mM7 / A♭mM7



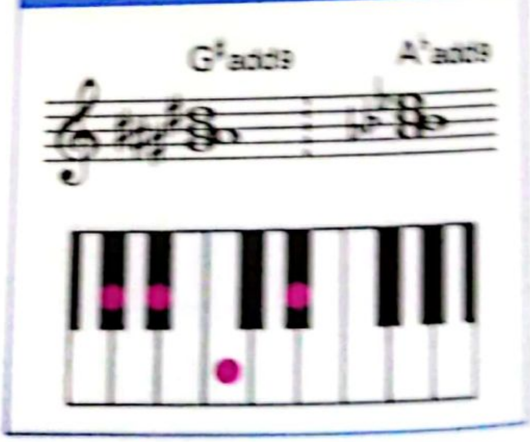
G♯dim7 / A♭dim7



G♯sus4 / A♭sus4



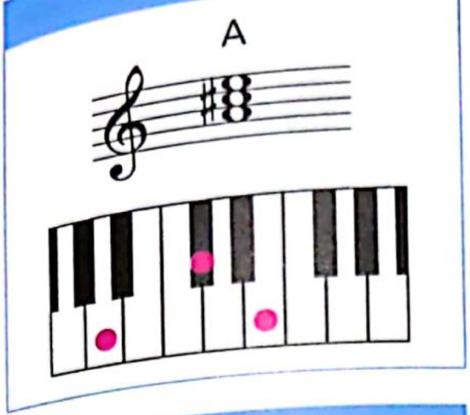
G♯add9 / A♭add9



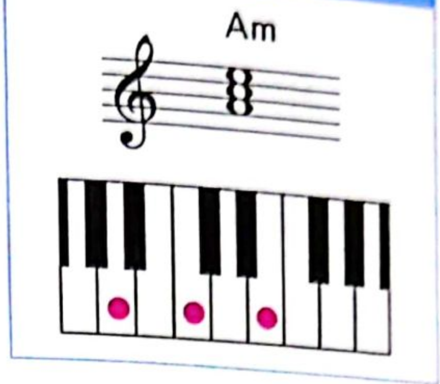
CamScannerでスキャン

※「-5」は「♭5」、そして「aug」は「#5」あるいは「+5」と同じ意味です。
「M7」は「△7」や「Maj7」とも表記されます。
「dim」は4音の和音「dim7」と混同することを避けるために
ここでは忠実に3音による和音として「m-5」の表記を採用しています。

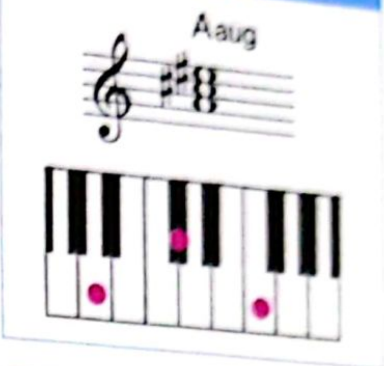
A



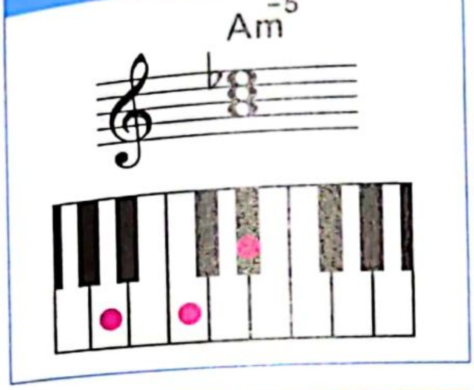
Am



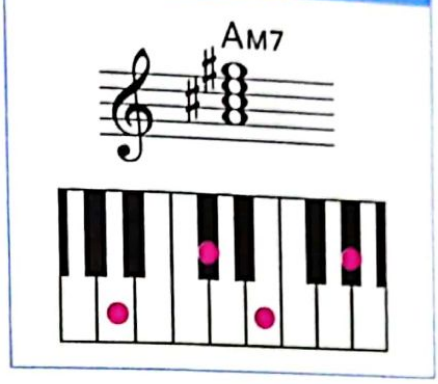
Aaug



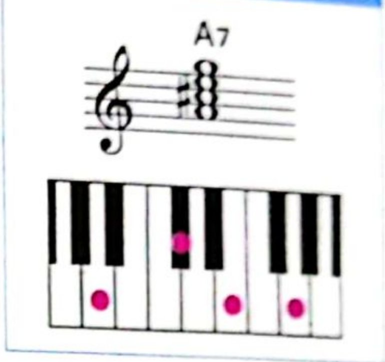
Am-5



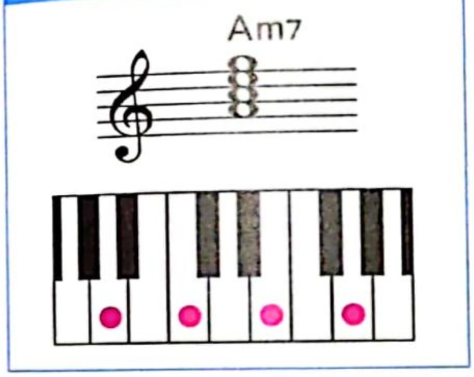
AM7



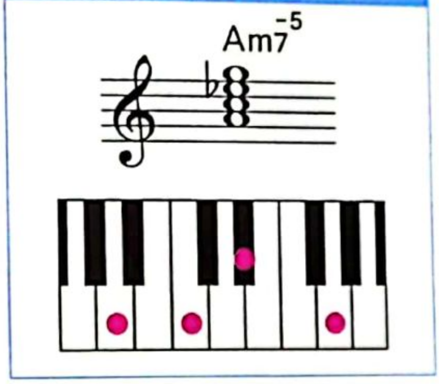
A7



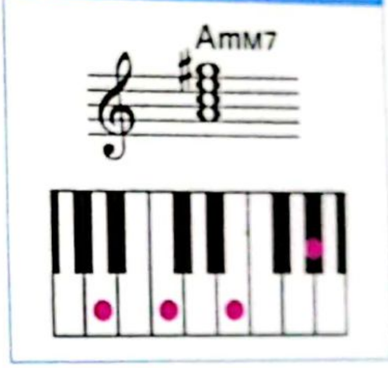
Am7



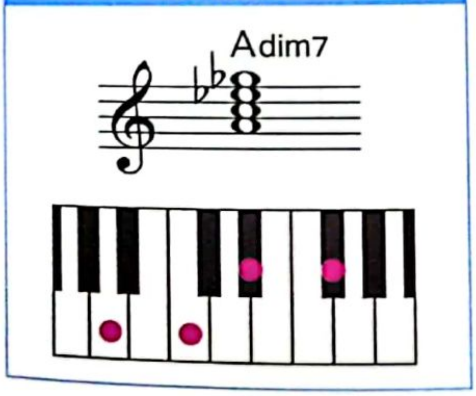
Am7-5



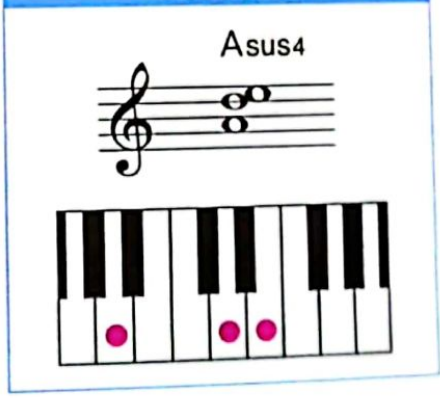
AmM7



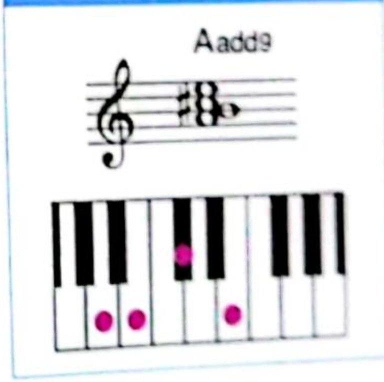
Adim7



Asus4

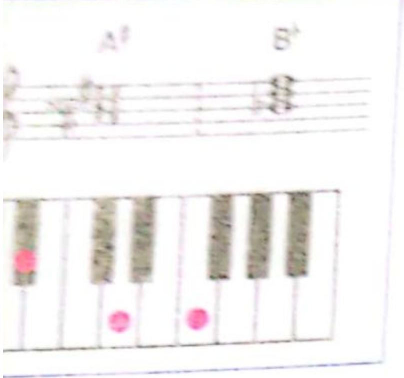


Aadd9

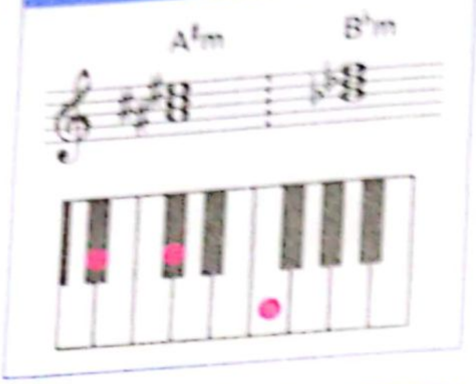


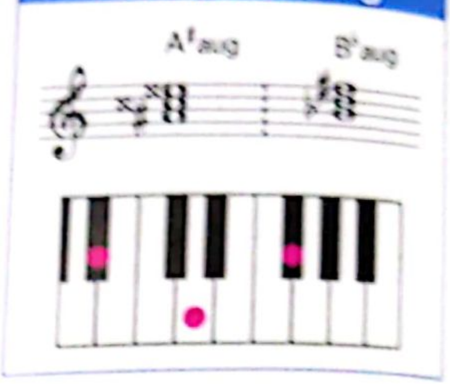
CamScannerでスキャン

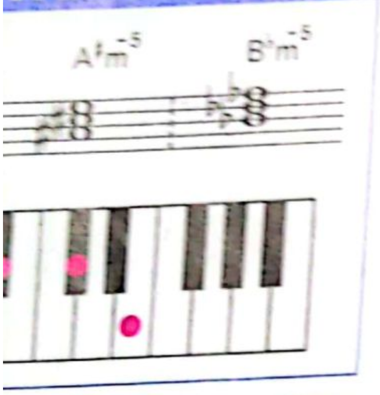
A♯ / B♭



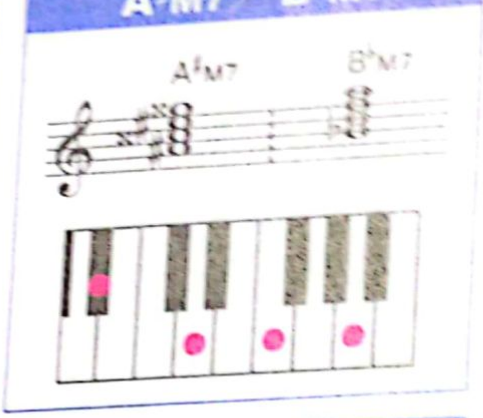
A♯m / B♭m



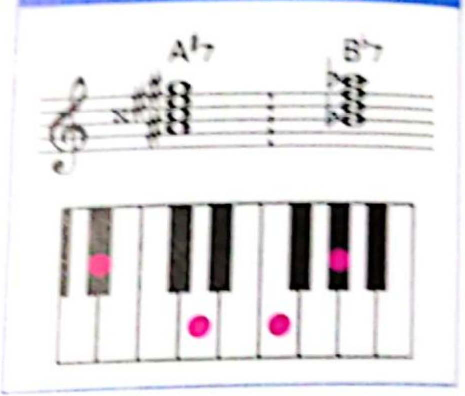
A♯aug / B♭aug

A♯m-5 / B♭m-5



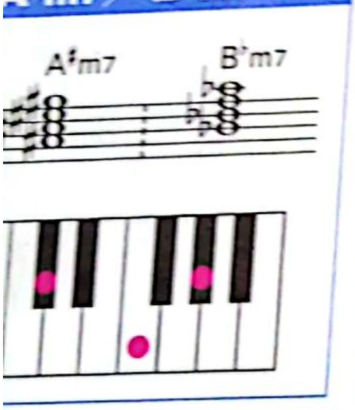
A♯M7 / B♭M7



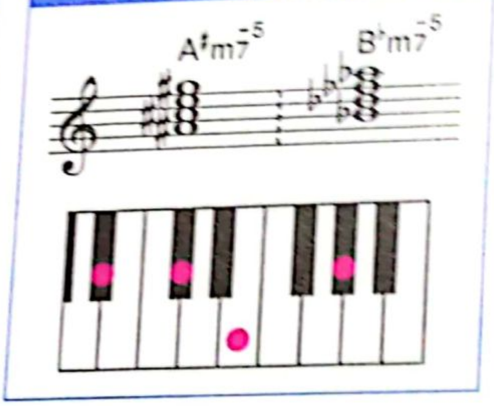
A♯7 / B♭7



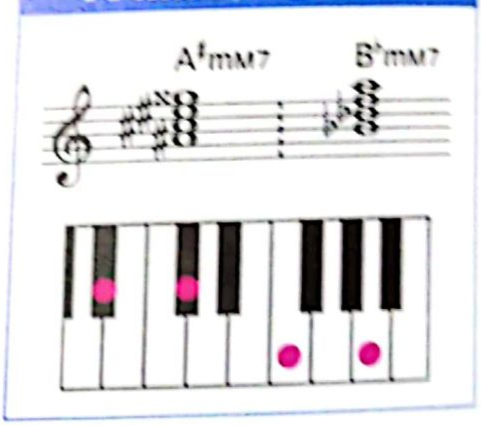
A♯m7 / B♭m7



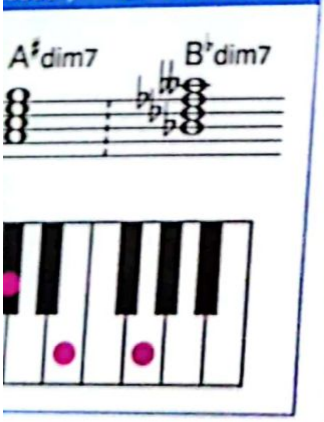
A♯m7-5 / B♭m7-5

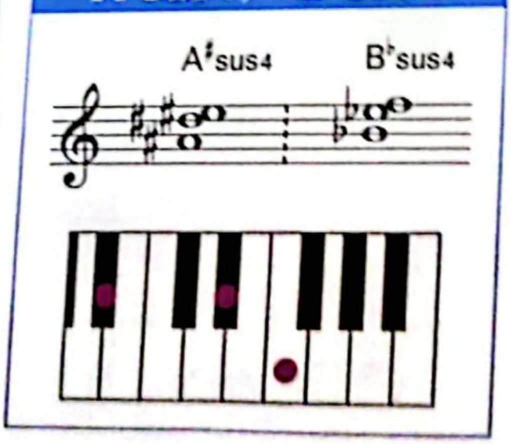
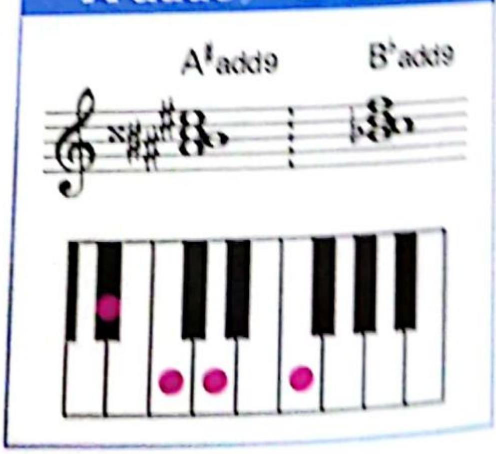


A♯mM7 / B♭mM7

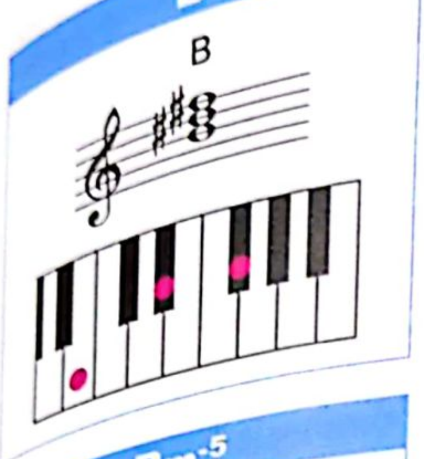


im7 / B♭dim7

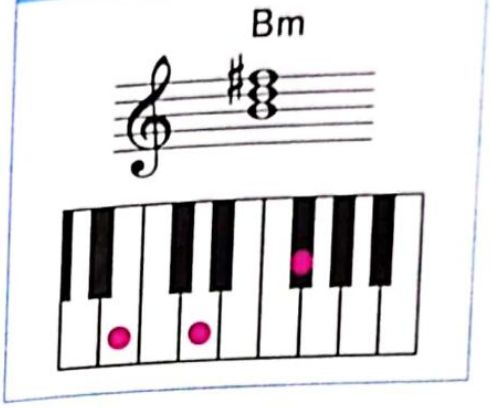


A♯sus4 / B♭sus4

A♯add9 / B♭add9

CamScannerでスキャン

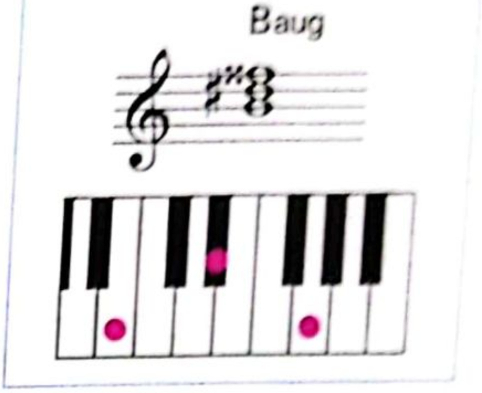
B



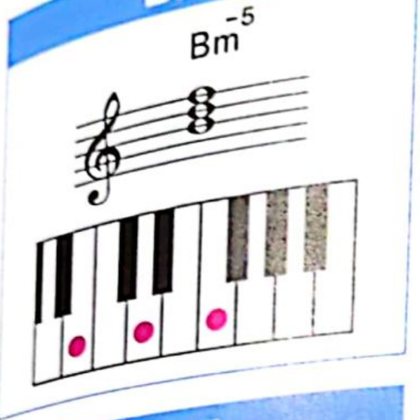
Bm



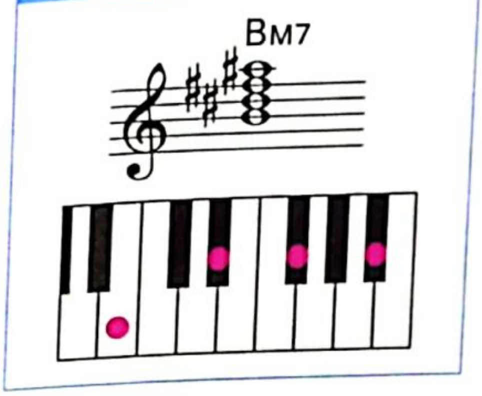
Baug



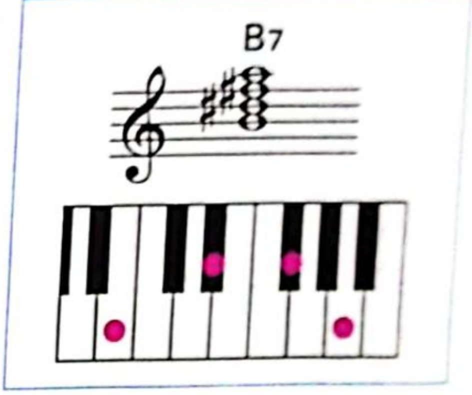
Bm-5



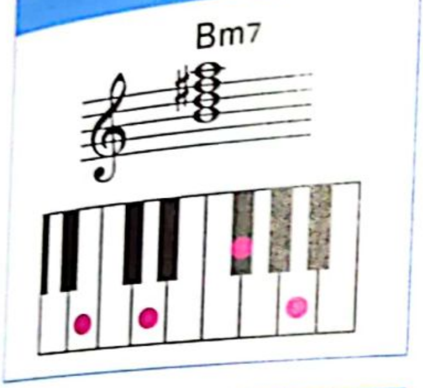
BM7



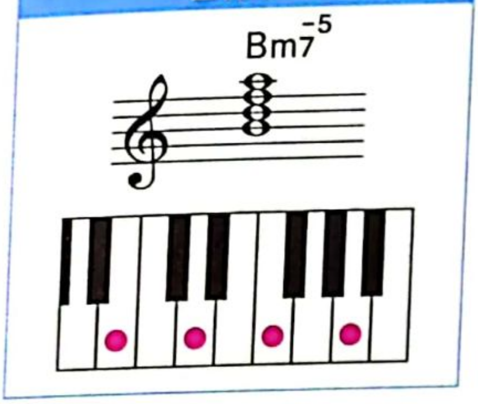
B7



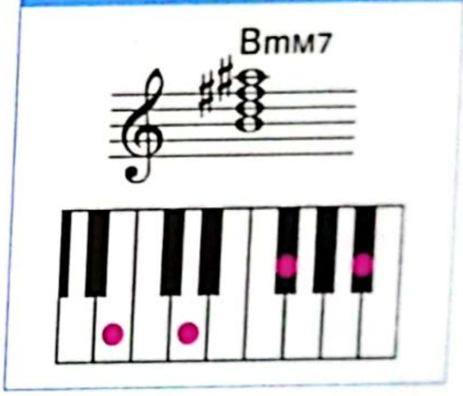
Bm7



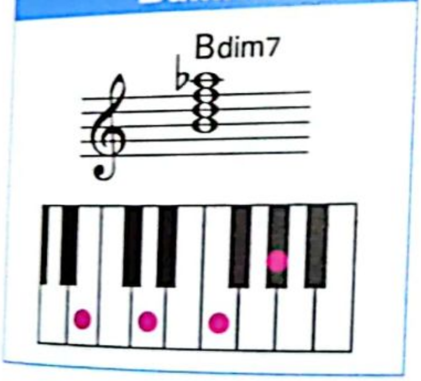
Bm7-5



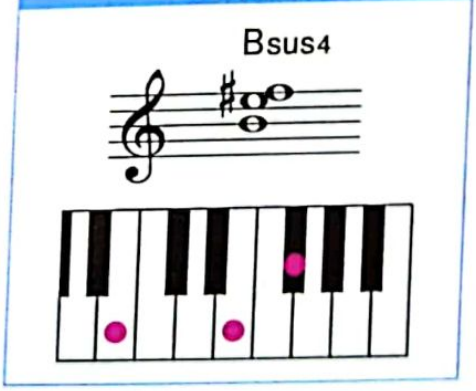
BmM7



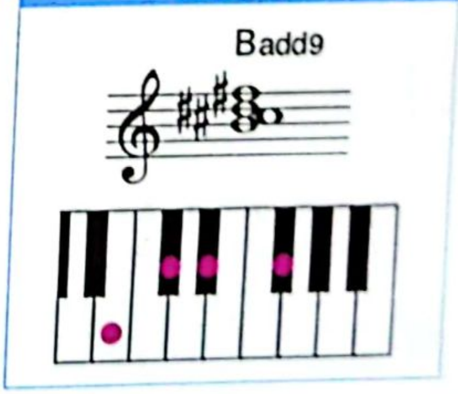
Bdim7



Bsus4



Badd9



CamScannerでスキャン

楽譜でよく使われる用語集

A	a2 (a due)　ア・ドゥーエ	2つで、2声で
	a piacere　ア・ピアチェーレ	自由に、気ままに
	ad libitum (ad lib.)　アド・リビトゥム(アド・リブ)	思うまま、任意に
	adagietto　アダージェット	ややadagioで (adagioよりは速めに)
	adagio　アダージョ	遅い速度で (くつろぐ速度)
	affettuoso　アフェットゥオーソ	愛情を込めて
	agitato　アジタート	興奮して
	al fine　アル・フィーネ	終わりまで
	alla　アッラ	～風に
	allegretto　アレグレット	やや速く (allegroよりは遅め)
	allegro　アレグロ	快活に速く
	amabile　アマービレ	愛らしく、優しく
	amoroso　アモローソ	愛らしく、優しく
	andante　アンダンテ	歩くような速さで
	andantino　アンダンティーノ	andanteよりは速めに
	animato　アニマート	活き活きと速く
	appasionato　アパッシオナート	熱情的に、豊かに
	arioso　アリオーソ	歌うように
	arpeggio(arp.)　アルペジオ	分散和音
	as is　アズ・イズ	記譜された通りに
	assai　アッサイ	非常に、きわめて
	attacca　アタッカ	休まずに、すぐ次へ
B	bassa　バッサ	低音、低く
	brightly　ブライトリー	輝かしく
	brillante　ブリッランテ	輝かしく
C	c.d.(colla destra)　コッラ・デストラ	右手で
	calando　カランド	だんだん遅く、だんだん弱く
	candenza　カデンツァ	即興部／終止形
	cantabile　カンタービレ	歌うように
	capriccio　カプリッチョ	気まぐれに
	cédez　セデ	だんだん遅く
	con brio　コン・ブリオ	活き活きと
	con fuoco　コン・フォーコ	火のように
	con moto　コン・モート	動きをつけて
	c.s. (colla sinistra)　コッラ・シニストラ	左手で
D	deciso　デチーゾ	思い切って、決然と
	div.(divisi)　ディヴィージ	声部を分けて
	dolce　ドルチェ	甘く、優しく
	dolciss.(dolcissimo)　ドルチッシモ	とても甘く
	doloroso　ドロローソ	悲痛に
E	echo　エコー	こだまのように
	elegante　エレガンテ	優美に、優雅に
	en dehors　アン・ドオール	少し際立たせて
	energico　エネルジコ	力強く、精力的に
	espress.(espressivo)　エスプレッシーヴォ	表情豊かに
	étouffé　エトフェ	ミュートをつけて、音を抑えて
F	fade in　フェード・イン	音量を徐々に上げる
	feroce　フェローチェ	荒々しく、野性的に

CamScannerでスキャン

	f.o.(fade out) フェ[illegible]	音が聞こえなくなるまで徐々に音量を下げる
	fine フィーネ	終わり
	frioso フリオーソ	荒れ狂って
	g.p. (generalpause) ゲネラルパウゼ	全員が休止
G	gently ジェントリー	静かに、穏やかに
	giocoso ジョコーソ	陽気に、楽しく
	grandioso グランディオーソ	堂々と、威厳をもって
	grave グラーヴェ	重々しく
	grazioso グラツィオーソ	優美に、優雅に
H	hold ホールド	音を長くのばして
	improvisation インプロヴィゼーション	即興演奏
I	in tempo イン・テンポ	正確なテンポで
	intro.(introduction) イントロ (イントロダクション)	導入部
	l'istesso tempo リステッソ・テンポ	拍子が変わっても、同じ速さで
L	l.h.(left hand) レフト・ハンド	左手で
	l.v.(let vibrate) レット・ヴァイブレイト	音を鳴らしたままで、余韻を残して
	lamentoso ラメントーソ	悲しそうに、哀れに
	langsam ラングザーム	遅く
	larghetto ラルゲット	largoよりは速めに
	largo ラルゴ	ゆったりと遅く
	legg.(leggiero) レジェーロ	軽やかに
	lento レント	ゆるやかに遅く
	loco ローコ	もとの位置、場所で
	lontano ロンターノ	遠く、こだまのように
M	m.d. (mano destra) マーノ・デストラ	右手で
	ma non troppo マ・ノン・トロッポ	しかし速すぎないように
	maestoso マエストーソ	荘厳に、堂々と
	marciale マルチアーレ	行進曲風に
	measure メジャー	小節、拍子
	mezza voce メッザ・ヴォーチェ	音量を抑えて
	m.g. (main gauche) マン・ゴーシュ	左手で
	misterioso ミステリオーソ	神秘的に、不思議に
	moderato モデラート	中くらいの速さ
	morendo モレンド	遅くしながら小さくしていく、消えるかのように
	mouvt. (mouvement) ムヴマン	動きをもって
	m.s.(mano sinistra) マーノ・シニストラ	左手で
	muta ムータ	持ち替える
	mute ミュート	弱音器をつける、ミュートして演奏する
N	n.c.(non chord) ノン・コード	コードなしの単音で
	nobilmente ノービルメンテ	高貴に、品よく
	non tanto ノン・タント	あまり～でなく
	n.v.(non vibrato) ノン・ヴィブラート	ヴィブラートなしで
O	obbl.(obbligato) オブリガート	主旋律に対して引き立てるように奏されるフレーズ、助奏
	optional オプショナル	任意で選択する
	ord.(ordinario) オルディナーリオ	通常の、普通の
	ossia オッシア	あるいは (難しい内容を簡単に書き換えた部分などに使う)
P	parlando パルランド	話すように
	passionato パッシオナート	情熱的に
	perdendosi ペルデンドシ	だんだん弱くしながら、だんだん遅く
	pesante ペザンテ	重々しく、重厚に

CamScannerでスキャン

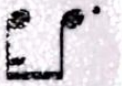
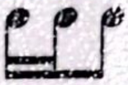
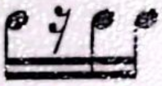
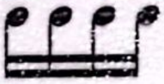
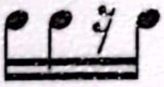
	peu à peu　プゥ・ア・プゥ	少しずつ
	piacevole　ピアチェーヴォレ	楽しげに
	pochiss.(pochissimo)　ポチッシモ	わずかに
	pomposo　ポンポーソ	豪華に、華やかに
	possibile　ポッシービレ	できるだけ
	prestissimo　プレッスティシモ	できるだけ速く
	presto　プレスト	きわめて速く
	primo　プリモ	第一の
Q	quasi　クアージ	ほとんど~のように、ほぼ~
	quickly　クイックリー	素早く
R	r.h.(right hand)　ライト・ハンド	右手で
	rall. (rallentando)　ラッレンタンド	だんだん遅く
	rapid　ラピド	急速に
	religioso　レリジョーソ	敬虔に
	repeat　リピート	繰り返す
	rf./rfz. (rinforzando)　リンフォルツァンド	その音を急に強く
	risoluto　リゾルート	決然と
	riten. (ritenuto)　リテヌート	すぐに遅く
	ritmico　リトミコ	リズミカルに
S	scherz. (scherzando)　スケルツァンド	おどけて、こっけいに
	sec. (secco)　セッコ	乾いた響き、鋭く音を切って、止めて
	seconda　セコンダ	第二の
	semplice　センプリチェ	単純に、素朴に
	sempre　センプレ	常に、引き続き
	senza tempo　センツァ・テンポ	テンポなしで=自由なテンポで
	sim.(simile)　シーミレ	前と同じように
	slightly　スライトリー	ごくわずか
	soli　ソリ	各パートや声部でひとりずつ
	solo　ソロ	ひとりで、独奏
	sonoro　ソノーロ	朗々と響かせて
	sosten. (sostenuto)　ソステヌート	音の長さを十分に保って
	sotto voce　ソット・ヴォーチェ	音量を抑えて
	spiritoso　スピリトーソ	元気に、活き活きと
	string. (stringendo)　ストリンジェンド	徐々にせき込んで、速めて
T	tacet　タチェット	しばらく音を出さない、長い休み
	tanto　タント	多い、十分に
	tranquillo　トランクイッロ	穏やかに、静かに
	trem. (tremolo)　トレモロ	トレモロの奏法で
	troppo　トロッポ	非常に、はなはだしく
	tutta forza　トゥッタ・フォルツァ	全力で
	tutti　トゥッティ	全員で
U	unis. (unison)　ユニゾン	同音、同度で
	un poco　ウン・ポコ	少し、やや
V	v.s.(volti subito)　ヴォルティ・スービト	すばやくページをめくって
	variation　ヴァリエーション	変奏
	veloce　ヴェローチェ	速く
	vib. (vibrato)　ヴィブラート	音の高さをわずかに揺らして演奏すること
	vivace　ヴィヴァーチェ	速く、快活に
	vivacissimo　ヴィヴァチッシモ	極めて快活に速く
	vivo　ヴィーヴォ	活き活きと速く

CamScannerでスキャン

定価：本体 1,500 円＋税

9784845629794
1922073015004
ISBN978-4-8456-2979-4
C2073 ¥1500E

●初心者にやさしいリズム譜早見表

音符	読み方	この言葉で覚えよう!
	タータタ	ラーメン
	タタータ	ステーキ
	ターータ	ケーキ
	タター－	カレー
	タタター	カロリー
	タッタタ	やっぱり
	タタタタ	食べ過ぎ
	タタッタ	ストップ

RittorMusic

CamScannerでスキャン